

基本計画書

基 本 計 画										
事 項		記 入 欄							備 考	
計 画 の 区 分		学部の設置								
フ リ ガ ナ 設 置 者		ガ'ッコウホジシ'ン ヤスタ'ガ'クセン 学校法人 安田学園								
フ リ ガ ナ 大 学 の 名 称		ヤスタ'シ'ョシダ'イ'ガ'ク 安田女子大学								
大 学 本 部 の 位 置		広島県広島市安佐南区安東6丁目13番1号								
大 学 の 目 的		安田女子大学は、教育基本法及び学校教育法の精神に則り、女子に広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を養い、もって文化の向上に寄与する人格円満な女子を育成することを目的とする。								
新 設 学 部 等 の 目 的		理工学部は、全人教育を理念とした学園訓「柔しく剛く」に基づき、真理の探究に努め、学生に幅広い教養と豊かな人間性を授け、自然の道理を探究する「理学的視点」と、その知識をもとに独創的に応用する「工学的視点」を身に付け、急速な技術革新、自然と社会の共生、持続可能な社会の実現など、現代社会が抱える複雑な課題に自ら対応策を模索する人材を養成することを目的とする。 生物科学科では、植物を中心に、分子・細胞から生態系に至るまで、幅広い階層で生物の進化や多様性の本質を学び、「食」「資源」「環境」に関わる諸問題を解決し、持続可能な社会構築に寄与する使命感を持った人材を養成することを目的とする。 情報科学科では、情報理論に基づく定量的な評価を用いて、社会課題を正確に理解し、解決に必要な情報システムの設計・開発から実装・運用まで行うとともに、人間の能力を援助する快適なヒューマンインタフェース環境を構築できる人材を養成することを目的とする。 建築学科では、建築に関する専門的知識・技能に加えて、自然環境への配慮やエネルギー効率化などグリーン分野を含めた広範な生活環境に対する状況把握能力や判断力、豊かな表現力と意匠性を兼ね備えた人材を養成することを目的とする。								
新設学部等の概要	新 設 学 部 等 の 名 称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位	学位の分野	開設時期及び開設年次	所在地	
	理工学部	年	人	年次人	人			年 月 第 年次		
	生物科学科	4	60	—	240	学士 (生物科学)	理学関係	令和7年4月 第1年次	広島県広島市安佐南区安東6丁目13番1号	
	情報科学科	4	60	—	240	学士 (情報科学)	工学関係	令和7年4月 第1年次	同上	
	建築学科	4	60	—	240	学士 (建築学)	工学関係	令和7年4月 第1年次	同上	
	計		180	—	720					
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)		教育学部 幼児教育学科 (130) (令和6年4月届出予定) 文学部 英語英米文学科[定員減] (△ 40) (令和7年4月) 教育学部 児童教育学科[定員減] (△ 90) (令和7年4月) (3年次編入学定員) [定員減] (△ 2) (令和9年4月) 現代ビジネス学部 現代ビジネス学科 [定員減] (△ 10) (令和7年4月) 国際観光ビジネス学科[定員減] (△ 10) (令和7年4月) 家政学部 生活デザイン学科[定員減] (△ 40) (令和7年4月) 安田女子短期大学 保育科(廃止) (△150) ※令和6年4月学生募集停止								

教育課程	新設学部等の名称		開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
			講義	演習	実験・実習	計					
	理工学部	生物科学科	101科目	48科目	18科目	167科目	128単位				
	理工学部	情報科学科	90科目	71科目	5科目	166科目	128単位				
	理工学部	建築学科	84科目	74科目	6科目	164科目	128単位				
学部等の名称			基幹教員					助手	基幹教員以外の教員 (助手を除く)		
			教授	准教授	講師	助教	計				
新設	理工学部	生物科学科	7 (7)	1 (1)	6 (6)	2 (2)	16 (16)	0 (0)	78 (68)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 6人	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	7 (7)	1 (1)	6 (6)	2 (2)	16 (16)					
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)					
	小計（a～b）	7 (7)	1 (1)	6 (6)	2 (2)	16 (16)					
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)					
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)					
	計（a～d）	7 (7)	1 (1)	6 (6)	2 (2)	16 (16)					
	情報科学科		7 (7)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	75 (67)		大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 6人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	5 (5)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	9 (9)					
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)					
	小計（a～b）	5 (5)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	9 (9)					
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)					
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	2 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2)						
計（a～d）	7 (7)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	11 (11)						
建築学科			8 (7)	2 (2)	4 (4)	1 (1)	15 (14)	0 (0)	76 (69)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 6人	
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	8 (7)	2 (2)	4 (4)	1 (1)	15 (14)						
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)						
小計（a～b）	8 (7)	2 (2)	4 (4)	1 (1)	15 (14)						
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)						
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)						
計（a～d）	8 (7)	2 (2)	4 (4)	1 (1)	15 (14)						
分											

新	設	教育学部 幼児教育学科	7 (5)	6 (4)	2 (2)	0 (0)	15 (11)			※令和6年4月届出(予定) 大学設置基準別表第一イに定める基幹教員数の四分の三の数 6人					
		a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	7 (5)	6 (4)	2 (2)	0 (0)	15 (11)								
		b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(aに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
		小計(a～b)	7 (5)	6 (4)	2 (2)	0 (0)	15 (11)								
		c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a又はbに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
		d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a、b又はcに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
		計(a～d)	7 (5)	6 (4)	2 (2)	0 (0)	15 (11)								
		計	29 (26)	12 (10)	13 (13)	3 (3)	57 (52)				0 (0)	— (—)			
		既	設	文学部 日本文学科	10 (10)	1 (1)	0 (0)				0 (0)	11 (11)			大学設置基準別表第一イに定める基幹教員数の四分の三の数 5人
				a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	10 (10)	1 (1)	0 (0)				0 (0)	11 (11)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(aに該当する者を除く)	0 (0)			0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
小計(a～b)	10 (10)			1 (1)	0 (0)	0 (0)	11 (11)								
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a又はbに該当する者を除く)	0 (0)			0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a、b又はcに該当する者を除く)	0 (0)			0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
計(a～d)	10 (10)			1 (1)	0 (0)	0 (0)	11 (11)								
書道学科	4 (4)			1 (1)	0 (0)	1 (1)	6 (6)	0 (0)	90 (90)						
設	分			a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	4 (4)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	6 (6)			大学設置基準別表第一イに定める基幹教員数の四分の三の数 4人			
				b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(aに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)						
		小計(a～b)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	6 (6)								
		c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a又はbに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
		d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a、b又はcに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
		計(a～d)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	6 (6)								
		英語英米文学科	5 (5)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	85 (85)						
		分	分	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	5 (5)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	13 (13)						大学設置基準別表第一イに定める基幹教員数の四分の三の数 5人
				b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(aに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)						
				小計(a～b)	5 (5)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	13 (13)						
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a又はbに該当する者を除く)	0 (0)			0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a、b又はcに該当する者を除く)	0 (0)			0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
計(a～d)	5 (5)			8 (8)	0 (0)	0 (0)	13 (13)								

既	教育学部 児童教育学科						0 (0)	108 (108)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	10 (10)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	13 (13)		大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 5人
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計（a～b）	10 (10)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	13 (13)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計（a～d）	10 (10)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	13 (13)		
設	心理学部 現代心理学科						0 (0)	95 (95)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	8 (8)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	12 (12)		大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 5人
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計（a～b）	8 (8)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	12 (12)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計（a～d）	8 (8)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	12 (12)		
	ビジネス心理学科						0 (0)	84 (84)
分	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	3 (3)	3 (3)	3 (3)	1 (1)	10 (10)		大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 5人
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計（a～b）	3 (3)	3 (3)	3 (3)	1 (1)	10 (10)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計（a～d）	3 (3)	3 (3)	3 (3)	1 (1)	10 (10)		
	現代ビジネス学部 現代ビジネス学科						0 (0)	98 (98)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	5 (5)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	8 (8)		大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 6人
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計（a～b）	5 (5)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	8 (8)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計（a～d）	5 (5)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	8 (8)		

既	国際観光ビジネス学科						0 (0)	83 (83)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	7 (7)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	11 (11)		
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計（a～b）	7 (7)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	11 (11)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計（a～d）	7 (7)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	11 (11)		
	公共経営学科						0 (0)	81 (81)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	8 (8)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	10 (10)		
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計（a～b）	8 (8)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	10 (10)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計（a～d）	8 (8)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	10 (10)		
設	家政学部 生活デザイン学科						0 (0)	88 (88)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	5 (5)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	9 (9)		
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計（a～b）	5 (5)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	9 (9)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計（a～d）	5 (5)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	9 (9)		
	管理栄養学科						8 (8)	81 (81)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	5 (5)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	12 (12)		
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計（a～b）	5 (5)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	12 (12)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計（a～d）	5 (5)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	12 (12)		
分								

既	造形デザイン学科						4 (4)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	86 (86)	大学設置基準別 表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 6人			
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	4 (4)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	10 (10)											
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)												
小計（a～b）	4 (4)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	10 (10)												
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する 者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)												
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する 者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する 者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)												
計（a～d）	4 (4)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	11 (11)												
設	薬学部 薬学科						18 (18)	5 (5)	8 (8)	2 (2)	33 (33)	1 (1)	86 (86)	大学設置基準別 表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 22人			
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	18 (18)	5 (5)	8 (8)	2 (2)	33 (33)											
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)											
	小計（a～b）	18 (18)	5 (5)	8 (8)	2 (2)	33 (33)											
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する 者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)											
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する 者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する 者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)											
	計（a～d）	18 (18)	5 (5)	8 (8)	2 (2)	33 (33)											
	看護学部 看護学科						12 (12)	9 (9)	10 (10)	6 (6)	37 (37)	8 (8)	83 (83)	大学設置基準別 表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 10人			
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	12 (12)	9 (9)	10 (10)	6 (6)	37 (37)											
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)											
	小計（a～b）	12 (12)	9 (9)	10 (10)	6 (6)	37 (37)											
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する 者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)											
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する 者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する 者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)											
	計（a～d）	12 (12)	9 (9)	10 (10)	6 (6)	37 (37)											
	分	計						104 (104)	51 (51)	31 (31)	10 (10)	196 (196)	17 (17)		－ (－)		
		合 計						133 (130)	63 (61)	44 (44)	13 (13)	253 (248)	17 (17)		－ (－)		
	職 種						専 属						そ の 他		計		
	事 務 職 員						98 (98)						34 (34)		132 (132)		
	技 術 職 員						1 (1)						0 (0)		1 (1)		
	図 書 館 職 員						5 (5)						9 (9)		14 (14)		
そ の 他 の 職 員						1 (1)						23 (23)			24 (24)		
指 導 補 助 者						0 (0)						0 (0)			0 (0)		
計						105 (105)						66 (66)			171 (171)		

校 地 等	区 分		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計			
	校 舎 敷 地		67,590 m ²	0 m ²	0 m ²		67,590 m ²			
	そ の 他		71,564 m ²	0 m ²	0 m ²		71,564 m ²			
	合 計		139,154 m ²	0 m ²	0 m ²		139,154 m ²			
校 舎			専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計			
			92,741 m ²	0 m ²	0 m ²		92,741 m ²			
			(77,355 m ²)	(0 m ²)	(0 m ²)		(77,355 m ²)			
教 室 ・ 教 員 研 究 室			教 室	260 室	教 員 研 究 室	260 室	大学全体			
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称		図書 〔うち外国書〕冊		学術雑誌 〔うち外国書〕種		機械・器具 点	標本 点	大学全体では、図書342,094冊（うち外国書58,748冊）、学術雑誌4,960種（うち外国雑誌2,169種）大学全体での共用分 機械・器具20,286点 標本7点	
			電子図書 〔うち外国書〕冊		電子ジャーナル 〔うち外国書〕種					
	理工学部		27,200 [2,600] (16,291 [1,839])	2,100 [57] (624 [29])	71 [29] (71 [29])	20 [20] (20 [20])	1,484 (0)	0 (0)		
	計		27,200 [2,600] (16,291 [1,839])	2,100 [57] (624 [29])	71 [29] (71 [29])	20 [20] (20 [20])	1,484 (0)	0 (0)		
スポーツ施設等			スポーツ施設		講堂		厚生補導施設		大学全体	
			2,794 m ²		3,111 m ²		6,016 m ²			
経費 の見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	図書費には電子ジャーナル・データベースの整備費（運用コスト含む）を含む。
		教員1人当り研究費等		300千円	300千円	300千円	300千円	－千円	－千円	
		共同研究費等		28,700千円	28,700千円	29,400千円	29,400千円	－千円	－千円	
		図 書 購 入 費	18,997千円	21,609千円	12,297千円	2,088千円	2,088千円	－千円	－千円	
		設 備 購 入 費	4,176千円	1,414,040千円	4,176千円	4,176千円	4,176千円	－千円	－千円	
	学生1人当り 納付金		第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
			1,479千円	1,379千円	1,379千円	1,379千円	－千円	－千円		
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常経費補助金、資産運用収入、雑収入 等							
大 学 等 の 名 称			安田女子大学							※令和4年度入学定員増（30人）
学 部 等 の 名 称		修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	収容定員充足率	開設年度	所在地	
文学部		年	人	3年次人	人		0.85		広島県広島市安佐南区安東6丁目13番1号	
日本文学科		4	90	1	362	学士(文学)	0.98	昭和41年度		
書道学科		4	30	1	122	学士(文学)	0.90	平成23年度		
英語英米文学科		4	110	2	444	学士(文学)	0.72	昭和41年度	同上	
教育学部				3年次			0.91		同上	
児童教育学科		4	150	3	606	学士(教育学)	0.91	平成24年度		
心理学部				3年次			1.02			
現代心理学科		4	90	1	332	学士(心理学)	1.08	平成24年度	同上	
ビジネス心理学科		4	60	1	242	学士(心理学)	0.95	平成30年度	同上	
現代ビジネス学部				3年次			0.93		同上	
現代ビジネス学科		4	90	1	362	学士(現代ビジネス学)	1.02	平成15年度		
国際観光ビジネス学科		4	90	1	362	学士(現代ビジネス学)	0.95	平成27年度		
公共経営学科		4	60	1	242	学士(現代ビジネス学)	0.75	令和2年度	同上	

既設大学等の状況	家政学部			3年次			1.00			
	生活デザイン学科	4	160	2	614	学士(家政学)	1.04	平成16年度	同上	※令和4年度入学定員増（30人）
	管理栄養学科	4	120	—	480	学士(家政学)	0.96	平成16年度	同上	
	造形デザイン学科	4	75	—	305	学士(家政学)	0.97	平成28年度	同上	※令和4年度入学定員減（△5人）
	薬学部			3年次			0.90			
	薬学科	6	100	2	632	学士(薬学)	0.90	平成19年度	同上	※令和2年度入学定員減（△20人）
				4年次						※令和4年度編入学定員増（3年次2名、4年次2名）
				2						
	看護学部						1.07			
	看護学科	4	120	—	480	学士(看護学)	1.07	平成26年度	同上	
	文学研究科									
	博士前期課程						0.41			
	日本語学日本文学専攻	2	6	—	12	修士(文学)	0.5	平成6年度	広島県広島市安佐南区安東6丁目13番1号	
	英語学英米文学専攻	2	6	—	12	修士(文学)	0.16	平成6年度	同上	
	教育学専攻	2	18	—	36	修士(文学)	0.47	平成6年度	同上	
	博士後期課程						0.07			
	日本語学日本文学専攻	3	2	—	6	博士(文学)	0.16	平成8年度	同上	
	英語学英米文学専攻	3	2	—	6	博士(文学)	0.00	平成8年度	同上	
	教育学専攻	3	5	—	15	博士(文学)	0.06	平成8年度	同上	
	家政学研究科									
	修士課程						0.16			
	健康生活学専攻	2	3	—	6	修士(家政学)	0.16	平成25年度	同上	
	薬学研究科									
	博士課程						0.12			
	薬学専攻	4	2	—	8	博士(薬学)	0.12	平成25年度	同上	
	看護学研究科									
	博士前期課程						0.2			
看護学専攻	2	10	—	20	修士(看護学)	0.2	平成30年度	同上		
博士後期課程						0.22				
看護学専攻	3	3	—	9	博士(看護学)	0.22	平成30年度	同上		
大 学 等 の 名 称		安田女子短期大学								
学 部 等 の 名 称		修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	収容定員充足率	開設年度	所 在 地	
保育科		年	人	年次人	人	短期大学士(保育)	倍	昭和30年度	広島県広島市安佐南区安東6丁目13番1号	※令和6年4月より学生募集停止
附属施設の概要		名 称：安田女子大学付属薬用植物園 目 的：創薬学の教育・研究 所 在 地：広島県広島市安佐南区安東6丁目13番1号 設置年月：平成22年8月 規 模 等：土地1,726.00㎡、建物（温室）109.64㎡								

学校法人安田学園 設置認可等に関わる組織の移行表

〔令和6年度〕

安田女子大学

学部	学科	入学 定員	編入学 定員	収容 定員
文学部	日本文学科	90	3年次 1	362
	書道学科	30	3年次 1	122
	英語英米文学科	110	3年次 2	444
教育学部	児童教育学科	150	3年次 3	606
	—	—	—	—
心理学部	現代心理学科	90	3年次 1	362
	ビジネス心理学科	60	3年次 1	242
現代ビジネス学部	現代ビジネス学科	90	3年次 1	362
	国際観光ビジネス学科	90	3年次 1	362
	公共経営学科	60	3年次 1	242
家政学部	生活デザイン学科	160	3年次 2	644
	管理栄養学科	120	—	480
	造形デザイン学科	75	—	300
薬学部	薬学科（6年制）	100	3年次 2 4年次 2	614
看護学部	看護学科	120	—	480
—	—	—	—	—
計		1,345	3年次 16 4年次 2	5,622

〔令和7年度〕

安田女子大学

 本認可申請
  本認可申請以外の変更

学部	学科	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
文学部	日本文学科	90	3年次 1	362	
	書道学科	30	3年次 1	122	
	英語英米文学科	70	3年次 2	284	定員変更（△40）
教育学部	児童教育学科	60	3年次 1	242	定員変更（△90） 編入学定員変更（△2）
	幼児教育学科	130	3年次 2	524	学科の設置（届出）
心理学部	現代心理学科	90	3年次 1	362	
	ビジネス心理学科	60	3年次 1	242	
現代ビジネス学部	現代ビジネス学科	80	3年次 1	322	定員変更（△10）
	国際観光ビジネス学科	80	3年次 1	322	定員変更（△10）
	公共経営学科	60	3年次 1	242	
家政学部	生活デザイン学科	120	3年次 2	484	定員変更（△40）
	管理栄養学科	120	—	480	
	造形デザイン学科	75	—	300	
薬学部	薬学科（6年制）	100	3年次 2 4年次 2	614	
看護学部	看護学科	120	—	480	
理工学部	生物科学科	60	—	240	学部の設置（認可申請）
	情報科学科	60	—	240	
	建築学科	60	—	240	
計		1,465	3年次 16 4年次 2	6,102	

安田女子大学大学院

研究科	専攻	入学 定員	編入学 定員	収容 定員
文学研究科	日本語学日本文学専攻（M）	6	—	12
	英語学英米文学専攻（M）	6	—	12
	教育学専攻（M）	18	—	36
	日本語学日本文学専攻（D）	2	—	6
	英語学英米文学専攻（D）	2	—	6
	教育学専攻（D）	5	—	15
家政学研究科	健康生活学専攻（M）	3	—	6
薬学研究科	薬学専攻（D）	2	—	8
看護学研究科	看護学専攻（M）	10	—	20
	看護学専攻（D）	3	—	9
計		57	—	130

安田女子大学大学院

研究科	専攻	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
文学研究科	日本語学日本文学専攻（M）	6	—	12	
	英語学英米文学専攻（M）	6	—	12	
	教育学専攻（M）	18	—	36	
	日本語学日本文学専攻（D）	2	—	6	
	英語学英米文学専攻（D）	2	—	6	
	教育学専攻（D）	5	—	15	
家政学研究科	健康生活学専攻（M）	3	—	6	
薬学研究科	薬学専攻（D）	2	—	8	
看護学研究科	看護学専攻（M）	10	—	20	
	看護学専攻（D）	3	—	9	
計		57	—	130	

安田女子短期大学

学科	入学 定員	編入学 定員	収容 定員
短期大学 保育科	150	—	300
計	150	—	300

安田女子短期大学

学科	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
短期大学 保育科	0	—	0	令和6年4月学生募集停止
計	0	—	0	

教 育 課 程 等 の 概 要																		
(理工学部生物科学科)																		
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授 業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考		
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教 員 (助 手 を 除 く) 以 外 の 教 員			
特 別 科 目	まほろば教養ゼミⅠ	1通	○	1				○			5	1	6					
	まほろば教養ゼミⅡ	2通	○	1				○			5	1	6					
	まほろば教養ゼミⅢ	3通	○	1				○			5	1	6					
	まほろば教養ゼミⅣ	4通	○	1				○			5	1	6					
	小計(4科目)	—	—	4	0	0	—			5	1	6	0	0	0	—		
共通 教育 科目	キ ャ リ ア 科 目	キャリアデザインⅠ	1前			2		○								1	共同	
		キャリアデザインⅡ	2後			2		○								1		
		ボランティア活動	1・2後			2			○							2		
		インターンシップ	3前			2			○							1		
		職と食—パティシエ実習	1・2・3・4後			1				○						1		
		小計(5科目)	—	—	0	9	0	—			0	0	0	0	0	4		—
	人 間 理 解	人間論A	1・2・3・4 前・後			2		○									1	
		人間論B	1・2・3・4 前・後			2		○									1	
		こころの科学A	1・2・3・4 前・後			2		○									3	
		こころの科学B	1・2・3・4 前・後			2		○									1	
		からだの科学A	1・2・3・4 前・後			2		○									3	
		からだの科学B	1・2・3・4 前・後			2		○									1	
		からだの科学C	1・2・3・4 前・後			2		○									1	
		人間形成の科学A	1・2・3・4 前・後			2		○									2	
		人間形成の科学B	1・2・3・4 前・後			2		○									2	
		ことばの世界A	1・2・3・4 前・後			2		○									1	
		ことばの世界B	1・2・3・4 前・後			2		○									2	
		日本の文学A	1・2・3・4 前・後			2		○									1	
		日本の文学B	1・2・3・4 前・後			2		○									1	
		世界の文学A	1・2・3・4 前・後			2		○									1	
		世界の文学B	1・2・3・4 前・後			2		○									1	
		芸術A	1・2・3・4 前・後			2		○									3	
		芸術B	1・2・3・4 前・後			2		○									1	
社 会 理 解	現代社会と人間A	1・2・3・4 前・後			2		○									3		
	現代社会と人間B	1・2・3・4 前・後			2		○									3		
	21世紀の社会と法A(日本国憲法)	1・2・3・4 前・後			2		○									1		
	21世紀の社会と法B	1・2・3・4 前・後			2		○									1		
	21世紀の経済A	1・2・3・4 前・後			2		○									1		
	21世紀の経済B	1・2・3・4 前・後			2		○									1		
	現代のビジネスA	1・2・3・4 前・後			2		○									1		
	現代のビジネスB	1・2・3・4 前・後			2		○									1		
	現代社会と政治A	1・2・3・4 前・後			2		○									1		
	現代社会と政治B	1・2・3・4 前・後			2		○									1		

科目 区分			授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
						必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外の教員	
共通教育科目	国際理解	異文化理解A	1・2・3・4 前・後			2		○								1		
		異文化理解B	1・2・3・4 前・後			2		○								1		
		日本の歴史と文化A	1・2・3・4 前・後			2		○								1		
		日本の歴史と文化B	1・2・3・4 前・後			2		○								1		
		世界の歴史と文化A	1・2・3・4 前・後			2		○								2		
		世界の歴史と文化B	1・2・3・4 前・後			2		○								1		
		国際協力A	1・2・3・4 前・後			2		○								1		
		国際協力B	1・2・3・4 前・後			2		○								1		
		科学技術理解	数学の世界	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
			自然科学の世界A	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
			自然科学の世界B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
			自然科学の世界C	1・2・3・4 前・後			2		○								2	
			生命の科学A	1・2・3・4 前・後			2		○								3	
			生命の科学B	1・2・3・4 前・後			2		○								2	
	生命の科学C		1・2・3・4 前・後			2		○								1		
	環境の科学A		1・2・3・4 前・後			2		○								1		
	環境の科学B		1・2・3・4 前・後			2		○								1		
	生活の科学A		1・2・3・4 前・後			2		○								1		
	生活の科学B	1・2・3・4 前・後			2		○								1			
	情報の科学	1・2・3・4 前・後			2		○								2			
	小計 (47科目)			—	—	0	94	0	—			0	0	0	0	0	56	—
	基礎科目	情報処理科目	情報処理基礎Ⅰ	1前			1			○							3	
			情報処理基礎Ⅱ	1前			1			○							3	
			情報処理基礎Ⅲ	1後			1			○							3	
			情報処理基礎Ⅳ	1後			1			○							3	
			情報処理演習A	2前			1			○							1	
			情報処理演習B	2後			1			○							1	
			情報処理演習C	3前			1			○							1	
			情報処理演習D	3後			1			○							1	
		健康スポーツ科目	健康スポーツA	1・2・3・4 前・後			1				○						2	
			健康スポーツB	1・2・3・4前			1				○						1	
			健康スポーツC	1・2・3・4後			1				○						2	
			野外活動	1・2・3・4前			2				○						2	共同
		外国語科目	英語リーディングⅠ	1前			1			○							2	
			英語リーディングⅡ	1後			1			○							2	
			英語ライティングⅠ	2前・後			1			○							1	
			英語ライティングⅡ	2前・後			1			○							1	
			英語コミュニケーションⅠ	1前			1			○							3	
			英語コミュニケーションⅡ	1後			1			○							3	
			英語コミュニケーションⅢ	2前・後			1			○							3	
			英語コミュニケーションⅣ	2前・後			1			○							3	
			中国語コミュニケーションⅠ	1前			1			○							1	
			中国語コミュニケーションⅡ	1後			1			○							1	
			中国語コミュニケーションⅢ	2前			1			○							1	
			中国語コミュニケーションⅣ	2後			1			○							1	

科目 区分			授業科目の名称	配当年次	主要授 業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考	
						必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教員 (助手を 除く) 教員		
共通 教育科目	外国 語科目	北米文化語学演習	1・2・3後				2				○						1		
		中国文化語学演習	1・2・3・4前				2					○					1		
	基礎 科目	基礎 養成 成科目	基礎国語演習	1前・後				1				○						1	
			基礎社会演習	1前・後				1					○					1	
			基礎数学演習	1前・後				1					○					1	
			基礎理科演習	1後				1					○					1	
			基礎生物演習	1前				1					○		1			1	
			基礎化学演習	1前				1					○					1	
			基礎物理演習	1前				1					○					1	
小計 (33科目)			—	—	0	36	0	—			0	0	1	0	0	24	—		
理工学 専攻科目	理工学概論	1前	○	2				○									1		
	理工学データサイエンス	1後	○	2				○									1		
小計 (2科目)			—	—	4	0	0	—			0	0	0	0	0	0	2	—	
専門 教育科目	基礎 科目	生物学入門	1前	○	2				○			3	1	2				オムニバス	
		生命科学基礎	1前		2				○			1							
		生物学倫理	1前	○	2				○			1							
		基礎生物学	1前	○	2				○				1						
		基礎化学	1前	○	2				○					1					
		サステナビリティ生物学	1前	○	2				○			2							
		生物化学	1後	○	2				○						1				
		生化学Ⅰ	1後	○	2				○			1			1				
		生化学Ⅱ	2前	○	2				○			1			1				
		動物分類学	1後		2				○			1		1					
		植物分類学	1後		2				○								1		
		植物生態学	1後		2				○			1		1	1				
		バイオビジネス実践論	1後	○	2				○			3		1				オムニバス・共同	
		分子生物学Ⅰ	2前	○	2				○					1					
		分子生物学Ⅱ	2後	○	2				○					1					
		細胞生物学	2前	○	2				○					1					
		微生物学	2前	○	2				○					1					
		酵素化学	2後		2			2			○	2							
		応用微生物学	2後		2			2			○			1					
	食と環境の経済学	2後	○	2						○	1						2	オムニバス・共同	
	生物統計学	3前		2						○	3		1	1					
小計 (21科目)			—	—	28	14	0	—			6	1	5	2	0	3	—		
実験 実習科目	化学実験Ⅰ	1前	○	1							○	1		1	1			共同	
	化学実験Ⅱ	1後	○	1							○	1		1	1			共同	
	植物学フィールドリサーチ	1前	○	1							○				1			共同	
	生物学実験Ⅰ	1後	○	1							○			2	1			共同	
	生物学実験Ⅱ	2前	○	1							○			2	1			共同	
	生化学実習	2前	○	1							○	1		1	1			共同	
	環境科学実習	2後	○	1							○	1					1	共同	
	微生物学実習	2後		1			1				○	1		1				共同	
	食品化学実習	2後	○	1							○	1						共同	
	植物生理学実習	3前		1			1				○			1	1			共同	
	植物育種学実習	3前		1			1				○	1	1					共同	
	植物形態学実習	3前		1			1				○	1	1		1			共同	
分子生物学実習	3前		1			1				○	1		2	1			共同		
小計 (13科目)			—	—	8	5	0	—			5	1	5	2	0	2	—		
基幹 科目	食香粧化学概論	1後		2				○				1					1	オムニバス	
	植物の多様性と進化	2前		2				○						1					
	進化生物学	2前		2				○				1							
	フードセイフティ論	2前		2				○				2							
	食品化学	2前	○	2				○				1							
	環境生物学	2前		2				○				1		1					
	植物形態学	2後		2				○				1							
	植物育種学	2後		2				○					1						
	食用作物学	2・3後		2				○									1		
	園芸栽培論	2後		2				○						1					
	環境科学	2後	○	2				○				1							
	昆虫学	2・3後		2				○						1					
	発酵化学	2・3後		2				○				1							
	食品加工学	2後		2				○				1							
小計 (14科目)			—	—	4	24	0	—			5	1	2	0	0	2	—		

科目 区分			授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考	
						必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外の教員		
専門教育科目	展開科目	理論追究	植物生理学	3・4前			2			○					1				共同
			動物生理学	3・4後			2			○									
			生理学演習	4前			1				○			3		1			
			遺伝子工学	3前			2			○				1					
			バイオインフォマティクス	3・4後			2			○				1		2			
			植物免疫学	3・4後			2			○									
			微生物利用学	3・4後			2			○			2						
			微生物工学演習	4前			1				○		1		1				
			生物資源工学	3・4前			2			○			1		1				
			生物資源工学演習	4前			1				○		1		1				
			小計(10科目)	-	-	0	17	0	-	-	5	0	3	0	0	1	-		
	展開科目	実践展開	花卉園芸科学	3・4前			2			○				1					
			園芸植物学	3・4後			2			○			1						
			園芸科学演習	4前			1				○		1	1					
			発酵工学	3前			2			○			1						
			食品の機能	3・4前			2			○			1		1				
			環境保全論	3・4後			2			○			1						
			醸造科学	3後			2			○			1		1				
			発酵・醸造学演習	4前			1				○		1		1				
			バイオマス利用論	3・4前			2			○			1		1				
			生物共生論	3・4後			2			○			1		1				
			小計(10科目)	-	-	0	18	0	-	-	5	1	3	0	0	0	-		
	専門演習・卒業研究	研究企画プレゼンテーション	2前	○	2				○			3	1	2				オムニバス・共同 共同 共同	
		協働プロジェクトⅠ	3前			2				○		4	1	1					
		協働プロジェクトⅡ	3後			2				○		4	1	1					
		専門演習Ⅰ	4前	○						○		7	1	6					
		専門演習Ⅱ	4後	○	2					○		7	1	6					
		卒業研究Ⅰ	3後	○	1					○		7	1	6					
		卒業研究Ⅱ	4前	○	1					○		7	1	6					
		卒業研究Ⅲ	4後	○	1					○		7	1	6					
	小計(8科目)	-	-	9	4	0	-	-	7	1	6	0	0	0	-				
合計(167科目)			-	-	57	221	0	-	-	7	1	6	2	0	78	-			
学位又は称号		学士(生物科学)			学位又は学科の分野			理学関係											
卒業・修了要件及び履修方法									授業期間等										
特別科目4単位、共通教育科目32単位以上(情報処理科目から4単位以上、外国語科目(英語)から6単位以上)、専門教育科目92単位以上(専門教育科目必修科目53単位を含む)を修得し、128単位以上修得すること。 (履修科目の登録の上限:原則 48単位(年間)) ただし、生物科学コースの学生は、専門教育科目の選択科目のうち実験実習科目の「植物生理学実習」と、展開科目「理論追究」区分の「植物生理学」「遺伝子工学」「生物資源工学」の単位を必ず修得すること。また、「生理学演習」「微生物工学演習」「生物資源工学演習」から1単位以上を修得し、展開科目「理論追究」区分から合計11単位以上を修得すること。 食・環境開発コースの学生は、専門教育科目の選択科目のうち展開科目「実践展開」区分の「花卉園芸科学」「発酵工学」「バイオマス利用論」の単位を必ず修得し、展開科目「実践展開」区分から合計11単位以上を修得すること。 ※「生理学演習」は「植物生理学」「動物生理学」の単位を全て修得した学生のみ履修できる。 ※「微生物工学演習」は「遺伝子工学」「微生物利用学」の単位を全て修得した学生のみ履修できる。 ※「生物資源工学演習」は「生物資源工学」の単位を修得した学生のみ履修できる。 ※「園芸科学演習」は「花卉園芸科学」「園芸植物学」の単位を全て修得した学生のみ履修できる。 ※「発酵・醸造学演習」は「発酵工学」「醸造科学」の単位を全て修得した学生のみ履修できる。									1学年の学期区分				2期						
									1学期の授業期間				15週						
									1時限の授業の標準時間				90分						

教 育 課 程 等 の 概 要																
（理工学部情報科学科）																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授 業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基幹 （助手を除く） 教員以外の教員	
特別 科目	まほろば教養ゼミⅠ	1通	○	1				○		4	2	2				
	まほろば教養ゼミⅡ	2通	○	1				○		4	2	2				
	まほろば教養ゼミⅢ	3通	○	1				○		4	2	2				
	まほろば教養ゼミⅣ	4通	○	1				○		4	2	2				
	小計（4科目）	—	—	4	0	0		—		4	2	2	0	0	0	—
共通 教育 科目	キャリアデザインⅠ	1前			2		○								1	共同
	キャリアデザインⅡ	2後			2		○								1	
	ボランティア活動	1・2後			2			○							2	
	インターンシップ	3前			2			○							1	
	職と食—パティシエ実習	1・2・3・4後			1				○						1	
	小計（5科目）	—	—	0	9	0		—		0	0	0	0	0	4	—
	人間論A	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	人間論B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	こころの科学A	1・2・3・4 前・後			2		○								3	
	こころの科学B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	からだの科学A	1・2・3・4 前・後			2		○								3	
	からだの科学B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	からだの科学C	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	人間形成の科学A	1・2・3・4 前・後			2		○								2	
	人間形成の科学B	1・2・3・4 前・後			2		○								2	
	ことばの世界A	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	ことばの世界B	1・2・3・4 前・後			2		○								2	
	日本の文学A	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	日本の文学B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	世界の文学A	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	世界の文学B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	芸術A	1・2・3・4 前・後			2		○								3	
	芸術B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
社会 理解	現代社会と人間A	1・2・3・4 前・後			2		○								3	
	現代社会と人間B	1・2・3・4 前・後			2		○								3	
	21世紀の社会と法A（日本国憲法）	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	21世紀の社会と法B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	21世紀の経済A	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	21世紀の経済B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	現代のビジネスA	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	現代のビジネスB	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	現代社会と政治A	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	現代社会と政治B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外の教員 (助手を除く)	
共通教育科目	国際理解	異文化理解A	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		異文化理解B	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		日本の歴史と文化A	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		日本の歴史と文化B	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		世界の歴史と文化A	1・2・3・4 前・後		2		○								2	
		世界の歴史と文化B	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		国際協力A	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		国際協力B	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
	科学技術理解	数学の世界	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		自然科学の世界A	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		自然科学の世界B	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		自然科学の世界C	1・2・3・4 前・後		2		○								2	
		生命の科学A	1・2・3・4 前・後		2		○								3	
		生命の科学B	1・2・3・4 前・後		2		○								2	
		生命の科学C	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		環境の科学A	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		環境の科学B	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		生活の科学A	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		生活の科学B	1・2・3・4 前・後		2		○								1	
		情報の科学	1・2・3・4 前・後		2		○			1	1				0	
	小計 (47科目)		—	—	0	94	0	—	—	1	1	0	0	0	54	—
	情報処理科目	情報処理基礎Ⅰ	1前		1			○							3	
		情報処理基礎Ⅱ	1前		1			○							3	
		情報処理基礎Ⅲ	1後		1			○							3	
		情報処理基礎Ⅳ	1後		1			○							3	
		情報処理演習A	2前		1			○							1	
		情報処理演習B	2後		1			○							1	
		情報処理演習C	3前		1			○							1	
		情報処理演習D	3後		1			○							1	
	健康スポーツ科目	健康スポーツA	1・2・3・4 前・後		1				○						2	
		健康スポーツB	1・2・3・4前		1				○						1	
		健康スポーツC	1・2・3・4後		1				○						2	
		野外活動	1・2・3・4前		2				○						2	
	外国語科目	英語リーディングⅠ	1前		1			○							2	
		英語リーディングⅡ	1後		1			○							2	
		英語ライティングⅠ	2前・後		1			○							1	
		英語ライティングⅡ	2前・後		1			○							1	
		英語コミュニケーションⅠ	1前		1			○							3	
		英語コミュニケーションⅡ	1後		1			○							3	
		英語コミュニケーションⅢ	2前・後		1			○							3	
		英語コミュニケーションⅣ	2前・後		1			○							3	
		中国語コミュニケーションⅠ	1前		1			○							1	
		中国語コミュニケーションⅡ	1後		1			○							1	
		中国語コミュニケーションⅢ	2前		1			○							1	
		中国語コミュニケーションⅣ	2後		1			○							1	
		北米文化語学演習	1・2・3後		2			○							1	
		中国文化語学演習	1・2・3・4前		2			○							1	

科目区分	授業科目の名称		配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外の教員	
共通教育科目	基礎科目	基礎国語演習	1前・後			1			○							1	
		基礎社会演習	1前・後			1			○							1	
		基礎数学演習	1前・後			1			○							1	
		基礎理科演習	1後			1			○							1	
		基礎生物演習	1前			1			○							2	
		基礎化学演習	1前			1			○							1	
		基礎物理演習	1前			1			○							1	
	小計 (33科目)		—	—	0	36	0	—			0	0	0	0	0	25	—
専門教育科目	理工通学科目	理工学概論	1前	○	2			○			1						
		理工学データサイエンス	1後	○	2			○			1						
		小計 (2科目)	—	—	4	0	0	—			2	0	0	0	0	0	—
	基礎科目・卒業研究	情報科学概論	1前	○	2			○			1						
		情報基礎数学Ⅰ	1前	○	2			○			1						
		情報基礎数学Ⅱ	1後	○	2			○			1						
		科学と倫理	1前	○	2			○			1						
		知的財産論	1後		2			○								1	
		情報処理概論	2前	○	2			○			1						
		情報セキュリティ	2後	○	2			○			1						
		人間工学	3前		2			○			1						
		情報社会論	3前		2			○								1	
		分野横断プロジェクトⅠ	3前		2				○			2	1				共同
		卒業研究Ⅰ	3前	○	1				○		5	2	2				共同
		分野横断プロジェクトⅡ	3後		2				○			2	1				共同
		卒業研究Ⅱ	3後	○	1				○		5	2	2				
		卒業研究Ⅲ	4前	○	1				○		5	2	2				
		卒業研究Ⅳ	4後	○	1				○		5	2	2				
	小計 (15科目)		—	—	16	10	0	—			6	2	2	0	0	2	—
	基幹科目	プログラミング総論	1前	○	2			○			1						
		プログラミングⅠ	1後	○	2				○				1				
		アルゴリズムとデータ構造	1後		2			○			1						
		プログラミングⅡ	2前	○	2				○			1					
		プログラミングⅢ	2後	○	2				○			1					
		プログラミングⅣ	3前	○	2				○		1						
		オブジェクト指向プログラミング	3前		2				○		1						
		コンピュータアーキテクチャ	3後	○	2			○					1				
		ソフトウェア工学	3・4後		2			○			1						
	小計 (9科目)		—	—	12	6	0	—			3	1	2	0	0	0	—
	展開科目	デジタルメディア	1前	○	2			○			1						
		Web	1後	○	2			○				1					
		データベース基礎	1後		2			○			1						
		WebプログラミングⅠ	2前	○	2				○			1					
		スマートモバイルプログラミング	2前		2				○			1					
		データベース設計	2後		2			○			1						
		ネットワークシステム	2後	○	2			○			1						
		WebプログラミングⅡ	2後		2				○			1					
		デジタルメディア演習	2後		2				○		1						
		通信ネットワーク設計	3前		2			○			1						
		動的Webプログラミング	3前		2				○							1	
		SNSビジネス演習	3前		2				○							1	
		システム運用	3前		2			○			1						
		ネットワーク演習	3後		2				○		1						
		データベース演習	4前		2				○		1						
		サーバ構築演習	4前		2				○		1						
		UNIX	4前		2			○			1						
		セキュリティ演習	4後		2				○		1						

科目 区分			授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考		
						必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外 の教員			
専門教育科目	展開科目	ヒューマンインタフェース	ヒューマンインタフェース	1前	○	2			○						1				1	オムニバス
			メディアコミュニケーション基礎	1前	○	2			○				1	1						
			マルチメディア	1後	○	2			○				1							
			画像処理演習	1後		2				○			1							
			画像処理ライブラリ	2前	○	2			○				1							
			コンピュータグラフィックス	2前		2				○				1						
			ヒューマンインタフェースプログラミング	2後	○	2				○			1							
			ゲーム開発	2後	○	2				○					1					
			映像処理演習	2後		2				○			1				1			
			メディアプログラミング	3前		2					○				1					
			X R	3前		2				○			1							
			ゲーム開発演習Ⅰ	3前		2					○				1					
			仮想ネット配信演習	3前		2					○			1						
			X R 演習Ⅰ	3後		2					○			1						
			3 D C G 演習	3後		2					○				1					
			ゲーム開発演習Ⅱ	3後		2					○					1				
			X R 演習Ⅱ	4前		2					○			1						
			プログラミングとエンジン	4後		2				○						1				
	データサイエンス	データサイエンス	1前	○	2				○				1							
		人工知能Ⅰ（機械学習）	1後	○	2				○				1							
		情報理論	2前	○	2				○					1						
		人工知能Ⅱ（深層学習）	2前	○	2				○				1							
		画像認識	2前		2				○					1						
		自然言語処理	2後		2				○						1					
		I o T 演習Ⅰ	2後	○	2					○			1							
		データ解析	2後		2					○					1					
		人工知能Ⅲ（AⅠのための統計）	2後		2					○			1							
		情報ストラテジ	3前		2					○										
		I o T 演習Ⅱ	3前		2						○									
		人工知能演習Ⅰ	3前		2						○		1							
		人工知能演習Ⅱ	3後		2						○		1							
		ビッグデータ解析	3後		2						○				1					
		データマイニング	4前		2					○			1							
	小計(51科目)			—	—	30	72	0	—			7	2	2	0	0	3	—		
(166科目)			—	—	66	227	0	—			7	2	2	0	0	75	—			
学位又は称号			学士（情報科学）			学位又は学科の分野			工学関係											
卒業・修了要件及び履修方法										授業期間等										
特別科目4単位、共通教育科目32単位以上（情報処理科目から4単位以上、外国語科目（英語）から6単位以上）、専門教育科目92単位以上（専門教育科目必修科目62単位を含む）を修得し、128単位以上修得すること。 （履修科目の登録の上限：原則48単位（年間）） 専門教育科目の基幹科目及び展開科目の3年次以降配当の選択科目のうち、以下の7つの領域から2領域以上を選択し、選択した各領域から2科目4単位以上、合計4科目8単位以上を修得すること。 ①プログラミング領域 「オブジェクト指向プログラミング」「ソフトウェア工学」 ②サーバ・ネットワーク領域 「通信ネットワーク設計」「システム運用」「ネットワーク演習」 「データベース演習」「サーバ構築演習」「UNIX」 「セキュリティ演習」 ③WEB領域 「動的Webプログラミング」「SNSビジネス演習」 ④ヒューマンインタフェース領域 「メディアプログラミング」「XR」「XR演習Ⅰ」「3DCG演習」 「XR演習Ⅱ」 ⑤ゲーム開発領域 「ゲーム開発演習Ⅰ」「仮想ネット配信演習」「ゲーム開発演習Ⅱ」 「プログラミングとエンジン」 ⑥I o T・データサイエンス領域 「情報ストラテジ」「I o T 演習Ⅱ」「ビッグデータ解析」 「データマイニング」 ⑦人工知能領域 「人工知能演習Ⅰ」「人工知能演習Ⅱ」										1 学年の学期区分					2 期					
										1 学期の授業期間					1 5 週					
										1 時限の授業の標準時間					9 0 分					

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(理工学部建築学科)																	
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授 業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考	
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教員以外 の教員		
特 別 科 目	まほろば教養ゼミⅠ	1通	○	1				○		7	2	4	1				
	まほろば教養ゼミⅡ	2通	○	1				○		7	2	4	1				
	まほろば教養ゼミⅢ	3通	○	1				○		7	2	4	1				
	まほろば教養ゼミⅣ	4通	○	1				○		7	2	4	1				
	小計(4科目)	—	—	4	0	0	—			7	2	4	1	0	0	—	
キ ャ リ ア 科 目	キャリアデザインⅠ	1前			2		○								1	共同	
	キャリアデザインⅡ	2後			2		○								1		
	ボランティア活動	1・2後			2			○							2		
	インターンシップ	3前			2			○							1		
	職と食—パティシエ実習	1・2・3・4後			1				○						1		
	小計(5科目)	—	—	0	9	0	—			0	0	0	0	0	4	—	
共 通 教 育 科 目	人 間 理 解	人間論A	1・2・3・4 前・後		2		○								1		
		人間論B	1・2・3・4 前・後		2		○								1		
		こころの科学A	1・2・3・4 前・後		2		○								3		
		こころの科学B	1・2・3・4 前・後		2		○								1		
		からだの科学A	1・2・3・4 前・後		2		○								3		
		からだの科学B	1・2・3・4 前・後		2		○								1		
		からだの科学C	1・2・3・4 前・後		2		○								1		
		人間形成の科学A	1・2・3・4 前・後		2		○								2		
		人間形成の科学B	1・2・3・4 前・後		2		○								2		
		ことばの世界A	1・2・3・4 前・後		2		○								1		
	ことばの世界B	1・2・3・4 前・後		2		○								2			
	教 養 科 目	日本の文学A	1・2・3・4 前・後		2		○								1		
		日本の文学B	1・2・3・4 前・後		2		○								1		
		世界の文学A	1・2・3・4 前・後		2		○								1		
		世界の文学B	1・2・3・4 前・後		2		○								1		
		芸術A	1・2・3・4 前・後		2		○								3		
		芸術B	1・2・3・4 前・後		2		○								1		
		社 会 理 解	現代社会と人間A	1・2・3・4 前・後		2		○									3
			現代社会と人間B	1・2・3・4 前・後		2		○									3
			21世紀の社会と法A(日本国憲法)	1・2・3・4 前・後		2		○									1
21世紀の社会と法B			1・2・3・4 前・後		2		○								1		
21世紀の経済A	1・2・3・4 前・後			2		○								1			
21世紀の経済B	1・2・3・4 前・後			2		○								1			
現代のビジネスA	1・2・3・4 前・後			2		○								1			
現代のビジネスB	1・2・3・4 前・後			2		○								1			
現代社会と政治A	1・2・3・4 前・後			2		○								1			
現代社会と政治B	1・2・3・4 前・後			2		○								1			

科目 区分		授業科目の名称	配当年次	主要授 業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
					必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教 員 以 外 の 教 員	
共通教育科目	国際理解	異文化理解A	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		異文化理解B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		日本の歴史と文化A	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		日本の歴史と文化B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		世界の歴史と文化A	1・2・3・4 前・後			2		○								2	
		世界の歴史と文化B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		国際協力A	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		国際協力B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
	科学技術理解	数学の世界	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		自然科学の世界A	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		自然科学の世界B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		自然科学の世界C	1・2・3・4 前・後			2		○								2	
		生命の科学A	1・2・3・4 前・後			2		○								3	
		生命の科学B	1・2・3・4 前・後			2		○								2	
		生命の科学C	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		環境の科学A	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		環境の科学B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		生活の科学A	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		生活の科学B	1・2・3・4 前・後			2		○								1	
		情報の科学	1・2・3・4 前・後			2		○								2	
	小計 (47科目)		—	—	0	94	0	—			0	0	0	0	0	56	—
	情報処 理科目	情報処理基礎Ⅰ	1前			1			○							3	
		情報処理基礎Ⅱ	1前			1			○							3	
		情報処理基礎Ⅲ	1後			1			○							3	
		情報処理基礎Ⅳ	1後			1			○							3	
		情報処理演習A	2前			1			○							1	
		情報処理演習B	2後			1			○							1	
		情報処理演習C	3前			1			○							1	
		情報処理演習D	3後			1			○							1	
	健康ス ポーツ 科目	健康スポーツA	1・2・3・4 前・後			1				○						2	
		健康スポーツB	1・2・3・4前			1				○						1	
		健康スポーツC	1・2・3・4後			1				○						2	
		野外活動	1・2・3・4前			2				○						2	共同
	外国語 科目	英語リーディングⅠ	1前			1			○							2	
		英語リーディングⅡ	1後			1			○							2	
		英語ライティングⅠ	2前・後			1			○							1	
		英語ライティングⅡ	2前・後			1			○							1	
		英語コミュニケーションⅠ	1前			1			○							3	
		英語コミュニケーションⅡ	1後			1			○							3	
		英語コミュニケーションⅢ	2前・後			1			○							3	
		英語コミュニケーションⅣ	2前・後			1			○							3	
		中国語コミュニケーションⅠ	1前			1			○							1	
		中国語コミュニケーションⅡ	1後			1			○							1	
		中国語コミュニケーションⅢ	2前			1			○							1	
		中国語コミュニケーションⅣ	2後			1			○							1	

科目 区分			授業科目の名称	配当年次	主要授 業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
						必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教 員 以 外 の 教 員 (助手を除く)	
共通教育科目	外国語科目		北米文化語学演習	1・2・3後			2			○							1	
			中国文化語学演習	1・2・3・4前			2			○							1	
	基礎科目	基礎養成科目	基礎国語演習	1前・後			1			○							1	
			基礎社会演習	1前・後			1			○							1	
			基礎数学演習	1前・後			1			○							1	
			基礎理科演習	1後			1			○							1	
			基礎生物演習	1前			1			○							2	
			基礎化学演習	1前			1			○							1	
			基礎物理演習	1前			1			○							1	
			小計 (33科目)	—	—	0	36	0	—			0	0	0	0	0	25	—
専門教育科目	理工学部	理工学専攻	理工学概論	1前	○	2			○								1	
			理工学データサイエンス	1後	○	2			○								1	
			小計 (2科目)	—	—	4	0	0	—			0	0	0	0	0	2	—
	基幹科目・卒業研究		建築概論	1前	○	2			○			1	1		1			共同 共同 共同
			建築デザイン論	2前	○	2			○			1						
			建築キャリアデザイン	1前	○	2				○		2						
			建築倫理	3前	○	2						2						
			デザイン基礎	1後	○	2			○			1						
			空間デザイン論	1前	○	2			○			1		1				
			建築計画学	2後	○	2			○			1						
			住空間計画学	2前	○	2			○			1						
			建築基礎製図	1前	○	3				○		1	2	2	1			
			建築設計演習Ⅰ	1後	○	3				○		1	2	2	1			
			建築設計演習Ⅱ	2前	○	3				○		1	2	3				
			建築基礎数学	1前	○	2				○		2			1			
			建築基礎物理	1後	○	2				○		2			1			
			卒業研究Ⅰ	4前	○	1				○		8	2	4				
			卒業研究Ⅱ	4後	○	1				○		8	2	4				
			小計 (15科目)	—	—	31	0	0	—			8	2	4	1	0	0	—
	展開科目	CAD	建築プレゼンテーション	2後	○	2				○		1	1					
			建築CADⅠ	1後	○	2				○			1	1				
			建築CADⅡ	2前			2			○			1	1				
			建築CADⅢ	2後			2			○			1	1				
			建築CG	3前			2			○			1					
			小計 (5科目)	—	—	4	6	0	—			1	1	1	0	0	0	—
		設計	建築設計演習Ⅲ	2後			3			○		3		1				共同 共同 共同 共同
			建築設計演習Ⅳ	3前			3			○		1		2				
			建築設計演習Ⅴ	3後			3			○		2		1				
			スタジオ設計演習	4前			3			○		2		2				
			建築設計特別演習	4後			3			○		2		2				
			建築思想作品論	2後			2		○			2		1	1			
			建築設計デザイン演習	4後	○	2				○		2		1				
			海外建築研修	1・2・3前			2			○		2	1	1				
			国内建築研修A	1・2・3前			2			○		3	1	1				
			国内建築研修B	1・2・3後			2			○		1	1	1	1			
			小計 (10科目)	—	—	2	23	0	—			6	2	3	1	0	0	—
		空間	インテリアデザイン論	1後			2			○		1	1					共同
			インテリアデザイン演習Ⅰ	2前			2			○		1	1					
			インテリアデザイン演習Ⅱ	2後			2			○		1	1					
			ランドスケープデザイン論	2前			2			○		1						
			ランドスケープデザイン演習	2後			2			○		1						
			アーバンデザイン	2後			2			○		2		1				
			福祉環境論	3前	○	2				○		1						
			福祉環境演習	3後			2			○		1						
			商空間デザイン論	3前			2			○		1		2				
			商空間デザイン演習Ⅰ	3後			2			○		1		2				
			商空間デザイン演習Ⅱ	4前			2			○		1		2				
			建築リノベーション論	3後			2			○		2						
			建築リノベーション演習	4前			2			○		2						
			建築フィールドワーク	4後			2			○		2	1	1				
			小計 (14科目)	—	—	2	26	0	—			4	2	2	0	0	0	—

科目 区分			授業科目の名称	配当年次	主要授 業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
						必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教員 (助手を除く) 以外の 教員	
専門 教育 科目	歴史	西洋建築史	1後	○	2			○							1			
		日本建築史	2前	○	2			○							1		1	
		近現代建築史	2後			2		○							1			
		住居史	3前			2		○						1				
		小計 (4科目)	—	—	4	4	0	—			0	1	0	1	0	1	—	
	法規	建築法規	3後			2		○			1		1					
		建築法規演習	4前			2			○		1		1					
		小計 (2科目)	—	—	0	4	0	—			1	0	1	0	0	0	—	
	材料・ 施工	建築材料学	3前	○	2			○			2		1					
		建築材料科学実験	3後			1				○	2		1					
		建築施工	3後			2		○			2							
		建築施工演習	4前			2			○		2							
		建築積算	3後			2		○			1							
		建築積算演習	4前			2			○		1							
		建築マネジメント	4後			2		○			2							
		小計 (7科目)	—	—	2	11	0	—			4	0	1	0	0	0	—	
	構造	建築構法	1後	○	2			○			2		1					
		建築一般構造学	2前	○	2			○			2		1					
		建築構造力学Ⅰ	2前	○	2			○			1		1					
		建築構造力学Ⅱ	2後			2		○			1		1					
		建築構造力学演習Ⅰ	3前			2			○		1		1					
		建築構造力学演習Ⅱ	3後			2			○		1		1					
		小計 (6科目)	—	—	6	6	0	—			2	0	1	0	0	0	—	
	環境 設備	建築環境学	2前	○	2			○			1		1					
		建築環境学演習	2後			2			○		1		1					
		建築設備	3前			2		○			1		1					
		建築設備演習	3後			2			○		1		1					
		小計 (4科目)	—	—	2	6	0	—			1	0	1	0	0	0	—	
	関連 科目	住生活論	1前			2		○			1	1						
		人間工学	1前			2		○					1					
		建築比較文化論	1後			2		○			2							
		デザイン	1後			1			○		1		1					
		色彩学	2・3後			2		○								1		
		スケッチ表現	2前			1			○		2		1					
		小計 (6科目)	—	—	0	10	0	—			3	1	2	0	0	1	—	
合計 (164科目)			—	—	61	235	0	—			8	2	4	1	0	76	—	
学位又は称号			学士 (建築学)			学位又は学科の分野				工学関係								
卒業・修了要件及び履修方法									授業期間等									
特別科目 4 単位、共通教育科目 3 2 単位以上 (情報処理科目から 4 単位以上、外国語科目 (英語) から 6 単位以上)、専門教育科目 9 2 単位以上 (専門教育科目必修科目 5 7 単位を含む) を修得し、1 2 8 単位以上修得すること。 (履修科目の登録の上限: 原則 4 8 単位 (年間)) ※専門教育科目の選択科目のうち、「建築設計演習Ⅲ」「建築法規」「建築構造力学Ⅱ」は建築コース必修科目とし、展開科目の「商空間デザイン論」「建築リノベーション論」「建築設備」は空間デザインコース必修科目として、上記必修科目にそれぞれ追加する。									1 学年の学期区分						2 期			
									1 学期の授業期間						1 5 週			
									1 時限の授業の標準時間						9 0 分			

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
特別 科目	まほろば教養ゼミⅠ	○	この授業は、安田の学生として、また一人の社会人として、学園訓「柔しく剛く（やさしくつよく）」に則った豊かで確かな自己実現が達成できるよう、「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」の四つの活動を柱に、主としてチューターを中心にクラス単位で展開する。 1年次では、「安田を知る」「学びを知る」を中心に授業を展開し、大学の歴史、建学の精神を知り、大学生としての学びの精神を理解する。	
	まほろば教養ゼミⅡ	○	この授業は、安田の学生として、また一人の社会人として、学園訓「柔しく剛く（やさしくつよく）」に則った豊かで確かな自己実現が達成できるよう、「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」の四つの活動を柱に、主としてチューターを中心にクラス単位で展開する。 2年次では、1年次に学んだ「安田を知る」「学びを知る」をふまえながら、「自分を知る」を中心に授業を展開し、自己を見つめ直す種々の作業を通して、自立性と主体性を兼ね備えた自己の育成を図ると同時に社会に眼を向ける姿勢を養う。	
	まほろば教養ゼミⅢ	○	この授業は、安田の学生として、また一人の社会人として、学園訓「柔しく剛く（やさしくつよく）」に則った豊かで確かな自己実現が達成できるよう、「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」の四つの活動を柱に、主としてチューターを中心にクラス単位で展開する。 3年次では、これまでに学んだ「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」をふまえながら、「社会を知る」を中心に授業を展開し、自立性と主体性を兼ね備えた自己の育成を図ると同時にさらなる学びの精神を培う。	
	まほろば教養ゼミⅣ	○	この授業は、安田の学生として、また一人の社会人として、学園訓「柔しく剛く（やさしくつよく）」に則った豊かで確かな自己実現が達成できるよう、「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」の四つの活動を柱に、主としてチューターを中心にクラス単位で展開する。 4年次では、これまでに学んだ「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」をふまえながら、学生は将来に向けての生き方を模索するために積極的に社会との関わりを求めるための取り組みを行う。	
共通 教育 科目	キャリア 科目	キャリアデザインⅠ	この授業の目的は、「生きる」「学ぶ」「働く」をキーワードにして人生の課題や進路・職業選択を考え、4年間の意図的学修や課外活動の充実を図ることにある。授業内容としては、次の3点がある。1) 多様な視点から自分らしさを理解し、自己を表現する。2) 社会の環境変化や期待される姿から、自分にとっての進路・職業選択の意味を考える。3) キャリアデザインに着手し、4年間の学修・生活設計を立てて自己駆動する。授業を通して、学園訓「柔しく剛く」の意味を深め、その感性や生きる力をどんな夢や目標に向けるのか、と自問自答し続ける。	
		キャリアデザインⅡ	キャリアデザインとは、自分のキャリア（職業・生涯の経歴）を、自らデザイン（設計）することである。仕事をしながら幸福感を味わうためには、また成果をあげるには、キャリアデザインが必要となる。「今まで何をしてきたか？」より「これから何をするか」を考え、なりたい自分をイメージすれば、「今何をすべきか」が自ずと分かってくる。この自己認識と、エンプロイアビリティ（雇用されるにふさわしい能力）を育成することが、本授業の目標である。以上の経験を持ち、個人としてのキャリアモデルになりうる人に、「私の人生観」「私の職業観」「私の友人観」などのテーマで語ってもらう、連続講演形式の授業である。	
	キャリア 科目	ボランティア活動	ボランティアは「主体性の原則（自由意志の原則）、非営利性の原則（非営利性の原則）、市民公益性の原則」の3つの原則で表現される。本授業ではまず、身の回りでのどのようなボランティア活動が行われているか、現状を把握する。次に、ボランティア活動を求められている現場からの声を参考に、自ら考え、ボランティア活動を実践する。 実際の活動を通して、ボランティア活動の社会的意義、個人の積極的参加の必要性、方法について生涯学習の立場から理解を深める。	共同
		インターンシップ	この授業では、企業や地方公共団体での就業体験を意義のあるものとするために、事前準備を行うとともに、夏期休業中に就業体験研修を行う。インターンシップに参加する目的と意義を理解し、現在の地域経済状況を理解するとともに、業界・研修先研究を行い、就業体験の意義をより深く考察する。同時に、ビジネスマナー・ビジネス文書作成等のスキルを磨き、これらの成果をもとに、実際に就業体験を行う。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	キャリア 科目		調理は食に関する栄養学、食品学などの知識を実際に食べる事に結び付ける接点でもある。生命を維持するためや嗜好品のなものなど様々である。本実習では、菓子、ケーキなどの嗜好品の製菓技術を習得し、食が人に与える心の豊かさ、ゆとり感について学ぶ。また、四季折々の素材を使い調理し味わうことにより、食べる事が人にとっていかに大切かを学ぶ。	
	人間論A		人間論は講義形式により授業を行ない、「人間としての真の生き方」を思索し、探究することを目標とする。現代社会は、少子高齢、経済のグローバル化、情報技術革命等々の大きな構造的変化を迎え、急激な変貌を遂げつつある。そこでは価値観や世界観の多様化、人間性喪失、人間関係の希薄化や連帯性喪失といった人間疎外的状況をいっそう加速させつつある。人間論はこうした人間疎外的状況を克服すべく、人間諸科学等の成果をふまえた総合的視点のもとで、真の人間性を探究することにより、人間性の回復と人間としての真の生き方を考察する。	
	人間論B		生命倫理の起こりと歴史的背景、倫理の拡大と応用（個人から共同体、生命圏）、生命倫理の基本原則、生命とは、人命とは、尊厳とは、死とその定義と取り扱いなどについて考察する。そのような理解のうえに患者の人權の歴史と現状、インフォームド・コンセント、自己決定、人工受精、出生前診断、人工妊娠中絶、生殖技術、生命操作、臓器移植、安楽死・尊厳死やQOL問題などについて論及する。さらには生殖医療、クローン、家族、親子の問題など新しく生起する困難なテーマについても問題解決のためにどのような法的枠組みを構築するべきかを考えることのできる能力を養いながら、医学・薬学及び看護学にとって重要な生命倫理学を学ぶ。	
	こころの科学A		自分や他人の「こころ」のメカニズムを知る手がかりは、人間が起こす行動の中にあると考えられている。複雑化する現代社会の中で生きる人間の行動を理解するために、心理学は一定の科学的研究法を用いて、人間の行動に影響を与える要因と、その法則性を見出そうと試みてきた。この科目では講義形式の授業を行い、直接見ることでできない人間の「こころ」の過程について理解を深めることを目標とし、人間が起こす興味深い様々な行動を取り上げ、そのような行動の原因や環境、背景について考えることで、心理学の基礎について学修する。	
	こころの科学B		人間の「こころ」を科学的に究明する「心理学」の領域の中に「臨床心理学」がある。本授業では、この臨床心理学を背景に、知的・身体的機能に支障のある状態、対人関係の困難な自閉症、学修不振やことばの障害、不登校や場面緘黙、チックなどの情緒障害、家庭内暴力や校内暴力などの問題行動など、様々な心理的・行動的問題の原因やそれらを持つ児童生徒への支援のあり方について、講義形式により授業を行い、臨床心理学の基礎について学修する。	
	からだの科学A		この科目は、ヒトのからだの成り立ちや営みについて理解を深めるとともに、今日的な問題状況をとりえながら健康なからだづくりについて学ぶ。特に、乳幼児・児童期から青年期に至る発育・発達を理解、こころとからだの歪みと養育、女性の心身の健康と男女の性差の問題及び運動・スポーツにおける身体の動きと働き、スポーツパフォーマンスを高めるための科学などについて学修する。	
	からだの科学B		身近な病気を通してヒトのからだの仕組みや病気が起こるメカニズム、また、広く環境問題とヒトとの関わりについて基本的知識の修得を目的とする。食物の消化とその異常、腸内細菌、肥満とやせ、糖尿病、ホルモンと病気、骨粗しょう症、動脈硬化、かぜとインフルエンザ、AIDS、BSE、痛み（頭痛、胸痛、腹痛、関節痛、腰痛）、心臓の病気、肺の病気、耳の病気、胃・腸の病気、アトピー・アレルギー、免疫と免疫疾患、痛風、がん、放射線と病気、喫煙と健康、アルコールと病気、老化、痴呆、頭の病気、神経症、精神障害（うつ病、統合失調症、パニック障害、心気症、不眠、性同一性障害、強迫性障害など）、PTSD、環境と健康、緊急処置など、今話題になっている病気についての基本的知識を修得する。	
	からだの科学C		社会は高度に都市化し、少子・高齢化が急速に進んでいる。そして、豊かさとともに、健康に関する関心が益々高まっている。健康科学が目指すところは、全ての人が健やかで心豊かな質の高い生活、活力のある社会を築くための知恵を培うことである。色々な観点より「健康」の問題にふれ、健康科学について学ぶ。健康の概念、疾病の概念、細胞の老化、ヒトの寿命、健康寿命、加齢・老化、病気の予防、生活習慣病、栄養、運動、休養・睡眠、環境と健康の関係について基本的知識を修得する。	
	人間形成の科学A		この科目は、人間形成のプロセスを、総合科学としての教育学を中核に据えながら、関連諸科学との統合のなかで考究する。その際、研究の結果としての知識の伝達と同時に、人間を多角的に探求する技法を獲得する。すなわち、人間形成のプロセスを考察することによって課題探求能力の育成を図るものである。なお、この授業ではより原理的な側面を対象とする。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	人間 理解 教養 科目	人間形成の科学B	人間形成のプロセスにとって幼児期は最も重要である。本授業の目的は、早期教育に焦点を当て、幼児の発達とは何か、発達課題とは、子どもの可能性についての基本的理論を学び、関連諸科学との統合のなかで考究することである。すなわち、人間形成のプロセスを考察することによって課題探求能力の育成を図るものである。子どもを取り巻く早期教育の現状を把握した上で、子どもの発達の基本理論を学び、研究の結果としての知識の伝達と同時に、人間を多角的に探求する技法の獲得を目指す。	
		ことばの世界A	人間関係が希薄になった現代日本社会に対し、ことばによるコミュニケーションという側面に焦点を当てて多角的なアプローチを試みる。ここでは、その土台としての日本語の基礎知識及びコミュニケーションの方法の2点を中心となる。前者では「ことば」の常識を修得させる。後者では対話における自己表現の方法・スキルなどの修得がターゲットとなる。また、地域社会におけるコミュニケーションも対象となる。地域社会の「ことば」である方言の実態解明も重要な問題であり、本授業を「日本語を見つめ直す」契機とする。	
		ことばの世界B	翻訳では味わえない英語の妙味に浸り、美しいことばとしての英語を楽しむことができるようにすることが、この科目の目的である。授業では、英語圏のすぐれた映画作品や身近な親しみやすい種々のジャンルの英文を教材として取り上げる。前者の場合では映画作品の鑑賞と並行して、シナリオ英語のしやれた感覚をも味わい、後者の場合では、Mother Goose、レシピや広告、新聞の英語など、そのジャンルに特有のスタイルや約束ごとを探究する。	
		日本の文学A	現在と未来を知るためには、過去を知らなければならない。過去を知る一つの方法は、過去の人々が歌い、語り、書いた文学作品を読むことである。古代から近世末までの日本の文学作品を取り上げ、それぞれの時代の人々が、どのような歴史的社会的状況の中で、何を感じ・考え・表現してきたのかを探究する。また、「社会－人間－文学」の関わりについて考えを深め、現在と未来における私たちの生き方を考察する。	
		日本の文学B	価値観の多様化や社会の国際化が急速に進展し、改めて日本人一人ひとりの伝統理解のあり方が問われている現代の動向をふまえ、近代以降の日本の文学作品を取り上げ、文学と文学をめぐる様々な事象の考察を多角的に行う。この授業は講義形式で行われ、作家の紹介や作品と時代との関わり、また、作品内容の読解や課題の考察・発表などの作業を通して、日本文学に親しみ理解を深めるとともに、人間自身及び人間と自然・社会・時代等の諸環境との関わりを探究する上において、文学のことばがいかに重要な役割を果たすかについても理解する。	
		世界の文学A	世界の文学には、大きく分けて東洋文学と西洋文学がある。本授業では日本文学以外の中国文学その他の東洋文学を扱う。この授業は、いずれかの東洋文学の一つあるいはいくつかの作品について、本文の読解などの作業を通して、それぞれに固有の「ものの見方、考え方」を学ぶことを目的とする。それらを学ぶことにより、私たちの有するものとは異なる要素を知り、理解することで、思考の幅を広げ深めることができる。	
		世界の文学B	人間とは努力する限り過誤を犯す存在であり、いかに進歩しても人間そのものの本質は変わらないと述べ、世界文学の必要性を説いたのはゲーテである。西洋の二大思潮としてギリシア・ローマの古典（ヘレニズム）と聖書・キリスト教（ヘブライズム）がよく指摘されるが、西洋の文学作品に表れた人間活動とその精神的様相を考究することは、文化の「メガトレンド」の理解にとどまらず、普遍的「人間理解」への手がかりをつかむ道である。こうした視点から、英米文学・フランス文学、その他の西洋文学を取り上げ、学修する。	
		芸術A	芸術の諸分野は感性を豊かに育み、生涯にわたる人間形成に重要な部分を占め、影響を与えている。いずれも技能の修練によって芸術の本質が達成されることが多い。それらを社会に示し評価を受け、さらなる向上が目指されるものである。これらの修得には才能及び、相当の環境と時間を要する忍耐のいる作業である。本授業は、音楽或いは美術の分野に即して、我が国や諸外国（西欧、東欧、アメリカ）の歴史を概観しつつ芸術が人間にもたらす影響と精神性をその主たる本質に迫る端緒を開くことを目的とするものである。	
		芸術B	この科目では、芸術の諸分野のうち書道を扱う。書道は、漢字を表現手段として展開される独特の芸術である。その漢字は、甲骨文字・金文・篆書・隷書・楷書と、その書体の変遷の過程で、様々な魅力あふれる古典を生み出し、今日の我々に語りかける。この授業は、書道芸術を今日的な観点から分析し、明日へと続く意義を考察する。同時に、漢字文化とはどのようなものか、関連する文学や歴史事象とも合わせ、文化史全般の中でとらえる。	
	社会 理解	現代社会と人間A	「普通」「標準」といった自明の基準が失われ、「私はどう生きるか」が常に問われるのが現代である。グローバル化社会にあって「日本人」としてどう生きるか。さらに、親が歩んだ道とは異なる人生をどう設計していくか。そうした問いに応じて生きていくには、異文化理解、異なる世代の生活世界の理解に基づく「相対化」の視点が重要である。この科目では、そうした視点を「人々の日常生活」に焦点をおきながら深めていく。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	社会 理解 教養 科目	現代社会と人間B	現代の社会に生きる大学生に、講義形式で、人間が本来的に持っている自己実現の力に気づき発揮できるよう、自己自身を力づける（エンパワーメント）きっかけを提示する。学生一人ひとりが、人生・生涯という、ゆったりとした長さの中で自己について考えられるように、他者との共感的な理解を深めてよい人間関係が築けるように、女性という社会的存在を生かしてより住みやすく平和な社会をつくるための貢献ができるようにと、エンパワーメントの願いをこめている。この授業は、現代の社会と人間の関わりについて、女性、青年、心理、自己表現といった観点からの理解を目指す。	
		21世紀の社会と法A （日本国憲法）	国の最高法規としての日本国憲法が、われわれの日常生活にどのような関わりを有しているかという視点を縦糸に、人権の保障と国の統治システムの解明を横糸に、21世紀の国際社会における憲法のあり方を模索する。そこでは、従来の価値基準では律することができず、他の科学領域の成果を採りこんでいかなければならない新たな現象に直面する憲法の苦悩が見て取れるが、そこにこそ新たな知的営為の必要性があることを認識する。	
		21世紀の社会と法B	男女雇用機会均等法が施行されて30年以上が経過したが、なお、その標とする職場における男女平等の実現は果たされていない。均等法のモデルのひとつとなった立法を有するアメリカでも、確かにエリート女性の華々しい活躍は見られるが、やはり、職場の実情は男女平等の実現からはほど遠い状態にある。この授業では、日本とアメリカの「職場における性差別禁止法」の仕組みと運用を比較検討することによって、その原因を考え、男女平等実現の道をさぐることを目標とする。	
		21世紀の経済A	近年、多くの経済社会問題が私たちの日々の生活に大きな影響を与えている。特に、少子高齢化や財政悪化の問題は、現在のみならず将来の私たちの日々の生活に大きな影響を与える。そこで、講義形式で行われる本授業では、こうした問題やそれらの問題が及ぼす影響を理解するために、基礎的な経済学の知識の修得、ならびに、現在生じている経済社会問題が私たちの生活に影響を与えるメカニズムを理解することを目指す。具体的には、経済の仕組み、景気、金融、財政・税制などについての基本的な知識及び経済学の分析手法を学修する。	
		21世紀の経済B	本授業は講義形式により行われ、経済社会の変化に対応した家計の経済管理やマネージメントの重要性について認識するとともに、生涯生活設計を実現するためのライフプランの立て方を修得することを目的とする。具体的には、まず、現在の家計を取り巻く環境変化を理解し、今後どのような家計の経済管理が必要かを学ぶ。そのうえで、生涯生活設計を実現するために、どのようにライフプランを作成していくべきかを考え、各自で将来のライフプランを作成する。ライフプランの作成に当たっては、金融市場をいかにうまく利用して資金調達・資産運用を行うかを検討する。	
		現代のビジネスA	働くことの意味とは何か、自己管理や自己啓発をどのようにすべきかなどについて考えるとともに、所属する組織の目的実現のために有効な役割を担い、組織にとって必要な存在となるために必要となる基礎的な知識や技能、実務能力などの修得について、ビジネス現場の具体的な事例を取り上げながら理解する。	
		現代のビジネスB	この授業は講義形式で行われ、ICTの急速な進展を背景にビジネスを取り巻く環境が変化する中で、「なぜ、従来型日本システムが、今大きく変わろうとしているのか」をキーワードとして、グローバルな視点から企業の目的や活動（戦略、組織、人的資源、マーケティング、財務）に関して基本的な理解を深めることを目標とする。この授業は、ビジネスが具体的に理解できるように、具体的な事例（ケーススタディ）や新聞記事を取り上げながら学修する。	
		現代社会と政治A	政治は消費税を上げたり、法律を決めたりすることによって、我々の生活や社会を変える力を持っている。対して我々は、その決定に影響を及ぼす力を持っている。社会をより良いものにしていくために、政治の仕組みを理解し、問題点を明らかにする必要がある。政治の仕組みを理解した上で、現在の日本や世界において、どのようなことが政治的に議論されているかを学ぶ。そして、国際化の時代において、国際人としての自覚と認識を持つことを目的とする。	
		現代社会と政治B	現代において、新しい情報や知識・価値観の存在感が増している。それらに対して、正しく理解し受容する必要性が高まっている。授業では、女性を取り巻く諸問題を、マスコミ等に取り上げられている今日的な素材をもとにして、それらの持つ意味や本質・問題点などを考察していく。新聞記事などを深く読むことにより、政治や社会問題などの情報・知識を掘り下げ、社会人・国際人としての良識や社会性を身につけることを目的とする。	
	国際 理解	異文化理解A	国際的な往来が活発化し、英米への旅行や長期滞在がかつてないほど身近なものになった現在、英米の社会的・文化的な背景の理解がますます重要になってきている。この授業では、英米の自然や歴史、慣習など多種多様な素材をもとに、イギリスあるいはアメリカの文化的特徴及び歴史的背景、人々の考え方や価値観を学び、異文化の中に暮らす人々の心を理解することにより、異文化理解を目指し、多様性を受け入れることのできる国際人を育成することを目的とする。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	国際 理解	異文化理解B	この授業では、異なる文化とそこに生きる人々と私たちとの関わりを考察し、真の異文化理解とは何であるか、そして異なる文化に属する人々に対するコミュニケーションはどうあるべきかの答えを探ることを目的としている。その目的のために、世界の様々な文化、特に日本文化のルーツともいえるアジアの文化を主対象とした比較文化的な考察や、異なる文化を背景に持つ人々とのコミュニケーションにおける諸問題を、知覚、言語、非言語、自己概念、ステレオタイプ、偏見、ヒーロー等、の様々な観点から学修する。	
		日本の歴史と文化A	21世紀における国際社会にあつては、それぞれの国が国境を越えて互いの国の歴史と文化を相互に理解しあう関係が強く求められているが、その一方では、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛することも併せて求められている。この授業はこうした見地のもとに、講義形態をとりながらも自らが考え組み立て、日本の歴史と文化に対する認識を深めることを目標とする。特に本授業においては、歴史書・絵巻物・建造物・遺跡・文書といった歴史的な素材を主に用いた視点から授業を展開し、21世紀にふさわしい日本のあり方を構想する。	
		日本の歴史と文化B	21世紀における国際社会にあつては、それぞれの国が国境を超えて互いの国の歴史と文化とを相互に理解しあう関係が強く求められているが、その一方で、自国の歴史と文化に対する正しい理解も併せて求められている。この授業はこうした見地のもとに、日本の歴史と文化に対する認識を深めることを目標とし、特に、神話・物語・説話・絵巻・絵伝・小説といった文学的な素材を主に用いて学修する。	
		世界の歴史と文化A	社会の国際化が進む現在、我々は世界的な視野で物事を考え、日本とは異なる文化や伝統を深く理解し、それを共有化できる価値を追求していく態度を養うことが求められている。本授業は、このような現代の動向をふまえ、世界の歴史と文化に対する理解を深めることを目標とする。特に、中央アジアやスリランカなど日本と深い関わりを持ちながらも、意外に知られてこなかった地域を取り上げ、社会や文化、歴史の紹介や解説に加え、基礎的言語や文字についても学修する。	
		世界の歴史と文化B	社会の国際化が進む現在、我々は世界的な視野で物事を考え、日本とは異なる文化や伝統を深く理解し、それを共有化できる価値を追求していく態度を養うことが求められている。本授業は、このような現代の動向をふまえ、世界の歴史と文化に対する理解を深めることを目標とし、講義形式で授業を展開する。特に本授業においては、諸外国の歴史・文化に対する理解を深めるために、政治史・文化史・社会史などの幅広い視点から考察する。	
		国際協力A	本授業では、「環境問題」のように、今まさに国際的な協力を要請する社会問題を例にとって、正しい国際協力のあり方を模索していく。「内政干渉」を切り札にする国家ではなく、同じような問題をかかえている地域のNon・state actorsが国家を通さず、直接横に結びついていく、「越境民主主義」のあり方こそが、「国際的」という言葉が意味する真の「国際協力」のあり方なのだ、ということを理解させることを目的とする。「国際的」という言葉、『もののけ姫』、人間中心主義、動物の権利、生態系中心主義、グローバリゼーション、日本の環境問題、南北問題、生命／生活圏主義、越境的民主主義などのテーマを扱う。	
		国際協力B	開発途上国が抱える様々な問題を解決するため、専門家やボランティアが開発途上国に派遣され、国際協力が実践されている。本授業は、国際協力の前提となる、国際情勢について学ぶ。特に「グローバリゼーション」の影響を考えるために、題材として、主に「南北格差の問題」を取り上げる。現在進行中のグローバリゼーションが何をもたらしているのか、そしてそれに対してなぜ「もうひとつの世界は可能だ」という声が世界中で上がっているのか、を理解し、同じような問題に苦しむ者たちが、国家を介在させずに、横にネットワークを築くという「越境民主主義」の可能性を探ることを目的とする。	
	科学 技術 理解	数学の世界	この授業は、体系的な数学の世界ではなく、人間の知的活動としての数学の世界、すなわち、数学という既存の学問体系にこだわらず、人間の知的営為としての数学の世界を端的に示す話題を中心に扱う。話題の中心となるのは数と図形であり、数学の世界の面白さを体験することを目標とし、魔法陣、暗号、作図、ソーマキューブ等を例に、数学の世界の合理性を理解するために、自然数の性質、ユークリッド幾何学、合同式的基本性質、数直線と実数の世界等を取り上げる。	
		自然科学の世界A	あくなき科学者の探究心のもと、現代の科学知識は、科学的な推察と精密観測によって、地球から飛び出て宇宙の端にまで及んでいる。人類は、古来、宇宙に果てしないロマンと夢を描き、想像の世界に浸っていたが、今やそれも科学探求の及ぶ領域となっている。この授業は講義形式により行い、宇宙と地球についての知見を得ることを目的とし、人類が如何にして宇宙と地球についての正確な知見を得ることができたのか、その歴史を振り返り、現在までに得られた知識についての概説を行なうとともに、探求に用いられた現代科学の一端を展望する。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	自然科学の世界B		われわれは、様々な化学物質を利用しながら生活しているが、身の回りには、案外危険な物質があり、環境破壊や公害につながるものもある。また、エネルギー資源の大量消費は温暖化や酸性雨といった地球規模の被害を起こしている。本授業で扱う化学は、これらの実態を知り、その被害を防ぐ上で重要な役割を果たしている。それゆえに資源・エネルギーや環境の問題を理解して、安全で快適な生活を送るためには、ある程度の化学的知識が必要である。この科目では、これらに関連する事項について考え、同時に基礎的な化学の概念や原理が身に付くことを目標とする。	
	自然科学の世界C		この授業科目で扱う生物学の目指すところは、生物についての知識を学ぶということに留まらず、生命現象に関する学問であり思索である。微生物、植物、動物、人を例にとりて生命・遺伝子、細胞、組織、個体、進化、集団、社会について構造的、機能的側面の理解を図る。これらを通して生命に対する考え方の醸成を図り、生命科学（ライフサイエンス）の目指すところの、生命を総合的に考え、自然理解、人間理解の一助となることを期待する。この授業では、生命、自然、人間を理解することを目指す。	
	生命の科学A		21世紀は20世紀に飛躍的に増大した生物に関する知識に基づく科学技術がいよいよ実用化に向かうことが期待される。一方で、“生命”が科学技術と対峙するキーワードとして使われている。科学的・論理的思考方法を身につけ、生命科学のイメージ（自分自身で、自分自身の）を確立し、その上で、“自分－生命科学－社会”の関わりについて考えることができるようになることを目的とする。本授業では、生命を20世紀に確立した物質論的生物学としてのみでなく、生命と人間との関係を含めて生命論的生物学を学修する。生命科学の誕生（分子から人間、分子生物学から生命科学）、人間科学と生物化学（生理心理学、人類学）、生命科学と技術（生体成分の利用、クローン生物等）などについて理解を図る。	
	生命の科学B		医学は呪術と宗教、迷信が支配する長い年月を経て、近年やっと、科学的に根拠のある薬が誕生し、医療の場で利用されるようになった。薬に関する基本的知識を学び、薬の正しい使い方を理解して、健康に生きる知恵を修得することを目的とする。本授業では科学的に合成された薬物のみでなく、自然界に存在する薬として使用される植物、動物、鉱物について基本的知識に加えて、主だった薬の発見と作用（クラーレ、フィソスチグミン、アトロピン、フェノールフタレイン、ニトログリセリン、アスピリン、シメチジン、モルヒネ、大麻、ハッシシ、LSD、インタール、経口避妊薬等）について解説する。また、現在の臨床の場で見える薬物（エフェドリン、エーテル、笑気ガス、コカイン、バルビタール・ハルシオン、インシュリン、ワルファリン、ヘパリン、レボドパ、プロモクリプチン、シスプラチン、コーチゾン、リチウム、レセルピン等）の発見の経緯と作用を学ぶことにより、薬に対する考察を深める。	
	生命の科学C		20世紀の生命科学改革は遺伝学を中心に展開してきたと云える。最近のメンデルの遺伝法則の再発見による遺伝学は、遺伝子の本体がDNAであることを証明し、生物学に革命をもたらした。その後も組換えDNA実験法、DNA塩基配列決定法やPCR法などの技術革命によりヒトゲノム計画を成功に導いた。今世紀前半にはゲノム生物学が情報科学的再編・統合化されてシステム生物学へと発展すると云われている。本授業では、このような学問の展開を視野に入れながら、ヒトの理解につながる分子遺伝学を中心とした生命科学の基礎と発展について学修する。	
	環境の科学A		地球環境を健全に保つために、大気や水を汚さず、温暖化を防ぎ、多様な生物種をこれ以上絶滅させることなく、地球上でわれわれの子孫が生活できるように考えなくてはならない。20世紀において豊かさを追求して、ヒトがつくり出した環境汚染物質やその諸要因が人間や野生生物にどのような影響を与えてきたかを検証することにより、新たな環境浄化へのステップを踏み出すことになることを理解する。具体的には、地球的規模の環境の諸問題、さらにヒトが摂取する食物及び食品における環境汚染について学修する。	
	環境の科学B		生物は環境との関係を密接に保ちながら進化し、それ自身が地球環境の一部を構成することとなった。地球環境と生物の相互作用の繰り返しが地球環境と生物進化の歴史である。生物の中には、かつては繁栄の時を持ちながら、環境変化に対応できず絶滅したり、わずかな種類にまで減じて生き残っているものもある。地球環境の一方の担い手である生物そのものがどのように進化してきたかを明らかにし、生物の進化と地球環境との関わりについて学修する。	
	生活の科学A		物質的に豊かになった現代、日々の生活において、生活の質的向上（Quality of Life）を図るライフスタイルが求められている。質的向上、すなわち、真に健康で心豊かな生活を創造するためには、生活者自らが生活における科学性に気づき、科学的な視点で生活をデザインすることが大切である。本授業は、生体と生活環境との関連性を科学的に考察する方法を紹介し、自らの生活を科学的にデザインできる能力を養うことを目的とする。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
教養科目 共通教育科目 基礎科目	科学技術理解		人は今日まで歴史を重ねながら、伝統や文化を育み、生活技術確立し、生活を向上させてきた。技術革新によって生活の利便性や効率性が追求され、ますます進行している。この授業では、視聴覚教材を活用し、衣食住の各分野における生活の伝統や文化の背景を知り、生活を支えている分野や技術の本質を探ることにより、真に身体的・精神的・社会的に健康で豊かな生活の在り方を考察することを目指す。	
	生活の科学B		人は今日まで歴史を重ねながら、伝統や文化を育み、生活技術確立し、生活を向上させてきた。技術革新によって生活の利便性や効率性が追求され、ますます進行している。この授業では、視聴覚教材を活用し、衣食住の各分野における生活の伝統や文化の背景を知り、生活を支えている分野や技術の本質を探ることにより、真に身体的・精神的・社会的に健康で豊かな生活の在り方を考察することを目指す。	
	情報の科学		メディアが多様化している現代は、情報リテラシー（課題や目的に応じ、情報を主体的に収集、処理、発信する能力）が重要になっている。基本的には、学内所蔵資料を中心にした一次資料、抄録（誌）・索引（誌）等、各種メディアによる二次資料の理解を目指す。さらに、デジタル資料の利用・活用については、インターネットやコンピュータネットワークを通じて外部データベース等情報源にアクセスするための知識や技術を習得する方途について学修する。	
	情報処理基礎Ⅰ		コンピュータリテラシーの基礎的な能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。まず、パソコンの基本的な操作を行うスキルを獲得した上で、日本語入力技術の向上、及び日本語文書作成ソフトの基本操作の習熟、プレゼンテーション能力の養成を目標とする。日本語文書作成、ファイル作成、入力、保存、編集等の操作を段階的に学び、ICTの知識とスキルを習得する。この授業の履修により、論理的思考力の礎とする。	
	情報処理基礎Ⅱ		インターネット利用技術の習得を目的とした演習形式の授業である。インターネットを介して利用することのできる各種技術（WWW検索・電子メール・ホームページ作成等）の習得を目標とする。WWWを利用して様々な角度から情報検索を行う手法を学んだり、電子メールの送受信の方法、基本的なホームページの作成による情報発信の手法等を、演習により段階的に学ぶ。	
	情報処理基礎Ⅲ		コンピュータリテラシーの中で、代表的なアプリケーションである表計算ソフトの活用能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。表計算ソフトの基本的な操作に習熟することを目指す。基本的な入力方法、編集操作方法、式・関数の利用方法、情報の保存方法、基礎的なグラフ作成方法等を、演習により段階的に学ぶ。また、表計算ソフトを用いた基礎的な統計手法を身につけ、総合的な問題解決能力を涵養する。	
	情報処理基礎Ⅳ		プログラミング作成の基礎的な能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。アプリケーションの中で利用できる基礎的なプログラミング技術の習得を目標とする。コンピュータの構成と基本動作を理解した上で、表計算ソフトのようなアプリケーションの中で、どのようにプログラミング作成を行うかについて、演習により段階的に学ぶ。	
	情報処理演習A		エンドユーザーに要求される能力を養成することを目的とする。すなわち、社会や組織におけるネットワーク・コンピューティングの様相を、エンドユーザーという立場から理解し、どのソフトの機能が業務に合致するかを判断できる能力を獲得することを目標とする。この授業は、情報処理基礎Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの履修を前提にし、ワープロ、表計算、プロジェクト管理等のソフトのより高度な利用法も、演習により段階的に学ぶ。	
	情報処理演習B		コンピュータリテラシーの中で、代表的なアプリケーションである表計算ソフトやデータベースソフトのより高度な活用能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。表計算ソフト・データベースソフトに関する操作の習得を目標とする。リレーショナルデータベースのデータ検索・更新等の操作法や、データベースの設計手法を学ぶとともに、複数アプリケーション間におけるデータの再利用法等を、演習により段階的に学ぶ。	
	情報処理演習C		コンピュータリテラシーの中で、プレゼンテーションソフトの活用能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。マルチメディアデータの活用方法や、それらを活用したプレゼンテーション技術に習熟することを目指す。デジタルスチルカメラやスキャナーで取り込んだ静止画像の処理や、ホームページに利用するためのマルチメディアデータ作成の技術等を、演習により段階的に学ぶ。	
	情報処理演習D		ファイリングの能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。データ検索・管理等のノウハウ、及びファイリングの基礎を学ぶことを目標とする。文献等資料検索システムの機器構成、検索統制語の概念、シソーラス等のデータアクセス方法等を、演習により段階的に学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	健康スポーツ科目	健康スポーツ A	生涯にわたるヘルスプロモーションと豊かなスポーツライフの実現に向け、心身の健康づくりと体力・運動能力および基礎的運動技能の向上、運動による仲間との交流を目指し運動や各種スポーツ・レクリエーション種目の実技を総合的に展開する。その上で、自らに適した運動・スポーツを主体的に実践できる能力の育成を目指し、各自の興味・関心にそったスポーツ種目を選択し、グループで協力して練習やゲームを展開できるようにする。	
		健康スポーツ B	体育館、グラウンド、テニスコートなど、学内のスポーツ施設を利用し、バレーボール、バドミントン、卓球、テニス、ゴルフ、ソフトボール等の中から、生涯にわたって取り組むことのできそうな種目を各自の興味・関心に基づいて選択する。試合や審判がある程度できるようになることを目標に、ゲームを中心に行う。基本的に初心者レベルを対象としている。	
		健康スポーツ C	体育館、グラウンド、テニスコートなど、学内のスポーツ施設を利用し、バレーボール、バドミントン、卓球、テニス、ゴルフ、ソフトボール等のうち、実施可能な種目について専門的な内容を展開することにより、身体運動能力のよりいっそうの改善を目指す。基本的に中・上級者レベルを対象としているが、効率の良い指導を行っていくため習熟度別に実施する。	
		野外活動	幼少期から成人にいたるまで野外活動経験の減少傾向が著しい今日、野外活動への期待と役割は大きく、それらを担う指導者の養成も求められている。また、科学技術の高まりに伴う環境問題や社会的ストレスへの対応として、自然や環境への関心が急速に高まっている。その現状に対応すべく自然体験林間キャンプを通して、自然環境教育とその実践を学ぶ。	共同
	外国語科目	英語リーディングⅠ	この授業では、英語の基礎的読解力を身につけるべく、その土台となる語彙力・文法力を様々な演習を通して伸ばす。そしてその応用として、精読、多読さらには速読の活動を行い、それらを通して基本的読解方略を学び、長文における談話構造の理解と処理の基礎能力を身につける。さらに、多様なジャンルの教材を読みこなすことによって「読むことにより考え、学ぶ」姿勢を養う。また、リスニング力育成にも重点を置き、英語の音調に関わる基礎的素養を育成すべく、各種のリスニング及びディクテーションの基礎的演習を行う。	
		英語リーディングⅡ	この授業では、「英語リーディングⅠ」で習得した基礎的読解力を生かし、多くの読解活動を行って応用的読解方略を学び、談話構造の理解と処理に関するより高い能力を身につける。さらに多くのジャンルの教材を読みこなすことによって「読むことにより考え、学ぶ」姿勢を伸ばし、単なる理解のレベルにとどまらず、著者の考えを的確に要約し、発表できるように指導する。またリスニング力育成においても、英語の音調に関わる素養をさらに高め、英語聴解力を伸ばすべく、各種のリスニングおよびディクテーションの応用的演習を行う。	
		英語ライティングⅠ	この授業では、並び替え英作文、和文英訳および自由英作文演習を通して、基礎的な英語ライティング力の育成を期する。並び替え英作文及び和文英訳では、英語の語法・文法・構文に関わる知識を基本的なものから学修し直し、英文構成に関わる基礎的素養を身につけるべく大量の問題をこなしていく。そしてその英文の添削の過程で、自分の英作文力における問題点を認識し、改善するように指導する。さらに自由英作文では、英文の論理構成に基づくパラグラフ構成の基本を学び、様々なトピックに基づいた英文を書く練習を通じ、ある程度の長さの英文を書く力を育成するとともに、英語で意見を表明し、情報を発信できる力を養う。	
		英語ライティングⅡ	この授業では、「英語ライティングⅠ」の授業で培った基礎的作文力をさらに伸ばし、並び替え英作文、和文英訳及び自由英作文の発展的演習を通して、応用的英語作文力の育成を期する。英語の語法・文法・構文に関わる知識を深め、英文構成に関わる高度な素養を身につけるべく、比較的難しい問題に取り組む。そしてその英文の添削の過程で、自分の英作文力における問題点を認識し、改善するように指導する。さらに自由英作文では、英文の論理構成に基づく結束性など複雑な構成力を身につけ、様々なトピックに基づいた英文を書く練習を通じ、比較的長い英文を書く力を育成するとともに、英語で意見を表明し、情報を発信できる力を養う。	
		英語コミュニケーションⅠ	この授業は、英語の「聞く」「話す」ための語彙や発音を含む基礎的コミュニケーション能力を身につけることを目的とする。具体的には、日常生活の身近な基本的語彙・表現や観光・ビジネスのための旅行における空港・ホテル・レストランなどさまざまな場面で役立つ多くの種類の初歩的表現を学修し、それらに関わる英語を聞いたり話したりする活動を通して、話の概要を聞き取ったり、要点を相手に伝える活動を行い、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。また、英語のアクセント、リズム、イントネーションなどのプロソディについても体系的に演習を行い、英語を「聞く」「話す」ための基礎的能力を養う。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	基礎科目 外国語科目	英語コミュニケーションⅡ	この授業では、「英語コミュニケーションⅠ」をふまえ、英語の「聞く」「話す」ための語彙や発音を含む応用的コミュニケーション能力を身につけることを目的とする。具体的には、日常生活の語彙・表現や観光・ビジネスのための旅行における空港・ホテル・レストランなど多くの場面で役立つ多くの種類の応用的表現を学修し、さらに、会話、映画、ニュースなど様々な分野の英語を聞き、概要や細部の情報を聞き取る活動と、言語の使用場面と機能に配慮した言語活動の中で、自分の意見や感情を相手に伝える活動を行う。また、英語のイントネーションなどプロソディについても演習を行い、英語を「聞く」「話す」ための応用力を養う。	
		英語コミュニケーションⅢ	この授業では、「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」の内容をさらに発展させ、英語の発展的コミュニケーション能力を身につけることを目的とする。具体的には、日常生活の語彙・表現や観光・ビジネスのための旅行における空港・ホテル・レストランなど様々な場面で役立つ多くの種類の発展的表現を学修し、さらに、外国で留学する際の基礎となるような、英語での学修スキルを学ぶ。さらに、読んだり聞いたりした情報に対する自分の考えを発表したり、また、聞いたことをメモして要約する活動などを行い、「聞く」「話す」活動と「読む」「書く」活動との有機的な融合を図り、総合的な英語コミュニケーション能力を育成する。	
		英語コミュニケーションⅣ	この授業では、「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」の内容をさらに発展させ、読んだり聞いたりした情報を要約して発表する活動などをさらに進め、「聞く」「話す」活動と「読む」「書く」活動との有機的な融合に基づく様々な演習を通して、英語で自由に自己表現ができるような高度な英語コミュニケーション能力を育成することを目的とする。具体的には、英語によるスピーチ、プレゼンテーション、ディスカッションなどを通して、英語の論理構成や文章構成ならびに議論での表現法やルールを学修する。また、他者との意見の交換を通して、自分の意見を深化させ、その場でそれを効果的に的確に相手に伝える能力も育成する。	
		中国語コミュニケーションⅠ	本授業は、日常的に用いられる言葉、言語を中心とし、自分の意志を中国語で表現する能力を養うことを目的とする。具体的には学校、家庭、社会など実生活におけるコミュニケーションの手段としての中国語、すなわち「話す・聞く・読む」を中心とした中国語の活用能力を養成する。特に発音と表記の仕方であるピンイン(中国語ローマ字)の習得に力を注ぐ。	
		中国語コミュニケーションⅡ	「中国語コミュニケーションⅠ」に引き続き、日常的に用いられる言葉、言語を中心とし、自分の意志を中国語で表現する能力を養うことを目的とする。中国語を学修し、その能力を高める為に最も大切なことは中国語を好きになることである。そのような見地から、本授業では、中国語および中国文化への理解や関心を深めるために、随時音声や動画などの教材を利用して実際に即した訓練を繰り返し、中国語の自然な表現に親しみ、中国語の魅力に触れるとともに、実践的な語学力を身につける。	
		中国語コミュニケーションⅢ	本授業では、「中国語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」を履修した学生を対象に、会話、中国語の文章作成、作品講読を中心に学ぶ。既に学修した単語や会話表現を復習しながら、新しい表現を加え、耳・口・目を使って繰り返し練習することによって、会話の能力をいっそう高めるとともに、メモ書き、小説や雑誌・新聞記事などを読む能力を養成することを目標とする。授業は演習形態で行なわれる。	
		中国語コミュニケーションⅣ	「中国語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」に引き続き、会話、中国語の文章作成、作品講読を中心に学ぶ。具体的には、ネイティブスピーカーとのコミュニケーション、手紙や短文の作成、小説や新聞などの読解を通して、話す力、聞く力、読む力を総合的に学修する。以上の学修を経て、中国語の知識を学修するだけでなく、実践的な中国語の活用能力を身につけることを目標とする。	
		北米文化語学演習	北米文化語学演習の目的は、約1ヶ月間にわたる北米家庭でのホームステイ及び現地大学での語学演習を通して、総合的な英語力の向上を図り、同時に文化に関して様々な面を直接体験し、異文化理解を深めることである。授業内容は、英会話・リスニング・英作文等に加え、文化学修、各種フィールド・トリップ等である。受講者は、事前のオリエンテーション参加と、演習終了後のレポート提出が求められる。	
		中国文化語学演習	中国文化語学演習は、事前学修及び現地での実践的な学修を通して、中国語の語学能力を高め、さらには中国の歴史、文化、社会に直接触れることにより、異文化に対する理解を深め、国際感覚を養成することを目的とする。このような目的のもと、本授業では実践的な語学指導によって、中国語を話す力、聞く力、読む力を習得させるとともに、史跡や博物館の参観、中国文化や芸術の講座の受講など、様々な活動を通じて、中国の文化・社会を深く理解する。受講者は、現地研修前の授業出席と、演習終了後のレポート提出が求められる。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育科目	基礎 科目	基礎 養成 科目	基礎国語演習	国語の基礎となる資質・能力を養うことを目的として、言語能力の向上を図る。具体的には、「話すこと・聞くこと」「話し合うこと」「書くこと」「読むこと」の理論と方法について理解するとともに、教材の研究や諸分野の考察、発表などを行う。講義、演習を交えて国語の基礎的な理解力を養成する。
			基礎社会演習	人間を育成し形成する公教育として、学校教育がある。そこでは学校の段階に応じた目的が設定され、その目的を実現するための教育内容が編成されている。本授業では、教育内容の一つとして設定されている社会科を取り上げ、その目標に基づく内容について、地理的内容、歴史的内容、公民的内容の側面から、考察を行う。特に地理的・歴史的内容に焦点をあて、その具体的教育内容を取り上げる。
			基礎数学演習	各分野の専門的内容を理解するために必要とされる基礎的な数学、あるいはまた、将来一般社会人として必要とされる応用的な数学を取り扱う。基礎的内容は、初等的な数論や幾何学であり、数学という学問的な立場というよりむしろ、文系学生に向けた数学として、専門的内容の基底に流れる数学的アイデアや思想に重点を置き、数の体系や図形の構成などについての理解を深める。また、応用的内容として簡単な数値計算や統計的推論について取り上げる。
			基礎理科演習	理科は、自然を理解し、自然とともに人間がいかに共存していくかを考える科目である。様々な自然の事象の中には、合理的な規則性や法則性が含まれている。太古の昔から、人類は少しずつその謎を解き明かし、自然科学の諸分野の学問を発展させてきた。ここでは、そういった自然科学の発展の歴史をその時代の背景とともに展望しながら、理科の諸分野の内容理解を深めていく。
			基礎生物演習	この授業では基礎生物学や生物系の専門教育科目を学修するために必要な、最も基礎的な生物学の知識と考え方を短期で修得することを目指す。そのために問題演習を中心に集中的・効率的な講義を行う。また、簡単な実験・観察も取り入れ理解を深めるとともに、生物学の面白さを伝えることにより学修への動機付けを行う。内容は遺伝子の構造、機能・細胞の構造、機能・感覚器の構造、機能・神経、感覚・内分泌・免疫を中心に行う。
			基礎化学演習	この授業は、具体的な問題を解きながら化学の基礎的理解を深めることを目的とし、演習形態で行われる。私たちは多種多様な物質で囲まれ、その中で生活している。化学は、物質の性質、反応性、構造性を調べることにより自然界の仕組みを理解する自然科学の主要な領域である。化学の基礎概念、大気中の分子、体内の化学物質、石油の化学について学修する。物質の変化において質的・量的関係にはどのような規則性があるかなど、化学の目を養うことは自然を理解するばかりでなく、化学に関連する科目を学ぶ上で重要となる。
			基礎物理演習	この授業は、物理学の基礎的理解を深めることを目的とする。物理学を理解することは、我々の周りの自然現象を理解することである。物理学は、大きく分けて、古典物理学と現代物理学を含んでいる。この授業では、両物理学の概要を説明するとともに、実験や演習を取り入れ、物理学の理解を図る。すなわち、運動（ガリレオ、ニュートン）、仕事とエネルギー、惑星の運動、振動、電気・磁気について学ぶ。
専門 教育科目	理工学部 共通科目		理工学概論	○ 理工学は、社会の様々な分野で発生する問題や課題を解決し、対処するために生まれた学問である。理学と工学は、自然科学の原則や法則を基にしており、現在の科学技術を生み出してきた。大学の理工学部は、理工学が成立する前提である教育・研究機関である。その役割を果たす、本学の理工学部において、学生が理工学を学ぶ上で必要となる、定義、分類、歴史、研究手法、社会との関わり、成果等について概観し、理工学についての広い視野を獲得することを目指す。
			理工学データサイエンス	○ 社会の様々な分野で発生する問題や課題の解決には、データ分析、機械学習、AIアプリケーションの技術が活用されるようになってきており、理工学においても、分野に関わらず、データサイエンスやAIの重要性が認識されてきている。本授業は、理工学の分野を学ぶ学生に共通して求められる、データサイエンスに関する知識を学ぶとともに、それらを、理工学の各領域で生かし、学びをより深化させるための技能を身に付けることを目指す。

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	基礎 科目		生物学は生命科学系の根幹をなす基盤科学として、生命の構造・機能・形態など基本原理を解明する学問である。その成果は、新たな応用科学を生み、他の学問分野にも影響を与え、医療、食料問題、環境・資源問題など地球規模で抱える課題解決に貢献するものである。 本講義では生物科学科の導入科目として、生物学の基本概念と原理、各学問領域の基礎を俯瞰して学ぶ。各専門分野の教員がオムニバス形式で担当し、身近なテーマから現代社会の諸問題まで、各専門領域における最先端の研究・技術との関り、その基盤となる学問領域について学修する。 （オムニバス方式／全15回） （2 長沼毅／3回） 生物学の導入（領域の概観と歴史）、生命の構造、総括と展望（生物学と生活の結びつき）。 （3 塩田誠／2回） 食機能科学、食料問題と生物学。 （4 石原浩二／2回） 発酵・醸造学、微生物学の基礎。 （8 高橋重一／2回） 植物育種学、花卉園芸科学。 （10 岡田悟／4回） 生命の機能、形態、遺伝学の基礎、医療と生物学。 （11 柳川綾／2回） 環境問題や資源問題と生物学の関係性。	オムニバス方式
			生命科学の進歩は目覚ましく、近年話題となっているiPS細胞など再生医療の分野や癌治療など、医学、薬学、生物学のみならず一部はDNA鑑定をはじめとする社会的判断や役割に関わる諸問題や自然保護や生物多様性条約など、社会的問題とも関連する幅広い分野となっている。そこで、これらを理解し、高等教育における常識を身につけ、様々な生命科学に関する内容を理解できる基礎知識をトピックス形式で学修する。	
			生物学の学びにおいて「総合科学」の基礎となる幅広い知識の獲得に加え、倫理観をもった豊かな人間性を涵養する教育が必要であり、生命科学の倫理的配慮が社会的、科学的、技術的側面などから求められている。中でも、ゲノム解析、各種細胞の研究利用、遺伝子組み換えによる品種改良など生命に係る技術利用が行われ、人類に有益な結果をもたらす一方で、予期せぬ有害な影響なども予測される。本授業では、生命科学分野で配慮されるべき生命倫理観及びその行動を学ぶ。「ヒトの生死や生命とは何か」「人間とは何か」などの根源的な問いに向き合いながら、生命科学の最新技術がヒトや地球環境に及ぼす影響を考察し、倫理的行動のあり方について学修する。	
			生物学は生体分子といったミクロなレベルから生態環境といったマクロなレベルまで、生物に関わる極めて幅広い現象を取り扱う学問である。本学科で学ぶ分野は、植物を中心に細胞、代謝、遺伝子、生殖・発生、や環境応答などの様々な生命活動に関わる内容が基盤となっており、それらを理解した上で専門的な学修に適用され、生物学の深い理解に繋がる。本講義では、これらの基礎知識を学び、専門科目の学修につなげるために十分な礎をつくる。	
			化学は現代社会において人類の生活と活動を、物質とエネルギーの両面から支える大切な要素であり、化学的な知識は生物学領域における基礎・専門科目を理解する上で欠かせない。それらの基礎となる知識は、物質の性質、反応性、構造的なものの様々な概念や原理・法則に関わる内容であり、それらを理解した上で専門科目における応用が求められる。本講義では、これらの基礎知識を学び、専門科目の学修につなげるために十分な礎をつくる。	
			人間を含む全ての生物は、周囲の自然環境の影響を受け、同時にその環境に影響を及ぼしつつ生存している。現代社会においては、人口増加や経済的発展の一方で、食料、環境、資源・エネルギー問題という複雑に絡み合った課題への対応が求められている。環境問題に対処し、生態系と調和しながら生物資源を利用するためには、SDGsにおける社会と経済の持続可能性を念頭に生物学を学ぶ必要がある。この講義では、持続性、レジリエンス、人間の幸福（well-being）という3つの視点から、持続可能な社会の実現に向け、生物学が果たす役割について考察する。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	基礎 科目			
	生物化学	○	生物物質のほとんどは有機化合物であり、生命現象の一つひとつは化学反応によって引き起こされている。本講義では、生物をその構成材料である有機化合物や生体高分子、それらの働きを通して生化学的な視点から理解する能力を身につける。具体的には、タンパク質、脂質、糖などの生体を構成する物質、遺伝情報伝達の仕組み、生体膜、代謝や酵素反応などの理解を深めて、生化学、分子生物学、遺伝子工学の基礎となる学修をする。	
	生化学Ⅰ	○	生物をミクロなレベルで理解するために、生命活動を支える分子の役割についての基本的知識を学修する。まず、細胞の成り立ちを分子レベルで理解するために、その構成成分であるアミノ酸、タンパク質、脂質、糖質、ビタミン、ホルモンの構造、性状、機能に関する基本的知識を学修し、さらに、生命活動の担い手である酵素や機能タンパク質について、構造、調節機構、機能など基本的知識を学修する。	
	生化学Ⅱ	○	生体分子の基本構造と機能・代謝を理解したうえで、生物資源の利用と維持に貢献できる能力を身につけるため、本講義では、生物化学に続き、生命を分子レベルで理解するための基本的事項、すなわち、ヒトの生体構成成分であるアミノ酸、タンパク質、糖質、脂質、核酸などの化学構造や機能・代謝について、より深い内容を学修する。さらに、生体内の物質変化であり、代謝反応を司る酵素とはどのようなものであるか、また、酵素の種類・性質と機能について学修する。	
	動物分類学		地球上に生息する動物は約130万種あるいはそれ以上といわれているが、現在この膨大な種は三十程度の門に分類されている。本講義では、各々の動物の種が、どのようにグルーピングされ、体系立てられ、そしてどのように命名されてきたのかを学ぶ。また、各々の動物門の特徴について、それを作り上げる発生の様式を重点に学ぶ。	
	植物分類学		自然環境を構成する上で最も重要な生物群である植物は約30万種が知られている。光合成をおこないそれによって酸素を発生する生物を一般には植物と呼ぶが、それらはクロロフィルをもつという共通点を有するものの、その実体は互いに系統的にかけ離れ、形態的にも多様な生物の集合に過ぎない。植物の多様性はどのようにしてもたらされたのか？植物は生物界全体にどのように位置づけられるのか？といった疑問に対する答えを探りつつ、各植物群の形態的特徴およびそれぞれの類縁関係などについて学修する。	
	植物生態学		自然環境を構成する上で不可欠である植物は、動物のように移動することができないが様々な生理機能を有しており、その機能を利用して多様な環境に適応している。本講義では、環境に対する植物の応答を生理、生態学的に理解するため、種子の発芽、植物と水、物質代謝、植物の開花と結実、植物の生長と制御、植物の防衛、植物個体群の動態、生物多様性等について生理学的、生態学的見地から学ぶ。	
	バイオビジネス実践論	○	生物学の研究成果は、今日の農林水産物の生産や加工食品の製造、食品産業（食品製造業、醸造業、食品流通業、フードサービス業など）など幅広い分野で活かされている。生物学を実践的に学ぶ上では、研究分野と世の中の繋がりを知ることが重要である。本講義では、第一次産業従事者や食品産業の社員、都道府県や市町村の職員、協同組合の職員など、生物学と関りの深いビジネスの最前線で活躍するゲストスピーカーを招き、その経験や現在の取り組み、先進的な実践事例を学ぶ。学生は生物学を学ぶ意義について考察し、その知見を食品、資源、環境の問題に対する解決策として自らの研究課題の検討に繋げるとともに、将来について考え、主体的職業選択につながる判断力を養う。 （オムニバス方式／全15回） （2 長沼毅／3回） （3 塩田誠／5回） 食品産業におけるイノベーション、醸造業・食品流通業・フードサービス業における生物学の応用、事例紹介。 （6 武田征士／4回） 導入（生物学とバイオビジネスの基本）、第一次産業における生物学、事例紹介、総括および将来計画。 （11 柳川綾／2回） 資源問題、環境問題と生物学の関係。 （2 長沼毅 ・ 3 塩田誠 ・ 6 武田征士 ・ 11 柳川綾／1回）（共同） 学修活動のプレゼンテーション、食・資源・環境の課題解決策としての研究課題共有とフィードバック。	オムニバス方式 共同（一部）

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	基礎 科目	分子生物学Ⅰ	○ ヒトのからだを構成する約60兆個の細胞は、互いに協調して組織や器官を作り上げ、様々なシグナルを絶えず交換しあっている。本講義では、こうした細胞間のコミュニケーションと、シグナルの受け取りから応答までの細胞内情報伝達について学修する。前半では、情報伝達のしくみについて、受容体のはたらきを中心に、後半では、細胞を組織へと組み上げる為の構造体（細胞骨格、細胞接着、細胞外マトリックスなど）について学ぶ。	
		分子生物学Ⅱ	○ 全ての生物は、遺伝情報を利用してタンパク質を合成し、生命活動を営んでいる。この生命現象を理解するためには、遺伝情報に従った分子構築機構を学ぶ必要がある。本講義は、生命活動についてゲノムを中心とした分子レベルで理解することを目的とし、DNAからRNAへの転写とRNAからタンパク質への翻訳の過程からなる遺伝子発現のメカニズムと転写レベル、翻訳レベルでの遺伝子発現調節メカニズムといった生命活動に必須な知識を学修する。	
		細胞生物学	○ 細胞は生命の基本単位であり、どの生物もはじめは1個の細胞から発生する。組織・器官の分化や形態形成など、生物が示す様々な機能を理解するためには、細胞の構造と機能に関する基礎的な知識が必要である。本講義では、真核細胞を理解する要点として、細胞膜、膜輸送、細胞小器官、エネルギー代謝、細胞骨格と細胞運動、細胞内輸送系、シグナル伝達系、細胞分裂と細胞周期、細胞接着と組織形成などについて学修する。	
		微生物学	○ 微生物は、細菌・真菌・ウイルス・原虫などを含むミリメートルに満たない生物を意味し、人間生活に密接にかかわっている。近年は、微生物を利用した食品や医薬品などの有用物質の生産、環境や資源に関する問題にも活用され、生活にますます欠かせないものとなっている。本講義は、これらを理解するために微生物の基本的知識、すなわち、微生物の分類、細胞の構造と機能、代謝生理、増殖とその制御などについて学修する。	
		酵素化学	生体における化学反応を触媒するタンパク質である酵素は、生命科学において極めて重要な役割を担っており、その触媒反応は、常温・常圧で進行し、かつ基質特異性が高い。このような酵素の特性を利用して、現在、様々な分野において酵素を利用して開発された製品が、身の回りに数多く見られる。本講義は、酵素がどのような機能をもつのかを理解し、その成り立ち、性質、具体的な反応機構について学修し、日常生活や様々な産業分野における意義や持続可能性を学ぶ。	
		応用微生物学	微生物は、細菌・真菌・ウイルス・原虫などを含むミリメートルに満たない生物を意味し、人間生活に密接にかかわっている。近年は、微生物を利用した食品や医薬品などの有用物質の生産、環境や資源に関する問題にも活用され、生活にますます欠かせないものとなっている。本講義は、有用微生物の物質生産などへの応用について講述し、微生物界の全容と微生物の化学・医薬・食品・環境・資源などへの適用の現状について学修する。	
		食と環境の経済学	○ 「食」や「環境」に関する諸課題を的確に把握するためには、生物学の社会的・実用的な重要性を認識することに加え、食糧の生産から消費に至るまでの経済的側面、食品が生産地から消費者に届くまでの流通過程、環境税や排出権取引などの政策および経済的手法を理解することが不可欠である。本講義では、「食」や「環境」と生物学の関係性、食糧経済、食品流通論、環境政策および経済的手法について学び、現代の食や環境に関する諸課題を俯瞰的に学ぶ。加えて、ケーススタディと実践例の紹介を通じて理解を深める。 （オムニバス方式／全15回） （3 塩田誠／2回） 食と環境の現代的課題と生物学の役割、食品加工と食品流通 （33 星田剛／8回） 食糧経済の基礎、食糧政策、食糧供給チェーン、食品流通論、サプライチェーン管理、食品マーケティング、ケーススタディと実践例の紹介 （20 大澤俊一／4回） 環境税と排出権取引、リサイクルと廃棄物管理、環境政策と経済ツール、ケーススタディと実践例の紹介 （3 塩田誠・16 星田剛・20 大澤俊一／1回）（共同） 総括	オムニバス方式 共同（一部）
		生物統計学	実験や調査などを通して得られたデータには必ず誤差が含まれる。したがって、データを科学的に解釈するためには、統計学の知識を駆使して誤差を考慮した解析をして、必要な情報を正しく読み取れることが必要となる。また、生物学においては、少ないサンプルをもとに一般性を議論する場合、統計処理により評価を行うことが多い。すなわち、所持しているデータがどのような確率分布に従うか理解し、それに応じた適切な統計処理を行うことも必要となる。本講義では、データ解析をする上で必要となる、記述統計学や統計学的検定方法などの生物統計学の考え方を修得する。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目 実験実習科目	化学実験Ⅰ	○	自然界に存在する様々な現象を明らかにするために、物質の組成・構造を知り、その物性を研究するのは化学の基本的な課題である。本実験では、専門実習への入口として、物理化学、無機化学、分析化学、有機化学など、化学全般にわたる基礎的な実験を行い、その内容および化学実験に必要な基本的操作および器具の使用法を修得する。また、科学系報告書（レポート）の作成を通して、論理的思考力、表現力を身につける。	共同
	化学実験Ⅱ	○	「化学実験Ⅰ」に引き続き、本実験では物理化学、無機化学、分析化学、有機化学など、化学全般にわたる基礎的な実験を行い、その内容及び化学実験に必要な基本的操作及び器具の使用法を修得する。また、科学系報告書（レポート）の作成を通して、論理的思考力、表現力を身につける。	共同
	植物学フィールドリサーチ	○	主に構内およびその近辺において生育する様々な植物群を自ら採集し、各植物分類群を特徴づける形態形質を観察する。また、各植物系統群がどのような生態学的・進化的特徴を維持し現在の分布域に適応してきたのかに関して考察する。これにより生物多様性に関する理解を深めるとともに、フィールドワーク調査やデータ解析など生物多様性研究に必要な技術・技法を実際の体験を通して修得する。	共同
	生物学実験Ⅰ	○	本実験は、生物（植物、動物、昆虫、微生物）を用いた基本的な実験操作を行い、生物学的データの解析など基礎的能力を修得する。例えば、植物の外部および内部形態の観察、生理・生態的現象の観察などマクロからミクロまで幅広い基礎的な実験を行い生物学実験についての初歩的な知識を学修する。「生物学実験Ⅰ」では、光学顕微鏡、マイクロピペット、遠心分離機、電気泳動槽、分光光度計の使用法などの実験手法、およびデータ処理を扱う。	共同
	生物学実験Ⅱ	○	本実験は、生物（植物、動物、昆虫、微生物）を用いた基本的な実験操作を行い、生物学的データの解析など基礎的能力を修得する。例えば、植物の外部および内部形態の観察、生理・生態的現象の観察などマクロからミクロまで幅広い基礎的な実験を行い生物学実験についての初歩的な知識を学修する。「生物学実験Ⅱ」では、細胞の観察、タンパク質の定量と機能解析、DNAの単離と解析、細菌の培養と無菌操作などの実験手法、およびデータ処理を扱う。	共同
	生化学実習	○	生体の構造と機能を系統的に学ぶうえで、生体を構成する成分（タンパク質、脂質、糖質、核酸、酵素など）の性質や、それらの代謝系を理解することは重要である。本実習では、生体構成分子の基礎知識と基本的な実験操作を修得することを目標に、糖質、タンパク質、核酸、ビタミンなどの定性・定量分析を行う。さらに、タンパク質の分離・精製、酵素活性の測定法と反応速度論について学ぶ。これらの実験を通じて生化学で使用する機器分析の基本技術を修得する。	共同
	環境科学実習	○	本実習では、水、空気などの環境試料を用いて公衆衛生分析のために必要となる基本的な衛生試験法とともに、試料処理法、測定原理や解析法の詳細を修得する。具体的には、水質試験法（飲料水試験及び下水・汚水試験）、空気試験法、大気・水汚染物質の測定法の項目の中から代表的なものを経験し、「環境」「資源」に関する科学的データや情報の調査収集、解釈・分析に必要な専門知識及び実験技術を身につける。	共同
	微生物学実習		本実習は、まず、微生物の純粋培養を通して、無菌操作、滅菌方法、微生物の培養方法、微生物塗抹法など、微生物取扱いの基礎的操作や手法を修得する。次に、身近な環境中や簡単な材料から菌を分離培養し、染色や薬剤感受性試験を行い、分離菌の性状について調べる。さらに、多方面で利用されている遺伝子増幅技術（PCR法）について、その原理を学び、実習を通じて一連の手法を修得する。	共同
	食品化学実習	○	食品は自然のままの植物体や動物体から、複雑な加工処理を経て製造される加工食品に至るまで、その外観、形態、成分組織、栄養価などはさまざまである。そして、その栄養学的価値、商品としての評価は、それぞれの食品を構成している化学成分に依存している。本実習では、食品の成分を化学的な面から追究し、その本質を究める。具体的には、食品を加工、貯蔵する際の化学変化について身近な食品を用いて分析し、「食」に関する科学的データや情報の調査収集、解釈・分析に必要な専門知識及び分析技術を修得する。	共同

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
実験 実習科目	植物生理学実習		植物は外的因子である生物的要因と物理化学的要因を受けて、内的因子である遺伝子発現や生理反応を介して応答して成長分化し、子実や果実の形成に至る。本実習では、生物的要因として病原菌、有用微生物、物理化学的要因として栄養塩類や土壌組成を取り上げ、それらの分類あるいは分析の基礎を実験・実習によって学ぶ。また、内的因子として遺伝子や植物成長調整物質を取り上げ、それらの発現や作用によって植物の形態形成が生じる過程を学修する。	共同
	植物育種学実習		本実習は、植物育種学に関して講義で学んだことの理解を深め、それらの学問に必要な技術・方法論を実際に、修得することを目的とする。具体的には、植物の組織培養を行うことで、無菌操作、培地作成、脱分化、再分化などについて学ぶ。また、植物からDNAやRNAを単離、精製するための理論と技術について学修する。さらに、DNAの定量、制限酵素処理、電気泳動、PCR法の理論と技術について学修する。	共同
	植物形態学実習		生物の形態とそれがもつ機能は密接に関係しているため、形態を知ることは生物学の様々な分野に繋がる重要な視点である。「形態学」は生物の外形や組織など、目視で確認できる形態の特徴を、記述・測定し比較する学問分野である。本実習では、植物の形態の観察を通して植物の生物学的な理解を深めることを目的とする。具体的には、植物材料を用いて、マクロおよびミクロの形態学を学修する。組織標本の作製法を会得するとともに、顕微鏡等を用いて、自ら作製した標本を観察し、組織の成り立ちや形態学的な特徴を理解する。	共同
	分子生物学実習		生命科学の発展は、遺伝子クローニング法、塩基配列の決定法、遺伝子増幅法など、遺伝子工学の画期的な技術の確立がもたらしたものである。本実習では、大腸菌のゲノムDNAを用いて、遺伝子組換え実験の基本技法とそれらの原理を学ぶ。具体的には、微生物の一般的な取り扱い技法を基盤に、遺伝子増幅反応（PCR）、DNAフラグメントの精製、制限酵素処理、プラスミドへの連結、大腸菌の形質転換、薬剤耐性によるスクリーニング、プラスミドの調製などを通じて、遺伝子クローニングの基本操作を修得する。	共同
専門 教育科目	食香粧化学概論		食品や化粧品は、人間の生活を支え、豊かにしてくれる大切な存在であり、その多くは「生物資源」という共通の素材から作られている。本講義では、食品・香料および化粧品の開発や製造加工、微生物学による食品化粧品の品質管理、およびタンパク質や酵素に関する生物化学と機能性の研究について概説する。食品科学および化粧品科学の概要を理解する。 （オムニバス方式／全15回） （3 塩田誠／11回） 人間の生活と生物資源の関係性、食品科学の基本概念と歴史、生物資源からの食品の開発過程・製造加工技術。 食品・化粧品の品質管理と変質・保存技術、タンパク質と酵素の生物化学、食品中のタンパク質と酵素の機能性、最新の動向と今後の可能性。 （84 高田定樹／4回） 化粧品科学の基本概念と歴史、生物資源からの化粧品・香料の開発過程、製造加工技術。化粧品中のタンパク質と酵素の機能性。	オムニバス方式
	植物の多様性と進化		植物は、いったん発芽した場所から動くことが出来ない生物であり、快適な生活場所を求めて移動が出来る動物とは大きな違いがある。つまり、植物には生育環境に「適応」して「変わる＝進化する」ことが、生き残るために必須となる。本講義では、植物と環境との相互作用、特に「光や、水、土壌無機養分との関係」「隣接する植物との競争」「昆虫などの捕食者との関係」「病原微生物や共生微生物との関係」を通じて、植物が多様性を進化させ、群集の複雑性を作り出している仕組みを学修する。	
	進化生物学		地球が誕生したのは46億年前だが、40億年前の地層からは早くも生命の痕跡が検出されている。その頃の単純な生命体はやがて原核細胞や真核細胞に進化し、さらに進化や分岐を繰り返して地球上の様々な環境に進出し、多様な体制や増殖の仕組みをもつ様々な生物群が出現した。本講義では、生物の系統進化や分類群について、また、それらの生物群が示す体制や生活史等について、地球上に棲息する生物たちの多様な世界を具体的に学修する。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	基礎 科目			
	フードセイフティ論		健全な食生活を実践するためには、食品の安全性はその必須条件である。食品衛生は、食料の生産からその貯蔵、加工、流通、販売などのサプライチェーン並びに調理、喫食にいたる各過程における食品の安全性を確保するためのあらゆる手段と措置を意味する。本講義では、安全な食品をいかにして確保するか、それをどのように実践していくか学修する。具体的には、食品と微生物、食中毒と感染症、有害物質による食品汚染、食品添加物、食品衛生対策について学ぶ。	
	食品化学	○	食品は、我々が生命を維持、増進するために栄養成分の供給源となるものである。食品学とは、食品の本質について学ぶ学問であり、物理学、化学、生物学に基づいて構築されている。本講義では、食品に含まれる各種の栄養成分や健康維持成分、さらには色、味、香り、物性に加えて、調理、加工、貯蔵中に起こる化学変化や安全性、嗜好を評価する方法、現代における食生活の課題や食文化の歴史と将来についても考え、「食」に関する諸課題における食品化学の役割や基本的な知識を深める。	
	環境生物学		環境中には様々な化学物質が存在し、それらは生物と共に安定な物質循環システム、すなわち生物圏を形成する。地球環境の重要な構成要素である生物圏では、酸素と栄養を生産する植物、これを消費する動物、動植物の死骸を分解したり還元したりする微生物などが食物連鎖を構成し、無機物から有機物へ、さらに有機物から無機物へと活発な物質代謝がバランスよく営まれている。本講義では、環境からの働きかけに対して生物が分子および細胞レベルでどのように応答するか、また、生物種の成立が環境にどのように影響するかについて生物学や化学の視点から考察する。	
	植物形態学		植物、特に有用植物に私たちの生活は依存している。では、どのような植物のどの部分を利用しているのだろうか。本講義では、植物の主要な形質である形態に関して基本的な特徴を学修する。具体的には、植物の主要な器官である茎、根、葉、花、果実における、細胞、組織、器官の形態的特徴とその形成過程と、それらの果たす物理的・生理学的役割について学修する。	
	植物育種学		農耕は、野生植物が栽培植物に姿を変えたこと、すなわち進化したことによって可能になった。これには、植物のもつ遺伝的形質を改良し、有益な品種を育成すること、つまり品種改良が大きく影響しており、育種とはこのような品種改良のことを言う。本講義では、農作物の改良に必要な知識の修得を目指し、環境適応性や耐病害虫性などの育種目標に加えて、遺伝子組換え技術などを用いた近年の新たな育種技術の原理と実例を学ぶ。	
	食用作物学		本講義では、畑作の主要な食用作物を中心にその形態、生理・生態、栽培技術、利用および国内外における生産状況などについて概説する。具体的には世界の3大穀物といわれるイネ、コムギ、トウモロコシやダイズ（マメ類）、サツマイモ・ジャガイモ（イモ類）などの食用作物について、それぞれの特徴や栽培技術について学修する。さらに、作物の生理生態的特徴をふまえて、栽培技術や品種選定の問題点とその改善方法を理論的に考察する。	
	園芸栽培論		本講義は、主要な花卉園芸植物繁殖の基礎的原理と繁殖方法を、生物学的、栽培学的視点から学ぶとともに、国内外の農業関連産業における植物繁殖の意義を学修する。生物学的視点においては、植物繁殖を理解する上で必要な植物生理の知識を学ぶ。栽培学的視点としては、植物栽培の起源と歴史的背景における繁殖の意義について理解し、果樹・花卉といった園芸作物の生産現場における繁殖技術の利用や効率向上のための技術について学ぶ。	
	環境科学	○	人間を含む全ての生物は、周囲の自然環境の影響を受け、同時にその環境に影響を及ぼしつつ生存している。自然環境を良好な状態に維持しつつ、健康で快適な生活を続けるためには、環境の問題を正しく理解し、対処すべきことが何かを自覚することが大切である。本講義では、水、空気などが関わる自然環境の理解を基本におき、身近な生活環境から地球規模までの視野を広げ、持続可能な社会発展における「エネルギー資源」「環境」に関する様々な課題と解決策について考える。	
	昆虫学		昆虫は種数やバイオマス（総重量）は数多の動物のなかで抜きん出ており、ヒトとは全く異なる進化の過程をたどりその頂点に立った生物のグループである。この繁栄に成功した理由として、脊椎動物にはない昆虫独特の環境への適応能力が指摘されている。本講義では、昆虫を生理・生態の両側面、かつ、様々な観点から詳細に学ぶことで、昆虫の生理・生態に関する広範な知識を身につける。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	基 幹 科 目	発酵化学	微生物発酵は古くから利用されている微生物利用法である。数千年前から食品の加工に利用され、食の素材の保存性を高め、全く異なった味を付け、素材に付加価値をもたらすため、現代の食生活にも密接につながっている。本講義では、発酵食品についての基礎知識と、製法、特徴及び発酵における成分の変化などについて学修する。微生物発酵は食品だけでなくバイオマスを乳酸やバイオアルコールに変換する身近な発酵方法でもあり、それらについても微生物の働きを酵素反応や分子のレベルで学ぶ。	
		食品加工学	食糧資源は、生産状態から加工することにより、流通性・保存性・安全性などを向上させることができ、この技術なくして、現在の社会を維持することはできない。特に食品には高い信頼性や安心が求められるため、より適切な科学的根拠に基づく加工が必要となる。本講義では、食品の加工技術、加工方法、加工例について、化学や物理の考え方に基づいて学修する。また、農産物や水産品などの様々な加工食品の特徴についても学修する。	
	展 開 科 目	植物生理学	細胞レベルの機構・機能において動物と植物は本質的に同じであるが、個体レベルの発生、形態形成、代謝、外界からの刺激に対する応答などは動物と植物で大きく異なる。本講義では、植物がどのようにして自らの生命を維持しているのか、エネルギー代謝として呼吸、光合成、窒素同化、糖類の合成や転流を中心に、植物の生存のための生理的メカニズムについて学修する。	
		動物生理学	生命は健全な状態を維持するために、分子から個体にいたる全てのレベルで相互に情報伝達・交換を行いながら、同時にそれら进行处理して適切な反応を行っており、個体発生・成長・加齢などの変化、あるいは環境変化や外界からの刺激に対応して、生体を制御している。本講義では、動物に不可欠な生命活動維持システムを解説し、生命現象の基本的原理や生体反応について理解を深める。	
		生理学演習	この科目では、動物と植物における生命活動維持システムの理解を深める。まず、動物の生命現象の基本的原理や生体反応について学び、細胞レベルから個体レベルまでの情報伝達と適応メカニズムを、次に、植物のエネルギー代謝、呼吸、光合成、窒素同化、糖類の合成や転流といった生理的メカニズムについて、具体的な事例を用いて詳細に学修する。動物と植物の違いを比較しつつ、生命現象の基本原則を深く理解し、生体反応の複雑さを学修する。	
		遺伝子工学	遺伝子工学とは、動物や植物、微生物などを対象として、遺伝子の塩基配列を改変して新たな遺伝子をつくり出す技術である。この技術の進展によって、遺伝子のレベルやタンパク質のレベルで、生命現象について理解することが可能となった。本講義では、遺伝子組換え技術の基本原則を理解し、新しい技術に対応するための知識及び方法論を修得する。具体的には、制限酵素によるDNA切断とリガーゼによる連結、特定遺伝子の増幅法(PCR法)、塩基配列の決定法、遺伝子産物の発現と機能解析などを中心に学修する。	
		バイオインフォマティクス	近年、情報学的手法は、あらゆる分野で活用されている。生命科学においても、塩基配列やアミノ酸配列などの大量のデータが得られるようになり、これらがデータベースに蓄積されるとともにその活用が開発され、欠かせない技術となっている。また、この技術発展に伴い、以前はできなかった様々な解析が可能となった。本講義は、生命科学分野における情報処理技術の活用とその生物学的な原理、そして、これによりどのようなことができるのかを学修する。	
		植物免疫学	植物と微生物は様々な相互作用を行っており、植物は受容体を介して病原菌と共生菌を区別して認識し、病原菌に対しては免疫応答を、共生菌に対しては共生反応を誘導する。一方、病原菌は、植物の免疫応答を抑制する分子機能を進化させ、菌の増殖を可能にしている。本講義では、植物による微生物の感染認識から免疫・共生発現に至る分子機構と病原菌による感染戦略の分子機構について基本原則を学ぶ。	
		微生物利用学	微生物には「バイ菌」という言葉に代表されるように、我々人類の健康を脅かし、家畜や農作物に多大な被害をもたらすというネガティブなイメージがあるが、一方で、人間の生活を支える物質（発酵食品、洗濯洗剤酵素、抗生物質、バイオエタノールなど）を生産し、ある時は環境中の汚染物質の浄化を行うなど有難い側面を持ち合わせている。本講義では、その中から、微生物による物質生産に焦点を絞り、微生物機能とその活用方法について学修する。	

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	理論 追 究	微生物工学演習	この科目では、遺伝子工学と微生物利用学の知識をもとに微生物工学の理論と応用を学修する。演習を通じて、遺伝子組換え技術の基本原理や微生物による物質生産の方法について理解を深め、その利用法についての具体的な事例を分析し、その応用方法を探る。これにより、遺伝子工学と微生物工学の技術を理解し、研究及び産業応用への基盤を築くことを目指す。	
		生物資源工学	生物資源は、我々の生活の中で食料や医薬品、衣類、用材としてのみならず、工業原料や燃料などとして、様々な形で利用されている。また、その利用は生物資源そのものである個体としての利用のみならず、その生産物や機能など利用形態も様々である。本講義では、生物資源の中でも、特に植物資源を中心に、成分（糖質、脂質およびタンパク質）およびその利用法について化学的見地から学修する。	
		生物資源工学演習	この科目では、生物資源工学の応用力を高めることを目的とする。特に植物資源を中心に、糖質、脂質、タンパク質の成分とその化学的特性について学修する。演習を通じて、植物資源の分析手法、成分の抽出・分離技術、及びその応用について理解を深める。また、その利用法についての具体的な事例を分析し、その応用方法を探る。最終的には、生物資源の多様な利用形態についての理解を深め、応用力を高めることを目指す。	
	実践 展 開	花卉園芸科学	花卉とは観賞用植物の総称であり、視覚や嗅覚を通して人間生活に潤いを与え、さらには文化的側面でも現代社会において重要な役割を担っている。花卉園芸で栽培される種類や品種は、観賞を目的としていることから極めて多様である。本講義では、人間生活に欠かせない花卉園芸とその特色および現状、分類、繁殖、発育と制御などについて学修する。	
		園芸植物学	園芸植物（果樹、野菜、花卉や観葉植物など）は人間が生存するために必須の作物ではないが、園芸植物の存在によって我々の生活は彩りを増し、豊かなものとなっている。本講義では、このような園芸植物の特性を理解するとともに、栽培、繁殖、育種に関して学修する。また、その野生種やそれらの近縁の植物群を対象に、それぞれの形態的および生態的特徴や、分布、さらに品種成立の経緯や育種の現況について学修する。	
		園芸科学演習	この科目では、花卉園芸と園芸植物の理解を深めるための演習を行う。花卉や観葉植物、果樹、野菜などの多様な園芸植物の特性、栽培、繁殖、育種について学び、特に、その形態的及び生態的特徴、分布、品種成立の経緯や育種の現況を探究する。これまでに得た理論を基に、実際の応用事例や問題解決を通じて、園芸科学の実践的な知識を修得し、園芸植物の効果的な利用と栽培技術の向上を目指す。	
		発酵工学	微生物は人間の生活環境のあらゆる場に生存し、大きな関わりをもってきた。この関わりには、微生物のもつ優れた分解作用や発酵による恩恵を受けるなどの有益な場合と、疾病要因となる微生物により生命を脅かされるなどの有害な場合に分けることができる。とりわけ、食物を介した関わりは深く、腐敗や食中毒を引き起こす一方、発酵や微生物由来の酵素を利用して多くの食品が製造される。本講義では、食品の加工並びに品質管理において重要な有用微生物と有害微生物について学修する。	
		食品の機能	食品の機能は、栄養素を提供する一次機能、色・味・香り・物性といった美味しさに関する二次機能のほかに、生理・生体調節機能としての三次機能があることが明らかとなり、近年、この三次機能に着目した食品開発が活発に行われるようになっている。本講義では、食品の三次機能を理解することを目的とし、食事と様々な疾患との因果関係、およびその予防・改善について学び、次に食品中に含まれている機能性成分の種類と効能について学修する。	
		環境保全論	自然環境や生物多様性を保全するためには自然そのものを「知る」だけでは不十分であり、科学的知見を活かした保全戦略を練り、実行していくことが重要となる。本講義は、人間と自然環境との関係の変遷をたどり、現代の生物多様性の危機を明らかにし、持続可能な社会をつくるために自然と共生するための要件を学ぶ。さらに、自然再生などの環境保全に必要な政策や実践について学修する。	

授 業 科 目 の 概 要					
（理工学部生物科学科）					
科目 区分	授業科目の名称		主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	展 開 科 目	実 践 展 開		醸造とは、醸造資源を微生物等により変換し付加価値をつける工程で、アルコール発酵に加え、微生物が生きていくための様々な代謝を巧みに利用しており、人類の生活と深く関わっている。本講義では、醸造の理解に必要な基礎から応用までの幅広い知識を学ぶ。すなわち酒類の製造法、原料及び醸造微生物、醸造微生物の分類、代謝と発酵生化学について解説し、これまでに開発されてきた醸造用微生物の育種や付加価値向上における役割等、次世代の発酵技術を学修する。	
				この科目では、発酵及び醸造の基礎から応用までを学修する。特に食品加工や品質管理における有用微生物と有害微生物、醸造における微生物の役割、発酵生化学、機能性食品の三次機能について理解を深める。講義で得た知識を基に、具体的な事例研究や問題解決を通じて、実践的な発酵・醸造技術を修得する。これにより、次世代の発酵技術や機能性食品の開発に向けた基盤を築き、研究及び産業への応用法を身に付ける。	
				20世紀は化石資源の利用で繁栄したが、それにより地球温暖化が進行している。バイオマスは再生可能な資源であり、これを有効に活用することは、低炭素社会を構築するための有効な手段の1つである。本講義では、植物バイオマスの性質、構成成分とその特性、植物バイオマスの資源量や利用現状、エネルギー資源としての利用と素材として利用方法について学修する。特に植物バイオマスを生分解可能なバイオマス素材にするための技術を解説し、持続可能な社会発展における「資源」としての応用について学修する。	
				植物や動物は常に微生物と共存しており、自然界にはこれら生物との間において密接な相互作用関係を成立させている微生物が数多く存在する。本講義では、植物に共生・寄生関係を成立する微生物について、様々な生物間作用の事例や分子レベルでの相互作用メカニズムについて学修する。また、動物の腸内微生物の種類や働き、それら微生物やその産物が宿主に及ぼす影響、微生物の働きによる難分解性資源の利用可能性など、動物に共生する微生物についての幅広い知識を修得する。	
	専 門 演 習 ・ 卒 業 研 究			学生は約10名程度でグループに分かれ、各専門分野において教員から指導を受け、各専門分野の基本的な知識と、現代社会が抱える食料問題、環境・資源問題などの課題への対応について考える力を養う。3年次以降の自律的なコース選択、卒業研究課題の選定を念頭に置き、グループワークにより学生同士で協働し、各分野の学問領域に関連した現代社会における問題解決策に関するプレゼンテーションを行う。 （オムニバス方式／全15回） （2 長沼毅／1回） 応用生物学の基礎および歴史、現代的な取り組み。 （3 塩田誠／1回） 食機能科学の基礎および歴史、現代的な取り組み。 （4 石原浩二／1回） 微生物学の基礎および歴史、現代的な取り組み。 （8 高橋重一／1回） 花卉園芸学の基礎および歴史、現代的な取り組み。 （10 岡田悟／3回） 遺伝子学の基礎および歴史、現代的な取り組み。グループワーク導入・進行。 （11 柳川綾／1回） 環境科学の基礎および歴史、現代的な取り組み。 （2 長沼毅 ・ 3 塩田誠 ・ 4 石原浩二 ・ 8 高橋重一 ・ 10 岡田悟 ・ 11 柳川綾／7回）（共同） 現代社会の課題特定、研究方法の検討、グループワーク、研究課題と解決策のプレゼンテーション、総括（食料問題や環境・資源問題への研究方向性の考察）。	オムニバス方式 共同（一部）
			○		
				「協働プロジェクト（Ⅰ・Ⅱ）」は、学内外との協働を前提とした産官学連携プロジェクト型学修で、食品の安全性、資源の持続可能な利用、環境保全などの課題に取り組む。プロジェクトを通して、自律的に課題設定するとともに、リテラシーとしての生物学実践力や創造力と、コミュニケーション力、協働力などのコンピテンシーを身につける。「協働プロジェクトⅠ」では、学生はグループに分かれ、連携先との協働を通して課題を設定し、企画・計画の立案を行う。	共同

授 業 科 目 の 概 要				
（理工学部生物科学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育科目	協働プロジェクトⅡ		「協働プロジェクト（Ⅰ・Ⅱ）」は、学内外との協働を前提とした産官学連携プロジェクト型学修で、食品の安全性、資源の持続可能な利用、環境保全などの課題に取り組む。プロジェクトを通して、自律的に課題設定するとともに、リテラシーとしての生物学実践力や創造力と、コミュニケーション力、協働力などのコンピテンシーを身につける。「協働プロジェクトⅡ」では、「協働プロジェクトⅠ」で立案した企画・計画にもとづき主体的に課題解決、社会への発信を行う。	共同
	専門演習Ⅰ	○	「専門演習Ⅰ」は、それぞれが専攻分属した研究室において、担当者の指導のもとに卒業研究と平行して実施する。セミナー形式で行い、各回の担当者は卒業研究テーマに関連する学術論文を読み、それらの内容を簡潔にまとめて発表、討論するとともに、文献の利用方法、実験、調査の計画作成法と実施法、データの取り扱いや統計処理方法、効果的なプレゼンテーション方法を修得する。また、研究室の教員、学生との討論を通して、ディベートの技術も身につける。	
	専門演習Ⅱ	○	「専門演習Ⅱ」は、それぞれが専攻分属した研究室において、担当者の指導のもとに卒業研究と平行して実施する。セミナー形式で行い、各回の担当者は卒業研究テーマに関連する学術論文を読み、それらの内容を簡潔にまとめて発表、討論するとともに、実験、調査計画の作成法、実験の進め方、実験データの数値の取り扱いと図表のまとめ方、文献紹介などを含め、研究論文の作成に関与する事項を理解し、修得する。また、研究発表を行うための要旨のまとめ方と書き方、発表原稿とパワーポイントの作成、研究内容を理解させるための説明方法、質疑応答の仕方などを修得する。	
	卒業研究Ⅰ	○	「卒業研究（Ⅰ～Ⅲ）」では、これまでに修得した生物学の専門知識に基づき、学生が各自のテーマに沿って教員の指導を受けながら、卒業研究に主体的に取り組む。 「卒業研究Ⅰ」では、卒業研究実施のために配属を決めた専門研究分野において、各々の分野でこれまで行われてきた様々な研究内容について、理解を深める。次に、指導教員の助言のもと、興味を持って遂行でき、これまで研究されていないオリジナルな卒業研究課題（テーマ）を設定し、その背景を調査して研究計画（研究方法、分析方法、調査計画）を立案する。	
	卒業研究Ⅱ	○	「卒業研究（Ⅰ～Ⅲ）」では、これまでに修得した生物学の専門知識に基づき、学生が各自のテーマに沿って教員の指導を受けながら、卒業研究に主体的に取り組む。 「卒業研究Ⅱ」では、「卒業研究Ⅰ」をふまえて、設定した研究課題を研究計画にしたがって実施する。研究の進捗状況については、分野内で定期的に報告し、質疑応答をすることにより研究方針を確認、あるいは、場合によっては修正等を行う。更に研究遂行の過程で、研究課題に関連する国内外の研究成果、先行研究や類似テーマを読解し内容について討論する。これらの研究活動を通じて、より大きな視野で物事をとらえる力を培うとともに、基本的研究能力、技術を培う。	
	卒業研究Ⅲ	○	「卒業研究（Ⅰ～Ⅲ）」では、これまでに修得した生物学の専門知識に基づき、学生が各自のテーマに沿って教員の指導を受けながら、卒業研究に主体的に取り組む。 「卒業研究Ⅲ」では、「卒業研究Ⅱ」で実施した研究の完成度を高め、学びの集大成としての卒業研究を結実させる。各自の研究課題に沿って実験等によりデータを収集・分析し、各分野内で入念に討論したうえで卒業論文としてまとめる。最終的に、研究成果については公開の卒業研究発表会で発表する。発表においては、質疑応答の時間を設けることにより、発表者のさらなる研究に対するの深化につなげる。これらの研究活動を通じて、生物学の知見を活かした問題解決のために自ら学修する態度、総合的に物事に取り組む姿勢と能力を身につける。	

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
特別 科目	まほろば教養ゼミⅠ	○	この授業は、安田の学生として、また一人の社会人として、学園訓「柔しく剛く」に則った豊かで確かな自己実現が達成できるよう、「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」の四つの活動を柱に、主としてチューターを中心にクラス単位で展開する。 1年次では、「安田を知る」「学びを知る」を中心に授業を展開し、大学の歴史、建学の精神を知り、大学生としての学びの精神を理解する。	
	まほろば教養ゼミⅡ	○	この授業は、安田の学生として、また一人の社会人として、学園訓に則った豊かで確かな自己実現が達成できるよう、「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」の四つの活動を柱に、主としてチュータークラス単位で展開する。 2年次では、1年次に学んだ「安田を知る」「学びを知る」をふまえながら、「自分を知る」を中心に授業を展開し、自己を見つめ直す種々の作業を通して、自立性と主体性を備えた自己の育成を図ると同時に社会に眼を向ける姿勢を養う。	
	まほろば教養ゼミⅢ	○	この授業は、安田の学生として、また一人の社会人として、学園訓に則った豊かで確かな自己実現が達成できるよう、「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」の四つの活動を柱に、主としてチュータークラス単位で展開する。 3年次では、これまでに学んだ「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」をふまえながら、「社会を知る」を中心に授業を展開し、自立性と主体性を備えた自己の育成を図ると同時にさらなる学びの精神を培う。	
	まほろば教養ゼミⅣ	○	この授業は、安田の学生として、また一人の社会人として、学園訓に則った豊かで確かな自己実現が達成できるよう、「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」の四つの活動を柱に、主としてチュータークラス単位で展開する。 4年次では、これまでに学んだ「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」をふまえながら、学生は将来に向けての生き方を模索するために積極的に社会との関わりを求めるための取り組みを行う。	
共通 教育 科目	キャリア ア 科 目	キャリアデザインⅠ	この授業の目的は、「生きる」「学ぶ」「働く」をキーワードにして人生の課題や進路・職業選択を考え、4年間の意図的学修や課外活動の充実を図ることにある。授業内容としては、次の3点がある。1) 多様な視点から自分らしさを理解し、自己を表現する。2) 社会の環境変化や期待される姿から、自分にとっての進路・職業選択の意味を考える。3) キャリアデザインに着手し、4年間の学修・生活設計を立てて自己駆動する。授業を通して、学園訓「柔しく剛く」の意味を深め、その感性や生きる力をどんな夢や目標に向けるのか、と自問自答し続ける。	
		キャリアデザインⅡ	キャリアデザインとは、自分のキャリア（職業・生涯の経歴）を、自らデザイン（設計）することである。仕事をしながら幸福感を味わうためには、また成果をあげるには、キャリアデザインが必要となる。「今まで何をしてきたか？」より「これから何をするか」を考え、なりたい自分をイメージすれば、「今何をすべきか」が自ずと分かってくる。この自己認識と、エンプロイアビリティ（雇用されるにふさわしい能力）を育成することが、本授業の目標である。以上の経験をもち、個人としてのキャリアモデルになりうる人に、「私の人生観」「私の職業観」「私の友人観」などのテーマで語ってもらう、連続講演形式の授業である。	
		ボランティア活動	ボランティアは「主体性の原則（自由意志の原則）、非営利性の原則（非配当性の原則）、市民公益性の原則」の3つの原則で表現される。本科目ではまず、身の回りでどのようなボランティア活動が行われているか、現状を把握する。次に、ボランティア活動を求められている現場からの声を参考に、自ら考え、ボランティア活動を実践する。 実際の活動を通して、ボランティア活動の社会的意義、個人の積極的参加の必要性、方法について生涯学習の立場より理解を深める。	共同
		インターンシップ	「インターンシップ」は、企業や地方公共団体での就業体験を意義のあるものとするために、事前準備を行うとともに、夏期休業中に就業体験研修を行う授業である。インターンシップに参加する目的と意義を理解し、現在の地域経済状況を理解するとともに、業界・研修先研究を行い、就業体験の意義をより深く考察する。同時に、ビジネスマナー・ビジネス文書作成等のスキルを磨き、これらの成果を基に、実際に就業体験を行う。	
		職と食 ーパティシエ実習	調理は食に関する栄養学、食品学などの知識を実際に食べる事に結び付ける接点でもある。生命を維持するためや嗜好品のななど様々である。本実習では、菓子、ケーキなどの嗜好品の製菓技術を習得し、食が人に与える心の豊かさ、ゆとり感について学ぶ。また、四季折々の素材を使い調理し味わうことにより、食べる事が人にとっていかに大切かを学ぶ。	
	教 養 科 目	人間論A	人間論は講義形式により授業を行ない、「人間としての真の生き方」を思索し、探究することを目標とする。現代社会は、少子高齢、経済のグローバル化、情報技術革命等々の大きな構造的変化を迎え、急激な変貌をとげつつある。そこでは価値観や世界観の多様化、人間性喪失、人間関係の希薄化や連帯性喪失といった人間疎外的状況をいっそう加速させつつある。人間論はこうした人間疎外的状況を克服すべく、人間諸科学等の成果をふまえた総合的視点のもとで、真の人間性を探究することにより、人間性の回復と人間としての真の生き方を考察する。	
		人間論B	生命倫理の起こりと歴史的背景、倫理の拡大と応用(個人から共同体、生命圏)、生命倫理の基本原則、生命とは、人命とは、尊厳とは、死とその定義と取り扱いなどについて考察する。そのような理解の上に患者の人權の歴史と現状、インフォームド・コンセント、自己決定、人工受精、出生前診断、人工妊娠中絶、生殖技術、生命操作、臓器移植、安楽死・尊厳死やQOL問題などについて論及する。更には生殖医療、クローン、家族、親子の問題など新しく生起する困難なテーマについても問題解決のためにどのような法的枠組みを構築すべきかを考えることのできる能力を養いながら、医学・薬学および看護学にとって重要な生命倫理学を学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	教 養 科 目	人 間 理 解	こころの科学A	自分や他人の「こころ」のメカニズムを知る手がかりは、人間が起こす行動の中にあると考えられている。複雑化する現代社会の中で生きる人間の行動を理解するために、心理学は一定の科学的研究法を用いて、人間の行動に影響を与える要因と、その法則性を見出そうと試みてきた。この科目では講義形式の授業を行い、直接見ることでできない人間の「こころ」の過程について理解を深めることを目標とし、人間が起こす興味深いさまざまな行動を取り上げ、そのような行動の原因や環境、背景について考えることで、心理学の基礎について学修する。
			こころの科学B	人間の「こころ」を科学的に究明する「心理学」の領域の中に「臨床心理学」がある。本科目では、この臨床心理学を背景に、知的・身体的機能に支障のある状態、対人関係の困難な自閉症、学修不振やことばの障害、不登校や場面緘黙、チックなどの情緒障害、家庭内暴力や校内暴力などの問題行動など、様々な心理的・行動的問題の原因やそれらを持つ児童生徒への支援のあり方について、講義形式により授業を行い、臨床心理学の基礎について学修する。
			からだの科学A	この科目は、ヒトのからだの成り立ちや営みについて理解を深めるとともに、今日的な問題状況をとらえながら健康なからだづくりについて学ぶ。特に、乳幼児・児童期から青年期に至る発育・発達を理解、こころとからだの歪みと養育、女性の心身の健康と男女の性差の問題、および運動・スポーツにおける身体の動きと働き、スポーツパフォーマンスを高めるための科学などについて、学修する。
			からだの科学B	身近な病気を通してヒトのからだの仕組みや病気が起こるメカニズム、また、広く環境問題とヒトとの関わりについて基本的知識の修得を目的とする。食物の消化とその異常、腸内細菌、肥満とやせ、糖尿病、ホルモンと病気、骨粗しょう症、動脈硬化、かぜとインフルエンザ、AIDS、BSE、痛み（頭痛、胸痛、腹痛、関節痛、腰痛）、心臓の病気、肺の病気、耳の病気、胃・腸の病気、アトピー・アレルギー、免疫と免疫疾患、痛風、がん、放射線と病気、喫煙と健康、アルコールと病気、老化、痴呆、頭の病気、神経症、精神障害（うつ病、統合失調症、パニック障害、心気症、不眠、性同一性障害、強迫性障害など）、PTSD、環境と健康、緊急処置など、今話題になっている病気についての基本的知識を修得する。
			からだの科学C	社会は高度に都市化し、少子・高齢化が急速に進んでいる。そして、豊かさと共に、健康に関する関心が益々高まっている。健康科学が目指すところは、全ての人が健やかで心豊かな質の高い生活、活力のある社会を築くための知恵を培うことである。色々な観点より「健康」の問題にふれ、健康科学について学ぶ。健康の概念、疾病の概念、細胞の老化、ヒトの寿命、健康寿命、加齢・老化、病気の予防、生活習慣病、栄養、運動、休養・睡眠、環境と健康の関係について基本的知識を修得する。
			人間形成の科学A	この科目は、人間形成のプロセスを、総合科学としての教育学を中核に据えながら、関連諸科学との統合のなかで考究する。その際、研究の結果としての知識の伝達と同時に、人間を多角的に探求する技法を獲得する。すなわち、人間形成のプロセスを考察することによって課題探求能力の育成を図るものである。なお、この授業ではより原理的な側面を対象とする。
			人間形成の科学B	人間形成のプロセスにとって幼児期は最も重要である。本講義の目的は、早期教育に焦点を当て、幼児の発達とは何か、発達課題とは、子どもの可能性についての基本的理論を学び、関連諸科学との統合のなかで考究することである。すなわち、人間形成のプロセスを考察することによって課題探求能力の育成を図るものである。子どもを取り巻く早期教育の現状を把握した上で、子どもの発達の基本理論を学び、研究の結果としての知識の伝達と同時に、人間を多角的に探求する技法の獲得を目指す。
			ことばの世界A	人間関係が希薄になった現代日本社会に対し、ことばによるコミュニケーションという側面に焦点を当てて多角的なアプローチを試みる。ここでは、その土台としての日本語の基礎知識、およびコミュニケーションの方法の2点が中心となる。前者では「ことば」の常識を修得させる。後者では対話における自己表現の方法・スキルなどの修得がターゲットとなる。また、地域社会におけるコミュニケーションも対象となる。地域社会の「ことば」である方言の実態解明も重要な問題であり、本科目を「日本語を見つめ直す」契機とする。
			ことばの世界B	翻訳では味わえない英語の妙味に浸り、美しいことばとしての英語を楽しむことができるようにすることが、この科目の目的である。授業では、英語圏のすぐれた映画作品や身近な親しみやすい種々のジャンルの英文を教材として取り上げる。前者の場合では映画作品の鑑賞と並行して、シナリオ英語のしやれた感覚をも味わい、後者の場合では、Mother Goose、レシピや広告、新聞の英語など、そのジャンルに特有のスタイルや約束ごとを探求する。
			日本の文学A	現在と未来を知るためには、過去を知らなければならない。過去を知る一つの方法は、過去の人々が歌い、語り、書いた文学作品を読むことである。古代から近世末までの日本の文学作品を取り上げ、それぞれの時代の人々が、どのような歴史的社会的状況の中で、何を感じ・考え・表現してきたのかを探究する。また、「社会—人間—文学」の関わりについて考えを深め、現在と未来における私たちの生き方を考察する。
			日本の文学B	価値観の多様化や社会の国際化が急速に進展し、改めて日本人一人ひとりの伝統理解のあり方が問われている現代の動向をふまえ、近代以降の日本の文学作品を取り上げ、文学と文学をめぐるさまざまな事象の考察を多角的に行う。この授業は講義形式で行われ、作家の紹介や作品と時代との関わり、また、作品内容の読解や課題の考察・発表などの作業を通して、日本文学に親しみ理解を深めるとともに、人間自身、および人間と自然・社会・時代等の諸環境との関わりを探究する上において、文学のことばがいかに重要な役割を果たすかについても理解する。

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	人間理解	世界の文学 A	世界の文学には、大きく分けて東洋文学と西洋文学がある。本科目では日本文学以外の中国文学その他の東洋文学を扱う。この授業は、いずれかの東洋文学の一つあるいはいくつかの作品について、本文の読解などの作業を通して、それぞれに固有の「ものの見方、考え方」を学ぶことを目的とする。それらを学ぶことにより、私たちの有するものとは異なる要素を知り、理解することで、思考の幅を広げ深めることができる。	
		世界の文学 B	人間とは努力する限り過誤を犯す存在であり、いかに進歩しても人間そのものの本質は変わらないと述べ、世界文学の必要性を説いたのはゲーテである。西洋の二大思潮としてギリシア・ローマの古典（ヘレニズム）と聖書・キリスト教（ヘブライズム）がよく指摘されるが、西洋の文学作品に表れた人間活動とその精神的様相を考究することは、文化の「メガトレンド」の理解にとどまらず、普遍的「人間理解」への手がかりをつかむ道である。こうした視点から、英米文学・フランス文学、その他の西洋文学を取り上げ、学修する。	
		芸術 A	芸術の諸分野は感性を豊かに育み、生涯にわたる人間形成に重要な部分を占め、影響を与えている。いずれも技能の修練によって芸術の本質が達成されることが多い。それらを社会に示し評価を受け、さらなる向上が目指されるものである。これらの修得には才能及び、相当の環境と時間を要する忍耐のいる作業である。本科目は、音楽或いは美術の分野に即して、我が国や諸外国（西欧、東欧、アメリカ）の歴史を概観しつつ芸術が人間にもたらす影響と精神性をその主たる本質に迫る端緒を開くことを目的とするものである。	
		芸術 B	この科目では、芸術の諸分野のうち書道を扱う。書道は、漢字を表現手段として展開される独特の芸術である。その漢字は、甲骨文字・金文・篆書・隷書・楷書と、その書体の変遷の過程で、さまざまな魅力あふれる古典を生み出し、今日の我々に語りかける。この授業は、書道芸術を今日的な観点から分析し、明日へと続く意義を考察する。同時に、漢字文化とはどのようなものか、関連する文学や歴史事象とも合わせ、文化史全般の中でとらえる。	
	社会理解	現代社会と人間 A	「普通」「標準」といった自明の基準が失われ、「私はどう生きるか」が常に問われるのが現代である。グローバル化社会にあつて「日本人」としてどう生きるか。さらに、親が歩んだ道とは異なる人生をどう設計していくか。そうした問いに応じて生きていくには、異文化理解、異なる世代の生活世界の理解に基づく「相対化」の視点が重要である。この科目では、そうした視点を「人々の日常生活」に焦点をおきながら深めていく。	
		現代社会と人間 B	現代の社会に生きる大学生に、講義形式で、人間が本来的に持っている自己実現の力に気づき発揮できるよう、自己自身を力づける（エンパワメント）きっかけを提示する。学生一人ひとりが、人生・生涯という、ゆったりとした長さの中で自己について考えられるように、他者との共感的な理解を深めてよい人間関係が築けるように、女性という社会的存在を生かしてより住みやすく平和な社会をつくるための貢献ができるようにと、エンパワメントの願いを込めている。この授業は、現代の社会と人間の関わりについて、女性、青年、心理、自己表現といった観点からの理解を目指す。	
		21世紀の社会と法 A （日本国憲法）	国の最高法規としての日本国憲法が、われわれの日常生活にどのような関わりを有しているかという視点を縦系に、人権の保障と国の統治システムの解明を横系に、21世紀の国際社会における憲法のあり方を模索する。そこでは、従来の価値基準では律することができず、他の科学領域の成果を採りこんでいかなければならない新たな現象に直面する憲法の苦悩が見て取れるが、そこにこそ新たな知的営為の必要性があることを認識する。	
		21世紀の社会と法 B	男女雇用機会均等法が施行されて30年以上が経過したが、なお、その標とする職場における男女平等の実現は果たされていない。均等法のモデルのひとつとなった立法を有するアメリカでも、確かにエリート女性の華々しい活躍は見られるが、やはり、職場の実情は男女平等の実現からはほど遠い状態にある。この授業では、日本とアメリカの「職場における性差別禁止法」の仕組みと運用を比較検討することによって、その原因を考え、男女平等実現の道をさぐることを目標とする。	
		21世紀の経済 A	近年、多くの経済社会問題が私たちの日々の生活に大きな影響を与えている。特に、少子高齢化や財政悪化の問題は、現在のみならず将来の私たちの日々の生活に大きな影響を与える。そこで、講義形式で行われる本講義では、こうした問題やそれらの問題が及ぼす影響を理解するために、基礎的な経済学の知識の修得、ならびに、現在生じている経済社会問題が私たちの生活に影響を与えるメカニズムを理解することを目指す。具体的には、経済の仕組み、景気、金融、財政・税制などについての基本的な知識、および、経済学の分析手法を学修する。	
		21世紀の経済 B	本講義は講義形式により行なわれ、経済社会の変化に対応した家計の経済管理やマネージメントの重要性について認識するとともに、生涯生活設計を実現するためのライフプランの立て方を修得することを目的とする。具体的には、まず、現在の家計を取り巻く環境変化を理解し、今後どのような家計の経済管理が必要かを学ぶ。そのうえで、生涯生活設計を実現するために、どのようにライフプランを作成していくべきかを考え、各自で将来のライフプランを作成する。ライフプランの作成に当たっては、金融市場をいかにうまく利用して資金調達・資産運用を行うかを検討する。	
		現代のビジネス A	働くことの意味とは何か、自己管理や自己啓発をどのようにすべきかなどについて考えるとともに、所属する組織の目的実現のために有効な役割を担い、組織にとって必要な存在となるために必要となる基礎的な知識や技能、実務能力などの修得について、ビジネス現場の具体的な事例を取り上げながら理解する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	社会 理解	現代のビジネス B	この授業は講義形式で行われ、ICTの急速な進展を背景にビジネスを取り巻く環境が変化の中で、「なぜ、従来型日本システムが、今大きく変わろうとしているのか」をキーワードとして、グローバルな視点から企業の目的や活動（戦略、組織、人的資源、マーケティング、財務）に関して基本的な理解を図ることを目標とする。この授業は、ビジネスが具体的に理解できるように、具体的な事例（ケーススタディ）や新聞記事を取り上げながら学修する。	
		現代社会と政治 A	政治は消費税を上げたり、法律を決めたりすることによって、我々の生活や社会を変える力を持っている。対して我々は、その決定に影響を及ぼす力を持っている。社会をより良いものにしていくために、政治の仕組みを理解し、問題点を明らかにする必要がある。政治の仕組みを理解した上で、現在の日本や世界において、どのようなことが政治的に議論されているかを学ぶ。そして、国際化の時代において、国際人としての自覚と認識を持つことを目的とする。	
		現代社会と政治 B	現代において、新しい情報や知識・価値観の存在感が増している。それらに対して、正しく理解し受容する必要性が高まっている。授業では、女性を取り巻く諸問題を、マスコミ等に取り上げられている今日的な素材を基にして、それらの持つ意味や本質・問題点などを考察していく。新聞記事などを深く読むことにより、政治や社会問題などの情報・知識を掘り下げ、社会人・国際人としての良識や社会性を身に付けることを目的とする。	
	教 養 科 目	異文化理解 A	国際的な往来が活発化し、英米への旅行や長期滞在がかつてないほど身近なものになった現在、英米の社会的・文化的な背景の理解がますます重要になってきている。この授業では、英米の自然や歴史、慣習など多種多様な素材をもとに、イギリスあるいはアメリカの文化的特徴および歴史的背景、人々の考え方や価値観を学び、異文化の中に暮らす人々の心を理解することにより、異文化理解を目指し、多様性を受け入れることのできる国際人を育成することを目的とする。	
		異文化理解 B	この授業では、異なる文化とそこに生きる人々と私たちとの関わりを考察し、真の異文化理解とは何であるか、そして異なる文化に属する人々に対するコミュニケーションはどうあるべきかの答えを探ることを目的としている。その目的のために、世界の様々な文化、特に日本文化のルーツともいえるアジアの文化を主対象とした比較文化的な考察や、異なる文化を背景に持つ人々とのコミュニケーションにおける諸問題を、知覚、言語、非言語、自己概念、ステレオタイプ、偏見、ヒーロー等、の様々な観点から学修する。	
		日本の歴史と文化 A	21世紀における国際社会にあつては、それぞれの国が国境を越えて互いの国の歴史と文化を相互に理解しあう関係が強く求められているが、その一方で、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛することも併せて求められている。この授業はこうした見地のもとに、講義形態をとりながらも自らが考え組み立て、日本の歴史と文化に対する認識を深めることを目標とする。特に本講義においては、歴史書・絵巻物・建造物・遺跡・文書といった歴史的な素材を主に用いた視点から授業を展開し、21世紀にふさわしい日本のあり方を構想する。	
		日本の歴史と文化 B	21世紀における国際社会にあつては、それぞれの国が国境を超えて互いの国の歴史と文化とを相互に理解しあう関係が強く求められているが、その一方で、自国の歴史と文化に対する正しい理解も併せて求められている。この授業はこうした見地のもとに、日本の歴史と文化に対する認識を深めることを目標とし、特に、神話・物語・説話・絵巻・絵伝・小説といった文学的な素材を主に用いて学修する。	
		世界の歴史と文化 A	社会の国際化が進む現在、我々は世界的な視野で物事を考え、我が国とは異なる文化や伝統を深く理解し、それを共有化できる価値を追求していく態度を養うことが求められている。本科目は、このような現代の動向をふまえ、世界の歴史と文化に対する理解を深めることを目標とする。特に、中央アジアやスリランカなど日本と深い関わりを持ちながらも、意外に知られてこなかった地域を取り上げ、社会や文化、歴史の紹介や解説に加え、基礎的言語や文字についても学修する。	
		世界の歴史と文化 B	社会の国際化が進む現在、我々は世界的な視野で物事を考え、日本とは異なる文化や伝統を深く理解し、それを共有化できる価値を追求していく態度を養うことが求められている。本科目は、このような現代の動向をふまえ、世界の歴史と文化に対する理解を深めることを目標とし、講義形式で授業を展開する。特に本講義においては、諸外国の歴史・文化に対する理解を深めるために、政治史・文化史・社会史などの幅広い視点から考察する。	
		国際協力 A	本講義では、「環境問題」のように、今まさに国際的な協力を要請する社会問題を例にとり、正しい国際協力のあり方を模索していく。「内政干渉」を切り札にする国家ではなく、同じような問題をかかえている地域のNon・state actorsが国家を通さず、直接横に結びついていく、「越境民主主義」のあり方こそが、「国際的」という言葉が意味する真の「国際協力」のあり方なのだ、ということを理解させることを目的とする。「国際的」という言葉、『もののけ姫』、人間中心主義、動物の権利、生態系中心主義、グローバリゼーション、日本の環境問題、南北問題、生命／生活圏主義、越境的民主主義などのテーマを扱う。	
		国際協力 B	開発途上国が抱えるさまざまな問題を解決するため、専門家やボランティアが開発途上国に派遣され、国際協力が実践されている。本授業は、国際協力の前提となる、国際情勢について学ぶ。特に「グローバリゼーション」の影響を考えるために、題材として、主に「南北格差の問題」を取り上げる。現在進行中のグローバリゼーションが何をもたらしているのか、そしてそれに対してなぜ「もうひとつの世界は可能だ」という声が世界中で上がっているのか、を理解し、同じような問題に苦しむ者たちが、国家を介在させずに、横にネットワークを築くという「越境民主主義」の可能性を探ることを目的とする。	
	国際 理解			

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	科学 技術 理解 教養 科目	数学の世界	この授業は、体系的な数学の世界ではなく、人間の知的活動としての数学の世界、すなわち、数学という既成の学問体系にこだわらず、人間の知的営為としての数学の世界を端的に示す話題を中心に扱う。話題の中心となるのは数と図形であり、数学の世界の面白さを体験することを目標とし、魔法陣、暗号、作図、ソーマキューブ等を例に、数学の世界の合理性を理解するために、自然数の性質、ユークリッド幾何学、合同式の基本性質、数直線と実数の世界等を取り上げる。	
		自然科学の世界 A	あくなき科学者の探究心のもと、現代の科学知識は、科学的な推察と精密観測によって、地球から飛び出て宇宙の端にまで及んでいる。人類は、古来、宇宙に果てしないロマンと夢を描き、想像の世界に浸っていたが、今やそれも科学探求の及ぶ領域となっている。この授業は講義形式により行い、宇宙と地球についての知見を得ることを目的とし、人類が如何にして宇宙と地球についての正確な知見を得ることができたのか、その歴史を振り返り、現在までに得られた知識についての概説を行なうとともに、探求に用いられた現代科学の一端を展望する。	
		自然科学の世界 B	われわれは、さまざまな化学物質を利用しながら生活しているが、身の回りには、案外危険な物質があり、環境破壊や公害につながるものもある。また、エネルギー資源の大量消費は温暖化や酸性雨といった地球規模の被害を起こしている。本科目で扱う化学は、これらの実態を知り、その被害を防ぐ上で重要な役割を果たしている。それゆえに資源・エネルギーや環境の問題を理解して、安全で快適な生活を送るためには、ある程度の化学的知識が必要である。この科目では、これらに関連する事項について考え、同時に基礎的な化学の概念や原理が身に付くことを目標とする。	
		自然科学の世界 C	この授業科目で扱う生物学の目指すところは、生物についての知識を学ぶということに留まらず、生命現象に関する学問であり思索である。微生物、植物、動物、人を例にとって生命・遺伝子、細胞、組織、個体、進化、集団、社会について構造的、機能的側面の理解を図る。これらを通して生命に対する考え方の醸成を図り、生命科学（ライフサイエンス）の目指すところの、生命を総合的に考え、自然理解、人間理解の一助となることを期待する。この授業では、生命、自然、人間を理解することを目指す。	
		生命の科学 A	21世紀は20世紀に飛躍的に増大した生物に関する知識に基づく科学技術がいよいよ実用化に向かうことが期待される。一方で、“生命”が科学技術と対峙するキーワードとして使われている。科学的・論理的思考方法を身に付け、生命科学のイメージ（自分自身で、自分自身の）を確立し、その上で、“自分－生命科学－社会”の関わりについて考えることができるようになることを目的とする。 本講義では、生命を20世紀に確立した物質論的生物学としてのみでなく、生命と人間との関係を含めて生命論的生物学を学修する。生命科学の誕生（分子から人間、分子生物学から生命科学）、人間科学と生物化学（生理心理学、人類学）、生命科学と技術（生体成分の利用、クローン生物等）などについて理解を図る。	
		生命の科学 B	医学は呪術と宗教、迷信が支配する長い年月を経て、近年やっと、科学的に根拠のある薬が誕生し、医療の場で利用されるようになった。薬に関する基本的知識を学び、薬の正しい使い方を理解して、健康に生きる知恵を修得することを目的とする。本講義では科学的に合成された薬物のみでなく、自然界に存在する薬として使用される植物、動物、鉱物について基本的知識に加えて、主だった薬の発見と作用（クラレ、フィソスチグミン、アトロピン、フェノールフタレイン、ニトログリセリン、アスピリン、シメチジン、モルヒネ、大麻、ハッシシ、LSD、インタール、経口避妊薬等）について解説する。また、現在の臨床の場で見える薬物（エフェドリン、エーテル、笑気ガス、コカイン、バルビタール・ハルシオン、インシュリン、ワルファリン、ヘパリン、レボドパ、プロモクリブチン、シスプラチン、コーチゾン、リチウム、フェレルピン等）の発見の経緯と作用を学ぶことにより、薬に対する考察を深める。	
		生命の科学 C	20世紀の生命科学改革は遺伝学を中心に展開してきたと云える。最近のメンデルの遺伝法則の再発見による遺伝学は、遺伝子の本体がDNAであることを証明し、生物学に革命をもたらした。その後も組換えDNA実験法、DNA塩基配列決定法やPCR法などの技術革命によりヒトゲノム計画を成功に導いた。今世紀前半にはゲノム生物学が情報科学的再編・統合化されてシステム生物学へと発展すると云われている。本講義では、このような学問の展開を視野に入れながら、ヒトの理解につながる分子遺伝学を中心とした生命科学の基礎と発展について学修する。	
		環境の科学 A	地球環境を健全に保つために、大気や水を汚さず、温暖化を防ぎ、多様な生物種をこれ以上絶滅させることなく、地球上でわれわれの子孫が生活できるように考えなくてはならない。20世紀において豊かさを追求して、ヒトがつくり出した環境汚染物質やその諸要因が人間や野生生物にどのような影響を与えてきたかを検証することにより、新たな環境浄化へのステップを踏み出すことになることを理解する。具体的には、地球的規模の環境の諸問題、さらにヒトが摂取する食物及び食品における環境汚染について学修する。	
		環境の科学 B	生物は環境との関係を密接に保ちながら進化し、それ自身が地球環境の一部を構成することとなった。地球環境と生物の相互作用の繰り返しが地球環境と生物進化の歴史である。生物の中には、かつては繁栄の時を持ちながら、環境変化に対応できず絶滅したり、わずかな種類にまで減じて生き残っているものもある。地球環境の一方の担い手である生物そのものがどのように進化してきたかを明らかにし、生物の進化と地球環境との関わりについて学修する。	
		生活の科学 A	物質的に豊かになった現代、日々の生活において、生活の質的向上（Quality of Life）を図るライフスタイルが求められている。質的向上、すなわち、真に健康で心豊かな生活を創造するためには、生活者自らが生活における科学性に気づき、科学的な視点で生活をデザインすることが大切である。本科目は、生体と生活環境との関連性を科学的に考察する方法を紹介し、自らの生活を科学的にデザインできる能力を養うことを目的とする。	

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	科学 技術 理 解	生活の科学B	人は今日まで歴史を重ねながら、伝統や文化を育み、生活技術を確立し、生活を向上させてきた。技術革新によって生活の利便性や効率性が追求され、ますます進行している。この授業では、視聴覚教材を活用し、衣食住の各分野における生活の伝統や文化の背景を知り、生活を支えている分野や技術の本質を探ることにより、真に身体的・精神的・社会的に健康で豊かな生活の在り方を考察することを目指す。	
		情報の科学	メディアが多様化している現代は、情報リテラシー（課題や目的に応じ、情報を主体的に収集、処理、発信する能力）が重要になっている。基本的には、学内所蔵資料を中心にした一次資料、抄録（誌）・索引（誌）等、各種メディアによる二次資料の理解を目指す。さらに、デジタル資料の利用・活用については、インターネットやコンピュータネットワークを通じて外部データベース等情報源にアクセスするための知識や技術を習得する方途について学修する。	
	情報 処 理 科 目	情報処理基礎Ⅰ	コンピュータリテラシーの基礎的な能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。まず、パソコンの基本的な操作を行うスキルを獲得した上で、日本語入力技術の向上、および、日本語文書作成ソフトの基本操作の習熟、プレゼンテーション能力の養成を目標とする。日本語文書作成、ファイル作成、入力、保存、編集等の操作を段階的に学び、ICTの知識とスキルを習得する。この授業の履修により、論理的思考力の礎とする。	
		情報処理基礎Ⅱ	インターネット利用技術の習得を目的とした演習形式の授業である。インターネットを介して利用することのできる各種技術（WWW検索・電子メール・ホームページ作成等）の習得を目標とする。WWWを利用して様々な角度から情報検索を行う手法を学んだり、電子メールの送受信の方法、基本的なホームページの作成による情報発信の手法等を、演習により段階的に学ぶ。	
		情報処理基礎Ⅲ	コンピュータリテラシーの中で、代表的なアプリケーションである表計算ソフトの活用能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。表計算ソフトの基本的な操作に習熟することを目標とする。基本的な入力方法、編集操作方法、式・関数の利用方法、情報の保存方法、基礎的なグラフ作成方法等を、演習により段階的に学ぶ。また、表計算ソフトを用いた基礎的な統計手法を身に付け、総合的な問題解決能力を涵養する。	
		情報処理基礎Ⅳ	プログラミング作成の基礎的な能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。アプリケーションの中で利用できる基礎的なプログラミング技術の習得を目標とする。コンピュータの構成と基本動作を理解した上で、表計算ソフトのようなアプリケーションの中で、どのようにプログラミング作成を行うかについて、演習により段階的に学ぶ。	
		情報処理演習A	エンドユーザーに要求される能力を養成することを目的とする。すなわち、社会や組織におけるネットワーク・コンピューティングの様相を、エンドユーザーという立場から理解し、どのソフトの機能が業務に合致するかを判断できる能力を獲得することを目指す。この授業は、情報処理基礎Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの履修を前提にし、ワープロ、表計算、プロジェクト管理等のソフトのより高度な利用法も、演習により段階的に学ぶ。	
		情報処理演習B	コンピュータリテラシーの中で、代表的なアプリケーションである表計算ソフトやデータベースソフトのより高度な活用能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。表計算ソフト・データベースソフトに関する操作の習得を目標とする。リレーショナルデータベースのデータ検索・更新等の操作法や、データベースの設計手法を学ぶと共に、複数アプリケーション間におけるデータの再利用法等を、演習により段階的に学ぶ。	
		情報処理演習C	コンピュータリテラシーの中で、プレゼンテーションソフトの活用能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。マルチメディアデータの活用法や、それらを活用したプレゼンテーション技術に習熟することを目標とする。デジタルスチルカメラやスキャナーで取り込んだ静止画像の処理や、ホームページに利用するためのマルチメディアデータ作成の技術等を、演習により段階的に学ぶ。	
		情報処理演習D	ファイリングの能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。データ検索・管理等のノウハウ、および、ファイリングの基礎を学ぶことを目標とする。文献等資料検索システムの機器構成、検索統制語の概念、シソーラス等のデータアクセス方法等を、演習により段階的に学ぶ。	
	健康 ス ポ ー ツ 科 目	健康スポーツA	生涯にわたるヘルスプロモーションと豊かなスポーツライフの実現に向け、心身の健康づくりと体力・運動能力および基礎的運動技能の向上、運動による仲間との交流を目指し運動や各種スポーツ・レクリエーション種目の実技を総合的に展開する。その上で、自らに適した運動・スポーツを主体的に実践できる能力の育成を目指し、各自の興味・関心にそったスポーツ種目を選択し、グループで協力して練習やゲームを展開できるようにする。	

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	健康 ス ポ ー ツ 科 目	健康スポーツ B	体育館、グラウンド、テニスコートなど、学内のスポーツ施設を利用し、バレーボール、バドミントン、卓球、テニス、ゴルフ、ソフトボール等の中から、生涯にわたって取り組むことのできるような種目を各自の興味・関心に基づいて選択する。試合や審判がある程度できるようになることを目標に、ゲームを中心に行う。基本的に初心者レベルを対象としている。	
		健康スポーツ C	体育館、グラウンド、テニスコートなど、学内のスポーツ施設を利用し、バレーボール、バドミントン、卓球、テニス、ゴルフ、ソフトボール等のうち、実施可能な種目について専門的な内容を展開することにより、身体運動能力のよりいっそうの改善を目指す。基本的に中・上級者レベルを対象としているが、効率の良い指導を行っていくため習熟度別に実施する。	
		野外活動	幼少期から成人にいたるまで野外活動経験の減少傾向が著しい今日、野外活動への期待と役割は大きく、それらを担う指導者の養成も求められている。また、科学技術の高まりに伴う環境問題や社会的ストレスへの対応として、自然や環境への関心が急速に高まっている。その現状に対応すべく自然体験林間キャンプを通して、自然環境教育とその実践を学ぶ。	
	基礎 科 目	英語リーディングⅠ	この授業では、英語の基礎的読解力を身に付けるべく、その土台となる語彙力・文法力を様々な演習を通して伸ばす。そしてその応用として、精読、多読さらには速読の活動を行い、それらを通して基本的読解方略を学び、長文における談話構造の理解と処理の基礎能力を身に付ける。さらに、多様なジャンルの教材を読みこなすことによって「読むことにより考え、学ぶ」姿勢を養う。また、リスニング力育成にも重点を置き、英語の音調に関わる基礎的素養を育成すべく、各種のリスニングおよびディクテーションの基礎的演習を行う。	
		英語リーディングⅡ	この授業では、「英語リーディングⅠ」で習得した基礎的読解力を生かし、多くの読解活動を行って応用的読解方略を学び、談話構造の理解と処理に関するより高い能力を身に付ける。さらに多くのジャンルの教材を読みこなすことによって「読むことにより考え、学ぶ」姿勢を伸ばし、単なる理解のレベルにとどまらず、著者の考えを的確に要約し、発表できるように指導する。またリスニング力育成においても、英語の音調に関わる素養をさらに高め、英語聴解力を伸ばすべく、各種のリスニングおよびディクテーションの応用的演習を行う。	
		英語ライティングⅠ	この授業では、並び替え英作文、和文英訳および自由英作文演習を通して、基礎的な英語ライティング力の育成を期する。並び替え英作文および和文英訳では、英語の語法・文法・構文に関わる知識を基本的なものから学修し直し、英文構成に関わる基礎的素養を身に付けるべく大量の問題をこなしていく。そしてその英文の添削の過程で、自分の英作文力における問題点を認識し、改善するように指導する。さらに自由英作文では、英文の論理構成に基づくパラグラフ構成の基本を学び、さまざまなトピックに基づいた英文を書く練習を通じ、ある程度の長さの英文を書く力を育成するとともに、英語で意見を表明し、情報を発信できる力を養う。	
		英語ライティングⅡ	この授業では、「英語ライティングⅠ」の授業で培った基礎的作文力をさらに伸ばし、並び替え英作文、和文英訳および自由英作文の発展的演習を通して、応用的英語作文力の育成を期する。英語の語法・文法・構文に関わる知識を深め、英文構成に関わる高度な素養を身に付けるべく、比較的難しい問題に取り組む。そしてその英文の添削の過程で、自分の英作文力における問題点を認識し、改善するように指導する。さらに自由英作文では、英文の論理構成に基づく結束性など複雑な構成力を身に付け、さまざまなトピックに基づいた英文を書く練習を通じ、比較的長い英文を書く力を育成するとともに、英語で意見を表明し、情報を発信できる力を養う。	
		英語コミュニケーションⅠ	この授業は、英語の「聞く」・「話す」ための語彙や発音を含む基礎的コミュニケーション能力を身に付けることを目的とする。具体的には、日常生活の身近な基本的語彙・表現や観光・ビジネスのための旅行における空港・ホテル・レストランなどさまざまな場面で役立つ多くの種類の初歩的表現を学修し、それらに関わる英語を聞いたり話したりする活動を通して、話の概要を聞き取ったり、要点を相手に伝える活動を行い、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。また、英語のアクセント、リズム、イントネーションなどのプロソディについても体系的に演習を行い、英語を「聞く」「話す」ための基礎的能力を養う。	
		英語コミュニケーションⅡ	この授業では、「英語コミュニケーションⅠ」をふまえ、英語の「聞く」・「話す」ための語彙や発音を含む応用的コミュニケーション能力を身に付けることを目的とする。具体的には、日常生活の語彙・表現や観光・ビジネスのための旅行における空港・ホテル・レストランなど多くの場面で役立つ多くの種類の応用的表現を学修し、さらに、会話、映画、ニュースなど様々な分野の英語を聞き、概要や細部の情報を聞き取る活動と、言語の使用場面と機能に配慮した言語活動の中で、自分の意見や感情を相手に伝える活動を行う。また、英語のイントネーションなどプロソディについても演習を行い、英語を「聞く」「話す」ための応用力を養う。	
		英語コミュニケーションⅢ	この授業では、「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」の内容をさらに発展させ、英語の発展的コミュニケーション能力を身に付けることを目的とする。具体的には、日常生活の語彙・表現や観光・ビジネスのための旅行における空港・ホテル・レストランなどさまざまな場面で役立つ多くの種類の発展的表現を学修し、さらに、外国で留学する際の基礎となるような、英語での学修スキルを学ぶ。さらに、読んだり聞いたりした情報に対する自分の考えを発表したり、また、聞いたことをメモして要約する活動などを行い、「聞く」「話す」活動と「読む」「書く」活動との有機的な融合を図り、総合的な英語コミュニケーション能力を育成する。	
		英語コミュニケーションⅣ	この授業では、「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」の内容をさらに発展させ、読んだり聞いたりした情報を要約して発表する活動などをさらに進め、「聞く」・「話す」活動と「読む」・「書く」活動との有機的な融合に基づく様々な演習を通して、英語で自由に自己表現ができるような高度な英語コミュニケーション能力を育成することを目的とする。具体的には、英語によるスピーチ、プレゼンテーション、ディスカッションなどを通して、英語の論理構成や文章構成ならびに議論での表現法やルールを学修する。また、他者との意見の交換を通して、自分の意見を深化させ、その場でそれを効果的に的確に相手に伝える能力も育成する。	
	外国 語 科 目			

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	外国語科目	中国語コミュニケーションⅠ	本科目は、日常的に用いられる言葉、言語を中心とし、自分の意志を中国語で表現する能力を養うことを目的とする。具体的には学校、家庭、社会など実生活におけるコミュニケーションの手段としての中国語、すなわち「話す・聞く・読む」を中心とした中国語の活用能力を養成する。特に発音と表記の仕方であるピンイン(中国語ローマ字)の習得に力を注ぐ。	
		中国語コミュニケーションⅡ	「中国語コミュニケーションⅠ」に引き続き、日常的に用いられる言葉、言語を中心とし、自分の意志を中国語で表現する能力を養うことを目的とする。中国語を学修し、その能力を高める為に、最も大切なことは中国語が好きになることである。そのような見地から、本科目では、中国語および中国文化への理解や関心を深めるために、随時音声や動画などの教材を利用して実際に即した訓練を繰り返し、中国語の自然な表現に親しみ、中国語の魅力に触れるとともに、実践的な語学力を身に付ける。	
		中国語コミュニケーションⅢ	本科目では、「中国語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」を履修した学生を対象に、会話、中国語の文章作成、作品講読を中心に学ぶ。既に学修した単語や会話表現を復習しながら、新しい表現を加え、耳・口・目を使って繰り返し練習することによって、会話の能力をいっそう高めるとともに、メモ書き、小説や雑誌・新聞記事などを読む能力を養成することを目標とする。授業は演習形態で行なわれる。	
		中国語コミュニケーションⅣ	「中国語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」に引き続き、会話、中国語の文章作成、作品講読を中心に学ぶ。具体的には、ネイティブスピーカーとのコミュニケーション、手紙や短文の作成、小説や新聞などの読解を通して、話す力、聞く力、読む力を総合的に学修する。以上の学修を経て、中国語の知識を学修するだけでなく、実践的な中国語の活用能力を身に付けることを目標とする。	
		北米文化語学演習	北米文化語学演習の目的は、約1ヶ月間にわたる北米家庭でのホームステイおよび現地大学での語学演習を通して、総合的な英語力の向上を図り、同時に文化に関して様々な面を直接体験し、異文化理解を深めることである。授業内容は、英会話・リスニング・英作文等に加え、文化学修、各種フィールド・トリップ等である。受講者は、事前のオリエンテーション参加と、演習終了後のレポート提出が求められる。	
		中国文化語学演習	中国文化語学演習は、事前学修および現地での実践的な学修を通して、中国語の語学能力を高め、さらには中国の歴史、文化、社会に直接触れることにより、異文化に対する理解を深め、国際感覚を養成することを目指す。このような目的のもと、本科目では実践的な語学指導によって、中国語を話す力、聞く力、読む力を習得させるとともに、史跡や博物館の参観、中国文化や芸術の講座の受講など、さまざまな活動を通じて、中国の文化・社会を深く理解する。受講者は、現地研修前の授業出席と、演習終了後のレポート提出が求められる。	
	基礎養成科目	基礎国語演習	国語の基礎となる資質・能力を養うことを目的として、言語能力の向上を図る。具体的には、「話すこと・聞くこと」「話し合うこと」「書くこと」「読むこと」の理論と方法について理解するとともに、教材の研究や諸分野の考察、発表などを行う。講義、演習を交えて国語の基礎的な理解力を養成する。	
		基礎社会演習	人間を育成し形成する公教育として、学校教育がある。そこでは学校の段階に応じた目的が設定され、その目的を実現するための教育内容が編成されている。本科目では、教育内容の一つとして設定されている社会科を取り上げ、その目標に基づく内容について、地理的内容、歴史的内容、公民的内容の側面から、考察を行う。特に地理的・歴史的内容に焦点をあて、その具体的教育内容を取り上げる。	
		基礎数学演習	各分野の専門的内容を理解するために必要とされる基礎的な数学、あるいはまた、将来一般社会人として必要とされる応用的な数学を取り扱う。基礎的内容は、初等的な数論や幾何学であり、数学という学問的な立場というよりむしろ、文系学生に向けた数学として、専門的内容の基底に流れる数学的アイデアや思想に重点を置き、数の体系や図形の構成などについての理解を深める。また、応用的内容として簡単な数値計算や統計的推論について取り上げる。	
		基礎理科演習	理科は、自然を理解し、自然と共に人間がいかに共存していくかを考える科目である。さまざまな自然の事象の中には、合理的な規則性や法則性が含まれている。太古の昔から、人類は少しずつその謎を解き明かし、自然科学の諸分野の学問を発展させてきた。ここでは、そういった自然科学の発展の歴史をその時代の背景と共に展望しながら、理科の諸分野の内容理解を深めていく。	
		基礎生物演習	この授業では基礎生物学や生物系の専門教育科目を学修するために必要な、最も基礎的な生物学の知識と考え方を短期で修得することを目標とする。そのために問題演習を中心に集中的・効率的な講義を行う。また、簡単な実験・観察も取り入れ理解を深めるとともに、生物学の面白さを伝えることにより学修への動機付けを行う。内容は遺伝子の構造、機能・細胞の構造、機能・感覚器の構造、機能・神経、感覚・内分泌・免疫を中心に行う。	

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部情報科学科)					
科目区分		授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	基礎科目	基礎養成科目		この授業は、具体的な問題を解きながら化学の基礎的理解を深めることを目的とし、演習形態で行われる。私たちは多種多様な物質で囲まれ、その中で生活している。化学は、物質の性質、反応性、構造性を調べることにより自然界の仕組みを理解する自然科学の主要な領域である。化学の基礎概念、大気中の分子、体内の化学物質、石油の化学について学修する。物質の変化において質的・量的関係にはどのような規則性があるかなど、化学の目を養うことは自然を理解するばかりでなく、化学に関連する科目を学ぶ上で重要となる。	
		基礎物理演習		この授業は、物理学の基礎的理解を深めることを目的とする。物理学を理解することは、我々の周りの自然現象を理解することである。物理学は、大きく分けて、古典物理学と現代物理学を含んでいる。この授業では、両物理学の概要を説明すると共に、実験や演習を取り入れ、物理学の理解を図る。すなわち、運動（ガリレオ、ニュートン）、仕事とエネルギー、惑星の運動、振動、電気・磁気について学ぶ。	
専門教育科目	理工学部共通科目	理工学概論	○	理工学は、社会の様々な分野で発生する問題や課題を解決し、対処するために生まれた学問である。理学と工学は、自然科学の原則や法則を基にしており、現在の科学技術を生み出してきた。 大学の理工学部は、理工学が成立する前提である教育・研究機関である。その役割を果たす、本学の理工学部において、学生が理工学を学ぶ上で必要となる、定義、分類、歴史、研究手法、社会との関わり、成果等について概観し、理工学についての広い視野を獲得することを目指す。	
		理工学データサイエンス	○	社会の様々な分野で発生する問題や課題の解決には、データ分析、機械学習、AIアプリケーションの技術が活用されるようになってきており、理工学においても、分野に関わらず、データサイエンスやAIの重要性が認識されてきている。 本授業は、理工学の分野を学ぶ学生に共通して求められる、データサイエンスに関する知識を学ぶとともに、それらを、理工学の各領域で生かし、学びをより深化させるための技能を身に付けることを目指す。	
	基礎科目・卒業研究	情報科学概論	○	今日の高度情報化社会を支えている技術は、コンピュータおよび情報通信ネットワークに代表される情報通信技術であり、人間生活の質を向上させる鍵となるものである。 本学の情報科学科は、情報通信技術を、発信力（デジタルメディア）、表現力（ヒューマンインタフェース）、課題解決力（データサイエンス）の3分野に分類・定義し、それらを援用することによって、高度情報化社会において社会で即戦力となるエンジニアの養成を目指している。 本講義では、情報科学の全体像を知り、社会における役割を学ぶとともに、情報科学において一般に知られている知識や経験を、専門的な立場から概要的に理解する。そして、3分野の概要を知り、各々の関心に応じて、4年間で学ぶべき科目を主体的に選択できるようになることを目指す。	
		情報基礎数学Ⅰ	○	情報科学においては、論理的に考えたり、数理的に問題解決の方法を推測したり、分析する場面が多く存在する。そのようなときに、問題解決の手段として、数学の知識や考え方が大いに役立つ。 本講義では、大学での学修で必要となる数学の基礎的かつ重要な内容を学修し、情報科学科での学びがより円滑に展開できるようになることを目指す。そして、多くの数学問題を実際に解くことで、高度情報化社会におけるエンジニアに必要とされる数学的問題解決能力を高めていく。特に、n進数、整数および浮動小数点数、二次関数、確率、統計的推論、数列、行列演算などについて詳しく学ぶ。	
		情報基礎数学Ⅱ	○	情報科学においては、論理的に考えたり、数理的に問題解決の方法を推測したり、分析する場面が多く存在する。そのようなときに、問題解決の手段として、数学の知識や考え方が大いに役立つ。 本講義では、大学での学修で必要となる数学の基礎的かつ重要な内容を学修し、情報科学科での学びがより円滑に展開できるようになることを目指す。そして、多くの数学問題を実際に解くことで、高度情報化社会におけるエンジニアに必要とされる数学的問題解決能力を高めていく。特に、ベクトル、指数関数、対数関数、三角関数、極限、微積分について詳しく学ぶ。	
		科学と倫理	○	今日の高度情報化社会を築き上げた科学技術の進展は、人間生活の質を大きく向上させているのと同時に、環境問題に代表される様々な弊害を生じさせている。特に、技術と自然、人と自然の調和をはかることは、人類がこれから長きにわたり地球上で生きていくために必要不可欠である。 本講義では、高度情報化社会におけるエンジニアにとって必要とされる倫理について学ぶ。新たな技術を開発するときに、それが、人として行うべき道なのか否か、善悪・正邪を判断できる倫理観を涵養することを目指す。そのために、自然環境倫理・情報倫理・生命倫理・技術者倫理などについて、具体的な問題を検討し、倫理の問題には多様な意見が存在することを理解した上で、今後、新たな問題に接したときに、どのような姿勢で対応するべきかを考える。	
		知的財産論		人間の知的活動によってこれまで生み出されてきたアイデアや創作物は、経済的価値を持つ情報である。そして、これらの情報は、特許権や実用新案権といった知的財産権の制度によって保護されている。 現在の高度情報化社会において、知的財産権を守ることの重要性は、飛躍的に増大しており、エンジニアにとって、知的財産権を知っておくことは大変重要である。 本講義では、知的財産権の基礎を学ぶ。知的財産とは何か、知的財産権とは何かを学び、その重要性を理解するとともに、権利を侵害しないこと、権利の有効活用することについて学ぶ。また、知的財産権とビジネス、科学技術との関係についての理解を深める。	
		情報処理概論	○	今日の高度情報化社会を支えているのは、コンピュータおよび情報通信ネットワークに代表される情報処理技術である。情報処理とは、元の「情報」から、計算により加工・抽出などを行い、別の形の情報を得る手続きのことであり、まさに、コンピュータがそれを実現している。エンジニアにとって、コンピュータの知識・技術を修得し、さらにはそれを活用する能力を身につけることは大変重要である。 本講義では、コンピュータの知識・技術を修得するために、コンピュータのソフトウェア、ハードウェアについての基本的な概念を学ぶ。そして、情報処理を実現する手段としてのプログラミングについての理解、コンピュータの内部に置けるデータの表現、データの処理の行う論理回路、論理回路からなる演算装置の構成、記憶装置についての基礎知識を学修する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	基 礎 科 目・卒 業 研 究	情報セキュリティ	個人のみならず、企業や公共機関にとって、情報セキュリティの重要さは言うまでもない。インターネットが世界に広がり浸透する中で、セキュリティの知識が不十分な利用者が増えていることもあり、ネットワーク犯罪も増加し、情報セキュリティに関わる問題は深刻さを増している。また、ウイルスプログラム、無線通信の盗聴、不正送金を目的としたマルウェアなどの新たな脅威も発生している。 本講義では、情報セキュリティ上の脅威に関する基礎知識を学ぶ。そして、それらの脅威に対して、実際にパソコンやスマートフォンを利用するときに、どのような対策を行うべきかについて、個人の利用者としてのみでなく、企業などの組織体としての立場で、その手法などを体系的に学ぶ。	
		人間工学	人間工学とは、心づかい、気配り、思いやりのもとで製品やサービス、そして制度などを創っていくために、人間の身体的、生理的、心理的な特性を科学的に分析し、人へのやさしさを形にしていくための思想や技術を研究する学問である。 本講義では、人間工学のなかでも重要な、人間の特性、人とコンピュータシステムとの相互作用（インタラクション）、感性情報とその評価法を学ぶ。人間の身体的特性や認知的特性を理解し、また必要に応じて感性情報を自ら収集、分析でき、さらにそれらの知識や分析結果に基づいて、人間工学的アプローチによるシステムの考察、提案ができる力を身に付ける。	
		情報社会論	高度情報化社会は、21世紀に入り急速に実現した。現在も進行しつつある技術革新が、どこに向い、社会をどのように変容させているか、そして、そこで生じる問題は何かを明らかにしておくことが、高度情報化社会におけるエンジニアにとって大変重要である。 本講義では、情報化社会の歴史について学び、情報化社会の基本的な知識を得ると同時に、その本質を考察する。そして、現在の高度情報化社会を様々な方向から分析することによって、内包する問題点と危険性を明らかにするとともに、エンジニアが、情報社会とどのようにかかわっていくべきか、適切な関わり方について学ぶ。	
		分野横断プロジェクトⅠ	本学の情報科学科では、情報通信技術を、発信力（デジタルメディア）、表現力（ヒューマンインタフェース）、課題解決力（データサイエンス）の3分野に分類・定義し、それらを援用することによって、高度情報化社会において社会で即戦力となるエンジニアの養成を目指している。 分野横断プロジェクトは、情報科学科の3分野を横断したプロジェクトのことである。3年次に、行政・企業と行う社会連携プロジェクトに3分野横断型チームで臨み、社会での即戦力（創造力、コミュニケーション力、課題解決力）を身に付けることを目的とする。 「分野横断プロジェクトⅠ」では、創造力、コミュニケーション力をもって複数メンバーで検討することによって、社会に存在する様々な課題を発見し、その課題解決のために何をすべきかを明らかにする。	共同
		卒業研究Ⅰ	卒業研究では、学生は、少人数のゼミに所属し、各自のテーマに沿って、それぞれ教員の指導を受けながら卒業研究を行う。卒業研究のテーマについては、学生が、自分の問題意識と、興味・関心に沿って課題を設定して研究テーマを設定するための探求活動を行い、指導教員と協議しながら決定する。卒業研究を通して、広い視野で物事をとらえる力、探究心と基本的研究能力、技術を培うことを目指す。 「卒業研究Ⅰ」では、自分の問題意識と、興味・関心を明らかにし、教員の助言を受けながら、初期試作品を制作する。また、課題と初期試作品を発表する。	
		分野横断プロジェクトⅡ	本学の情報科学科は、情報通信技術を、発信力（デジタルメディア）、表現力（ヒューマンインタフェース）、課題解決力（データサイエンス）の3分野に分類・定義し、それらを援用することによって、高度情報化社会において社会で即戦力となるエンジニアの養成を目指している。分野横断プロジェクトは、情報科学科の3分野を横断したプロジェクトのことである。3年次に、行政・企業と行う社会連携プロジェクトに3分野横断型チームで臨み、社会での即戦力（創造力、コミュニケーション力、課題解決力）を身に付けることを目的とする。 「分野横断プロジェクトⅡ」では、創造力、コミュニケーション力、課題解決力を総動員し、社会に存在する課題の解決を試みる。	共同
		卒業研究Ⅱ	卒業研究では、学生は、少人数のゼミに所属し、各自のテーマに沿って、それぞれ教員の指導を受けながら卒業研究を行う。卒業研究のテーマについては、学生が、自分の問題意識と、興味・関心に沿って課題を設定して研究テーマを設定するための探求活動を行い、指導教員と協議しながら決定する。卒業研究を通して、広い視野で物事をとらえる力、探究心と基本的研究能力、技術を培うことを目指す。 「卒業研究Ⅱ」では、初期試作品から問題点を抽出し、その解決のために、教員の助言を受けながら、新規に試作品を設計し、部品収集、制作、動作確認を行う。その後、新規試作品の発表・評価を通じて、卒業研究テーマ案を作成する。	
		卒業研究Ⅲ	卒業研究では、学生は少人数のゼミに所属し、各自のテーマに沿って、それぞれ教員の指導を受けながら卒業研究を行う。卒業研究のテーマについては、学生が、自分の問題意識と、興味・関心に沿って課題を設定して研究テーマを設定するための探求活動を行い、指導教員と協議しながら決定する。卒業研究を通して、広い視野で物事をとらえる力、探究心と基本的研究能力、技術を培うことを目指す。 「卒業研究Ⅲ」では、卒業研究テーマを決定し、そのテーマに沿って卒業作品を制作する。また、中間発表を行う。	
		卒業研究Ⅳ	卒業研究では、学生は、少人数のゼミに所属し、各自のテーマに沿って、それぞれ教員の指導を受けながら卒業研究を行う。卒業研究のテーマについては、学生が、自分の問題意識と、興味・関心に沿って課題を設定して研究テーマを設定するための探求活動を行い、指導教員と協議しながら決定する。卒業研究を通して、広い視野で物事をとらえる力、探究心と基本的研究能力、技術を培うことを目指す。 「卒業研究Ⅳ」では、卒業作品をもとに、卒業論文を執筆し、完成させるとともに、卒業研究発表を行う。	

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	基 幹 科 目	プログラミング総論	○ コンピュータは、高度な現代社会を支える重要なインフラである。そして、コンピュータは、人間の創造物であるプログラムに従って動作している。このプログラムを創り出す作業であるプログラミングが専門家だけの特殊な技術であった時代は終わり、これからの社会においては、小学生を含むあらゆる人々が理解しておくべき技術に変容しつつある。 本講義では、プログラミング技術の概要について学ぶ。プログラムの動作原理を学ぶとともに、プログラミング言語の種類、コンパイラとインタプリタ、リンカ、アルゴリズムの必要性といった、プログラミングに必要な多くの知識を系統的に学ぶ。	
		プログラミングⅠ	○ 我々の生活は多くのIT機器に支えられており、仕事の場のみならずプライベートの場でも同様である。それらのIT機器を能動的に使う事は非常に有益であり、プログラミング技術を修得することは重要である。 本講義では基礎的なプログラミングを学び、その後に展開される応用的プログラミング科目の基礎となる技術を修得する。またプログラミング技術を修得する過程で論理的思考、創造性、問題解決力、実行力を身に付ける事を目的とする。汎用性の高いプログラミング言語を取り上げ、プログラミングの手順、簡単なアルゴリズムの組み立て、コード化およびデバックできる事を目標とする。またプログラミングを修得する過程で論理的思考、創造性、問題解決力、実行力を身に付ける事を目標とする。	
		アルゴリズムとデータ構造	○ コンピュータのプログラムは問題を解くための具体的な処理を定式化した「アルゴリズム」と、その処理に必要なデータを管理する「データ構造」から構成される。アルゴリズムとはプログラミング言語に依存しない処理の本質であり、アルゴリズムを理解することは様々なプログラムを設計する上で重要である。 本講義では、代表的なアルゴリズムとデータ構造を学び、プログラムに適用する方法について学ぶ。また、アルゴリズムで重要視される効率性の評価基準となる計算量についても学修し、様々なアルゴリズムの特徴や性能について考察する。	
		プログラミングⅡ	○ 我々の生活は多くのIT機器に支えられており、仕事の場のみならずプライベートの場でも同様である。それらのIT機器を能動的に使う事は非常に有益であり、そのためにプログラミング技術を修得することは重要である。 本授業では基礎的なプログラミングを学び、その後に展開される応用的プログラミング科目の基礎となる技術を修得する。またプログラミング技術を修得する過程で論理的思考、創造性、問題解決力、実行力を身に付ける事を目的とする。プログラムを組む際に、最適なライブラリや関数を使用し、直観的に操作できるGUIプログラミングを行い、使いやすいアプリの開発ができるようになる事を目標とする。	
		プログラミングⅢ	○ コンピュータは、高度な現代社会を支える重要なインフラである。そして、コンピュータは、人間の創造物であるプログラムに従って動作している。このプログラムを創り出す作業であるプログラミングが専門家だけの特殊な技術であった時代は終わり、これからの社会においては、小学生を含むあらゆる人々が理解しておくべき技術に変容しつつある。本講義では、プログラミング技術の中で、企業でも多く使われる、データを保存するためのファイルの取り扱いやデータ分析という技術について学ぶ。 プログラムにおけるデータとファイルの原理を学ぶとともに、ファイル入出力、データ分析、画像ファイル操作といった、プログラミングに必要な多くの知識を系統的に学ぶ。	
		プログラミングⅣ	○ コンピュータを人間生活の中に応用する技術を身に付けるために、プログラミングⅠ、Ⅱ、Ⅲで学んだ技術を基に、実際にコンピュータ側で制御プログラムを作成することにより、制御を行う技術について学ぶ。そのためにプログラミング言語Python(パイソン)の制御用の文法を学び、制御コンピュータで複数の技術要素を制御するプログラムを作成し、システムを構築する演習を行う。これらを通して、人間生活に制御コンピュータを導入する方法を修得する。制御コンピュータにはBBC micro:bit(マイクロビット)を使用する。	
		オブジェクト指向プログラミング	○ 高度情報化社会を支えるプログラミング技術の中で、「オブジェクト指向」によるプログラミングは、データと手続きを、オブジェクトという入れ物に格納し、刺激と反応という単純な操作により抽象度を高めることによって、特にソフトウェアの開発、保守の分野で高い評価を受け、今日広く使われているプログラミング言語のほとんどに採用されている。 本授業では、オブジェクト指向という考え方を学ぶ。そして、オブジェクト指向プログラミングの各技法を学び、これらを活用したプログラミングを修得する。	
		コンピュータアーキテクチャ	○ 情報科学の分野において、コンピュータの動作原理と高性能化のための方式を理解し、さらにハードウェアとソフトウェアの相互関係を修得することは非常に重要である。 本講義では、まず、コンピュータの動作原理を学ぶ。そして、プロセッサ、メモリ、入出力、マルチプロセッサ、マルチコアというコンピュータシステムを構成する各種装置について、その役割と動作原理を学び、コンピュータの原理を理解する。また、命令セットアーキテクチャのバリエーションやその違いについて学ぶ。	
		ソフトウェア工学	○ 大規模ソフトウェアを開発するときに必要なものが、ソフトウェア工学である。 本講義では、ソフトウェア工学の基礎的な知識を学ぶとともに、ソフトウェア技術の全体を学ぶ。要求分析、設計、プログラミング、テスト、運用・保守といった、ソフトウェア開発プロセスや、構造化技法、オブジェクト指向に基づいた分析・設計の技法を学ぶ。そして、ソフトウェア工学の今後の展望について考察できるようにする。そして、プログラミング言語、ソフトウェアアーキテクチャ、データベース技術、ソフトウェア設計パターン、ソフトウェアテスト、プロジェクトマネジメントについての知識を深める。	

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部情報科学科)					
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	展 開 科 目	デ ジ タ ル メ デ ィ ア	デジタルメディア	○	本学の情報科学科では、今日の高度情報化社会を支えている情報通信技術の中で、それを発信する技術が「デジタルメディア」分野であると考えている。 本講義では、デジタルメディア分野における、ソフトウェア、ハードウェア、ネットワークといったICT技術の基礎を学ぶ。また、この分野で、攻守を決めてセキュリティを学ぶホワイトハッキング技術、現代の情報端末として最も普及しているスマホアプリ開発技術について概観し、実践力のあるエンジニアとしての素養を身に付ける。
			We b	○	WWWは、高度情報化社会を支えるグローバルな情報プラットフォームとして、日々進化を続けており、今後も重要さが増加していく技術である。そして、We bを使い自ら情報を発信するときには、マルチメディアの理解も欠かすことができない。 本講義では、インターネット通信方式とサービス、WWWとその構成技術を学び、We bサーバ、クライアントを理解する。また、マルチメディアの基礎と、We bへの応用について考察する。 それとともに、最新のWe b技術動向を学び、様々な技術を結集した新しいWe bの活用法を考える。
			データベース基礎		情報は、高度情報化社会における重要な資源のひとつである。企業において、その情報を蓄積・管理する手段として、データベースがある。近年、ビッグデータやデータ分析が注目されているが、データベースはこれらの技術の基礎である。 本講義では、データベースによる、データ（情報）の設計・蓄積から活用（データ分析）まで、一連のデータのライフサイクルを学修する。また、近年はインターネットの発展によって文章や音声、画像、映像などの多様なデータがWe b上に蓄積されるようになり、これらを活用するための新しいデータベース技術も開発されており、ビッグデータ時代で用いられる新しいデータベース技術の概要についても学ぶ。
			We bプログラミングⅠ	○	高度情報化社会を支えるグローバルな情報プラットフォームであるWWWを構築するために、We bアプリケーションの開発を行う。 本演習では、静的なWe bページを作成する演習を行う。We bページ作成ソフトの使い方、文字、画像、映像等の素材の吟味や素材の配置、必要な情報の正確な伝達法、インターネットメディアに出力する技法などを学ぶ。また、複数のWe bページを作成する場合、テーマを掲げ、統一感を出す必要があり、そのようなWe bページを制作する能力を養う。
			スマートモバイルプログラミング		スマートモバイルは、パソコンより歴史が浅いものの、その普及率は極めて高く、高度情報化社会にとって大変重要な情報デバイスである。常に持ち歩き、瞬時に起動できるという特性が、デジタルトランスフォーメーション（DX）において重要な役割を果たしている。しかし、スマートモバイルのプログラミングが行えるエンジニアはごく少数である。 本授業は、スマートモバイルの基本的なプログラミング技術を学ぶ。そして、モバイルアプリの作成を行い、さまざまな技術を学ぶことによって、高度な情報リテラシーを修得することを目指す。
			データベース設計		データベースにおいて、指定したキーワードに基づく検索が最も多く行われる処理である。そのとき、適切に設計されていないデータベースでは、正確な検索結果を高速に求めることができないばかりでなく、誤ったデータ検索結果が求まってしまうこともあり得る。高度情報化社会において大変重要な技術であるデータベースにおいて、設計の技術は大変重要である。 本講義では、データベースにおけるテーブルの設計方法について、リレーショナルデータベースを対象に修得する。永続化するデータの決定、概念設計、論理設計、物理設計といった設計手順を学ぶとともに、デイトの提唱した直交設計の原理、正規化の原理を理解し、データベースに適用できる技術を身に付ける。また、データベース検索のためのSQL言語についての知識を得る。
			ネットワークシステム	○	高度情報化社会において、情報通信技術は、私たちの日常生活に深く浸透している。そして、情報通信ネットワークは、社会にとって必要不可欠なインフラストラクチャとなっている。 本講義では、主に情報通信システムにおけるネットワーク技術の概要、ネットワーク機器とその役割について学ぶ。また、ネットワークを構成する上で重要なインターネットプロトコルを理解し、情報通信ネットワークが、多くの要素技術の協調作用によって成立しているシステムであることを理解する。
			We bプログラミングⅡ		「We bプログラミングⅠ」に続き、高度情報化社会を支えるグローバルな情報プラットフォームであるWWWを構築するために、We bアプリケーションの開発を行う。 本演習では、魅力的なWe bページを作成する演習を行う。We bページのコンテンツを構造化するために使用されるマークアップ言語HTMLと、We bページの見た目をスタイリングするために使用されるスタイルシート言語CSSを組み合わせ、効果的なWe bページを制作する能力を養う。
			デジタルメディア演習		本学の情報科学科では、今日の高度情報化社会を支えている情報通信技術の中で、それを発信する技術が「デジタルメディア」分野であると考えている。 インターネットは、従来のメディアによる情報発信を超えようとしている。本演習では、デジタルメディア分野における、インターネットの情報発信技術について、情報配信技術の機材構成、技術、効果的な活用方法等について初歩から応用まで学ぶ。ビデオ編集、コンテンツ制作、グラフィックスとアニメーション、ビデオコーデック、配信技術、ウェブ開発といった技術について学ぶことで、効果的な情報配信ができ、実践力のあるエンジニアとしての素養を身に付けることを目指す。
			通信ネットワーク設計		通信ネットワーク設計には様々な技術が必要である。本授業においては、ネットワークの概念や基礎知識を学び、様々な専門的な知識と経験を得ることにより、自分でネットワークの設計・設定して実際にネットワーク通信環境が作れるようになることを目標とする。 スター、リング、バス、ツリーなどのネットワークポロジ、通信ネットワークの拡張性と管理性を確保するために重要なIPアドレス設計、通信ネットワークのパフォーマンスと信頼性を向上させるためのルーティングとスイッチング、通信ネットワークに存在するセキュリティリスクを最小限に抑えるためのネットワークセキュリティといった技術を学ぶ。

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	展 開 科 目	デ ジ タ ル メ デ ィ ア	動的We bプログラミング	本演習では、動的なWe bページを作成する演習を行う。すでに「We bプログラミングⅠ・Ⅱ」で学んだWe bページのデザイン技術に加え、動的なWe bページを作成するために必要なプログラミングの技術を学ぶ。 特に、We bプログラミングを実現する仕組み、サーバーサイドにおけるプログラミング、クライアントサイドにおけるプログラミング、リッチクライアントのプログラミングを学び、動的なWe bページを作成する手法が使えるようにする。 また、マルチメディア技術を活用し、魅力のあるWe bを作成する手法を修得する。
			SNSビジネス演習	SNSビジネスの目的は、写真や動画、メッセージなどにより他のユーザーとコミュニケーションを取ったり、ターゲットに合ったユーザーに対して広告を配信したり、企業がブランディングをしたり、ソーシャルエンゲージメントをしたり、SNSでモノの販売を行ったりすることにある。そして、SNSビジネスに必要な技術は多岐にわたる。 本演習では、SNSビジネスの目的を学ぶとともに、SNSビジネスに必要な、We b開発技術、データベース技術、サーバー管理、ネットワーク技術、セキュリティ技術を学ぶ。それらの技術を獲得することによって、様々なSNS上で、戦略的なSNS運用ができるノウハウやデジタルマーケティングスキルを身に付け、SNSビジネスの場で活躍できる人材の育成を目指す。
			システム運用	企業において、情報ネットワークシステムを構築し、基幹業務から販売促進までコンピュータ化することは非常に重要である。しかし、情報ネットワークシステムの構築方法や運用、保守、障害発生への対応などの知識は、身に付けることが困難である。 本講義では、情報ネットワークシステムとは何かを学び、実際にシステム構築する際に必要な要素として、ネットワーク技術、サーバ技術、データベース技術、システム管理技術、セキュリティ技術を学ぶ。 そして、システムにおいて最も重要な、安定で円滑な運用、保守の方法、および、システム運用時につねに考慮しなければならない障害発生防止、障害発生時の対応方法について詳しく学ぶ。
			ネットワーク演習	高度情報化社会においては、情報機器が、ネットワークを介してつながっている。スマートフォン、タブレット、パソコンといった情報機器を活用する際に、ネットワークは必須のインフラである。 本演習では、情報伝達の仕組みとしてのコンピュータネットワークを修得するため、演習で使用するネットワークの設定を調査する。そして、ネットワークを用いた通信に関する問題を解決することを通じて、ネットワークの基本的な仕組みを理解する。最終的には、個人でネットワークシステムを構築し、保守できることを目指す。
			データベース演習	データベースは、高度情報化社会において、データを扱う大変重要な技術である。 本授業では、リレーショナルデータベースを対象に演習を行う。リレーショナルデータベースのインストール、各種設定を行うとともに、データベースの正規化の考え方に基づくテーブル設計、データ登録、JOINによるテーブル結合、SQL言語を使用したデータ検索、データ更新等を実行できるようにする。また、SQL言語を他のプログラミング言語から呼び出し、その結果を受け取って活用する手法について学ぶ。
			サーバ構築演習	エンジニアは、企業の業務を理解し、それに合った情報ネットワークシステムのサーバを構築する必要に迫られることがある。そして、エンジニアは、各種のサーバについての知識を持ち、組み合わせ、運用する技術を持つ必要がある。しかし、そのようなサーバ構築を経験する機会は、一般的に非常に少ない。 本演習では、実際に情報ネットワークを構築する。そして、サーバの基本操作と管理方法について、基礎的な知識と技術を修得すると同時に、サーバ構築のために必要な用語、システムが社会に果たす役割・影響、サービスの在り方について学ぶ。サーバハードウェアの知識、オペレーティングシステムの知識、ネットワーク技術、サーバソフトウェアの知識、セキュリティ技術の知識を深める。
			UNIX	UNIXは、最も歴史が古いOSのひとつであり、コマンドと呼ばれる命令によって操作する。個人のパソコンでの利用者が多いWindowsに対し、UNIXは現在でもネットワークサーバの管理やプログラミング、研究分野などで幅広く利用されており、UNIXの基本的な操作方法は、エンジニア者にとって、最低限知っておくべき重要な知識、技術である。 本授業では、UNIXの基本的なコマンドの利用方法、シェルの概念、シェルスクリプトの作成、ファイルの操作、テキストの編集、ホスト間のネットワーク通信の方法、及びシステム管理などについて学ぶ。また、UNIXと互換性があり、市場で多く使われているLINUXについても学ぶ。
			セキュリティ演習	インターネットの普及に伴い、ネットワーク上の脅威は日々増大し続けている。そのため、企業や公共機関にとって、セキュリティの確保はきわめて重要な問題であり、扱いを間違えると、システム閉鎖などにより、業務に甚大な損害を与えることもある。 本演習では、情報ネットワークシステムを構築し、攻撃、防御の2チームを作る。そして、攻撃チームからの様々な悪意に基づく攻撃に対し、防御チームがどのように対抗し、防御するかについての演習を行う。また、この様子は、両チームの中間に設置する大型モニターで可視化し、脅威に対する防御を観察することを通じて、セキュリティの重要性を認識する。

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	展 開 科 目	ヒ ュ ー マ ン イ ン タ フ ェ ー ス	ヒューマンインタフェース	○ 本学の情報科学科では、今日の高度情報化社会を支えている情報通信技術の中で、それを表現する技術が「ヒューマンインタフェース」分野であると考えている。コンピュータシステムや、ソフトウェアの開発に関わるすべてのエンジニアには、ヒューマンインタフェースに対して、共通の認識を持つておくことが必要とされている。 本講義では、ヒューマンインタフェース分野における様々な要素について学ぶ。画像・映像の編集技術を概観し、ゲーム開発の概要、そして、今後一層の成長が期待されるメタバース（3次元仮想空間）技術を知り、次世代クリエイターとしての基礎知識を身に付ける。
			メディアコミュニケーション基礎	○ コミュニケーションは、様々な要因によって、変化・歪曲・断絶等が絶えず発生する行為である。その中でも、メディアを介したコミュニケーションは、ネットワークを介して伝達されるという特性から、直接的なコミュニケーション以上に、コミュニケーションが変容する要因を特定することが困難である。 本講義では、現代社会におけるコミュニケーションの多様な側面を学び、どのような論点が提起されているのかを学ぶとともに、コミュニケーションを成立させる存在や情報環境について学ぶ。また、うわさやフェイクニュース、映像の問題を取り上げることで、現代のコミュニケーションに対する基礎的な視点を獲得することを目指す。 （オムニバス方式／全15回） (1 山下明博 または 7 西村則久／10回) コミュニケーション理論、メディア表現とメディアリテラシー、メディアと社会（メディアと倫理、プライバシーの関係性）、メディアの制作と編集、メディアコンテンツの著作権と法律、メディアプレゼンテーションとパフォーマンス、総括。 (21 染岡 慎一／5回) メディアコミュニケーションの概要、メディアの種類と特徴、メディアと社会（メディアの社会的役割と影響の分析）。
			マルチメディア	○ 情報科学科では、Web構築や、ゲーム開発、3次元仮想空間の構築といった各種場面で、マルチメディアの技術、および、そのコンテンツが必要となる。今日のコンピューティングにおいても、音や画像といった、いわゆるマルチメディアコンテンツは不可欠な存在になっている。 本講義では、音や画像のデジタル表現に関しての知識や、それらの情報を処理する技術を学ぶ。マルチメディアをコンピュータ上で処理する方法を理解し、実際にコンピュータ上で実験することにより、その理解を深める。
			画像処理演習	スマートフォンなどのカメラ付き携帯端末の普及に伴い、画像を取得・加工・流通させることが日常的に行われるようになった。また、画像処理技術は、ヒューマンインタフェース分野においても必要不可欠な技術である。 この演習では、まず、画像の入出力、画像に対する信号処理、画像計測についてその原理と手法を学ぶ。そして、コンピュータを用いた画像処理の原理、手法をもとに、実際に様々な手法による画像処理を行う。また、画像処理で多く使用されるPhotoShopやIllustratorといったソフトウェアの特徴と操作法について、演習を通じ修得する。
			画像処理ライブラリ	○ 画像処理においては、Pythonを用いた画像処理ライブラリが使用されることが多い。カメラで撮影した画像データを用い、人工知能による画像認識、画像変換、画像生成も自由に行われるようになった。その技術を支えているのが、画像処理ライブラリである。 本授業では、画像処理ライブラリについて、その種類と特徴を知るとともに、実際にパソコン上で画像処理ライブラリをインストールし、画像処理の方法について学修する。
			コンピュータグラフィックス	3次元コンピュータグラフィックスの技術は、映画、テレビといった旧来のメディアに加え、メタバースに代表される新たなインターネットメディアにおいても使用されており、高度情報化社会を支える重要な技術の1つである。 本授業では、モデリング、レンダリング等の3次元コンピュータグラフィックスに関する知識・技能をもとに、より実践的な3次元コンピュータグラフィックス作品の製作技能を学ぶ。また、それを使い、自分自身のオリジナルの作品を製作する。コンピュータグラフィックスで多く使用されるソフトウェアの特徴と操作についても、演習を通じ修得する。
			ヒューマンインタフェースプログラミング	○ ヒューマンインタフェースや人間工学の講義で学んだ知識を基にして、人とコンピュータシステムとの相互作用（インタラクション）について検討して、デジタルメディア、ゲーム、Webシステムなどのコンピュータシステムに応用可能なヒューマンインタフェースのプログラミング手法を演習により会得する。また、プログラム開発に必要な機材やヒューマンインタフェースデバイスの取り扱いも修得する。さらに、ヒューマンインタフェースの評価方法も学ぶ。
			ゲーム開発	○ 小規模なゲーム開発においては、個人ですべての技術分野を担当することもあるが、本格的なゲーム開発においては、多くのスタッフが協力し、技術分野を分担して制作を行っている。特に、3次元のコンテンツ、インタラクティブなコンテンツは、最新のゲーム開発においては欠くことのできないものになっている。 本講義では、ゲームを題材とした3次元コンテンツの制作方法、インタラクティブコンテンツの制作手法を学ぶことで、プログラミング技術の組み合わせにより、高度な制作物をつくり上げる能力を養う。 そして、最終的には、ミニゲームを1人で完成させることができる技術を修得することを目指す。
			映像処理演習	高度情報化社会においては、通信可能な帯域の拡大に伴い、大量のデータを瞬時に送受信することが可能となっている。そのため、映像コンテンツがネットワーク上に大量にアップロードされ、消費され続けている。 本演習では、エンジニアが、映像コンテンツを作成する知識と技術を身に付けることを目指す。After EffectsやPremiereを使用した映像制作ワークフローを身につけ、自分のオリジナル作品を作る。また、カメラワークや構図といった、撮影に関する知識を学ぶとともに、映像を編集する技術を修得する。
			メディアプログラミング	図形や画像、サウンドといったメディアを取り扱うアプリケーションは、必要とされる技術の種類が多く、難易度が高いと考えられている。また、グラフィカルユーザインターフェースのプログラミングにおいては、オブジェクト指向の概念を理解し、活用する必要がある。 本演習は、アプリケーション開発を補助するフレームワークを利用し、マルチメディアプログラミングについての技術を修得する。メディアプログラミングに必要な、プログラミング言語、グラフィックス技術、音声処理、ビデオ処理、マルチメディアシステム、ソフトウェア開発方法論、アルゴリズムとデータ構造に関する知識を理解することを目指す。

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	展 開 科 目	ヒ ュ ー マ ン イ ン タ ラ ク ス	X R	最近注目されているX Rは、V R、A R、M R等の技術の総称である。V Rは、仮想世界を現実世界のように体験できる技術であり、A Rは、現実空間に仮想世界を重ねて投影して見せる技術、M Rは、現実空間と仮想世界を融合させて見せる技術である。いずれも、専用のヘッドマウントディスプレイ等を使用し、コンピュータグラフィックス映像や360度カメラによって撮影された映像を合成したものを体験することにより、臨場感と没入感を得ることができる。本講義では、X Rの実現技術について学ぶとともに、日常生活での活用方法を学ぶ。また、将来、どのような状況でX Rによる事業が展開できるかについての提案ができることを目指す。
			ゲーム開発演習 I	「ゲーム開発演習 I」では、ゲーム開発の対象となるさまざまな分野のうち、パソコンゲーム、およびブラウザゲームについて、その開発方法と開発環境を学ぶ。また、パソコンゲーム、ブラウザゲームに最適なゲームエンジンの利用法、および、3次元コンピュータグラフィックスによるキャラクターの作成を学ぶ。 ゲームを開発するためには、データ構造、オブジェクトの操作手法、グラフィック表示技術、衝突判定、サウンド技術などに関する知識や技術も必要となる。この演習を通じて、個人で比較的大規模のゲーム開発を完成させる。
			仮想ネット配信演習	仮想ネットワーク配信とは、Y o u t u b eのようなネットワーク通信上で、3 Dコンピュータグラフィックスやアニメーション技術を使用して、仮想キャラクターを作り出し、配信することである。仮想ネットワーク配信において考えなければならないのは、配信用のソフトウェア、ストリーミングサーバー、スピードと帯域幅、音声と映像のキャプチャデバイス、データ転送プロトコルである。 本演習では、仮想ネットワーク配信に必要な技術を学ぶとともに、本学科で学ぶ3 Dコンピュータグラフィックスやアニメーション技術を駆使して、オリジナル性の高いコンテンツを自らの手で生み出すことを目指す。
			X R 演習 I	「X R」の講義を受け、最近注目されているX Rの開発に関する様々な技術を実践的に演習する。また、既存のV Rを使用したS N Sに対し、アバターやワールドを設定し、その世界に進出する方法の修得を行う。それとともに、X R技術が、どのようなビジネスモデルの下で使われているかを学び、自ら、X Rでのビジネスを提案できるエンジニアになることを目指す。また、デジタル社会で、知的財産を保護するために欠かせない技術である、N F Tといった暗号資産技術に関するリテラシーを修得する。
			3 D C G 演習	3次元コンピュータグラフィックス(3 D C G)の基本的な技術について理論とアルゴリズムを学修するとともに、実際に3 D C Gの制作を行う場合に必要実践的グラフィックス処理技術、C言語とOpenGLを利用したプログラミング演習によって修得する。また、CGで多用される行列計算や、CGと関連が深い画像処理技術の一部についても基本的技術の学修とMATLAB(もしくはOctave)を用いたプログラミング演習を通じて修得する。 特に制作に高い技術を要する人体のモデリング、アニメーション、キャラクターセットアップ、F K・I Kによる人体アニメーションの制作について学ぶ。
			ゲーム開発演習 II	「ゲーム開発演習 II」では、ゲーム開発の対象となるさまざまな分野のうち、スマホゲーム、V Rゲームについて、その開発方法と開発環境を学ぶ。また、スマホゲーム、V Rゲームに最適なゲームエンジンの利用法、および、3次元コンピュータグラフィックスによるキャラクターの作成を引き続き学ぶ。 そして、パソコンゲーム、ブラウザゲームとは異なるゲーム開発の知識、技術などを獲得し、この演習を通じて、多彩なゲームの開発を完成させる。
			X R 演習 II	「X R演習 I」の講義を受け、X Rの高度な活用法について学ぶ。 3 6 0度カメラで撮影した映像を利用するデータ環境を作成したり、3 6 0度カメラで撮影した複数の映像を接続したり、利用するデータ環境を作成することにより、シームレスなV R環境を作成する。また、A R技術を使いこなすために、マーカーA RとマーカーレスA Rの技術を修得する。さらに、M R技術で、仮想世界と現実世界を関連付け、教育向けM R環境を作成する技術を修得し、社会に対してX R技術を使用した世界をアピールできることを目指す。
			プログラミングとエンジン	プログラムを開発するときに、すべてプログラミング言語のみを使用する方法も存在するが、次第に、プログラミング技術を支える存在として、エンジンが大きな位置を占めるようになってきた。開発対象によって、使用するエンジンは選択する必要があるが、エンジンのライブラリを使用する方法を学ぶことによって、プログラムの完成度が大きく左右される時代になったということが言える。 本授業では、プログラミング技術を支えるエンジンを選択し、それを用いて、小規模なゲームを制作する。それにより、プログラミングとエンジンの関係性を理解する。また、エンジニアとして、ノーコードプログラミング、すなわち、プログラミング言語を全く使用しないプログラミング手法についても知識を持っており、ノーコードプログラミングもできる技術を修得する。
データサイエンス	データサイエンス	○	データサイエンス	本学の情報科学科では、今日の高度情報化社会を支えている情報通信技術の中で、課題を解決する技術が「データサイエンス」分野であると考えている。I o T技術に携わるすべてのエンジニアには、データサイエンスに対して、共通の認識を持つておくことが必要とされている。本講義では、データサイエンス分野における様々な要素について学ぶ。マイコン制御に代表されるI o T技術を学び、人工知能の技術を概観し、未来を予測できる課題解決型人材になるための基礎知識を身に付ける。
		○	人工知能 I (機械学習)	機械学習をはじめとする人工知能技術は、社会の様々な場面で使われており、世界全体の経済に影響を与えている。人工知能技術を正しく理解し、運用することは、情報技術者として重要である。 「人工知能 I」では、人工知能の基礎として、人工知能の定義や歴史、探索・推論、知識表現、トイ・プロブレム問題やフレーズ問題など人工知能分野の基礎について学ぶ。その基礎知識を土台にして、教師あり学習と教師なし学習など機械学習の代表的な手法を具体的に学び、最後に評価方法についても学修する。

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目 展開科目	情報理論	○	情報理論は、情報を定量的に扱うことにより、通信の効率や通信データの信頼性、あるいはデータの安全性について、その限界を明らかにする学問である。また、データ圧縮や誤り訂正を行うための符号化に関する知識も重要である。 本講義では、まず、情報の価値と情報量との関係を定量的に明らかにする。そして、情報理論と符号化に関する基本事項を修得するとともに、情報量（自己情報量、相互情報量、エントロピー等）について学ぶ。これによって、情報理論の基本事項に関して正しく理解し、これまで定性的に捉えていた情報量を定量的に理解することができることを学ぶ。	
	人工知能Ⅱ（深層学習）	○	「人工知能Ⅱ」では、「人工知能Ⅰ」で学んだ内容をもとに、深層学習（ディープラーニング）の手法、ディープラーニングの研究分野、ディープラーニングの産業への応用、法律・倫理などについて学ぶ。ディープラーニングの手法では、活性化関数、畳み込みニューラルネットワーク、リカレントニューラルネットワーク深層強化学習について学ぶ。ディープラーニングの研究分野については、画像認識分野、自然言語処理分野、音声認識分野の現状を学ぶ。	
	画像認識		コンピュータによる画像認識技術は以前から存在していたが、人工知能により、その認識精度が極めて高くなった。そして、スマートモバイルなどの認証、監視カメラなどにおける個人認証などにも利用されるようになった。 本講義では、画像認識に必要なモデルについて学ぶ。そして、その中でも認識の核となるパターン認識について理解する。顔や手などをを用いたバイオメトリクス、一般物体認識、シーン認識などの例をもとに、画像認識に対する理解を深める。	
	自然言語処理		機械翻訳や対話システムなど、様々な自然言語処理システムが日常生活に浸透している。特に、人工知能を活用した対話型チャットシステムの中には、あらゆる質問にほぼ的確に回答するものも存在する。 本講義は、自然言語処理について、その技術を学び、活用できる能力を身に付けることを目標とする。具体的には深層学習による自然言語処理のコア技術、形態素解析や構文解析などの基礎解析技術と機械翻訳、音声対話システムを学ぶ。	
	I o T 演習Ⅰ	○	I o T (Internet of Things) は「モノのインターネット」と訳される。このI o Tは、モノがインターネット経由で通信することを意味している。ネットワークの発展とともに通信機能を持つモノが増えてきた。特に、通信機能に加え、センサやバッテリーなどを搭載した小型コンピュータ(I o Tデバイス)が普及してきた。「I o T演習Ⅰ」では、I o Tデバイスのハードウェアとソフトウェアの基礎を学ぶ。特に、1つのI o Tデバイスに接続された複数センサから環境情報を受け取り、信号処理する手法を演習により会得する。また、I o Tデバイスを通して、環境に力や光などの多様な物理的な信号を出力する手法も演習を通して会得する。	
	データ解析		コンピュータサイエンスの研究論文等で、調査結果などをまとめるような場合、データを見やすいグラフに加工することやp値や信頼区間についての計算といった統計処理を行う必要がある。 本講義では、コンピュータサイエンス研究の様々な場面で遭遇する多様なデータに対し、それらを解析・解釈するための基礎から発展に至る手法を理解することを目的とする。現在、データ解析や統計処理には、統計・データ解析ソフト「R」が使われることが多い。また、Python 上からRを使うことも多くなっているため、Rを使ったデータ解析を行う。	
	人工知能Ⅲ (A Iのための統計)		「人工知能Ⅰ・Ⅱ」において、機械学習や深層学習の人工知能技術について学んだ。それらの人工知能技術は、確率統計をベースに理論が構築されている。特に、人工知能の学習については、ベイズ統計の活用が盛んである。そこで、「人工知能Ⅲ」では、A Iのための統計として、確率統計の基礎（代表値、期待値、分散、標準偏差、相関、回帰分析）、分布（ベルヌーイ分布、多項分布、ガウス分布）、尤度関数、ベイズの定理、ベイズ統計、マルコフ連鎖、モンテカルロ法などについて学ぶ。	
	情報ストラテジ		情報ストラテジとは、企業の成功に欠かせない情報資源を有効に活用するための戦略・計画・手法を統合することを意味する。 本講義では、データ分析、ビジネスインテリジェンス、インフォメーションシステム、情報セキュリティ、プロジェクトマネジメントなどを含む技術と手法を学び、情報ストラテジにより、ビジネス上の課題を解決するための方策を決定するための基礎を学ぶ。また、情報資源を有効に活用することで、競争優位性を確保することができるようにする。	
	I o T 演習Ⅱ		「I o T演習Ⅰ」では、1つのI o Tデバイスに接続された複数センサから環境情報を取得して活用する技術を学んだ。この「I o T演習Ⅰ」で学んだことを応用して、複数のI o Tデバイスから環境情報を得て、それらの環境情報を処理した結果を、複数のI o Tデバイスで出力したり、W e bサービスに活用したりする技術について演習を通して会得する。また、I o Tデバイスからビッグデータを取得する方法も学ぶ。これらの演習を通して、I o Tデバイスを用いて、社会が抱える問題を解決するためのコンピュータシステムやそれを用いた手法についても検討する。	
	人工知能演習Ⅰ		「人工知能演習Ⅰ」では、機械学習について、演習を通じて学ぶ。機械学習には、教師あり学習と教師なし学習、強化学習がある。「人工知能演習Ⅰ」では、機械学習の基本である「教師あり学習」について学ぶ。教師あり学習には回帰問題と分類問題があり、前者が入力に対して連続した数値を対応付ける問題である。また、後者は入力を複数のカテゴリーに分類する問題である。「人工知能演習Ⅰ」では、この回帰問題と分類問題について、プログラミングを通じて学修する。	
	人工知能演習Ⅱ		「人工知能演習Ⅰ」では、代表的な機械学習である「教師あり学習（回帰と分類）」について、演習を通じて学んだ。「人工知能演習Ⅱ」では、深層学習（ディープラーニング）について、演習を通じて学ぶ。ディープラーニングとは、ニューラルネットワークの一手法である。ニューラルネットワークは、脳の神経ネットワークをモデルにしたアルゴリズムであり、機械学習の一手法である。「人工知能演習Ⅱ」では、ニューラルネットワーク用のライブラリやデータセットを用いて、実際にディープラーニングを実装したソフトウェアの制作を行う。	

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部情報科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	データ サイ エ ン ス 展 開 科 目		情報ネットワークシステムのクラウド化が進行するに従い、あらゆるデータがクラウドに集められ、ビッグデータの活用が始まっている。特に、ビッグデータは、人工知能の学習データに適しており、人工知能の精度を高めることに貢献している。 本講義では、ビッグデータの活用方法の基礎を学び、そこから知識を抽出するデータ加工技術、および数理最適化技術について学ぶことを通じて、ビッグデータを解析する手法を学ぶ。また、Pythonを利用し、分類を行う人工知能を作成することができることを学ぶ。	
			データマイニングは、大量のデータから、有益なビジネスルールを発見する手法である。現在、多くのエンジニアには、データマイニングについての実践的な能力を持つことが求められている。 本講義では、推測統計の基礎を学んだ後に、多変量解析手法（主成分分析・因子分析、回帰分析など）、データマイニング手法（決定木、KJ法、テキストマイニングなど）を修得できるようにする。また、マイニング手法を理解した上で、マイニングツールを使用できるようにする。 その中では、身近なデータマイニングの例として、We b アクセスログデータを活用する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部建築学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
特別 科目	まほろば教養ゼミⅠ	○	この授業は、安田の学生として、また一人の社会人として、学園訓「柔しく剛く（やさしくつよく）」に則った豊かで確かな自己実現が達成できるよう、「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」の四つの活動を柱に、主としてチューターを中心にクラス単位で展開する。 1年次では、「安田を知る」「学びを知る」を中心に授業を展開し、大学の歴史、建学の精神を知り、大学生としての学びの精神を理解する。	
	まほろば教養ゼミⅡ	○	この授業は、安田の学生として、また一人の社会人として、学園訓「柔しく剛く（やさしくつよく）」に則った豊かで確かな自己実現が達成できるよう、「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」の四つの活動を柱に、主としてチューターを中心にクラス単位で展開する。 2年次では、1年次に学んだ「安田を知る」「学びを知る」をふまえながら、「自分を知る」を中心に授業を展開し、自己を見つめ直す種々の作業を通して、自立性と主体性とを兼ね備えた自己の育成を図ると同時に社会に眼を向ける姿勢を養う。	
	まほろば教養ゼミⅢ	○	この授業は、安田の学生として、また一人の社会人として、学園訓「柔しく剛く（やさしくつよく）」に則った豊かで確かな自己実現が達成できるよう、「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」の四つの活動を柱に、主としてチューターを中心にクラス単位で展開する。 3年次では、これまでに学んだ「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」をふまえながら、「社会を知る」を中心に授業を展開し、自立性と主体性とを兼ね備えた自己の育成を図ると同時にさらなる学びの精神を培う。	
	まほろば教養ゼミⅣ	○	この授業は、安田の学生として、また一人の社会人として、学園訓「柔しく剛く（やさしくつよく）」に則った豊かで確かな自己実現が達成できるよう、「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」の四つの活動を柱に、主としてチューターを中心にクラス単位で展開する。 4年次では、これまでに学んだ「安田を知る」「学びを知る」「自分を知る」「社会を知る」をふまえながら、学生は将来に向けての生き方を模索するために積極的に社会との関わりを求めるための取り組みを行う。	
共通 教育 科目	キャリア 科目		この授業の目的は、「生きる」「学ぶ」「働く」をキーワードにして人生の課題や進路・職業選択を考え、4年間の意図的学修や課外活動の充実を図ることにある。授業内容としては、次の3点がある。1) 多様な視点から自分らしさを理解し、自己を表現する。2) 社会の環境変化や期待される姿から、自分にとっての進路・職業選択の意味を考える。3) キャリアデザインに着手し、4年間の学修・生活設計を立てて自己駆動する。授業を通して、学園訓「柔しく剛く」の意味を深め、その感性や生きる力をどんな夢や目標に向けるのか、と自問自答し続ける。	
			キャリアデザインとは、自分のキャリア（職業・生涯の経歴）を、自らデザイン（設計）することである。仕事をしながら幸福感を味わうためには、また成果をあげるには、キャリアデザインが必要となる。「今まで何をしてきたか？」より「これから何をするか」を考え、なりたい自分をイメージすれば、「今何をすべきか」が自ずと分かってくる。この自己認識と、エンプロイアビリティ（雇用されるにふさわしい能力）を育成することが、本授業の目標である。以上の経験を持ち、個人としてのキャリアモデルになりうる人に、「私の人生観」「私の職業観」「私の友人観」などのテーマで語ってもらう、連続講演形式の授業である。	
			ボランティアは「主体性の原則（自由意志の原則）、非営利性の原則（非配当性の原則）、市民公益性の原則」の3つの原則で表現される。本授業ではまず、身の回りでのどのようなボランティア活動が行われているか、現状を把握する。次に、ボランティア活動を求められている現場からの声を参考に、自ら考え、ボランティア活動を実践する。 実際の活動を通して、ボランティア活動の社会的意義、個人の積極的参加の必要性、方法について生涯学習の立場から理解を深める。	共同
			この授業では、企業や地方公共団体での就業体験を意義のあるものとするために、事前準備を行うとともに、夏期休業中に就業体験研修を行う。インターンシップに参加する目的と意義を理解し、現在の地域経済状況を理解するとともに、業界・研修先研究を行い、就業体験の意義をより深く考察する。同時に、ビジネスマナー・ビジネス文書作成等のスキルを磨き、これらの成果をもとに、実際に就業体験を行う。	

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部建築学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
共通教育科目 教養科目 人間理解	キャリア科目 職と食 ーパティシエ実習		調理は食に関する栄養学、食品学などの知識を実際に食べる事に結び付ける接点でもある。生命を維持するためや嗜好品のななど様々である。本実習では、菓子、ケーキなどの嗜好品の製菓技術を習得し、食が人に与える心の豊かさ、ゆとり感について学ぶ。また、四季折々の素材を使い調理し味わうことにより、食べる事が人にとっていかに大切かを学ぶ。		
	人間論 A		人間論は講義形式により授業を行ない、「人間としての真の生き方」を思索し、探究することを目標とする。現代社会は、少子高齢、経済のグローバル化、情報技術革命等々の大きな構造的変化を迎え、急激な変貌を遂げつつある。そこでは価値観や世界観の多様化、人間性喪失、人間関係の希薄化や連帯性喪失といった人間疎外の状況をいっそう加速させつつある。人間論はこうした人間疎外の状況を克服すべく、人間諸科学等の成果をふまえた総合的視点のもとで、真の人間性を探究することにより、人間性の回復と人間としての真の生き方を考察する。		
	人間論 B		生命倫理の起こりと歴史的背景、倫理の拡大と応用(個人から共同体、生命圏)、生命倫理の基本原則、生命とは、人命とは、尊厳とは、死とその定義と取り扱いなどについて考察する。そのような理解のうえに患者の人權の歴史と現状、インフォームド・コンセント、自己決定、人工受精、出生前診断、人工妊娠中絶、生殖技術、生命操作、臓器移植、安楽死・尊厳死やQOL問題などについて論及する。さらには生殖医療、クローン、家族、親子の問題など新しく生起する困難なテーマについても問題解決のためにどのような法的枠組みを構築するべきかを考えることのできる能力を養いながら、医学・薬学及び看護学にとって重要な生命倫理学を学ぶ。		
	こころの科学 A		自分や他人の「こころ」のメカニズムを知る手がかりは、人間が起こす行動の中にあると考えられている。複雑化する現代社会の中で生きる人間の行動を理解するために、心理学は一定の科学的研究法を用いて、人間の行動に影響を与える要因と、その法則性を見出そうと試みてきた。この科目では講義形式の授業を行い、直接見ることのできない人間の「こころ」の過程について理解を深めることを目標とし、人間が起こす興味深い様々な行動を取り上げ、そのような行動の原因や環境、背景について考えることで、心理学の基礎について学修する。		
	こころの科学 B		人間の「こころ」を科学的に究明する「心理学」の領域の中に「臨床心理学」がある。本授業では、この臨床心理学を背景に、知的・身体的機能に支障のある状態、対人関係の困難な自閉症、学修不振やことばの障害、不登校や場面緘黙、チックなどの情緒障害、家庭内暴力や校内暴力などの問題行動など、様々な心理的・行動的問題の原因やそれらを持つ児童生徒への支援のあり方について、講義形式により授業を行い、臨床心理学の基礎について学修する。		
	からだの科学 A		この科目は、ヒトのからだの成り立ちや営みについて理解を深めるとともに、今日的な問題状況をとらえながら健康なからだづくりについて学ぶ。特に、乳幼児・児童期から青年期に至る発育・発達の理解、こころとからだの歪みと養育、女性の心身の健康と男女の性差の問題及び運動・スポーツにおける身体の動きと働き、スポーツパフォーマンスを高めるための科学などについて学修する。		
	からだの科学 B		身近な病気を通してヒトのからだの仕組みや病気が起こるメカニズム、また、広く環境問題とヒトとの関わりについて基本的知識の修得を目的とする。食物の消化とその異常、腸内細菌、肥満とやせ、糖尿病、ホルモンと病気、骨粗しょう症、動脈硬化、かぜとインフルエンザ、AIDS、BSE、痛み（頭痛、胸痛、腹痛、関節痛、腰痛）、心臓の病気、肺の病気、耳の病気、胃・腸の病気、アトピー・アレルギー、免疫と免疫疾患、痛風、がん、放射線と病気、喫煙と健康、アルコールと病気、老化、痴呆、頭の病気、神経症、精神障害（うつ病、統合失調症、パニック障害、心気症、不眠、性同一性障害、強迫性障害など）、PTSD、環境と健康、緊急処置など、今話題になっている病気についての基本的知識を修得する。		
	からだの科学 C		社会は高度に都市化し、少子・高齢化が急速に進んでいる。そして、豊かさとともに、健康に関する関心が益々高まっている。健康科学が目指すところは、全ての人が健やかで心豊かな質の高い生活、活力のある社会を築くための知恵を培うことである。色んな観点より「健康」の問題にふれ、健康科学について学ぶ。健康の概念、疾病の概念、細胞の老化、ヒトの寿命、健康寿命、加齢・老化、病気の予防、生活習慣病、栄養、運動、休養・睡眠、環境と健康の関係について基本的知識を修得する。		

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部建築学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	人間 理解 教 養 科 目	人間形成の科学A	この科目は、人間形成のプロセスを、総合科学としての教育学を中核に据えながら、関連諸科学との統合のなかで考究する。その際、研究の結果としての知識の伝達と同時に、人間を多角的に探求する技法を獲得する。すなわち、人間形成のプロセスを考察することによって課題探求能力の育成を図るものである。なお、この授業ではより原理的な側面を対象とする。	
		人間形成の科学B	人間形成のプロセスにとって幼児期は最も重要である。本授業の目的は、早期教育に焦点を当て、幼児の発達とは何か、発達課題とは、子どもの可能性についての基本的理論を学び、関連諸科学との統合のなかで考究することである。すなわち、人間形成のプロセスを考察することによって課題探求能力の育成を図るものである。子どもを取り巻く早期教育の現状を把握した上で、子どもの発達の基本理論を学び、研究の結果としての知識の伝達と同時に、人間を多角的に探求する技法の獲得を目指す。	
		ことばの世界A	人間関係が希薄になった現代日本社会に対し、ことばによるコミュニケーションという側面に焦点を当てて多角的なアプローチを試みる。ここでは、その土台としての日本語の基礎知識及びコミュニケーションの方法の2点を中心となる。前者では「ことば」の常識を修得させる。後者では対話における自己表現の方法・スキルなどの修得がターゲットとなる。また、地域社会におけるコミュニケーションも対象となる。地域社会の「ことば」である方言の実態解明も重要な問題であり、本授業を「日本語を見つめ直す」契機とする。	
		ことばの世界B	翻訳では味わえない英語の妙味に浸り、美しいことばとしての英語を楽しむことができるようにすることが、この科目の目的である。授業では、英語圏のすぐれた映画作品や身近な親しみやすい種々のジャンルの英文を教材として取り上げる。前者の場合では映画作品の鑑賞と並行して、シナリオ英語のしゃれた感覚をも味わい、後者の場合では、Mother Goose、レシピや広告、新聞の英語など、そのジャンルに特有のスタイルや約束ごとを探究する。	
	人間 理解 教 養 科 目	日本の文学A	現在と未来を知るためには、過去を知らなければならない。過去を知る一つの方法は、過去の人々が歌い、語り、書いた文学作品を読むことである。古代から近世末までの日本の文学作品を取り上げ、それぞれの時代の人々が、どのような歴史的社会的状況の中で、何を感じ・考え・表現してきたのかを探究する。また、「社会－人間－文学」の関わりについて考えを深め、現在と未来における私たちの生き方を考察する。	
		日本の文学B	価値観の多様化や社会の国際化が急速に進展し、改めて日本人一人ひとりの伝統理解のあり方が問われている現代の動向をふまえ、近代以降の日本の文学作品を取り上げ、文学と文学をめぐる様々な事象の考察を多角的に行う。この授業は講義形式で行われ、作家の紹介や作品と時代との関わり、また、作品内容の読解や課題の考察・発表などの作業を通して、日本文学に親しみ理解を深めるとともに、人間自身及び人間と自然・社会・時代等の諸環境との関わりを探究する上において、文学のことばがいかに重要な役割を果たすかについても理解する。	
		世界の文学A	世界の文学には、大きく分けて東洋文学と西洋文学がある。本授業では日本文学以外の中国文学その他の東洋文学を扱う。この授業は、いずれかの東洋文学の一つあるいはいくつかの作品について、本文の読解などの作業を通して、それぞれに固有の「ものの見方、考え方」を学ぶことを目的とする。それらを学ぶことにより、私たちの有するものとは異なる要素を知り、理解することで、思考の幅を広げ深めることができる。	
		世界の文学B	人間とは努力する限り過誤を犯す存在であり、いかに進歩しても人間そのものの本質は変わらないと述べ、世界文学の必要性を説いたのはゲーテである。西洋の二大思潮としてギリシア・ローマの古典（ヘレニズム）と聖書・キリスト教（ヘブライズム）がよく指摘されるが、西洋の文学作品に表れた人間活動とその精神的様相を考究することは、文化の「メガトレンド」の理解にとどまらず、普遍の「人間理解」への手がかりをつかむ道である。こうした視点から、英米文学・フランス文学、その他の西洋文学を取り上げ、学修する。	
		芸術A	芸術の諸分野は感性を豊かに育み、生涯にわたる人間形成に重要な部分を占め、影響を与えている。いずれも技能の修練によって芸術の本質が達成されることが多い。それらを社会に示し評価を受け、さらなる向上が目指されるものである。これらの修得には才能及び、相当の環境と時間を要する忍耐のいる作業である。本授業は、音楽或いは美術の分野に即して、我が国や諸外国（西欧、東欧、アメリカ）の歴史を概観しつつ芸術が人間にもたらす影響と精神性をその主たる本質に迫る端緒を開くことを目的とするものである。	

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部建築学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
共通教育科目	人間理解		この科目では、芸術の諸分野のうち書道を扱う。書道は、漢字を表現手段として展開される独特の芸術である。その漢字は、甲骨文字・金文・篆書・隸書・楷書と、その書体の変遷の過程で、様々な魅力あふれる古典を生み出し、今日の我々に語りかける。この授業は、書道芸術を今日的な観点から分析し、明日へと続く意義を考察する。同時に、漢字文化とはどのようなものか、関連する文学や歴史事象とも合わせ、文化史全般の中でとらえる。		
	芸術B				
	現代社会と人間A		「普通」「標準」といった自明の基準が失われ、「私はどう生きるか」が常に問われるのが現代である。グローバル化社会にあって「日本人」としてどう生きるか。さらに、親が歩んだ道とは異なる人生をどう設計していくか。そうした問いに応じて生きていくには、異文化理解、異なる世代の生活世界の理解に基づく「相対化」の視点が重要である。この科目では、そうした視点を「人々の日常生活」に焦点をおきながら深めていく。		
	現代社会と人間B		現代の社会に生きる大学生に、講義形式で、人間が本来的に持っている自己実現の力に気づき発揮できるよう、自己自身を力づける（エンパワーメント）きっかけを提示する。学生一人ひとりが、人生・生涯という、ゆったりとした長さの中で自己について考えられるように、他者との共感的な理解を深めてよい人間関係が築けるように、女性という社会的存在を生かしてより住みやすく平和な社会をつくるための貢献ができるようにと、エンパワーメントの願いをこめている。この授業は、現代の社会と人間の関わりについて、女性、青年、心理、自己表現といった観点からの理解を目指す。		
	21世紀の社会と法A (日本国憲法)		国の最高法規としての日本国憲法が、われわれの日常生活にどのような関わりを有しているかという視点を縦糸に、人権の保障と国の統治システムの解明を横糸に、21世紀の国際社会における憲法のあり方を模索する。そこでは、従来の価値基準では律することができず、他の科学領域の成果を採りこんでいかなければならない新たな現象に直面する憲法の苦悩が見て取れるが、そこにこそ新たな知的営為の必要性があることを認識する。		
	21世紀の社会と法B		男女雇用機会均等法が施行されて30年以上が経過したが、なお、その標とする職場における男女平等の実現は果たされていない。均等法のモデルのひとつとなった立法を有するアメリカでも、確かにエリート女性の華々しい活躍は見られるが、やはり、職場の実情は男女平等の実現からはほど遠い状態にある。この授業では、日本とアメリカの「職場における性差別禁止法」の仕組みと運用を比較検討することによって、その原因を考え、男女平等実現の道をさぐることを目標とする。		
	21世紀の経済A		近年、多くの経済社会問題が私たちの日々の生活に大きな影響を与えている。特に、少子高齢化や財政悪化の問題は、現在のみならず将来の私たちの日々の生活に大きな影響を与える。そこで、講義形式で行われる本授業では、こうした問題やそれらの問題が及ぼす影響を理解するために、基礎的な経済学の知識の修得、ならびに、現在生じている経済社会問題が私たちの生活に影響を与えるメカニズムを理解することを目指す。具体的には、経済の仕組み、景気、金融、財政・税制などについての基本的な知識及び経済学の分析手法を学修する。		
	21世紀の経済B		本授業は講義形式により行なわれ、経済社会の変化に対応した家計の経済管理やマネージメントの重要性について認識するとともに、生涯生活設計を実現するためのライフプランの立て方を修得することを目的とする。具体的には、まず、現在の家計を取り巻く環境変化を理解し、今後どのような家計の経済管理が必要かを学ぶ。そのうえで、生涯生活設計を実現するために、どのようにライフプランを作成していくべきかを考え、各自で将来のライフプランを作成する。ライフプランの作成に当たっては、金融市場をいかにうまく利用して資金調達・資産運用を行うかを検討する。		
	現代のビジネスA		働くことの意味とは何か、自己管理や自己啓発をどのようにすべきかなどについて考えるとともに、所属する組織の目的実現のために有効な役割を担い、組織にとって必要な存在となるために必要となる基礎的な知識や技能、実務能力などの修得について、ビジネス現場の具体的な事例を取り上げながら理解する。		
	現代のビジネスB		この授業は講義形式で行われ、ICTの急速な進展を背景にビジネスを取り巻く環境が変化する中で、「なぜ、従来型日本システムが、今大きく変わろうとしているのか」をキーワードとして、グローバルな視点から企業の目的や活動（戦略、組織、人的資源、マーケティング、財務）に関して基本的な理解を図ることを目標とする。この授業は、ビジネスが具体的に理解できるように、具体的な事例（ケーススタディ）や新聞記事を取り上げながら学修する。		

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部建築学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	社会 理解	現代社会と政治A	政治は消費税を上げたり、法律を決めたりすることによって、我々の生活や社会を変える力を持っている。対して我々は、その決定に影響を及ぼす力を持っている。社会をより良いものにしていくために、政治の仕組みを理解し、問題点を明らかにする必要がある。政治の仕組みを理解した上で、現在の日本や世界において、どのようなことが政治的に議論されているかを学ぶ。そして、国際化の時代において、国際人としての自覚と認識を持つことを目的とする。	
		現代社会と政治B	現代において、新しい情報や知識・価値観の存在感が増している。それらに対して、正しく理解し受容する必要性が高まっている。授業では、女性を取り巻く諸問題を、マスコミ等に取り上げられている今日的な素材をもとにして、それらの持つ意味や本質・問題点などを考察していく。新聞記事などを深く読むことにより、政治や社会問題などの情報・知識を掘り下げ、社会人・国際人としての良識や社会性を身につけることを目的とする。	
	国際 理解	異文化理解A	国際的な往来が活発化し、英米への旅行や長期滞在がかつてないほど身近なものになった現在、英米の社会的・文化的な背景の理解がますます重要になってきている。この授業では、英米の自然や歴史、慣習など多種多様な素材をもとに、イギリスあるいはアメリカの文化的特徴及び歴史的背景、人々の考え方や価値観を学び、異文化の中に暮らす人々の心を理解することにより、異文化理解を目指し、多様性を受け入れることのできる国際人を育成することを目的とする。	
		異文化理解B	この授業では、異なる文化とそこに生きる人々と私たちとの関わりを考察し、真の異文化理解とは何であるか、そして異なる文化に属する人々に対するコミュニケーションはどうあるべきかの答えを探ることを目的としている。その目的のために、世界の様々な文化、特に日本文化のルーツともいえるアジアの文化を主対象とした比較文化的な考察や、異なる文化を背景に持つ人々とのコミュニケーションにおける諸問題を、知覚、言語、非言語、自己概念、ステレオタイプ、偏見、ヒーロー等、の様々な観点から学修する。	
		日本の歴史と文化A	21世紀における国際社会にあつては、それぞれの国が国境を越えて互いの国の歴史と文化を相互に理解しあう関係が強く求められているが、その一方で、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛することも併せて求められている。この授業はこうした見地のもとに、講義形態をとりながらも自らが考え組み立て、日本の歴史と文化に対する認識を深めることを目標とする。特に本授業においては、歴史書・絵巻物・建造物・遺跡・文書といった歴史的な素材を主に用いた視点から授業を展開し、21世紀にふさわしい日本のあり方を構想する。	
		日本の歴史と文化B	21世紀における国際社会にあつては、それぞれの国が国境を超えて互いの国の歴史と文化とを相互に理解しあう関係が強く求められているが、その一方で、自国の歴史と文化に対する正しい理解も併せて求められている。この授業はこうした見地のもとに、日本の歴史と文化に対する認識を深めることを目標とし、特に、神話・物語・説話・絵巻・絵伝・小説といった文学的な素材を主に用いて学修する。	
		世界の歴史と文化A	社会の国際化が進む現在、我々は世界的な視野で物事を考え、日本とは異なる文化や伝統を深く理解し、それを共有化できる価値を追求していく態度を養うことが求められている。本授業は、このような現代の動向をふまえ、世界の歴史と文化に対する理解を深めることを目標とする。特に、中央アジアやスリランカなど日本と深い関わりを持ちながらも、意外に知られてこなかった地域を取り上げ、社会や文化、歴史の紹介や解説に加え、基礎的言語や文字についても学修する。	
		世界の歴史と文化B	社会の国際化が進む現在、我々は世界的な視野で物事を考え、日本とは異なる文化や伝統を深く理解し、それを共有化できる価値を追求していく態度を養うことが求められている。本授業は、このような現代の動向をふまえ、世界の歴史と文化に対する理解を深めることを目標とし、講義形式で授業を展開する。特に本授業においては、諸外国の歴史・文化に対する理解を深めるために、政治史・文化史・社会史などの幅広い視点から考察する。	
		国際協力A	本授業では、「環境問題」のように、今まさに国際的な協力を要請する社会問題を例にとり、正しい国際協力のあり方を模索していく。「内政干渉」を切り札にする国家ではなく、同じような問題をかかえている地域のNon・state actorsが国家を通さず、直接横に結びついていく、「越境民主主義」のあり方こそが、「国際的」という言葉が意味する真の「国際協力」のあり方なのだ、ということを理解させることを目的とする。「国際的」という言葉、『もののけ姫』、人間中心主義、動物の権利、生態系中心主義、グローバリゼーション、日本の環境問題、南北問題、生命／生活圏主義、越境的民主主義などのテーマを扱う。	

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部建築学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
共通教育科目	国際理解		開発途上国が抱える様々な問題を解決するため、専門家やボランティアが開発途上国に派遣され、国際協力が実践されている。本授業は、国際協力の前提となる、国際情勢について学ぶ。特に「グローバリゼーション」の影響を考えるために、題材として、主に「南北格差の問題」を取り上げる。現在進行中のグローバリゼーションが何をもたらしているのか、そしてそれに対してなぜ「もうひとつの世界は可能だ」という声が世界中で上がっているのか、を理解し、同じような問題に苦しむ者たちが、国家を介在させずに、横にネットワークを築くという「越境民主主義」の可能性を探るの事を目的とする。		
	国際協力B				
	数学の世界		この授業は、体系的な数学の世界ではなく、人間の知的活動としての数学の世界、すなわち、数学という既成の学問体系にこだわらず、人間の知的営為としての数学の世界を端的に示す話題を中心に扱う。話題の中心となるのは数と図形であり、数学の世界の面白さを体験することを目標とし、魔法陣、暗号、作図、ソーマキューブ等を例に、数学の世界の合理性を理解するために、自然数の性質、ユークリッド幾何学、合同式の基本性質、数直線と実数の世界等を取り上げる。		
	自然科学の世界A		あくなき科学者の探究心のもと、現代の科学知識は、科学的な推察と精密観測によって、地球から飛び出て宇宙の端にまで及んでいる。人類は、古来、宇宙に果てしないロマンと夢を描き、想像の世界に浸っていたが、今やそれも科学探求の及ぶ領域となっている。この授業は講義形式により行い、宇宙と地球についての知見を得ることを目的とし、人類が如何にして宇宙と地球についての正確な知見を得ることができたのか、その歴史を振り返り、現在までに得られた知識についての概説を行なうとともに、探求に用いられた現代科学の一端を展望する。		
	自然科学の世界B		われわれは、様々な化学物質を利用しながら生活しているが、身の回りには、案外危険な物質があり、環境破壊や公害につながるものもある。また、エネルギー資源の大量消費は温暖化や酸性雨といった地球規模の被害を起こしている。本授業で扱う化学は、これらの実態を知り、その被害を防ぐ上で重要な役割を果たしている。それゆえに資源・エネルギーや環境の問題を理解して、安全で快適な生活を送るためには、ある程度の化学的知識が必要である。この科目では、これらに関連する事項について考え、同時に基礎的な化学の概念や原理が身に付くことを目標とする。		
	自然科学の世界C		この授業科目で扱う生物学の目指すところは、生物についての知識を学ぶということに留まらず、生命現象に関する学問であり思索である。微生物、植物、動物、人を例にとりて生命・遺伝子、細胞、組織、個体、進化、集団、社会について構造的、機能的側面の理解を図る。これらを通して生命に対する考え方の醸成を図り、生命科学（ライフサイエンス）の目指すところの、生命を総合的に考え、自然理解、人間理解の一助となることを期待する。この授業では、生命、自然、人間を理解することを目指す。		
	生命の科学A		21世紀は20世紀に飛躍的に増大した生物に関する知識に基づく科学技術がいよいよ実用化に向かうことが期待される。一方で、“生命”が科学技術と対峙するキーワードとして使われている。科学的・論理的思考方法を身につけ、生命科学のイメージ（自分自身で、自分自身の）を確立し、その上で、“自分－生命科学－社会”の関わりについて考えることができるようになることを目的とする。本授業では、生命を20世紀に確立した物質論的生物学としてのみでなく、生命と人間との関係を含めて生命論的生物学を学修する。生命科学の誕生（分子から人間、分子生物学から生命科学）、人間科学と生物化学（生理心理学、人類学）、生命科学と技術（生体成分の利用、クローン生物等）などについて理解を図る。		
	生命の科学B		医学は呪術と宗教、迷信が支配する長い年月を経て、近年やっと、科学的に根拠のある薬が誕生し、医療の場で利用されるようになった。薬に関する基本的知識を学び、薬の正しい使い方を理解して、健康に生きる知恵を修得することを目的とする。本授業では科学的に合成された薬物のみでなく、自然界に存在する薬として使用される植物、動物、鉱物について基本的知識に加えて、主だった薬の発見と作用（クラレ、フィズチグミン、アトロピン、フェノールフタレイン、ニトログリセリン、アスピリン、シメチジン、モルヒネ、大麻、ハッシン、LSD、インタール、経口避妊薬等）について解説する。また、現在の臨床の場で見る薬物（エフェドリン、エーテル、笑気ガス、コカイン、バルビタール・ハルシオン、インシュリン、ワルファリン、ヘパリン、レボドパ、プロモクリプチン、シスプラチン、コーチゾン、リチウム、レセルビン等）の発見の経緯と作用を学ぶことにより、薬に対する考察を深める。		

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部建築学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	科学技術理解	生命の科学C	20世紀の生命科学改革は遺伝学を中心に展開してきたと云える。最近のメンデルの遺伝法則の再発見による遺伝学は、遺伝子の本体がDNAであることを証明し、生物学に革命をもたらした。その後も組換えDNA実験法、DNA塩基配列決定法やPCR法などの技術革命によりヒトゲノム計画を成功に導いた。今世紀前半にはゲノム生物学が情報科学的再編・統合化されてシステム生物学へと発展すると云われている。本授業では、このような学問の展開を視野に入れながら、ヒトの理解につながる分子遺伝学を中心とした生命科学の基礎と発展について学修する。	
		環境の科学A	地球環境を健全に保つために、大気や水を汚さず、温暖化を防ぎ、多様な生物種をこれ以上絶滅させることなく、地球上でわれわれの子孫が生活できるように考えなくてはならない。20世紀において豊かさを追求して、ヒトがつくり出した環境汚染物質やその諸要因が人間や野生生物にどのような影響を与えてきたかを検証することにより、新たな環境浄化へのステップを踏み出すことになることを理解する。具体的には、地球的規模の環境の諸問題、さらにヒトが摂取する食物及び食品における環境汚染について学修する。	
		環境の科学B	生物は環境との関係を密接に保ちながら進化し、それ自身が地球環境の一部を構成することとなった。地球環境と生物の相互作用の繰り返しが地球環境と生物進化の歴史である。生物の中には、かつては繁栄の時を持ちながら、環境変化に対応できず絶滅したり、わずかな種類にまで減じて生き残っているものもある。地球環境の一方の担い手である生物そのものがどのように進化してきたかを明らかにし、生物の進化と地球環境との関わりについて学修する。	
		生活の科学A	物質的に豊かになった現代、日々の生活において、生活の質的向上（Quality of Life）を図るライフスタイルが求められている。質的向上、すなわち、真に健康で心豊かな生活を創造するためには、生活者自らが生活における科学性に気づき、科学的な視点で生活をデザインすることが大切である。本授業は、生体と生活環境との関連性を科学的に考察する方法を紹介し、自らの生活を科学的にデザインできる能力を養うことを目的とする。	
		生活の科学B	人は今日まで歴史を重ねながら、伝統や文化を育み、生活技術を確立し、生活を向上させてきた。技術革新によって生活の利便性や効率性が追求され、ますます進行している。この授業では、視聴覚教材を活用し、衣食住の各分野における生活の伝統や文化の背景を知り、生活を支えている分野や技術の本質を探ることにより、真に身体的・精神的・社会的に健康で豊かな生活の在り方を考察することを目標とする。	
		情報の科学	メディアが多様化している現代は、情報リテラシー（課題や目的に応じ、情報を主体的に収集、処理、発信する能力）が重要になっている。基本的には、学内所蔵資料を中心にした一次資料、抄録（誌）・索引（誌）等、各種メディアによる二次資料の理解を目指す。さらに、デジタル資料の利用・活用については、インターネットやコンピュータネットワークを通じて外部データベース等情報源にアクセスするための知識や技術を習得する方途について学修する。	
	基礎科目	情報処理基礎Ⅰ	コンピュータリテラシーの基礎的な能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。まず、パソコンの基本的な操作を行うスキルを獲得した上で、日本語入力技術の向上、及び日本語文書作成ソフトの基本操作の習熟、プレゼンテーション能力の養成を目標とする。日本語文書作成、ファイル作成、入力、保存、編集等の操作を段階的に学び、ICTの知識とスキルを習得する。この授業の履修により、論理的思考力の礎とする。	
		情報処理基礎Ⅱ	インターネット利用技術の習得を目的とした演習形式の授業である。インターネットを介して利用することのできる各種技術（WWW検索・電子メール・ホームページ作成等）の習得を目標とする。WWWを利用して様々な角度から情報検索を行う手法を学んだり、電子メールの送受信の方法、基本的なホームページの作成による情報発信の手法等を、演習により段階的に学ぶ。	
		情報処理基礎Ⅲ	コンピュータリテラシーの中で、代表的なアプリケーションである表計算ソフトの活用能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。表計算ソフトの基本的な操作に習熟することを目標とする。基本的な入力方法、編集操作方法、式・関数の利用方法、情報の保存方法、基礎的なグラフ作成方法等を、演習により段階的に学ぶ。また、表計算ソフトを用いた基礎的な統計手法を身につけ、総合的な問題解決能力を涵養する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部建築学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	情報 処理 科目	情報処理基礎Ⅳ	プログラミング作成の基礎的な能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。アプリケーションの中で利用できる基礎的なプログラミング技術の習得を目標とする。コンピュータの構成と基本動作を理解した上で、表計算ソフトのようなアプリケーションの中で、どのようにプログラミング作成を行うかについて、演習により段階的に学ぶ。	
		情報処理演習 A	エンドユーザーに要求される能力を養成することを目的とする。すなわち、社会や組織におけるネットワーク・コンピューティングの様相を、エンドユーザーという立場から理解し、どのソフトの機能が業務に合致するかを判断できる能力を獲得することを目標とする。この授業は、情報処理基礎Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの履修を前提にし、ワープロ、表計算、プロジェクト管理等のソフトのより高度な利用法も、演習により段階的に学ぶ。	
		情報処理演習 B	コンピュータリテラシーの中で、代表的なアプリケーションである表計算ソフトやデータベースソフトのより高度な活用能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。表計算ソフト・データベースソフトに関する操作の習得を目標とする。リレーショナルデータベースのデータ検索・更新等の操作方や、データベースの設計手法を学ぶとともに、複数アプリケーション間におけるデータの再利用法等を、演習により段階的に学ぶ。	
		情報処理演習 C	コンピュータリテラシーの中で、プレゼンテーションソフトの活用能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。マルチメディアデータの活用方法や、それらを活用したプレゼンテーション技術に習熟することを目標とする。デジタルスチルカメラやスキャナーで取り込んだ静止画像の処理や、ホームページに利用するためのマルチメディアデータ作成の技術等を、演習により段階的に学ぶ。	
		情報処理演習 D	ファイリングの能力を養成することを目的とした、演習形式の授業である。データ検索・管理等のノウハウ、及びファイリングの基礎を学ぶことを目標とする。文献等資料検索システムの機器構成、検索統制語の概念、シソーラス等のデータアクセス方法等を、演習により段階的に学ぶ。	
	健康 スポ ーツ 科目	健康スポーツ A	生涯にわたるヘルスプロモーションと豊かなスポーツライフの実現に向け、心身の健康づくりと体力・運動能力および基礎的運動技能の向上、運動による仲間との交流を目指し運動や各種スポーツ・レクリエーション種目の実技を総合的に展開する。その上で、自らに適した運動・スポーツを主体的に実践できる能力の育成を目指し、各自の興味・関心にそったスポーツ種目を選択し、グループで協力して練習やゲームを展開できるようにする。	
		健康スポーツ B	体育館、グラウンド、テニスコートなど、学内のスポーツ施設を利用し、バレーボール、バドミントン、卓球、テニス、ゴルフ、ソフトボール等の中から、生涯にわたって取り組むことのできそうな種目を各自の興味・関心に基づいて選択する。試合や審判がある程度できるようになることを目標に、ゲームを中心に行う。基本的に初心者レベルを対象としている。	
		健康スポーツ C	体育館、グラウンド、テニスコートなど、学内のスポーツ施設を利用し、バレーボール、バドミントン、卓球、テニス、ゴルフ、ソフトボール等のうち、実施可能な種目について専門的な内容を展開することにより、身体運動能力のよりいっそうの改善を目指す。基本的に中・上級者レベルを対象としているが、効率の良い指導を行っていくため習熟度別を実施する。	
		野外活動	幼少期から成人にいたるまで野外活動経験の減少傾向が著しい今日、野外活動への期待と役割は大きく、それらを担う指導者の養成も求められている。また、科学技術の高まりに伴う環境問題や社会的ストレスへの対応として、自然や環境への関心が急速に高まっている。その現状に対応すべく自然体験林間キャンプを通して、自然環境教育とその実践を学ぶ。	共同

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部建築学科)					
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
共通 教育 科目	基礎 科目	外国 語 科 目	英語リーディングⅠ	この授業では、英語の基礎的読解力を身につけるべく、その土台となる語彙力・文法力を様々な演習を通して伸ばす。そしてその応用として、精読、多読さらには速読の活動を行い、それらを通して基本的読解方略を学び、長文における談話構造の理解と処理の基礎能力を身につける。さらに、多様なジャンルの教材を読みこなすことによって「読むことにより考え、学ぶ」姿勢を養う。また、リスニング力育成にも重点を置き、英語の音調に関わる基礎的素養を育成すべく、各種のリスニング及びディクテーションの基礎的演習を行う。	
			英語リーディングⅡ	この授業では、「英語リーディングⅠ」で習得した基礎的読解力を生かし、多くの読解活動を行って応用的読解方略を学び、談話構造の理解と処理に関するより高い能力を身につける。さらに多くのジャンルの教材を読みこなすことによって「読むことにより考え、学ぶ」姿勢を伸ばし、単なる理解のレベルにとどまらず、著者の考えを的確に要約し、発表できるように指導する。またリスニング力育成においても、英語の音調に関わる素養をさらに高め、英語聴解力を伸ばすべく、各種のリスニングおよびディクテーションの応用的演習を行う。	
			英語ライティングⅠ	この授業では、並び替え英作文、和文英訳および自由英作文演習を通して、基礎的な英語ライティング力の育成を期する。並び替え英作文及び和文英訳では、英語の語法・文法・構文に関わる知識を基本的なものから学修し直し、英文構成に関わる基礎的素養を身につけるべく大量の問題をこなしていく。そしてその英文の添削の過程で、自分の英作文力における問題点を認識し、改善するように指導する。さらに自由英作文では、英文の論理構成に基づくパラグラフ構成の基本を学び、様々なトピックに基づいた英文を書く練習を通じ、ある程度の長さの英文を書く力を育成するとともに、英語で意見を表明し、情報を発信できる力を養う。	
			英語ライティングⅡ	この授業では、「英語ライティングⅠ」の授業で培った基礎的作文力をさらに伸ばし、並び替え英作文、和文英訳及び自由英作文の発展的演習を通して、応用的英語作文力の育成を期する。英語の語法・文法・構文に関わる知識を深め、英文構成に関わる高度な素養を身につけるべく、比較的難しい問題に取り組む。そしてその英文の添削の過程で、自分の英作文力における問題点を認識し、改善するように指導する。さらに自由英作文では、英文の論理構成に基づく結束性など複雑な構成力を身につけ、様々なトピックに基づいた英文を書く練習を通じ、比較的長い英文を書く力を育成するとともに、英語で意見を表明し、情報を発信できる力を養う。	
			英語コミュニケーションⅠ	この授業は、英語の「聞く」「話す」ための語彙や発音を含む基礎的コミュニケーション能力を身につけることを目的とする。具体的には、日常生活の身近な基本的語彙・表現や観光・ビジネスのための旅行における空港・ホテル・レストランなどさまざまな場面で役立つ多くの種類の初歩的表現を学修し、それらに関わる英語を聞いたり話したりする活動を通して、話の概要を聞き取ったり、要点を相手に伝える活動を行い、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。また、英語のアクセント、リズム、イントネーションなどのプロソディについても体系的に演習を行い、英語を「聞く」「話す」ための基礎的能力を養う。	
			英語コミュニケーションⅡ	この授業では、「英語コミュニケーションⅠ」をふまえ、英語の「聞く」「話す」ための語彙や発音を含む応用的コミュニケーション能力を身につけることを目的とする。具体的には、日常生活の語彙・表現や観光・ビジネスのための旅行における空港・ホテル・レストランなど多くの場面で役立つ多くの種類の応用的表現を学修し、さらに、会話、映画、ニュースなど様々な分野の英語を聞き、概要や細部の情報を聞き取る活動と、言語の使用場面と機能に配慮した言語活動の中で、自分の意見や感情を相手に伝える活動を行う。また、英語のイントネーションなどプロソディについても演習を行い、英語を「聞く」「話す」ための応用力を養う。	
			英語コミュニケーションⅢ	この授業では、「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」の内容をさらに発展させ、英語の発展的コミュニケーション能力を身につけることを目的とする。具体的には、日常生活の語彙・表現や観光・ビジネスのための旅行における空港・ホテル・レストランなど様々な場面で役立つ多くの種類の発展的表現を学修し、さらに、外国で留学する際の基礎となるような、英語での学修スキルを学ぶ。さらに、読んだり聞いたりした情報に対する自分の考えを発表したり、また、聞いたことをメモして要約する活動などを行い、「聞く」「話す」活動と「読む」「書く」活動との有機的な融合を図り、総合的な英語コミュニケーション能力を育成する。	

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部建築学科)					
科目 区分		授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	外国 語 科 目	英語コミュニケーションⅣ		この授業では、「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」の内容をさらに発展させ、読んだり聞いたりした情報を要約して発表する活動などをさらに進め、「聞く」「話す」活動と「読む」「書く」活動との有機的な融合に基づく様々な演習を通して、英語で自由に自己表現ができるような高度な英語コミュニケーション能力を育成することを目的とする。具体的には、英語によるスピーチ、プレゼンテーション、ディスカッションなどを通して、英語の論理構成や文章構成ならびに議論での表現法やルールを学修する。また、他者との意見の交換を通して、自分の意見を深化させ、その場でそれを効果的に相手に伝える能力も育成する。	
		中国語コミュニケーションⅠ		本授業は、日常的に用いられる言葉、言語を中心とし、自分の意志を中国語で表現する能力を養うことを目的とする。具体的には学校、家庭、社会など実生活におけるコミュニケーションの手段としての中国語、すなわち「話す・聞く・読む」を中心とした中国語の活用能力を養成する。特に発音と表記の仕方であるピンイン(中国語ローマ字)の習得に力を注ぐ。	
		中国語コミュニケーションⅡ		「中国語コミュニケーションⅠ」に引き続き、日常的に用いられる言葉、言語を中心とし、自分の意志を中国語で表現する能力を養うことを目的とする。中国語を学修し、その能力を高める為に最も大切なことは中国語を好きになることである。そのような見地から、本授業では、中国語および中国文化への理解や関心を深めるために、随時音声や動画などの教材を利用して実際に即した訓練を繰り返し、中国語の自然な表現に親しみ、中国語の魅力に触れるとともに、実践的な語学力を身につける。	
		中国語コミュニケーションⅢ		本授業では、「中国語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」を履修した学生を対象に、会話、中国語の文章作成、作品講読を中心に学ぶ。既に学修した単語や会話表現を復習しながら、新しい表現を加え、耳・口・目を使って繰り返し練習することによって、会話の能力をいっそう高めるとともに、メモ書き、小説や雑誌・新聞記事などを読む能力を養成することを目標とする。授業は演習形態で行なわれる。	
		中国語コミュニケーションⅣ		「中国語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」に引き続き、会話、中国語の文章作成、作品講読を中心に学ぶ。具体的には、ネイティブスピーカーとのコミュニケーション、手紙や短文の作成、小説や新聞などの読解を通して、話す力、聞く力、読む力を総合的に学修する。以上の学修を経て、中国語の知識を学修するだけでなく、実践的な中国語の活用能力を身につけることを目標とする。	
		北米文化語学演習		北米文化語学演習の目的は、約1ヶ月間にわたる北米家庭でのホームステイ及び現地大学での語学演習を通して、総合的な英語力の向上を図り、同時に文化に関して様々な面を直接体験し、異文化理解を深めることである。授業内容は、英会話・リスニング・英作文等に加え、文化学修、各種フィールド・トリップ等である。受講者は、事前のオリエンテーション参加と、演習終了後のレポート提出が求められる。	
		中国文化語学演習		中国文化語学演習は、事前学修及び現地での実践的な学修を通して、中国語の語学能力を高め、さらには中国の歴史、文化、社会に直接触れることにより、異文化に対する理解を深め、国際感覚を養成することを目的とする。このような目的のもと、本授業では実践的な語学指導によって、中国語を話す力、聞く力、読む力を習得させるとともに、史跡や博物館の参観、中国文化や芸術の講座の受講など、様々な活動を通じて、中国の文化・社会を深く理解する。受講者は、現地研修前の授業出席と、演習終了後のレポート提出が求められる。	
	基礎 養成 科目	基礎国語演習		国語の基礎となる資質・能力を養うことを目的として、言語能力の向上を図る。具体的には、「話すこと・聞くこと」「話し合うこと」「書くこと」「読むこと」の理論と方法について理解するとともに、教材の研究や諸分野の考察、発表などを行う。講義、演習を交えて国語の基礎的な理解力を養成する。	
		基礎社会演習		人間を育成し形成する公教育として、学校教育がある。そこでは学校の段階に応じた目的が設定され、その目的を実現するための教育内容が編成されている。本授業では、教育内容の一つとして設定されている社会科を取り上げ、その目標に基づく内容について、地理的内容、歴史的内容、公民的内容の側面から、考察を行う。特に地理的・歴史的内容に焦点をあて、その具体的教育内容を取り上げる。	

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部建築学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容		備考
共通教育科目	基礎数学演習		各分野の専門的内容を理解するために必要とされる基礎的な数学、あるいはまた、将来一般社会人として必要とされる応用的な数学を取り扱う。基礎的内容は、初等的な数論や幾何学であり、数学という学問的な立場というよりむしろ、文系学生に向けた数学として、専門的内容の基底に流れる数学的アイデアや思想に重点を置き、数の体系や図形の構成などについての理解を深める。また、応用的内容として簡単な数値計算や統計的推論について取り上げる。		
	基礎理科演習		理科は、自然を理解し、自然とともに人間がいかに共存していくかを考える科目である。様々な自然の事象の中には、合理的な規則性や法則性が含まれている。太古の昔から、人類は少しずつその謎を解き明かし、自然科学の諸分野の学問を発展させてきた。ここでは、そういった自然科学の発展の歴史をその時代の背景とともに展望しながら、理科の諸分野の内容理解を深めていく。		
	基礎生物演習		この授業では基礎生物学や生物系の専門教育科目を学修するために必要な、最も基礎的な生物学の知識と考え方を短期で修得することを目指す。そのために問題演習を中心に集中的・効率的な講義を行う。また、簡単な実験・観察も取り入れ理解を深めるとともに、生物学の面白さを伝えることにより学修への動機付けを行う。内容は遺伝子の構造、機能・細胞の構造、機能・感覚器の構造、機能・神経、感覚・内分泌・免疫を中心に行う。		
	基礎化学演習		この授業は、具体的な問題を解きながら化学の基礎的理解を深めることを目的とし、演習形態で行われる。私たちは多種多様な物質で囲まれ、その中で生活している。化学は、物質の性質、反応性、構造化を調べることにより自然界の仕組みを理解する自然科学の主要な領域である。化学の基礎概念、大気中の分子、体内の化学物質、石油の化学について学修する。物質の変化において質的・量的関係にはどのような規則性があるかなど、化学の目を養うことは自然を理解するばかりでなく、化学に関連する科目を学ぶ上で重要となる。		
	基礎物理演習		この授業は、物理学の基礎的理解を深めることを目的とする。物理学を理解することは、我々の周りの自然現象を理解することである。物理学は、大きく分けて、古典物理学と現代物理学を含んでいる。この授業では、両物理学の概要を説明するとともに、実験や演習を取り入れ、物理学の理解を図る。すなわち、運動（ガリレオ、ニュートン）、仕事とエネルギー、惑星の運動、振動、電気・磁気について学ぶ。		
専門教育科目	理工学概論	○	理工学は、社会の様々な分野で発生する問題や課題を解決し、対処するために生まれた学問である。理学と工学は、自然科学の原則や法則を基にしており、現在の科学技術を生み出してきた。大学の理工学部は、理工学が成立する前提である教育・研究機関である。その役割を果たす、本学の理工学部において、学生が理工学を学ぶ上で必要となる、定義、分類、歴史、研究手法、社会との関わり、成果等について概観し、理工学についての広い視野を獲得することを目指す。		
	理工学データサイエンス	○	社会の様々な分野で発生する問題や課題の解決には、データ分析、機械学習、AIアプリケーションの技術が活用されるようになってきており、理工学においても、分野に関わらず、データサイエンスやAIの重要性が認識されてきている。本授業は、理工学の分野を学ぶ学生に共通して求められる、データサイエンスに関する知識を学ぶとともに、それらを、理工学の各領域で生かし、学びをより深化させるための技能を身につけることを目指す。		
	建築概論	○	建築とは、人間が活動するための空間を内部に持った構造物を計画、設計、施工そして使用するに至るまでの行為を指す総合技術であり、総合芸術でもある。本授業では初めて建築を学ぶ学生を対象として、社会的・技術的・芸術的な切り口で、代表的な現代建築の作品とそのコンセプトなど、実例に基づいて建築を概観し、近代建築の考え方や手法についても具体的な事例に焦点を当てて学ぶ。また、これから学ぶ建築学の基本構成である計画・歴史・構造・環境などについての概要も併せて理解する。さらに省エネルギー、創エネルギー、長寿命建築等、これからの建築業界におけるグリーンイノベーションの必要性を学修する。		

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部建築学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目	基幹科目・卒業研究	建築デザイン論	建築というもの、理論と実践の両者の相互作用によって生成してくるが、当講義ではその際の前者について、骨太な思想的骨格となる学びを得る。建築が単なる意匠操作だけによらない、非常に奥深い事業であることを、様々な分野の横断的検証から明確にしていく。 授業の序盤では建築分野における意匠処理の根本的な意味を客観的に会得することから始め、中盤以降では今後の建築を支える要素について解明していく。	
		建築キャリアデザイン	建築業界は裾野が広く、設計関係・建設関係（各種下請け業者）・メーカー（床材・壁材・天井材・家具類）・公務員等の多種多様な企業が関わりあって構成されている。こうした多様な業種の建築業界について、その業務内容と業界内での位置づけなどを具体的に知る。また、建築士資格だけでなく施工管理資格やインテリア関連の資格など建築系資格の業務内容についても幅広く理解し、それぞれの役割や協働の重要性を学修する。	
		建築倫理	建築という分野が至って芸術的であると同時に、極度に社会的な行為であるという両極面を併せ持つことから、その職能に関わる際の態度について修得しておくことが要となる。また一般的に建築物とは、一個人が入手する財産としては人生の中で最も高額なものであること、そのことへの自覚と責任を養う場でもある。それゆえに当講義では、「請負契約・任意契約」という“依頼主あつての行為”として事が運ばれてゆく流れのなかでの諸事項を吟味していく。具体的には、弁護士や医者等と同様の「プロフェッショナル（専門家）」としての責務、インフォームドコンセント、高度な注意義務、法務に関する知識、瑕疵や損害賠償、そしてさらには建築が全人的職能であるという認識の下での道徳的示唆も並行して学修する。	
		デザイン基礎	デザインとは単に美しいかどうかではなく、見る人に何かを伝えようとするものである。よくできたデザインは人目を引くだけでなく、明確なメッセージ性をもつ。つまり、デザインの構成要素はコミュニケーションの手段となり、テーマやメッセージを伝えるものである。また、デザインは日常の身の回りにある物も、より良いデザインに変えることで新しい魅力と価値を生み出す重要な力がある。 建築はサインやモニュメント、家具、照明、ランドスケープなどのデザインと関係が深く、建築と一体となったデザインをするためのデザイン史、近代デザイン運動や人間の知覚と心理などの基礎知識を修得する。	
		空間デザイン論	建築では理論と実践の両面が必要とされるが、当科目は前者の「理論」に関する徹底した手法の会得を目的とする。それは、実際に現象する空間や風景を創っていくためのメソッドの紹介であり、将来的にそれを使いこなせるようになる為の理論の会得でもある。空間に対峙したときの人間の認識や知覚をコントロールする為の様々なデザイン手法、例えば、レベル差、ボイド開け、遮蔽物の配置、視線操作、内部の外部化、配置のズラシ、アンバランス・バランス、素材からの発案、その他沢山の具体的手法がどのように建築空間で役割を果たすのかを理解できるようになることを目指す。	
		建築計画学	建築計画学とは、各種建築を計画・設計するための理論と手法を体系化した学問である。建築の計画・設計には、建築に共通する知識（総論）と建築の種類による独自の特性に関する知識や理論（各論）がある。 本授業では、建築計画の成り立ちから計画学の研究、各種建築の計画論に関する考え方と計画論の意味などについて学ぶ。各論では、美術館、幼稚園、図書館、病院、福祉施設、劇場、ホテルなど13の各種建築の計画論について知識を深める。	

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部建築学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	住空間計画学	○	住空間計画学は、住まいなどの居住空間を計画・設計するための理論と手法を体系化したものである。 本授業では、住空間の計画の基礎から計画の進め方、巨匠と呼ばれる近代建築家の手法について学修し、住空間の各室を計画するための基礎知識並びに、現代建築家の作品とその手法を修得する。また、世界のアノニマス（自然発生的）な住空間などについて、その立地・気候・風土との関係性、材料と構法の関係性などの基礎知識の修得を図る。	
	建築基礎製図	○	「建築基礎製図」では、設計をするのに必要な製図用具の使い方、製図するときの基本知識とルール（JIS基準）を知り、製図用の線や文字が正確に描けるように図面作成の手法を学ぶ。また、各種建築図面の役割と作図手順・ルールなど、設計をする際の基本的な知識と技能を修得する。自分で建築空間のコンセプトを構想し、それを設計図面に正確に表現する能力を身につける。	共同
	建築設計演習Ⅰ	○	「建築設計演習Ⅰ」では、設計の楽しさと空間デザインの面白さに興味を持ち、計画的に課題に取り組む能力を修得する。 自分で建築空間のコンセプトを構想し、それを設計図面に正確に表現する能力を養うとともに、建築模型製作の基本を学び、技術を修得することを目的とする。	共同
	建築設計演習Ⅱ	○	「建築設計演習Ⅱ」では、さまざまな種類の設計課題（カフェなどの店舗、ギャラリーなどの展示施設）を通して課題発見力と創造力を養う。 第1課題は、「公園のカフェ」、小規模で、シンプルな機能を持つ建築の設計であるが、立地は本川に沿った平和公園の敷地であり、周辺環境との精神的・物理的調和が求められる。 第2課題は、「キャンパスギャラリー」で、機能と空間の関係を学ぶとともに、建設敷地がアプローチ道路と3mの段差があることや湖に面していることなど、周囲の環境と建築との関わりを考えた建築空間を構想する力を修得する。	共同
	建築基礎数学	○	設計、法規、構造力学、環境、積算、測量など、建築を学ぶ時、さまざまな分野で数学が深く関わってくる。本授業では、建築学科で学び研究をするために、建築物の解析や研究に必要な数学的知識を確実にすることを目的としている。このため、構造力学の計算で用いられる三角関数や方程式などの数学的基礎知識を整理し、応用を確実なものとする。また、設計者としての素養を身につけるため、関東大震災、阪神・淡路大震災や東日本大震災、直近では2023年に起きたマグニチュード7.8のトルコ・シリア地震などの諸事例も併せて学修する。	
	建築基礎物理	○	建築学科に必要な構造力学の解析に求められる物理の基礎について、ニュートン力学における力、運動量、力のモーメント、ベクトルなどを整理し、確実に理解することにより、力学における物理学の基礎学力の習熟を目指す。また、設計者として建築における安全性や快適性に影響する力学現象の素養を身につけるため、物理がどのように構築物で用いられているかの事例や地震被害の事例と力学の関わりなども併せて学修する。	
	卒業研究Ⅰ	○	3年次後期に卒業論文または卒業設計のどちらかを選択し、担当教員の指導を受ける。 ・卒業論文 これまでの学修を総合的に生かし、建築に関して自分で解き明かしてみたいテーマを見つけ、社会の多様性や自然環境への配慮など、多角的な視点と問題意識をもって研究テーマを考えるとともに、それに関する論文などの資料を集めて分析を行う。このようなプロセスを通じて「卒業研究Ⅱ」で執筆する卒業論文の基盤を確立する。 ・卒業設計 これまでの学修を総合的に生かし、建築や空間デザインに関して設定した課題（テーマ）に対して、社会の多様性や自然環境などをふまえて具体的な提案を作成する。情報収集やフィールドワークを行い、専門知識を深めながら「卒業研究Ⅱ」でイメージをアウトプットするための計画・設計を進める。	
	卒業研究Ⅱ	○	・卒業論文 「卒業研究Ⅰ」で研究した内容を基礎として、実際に卒業論文の執筆に取り組み、内容等について指導教員の指導を受ける。また、ゼミ内の中間発表でのディスカッション等をふまえて、テーマの設定と解決案の検証を繰り返しながら、卒業論文の内容を洗練し、完成させていく。 ・卒業設計 「卒業研究Ⅰ」で研究した内容を基礎として、イメージをアウトプットする作業に取り組み、計画等について指導教員の指導を受ける。また、ゼミ内の中間発表でのディスカッション等をふまえて、テーマの設定と解決案の検証を繰り返しながら、設計の内容を洗練し、完成させていく。	

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部建築学科)					
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	展 開 科 目	C A D	建築プレゼンテーション	○	建築デザインのためのプレゼンテーション表現技法を学ぶ。建築のデザインは図面や模型などによって自分の考え方の全てを伝えなければならない。本授業では建築設計におけるテーマに対するデザインの考え方（コンセプト）の表現技法や、CGグラフィックを用いたプレゼンテーションの知識と各種手法の修得を目指す。また、コンペなどで作品のコンセプトを発表するコミュニケーション力など総合的なプレゼンテーション力の修得を目指す。
			建築CAD I	○	建築設計・インテリア設計の図面作成において必須と言えるCADは大きく分けて2次元CADと3次元CADに分けられる。「建築CAD I」では、2次元CAD技能を修得する。CADソフトウェアは、建築・インテリア分野で広く使われているVectorworks（ベクターワークス）を主に用いて、基本的な操作や平面図・立面図・断面図等、建築設計・インテリア設計における実践的な図面作成のCADスキル(2次元)の修得を目的とする。
			建築CAD II		建築設計・インテリア設計の図面作成において必須と言えるCADは大きく分けて2次元CADと3次元CADに分けられる。「建築CAD II」では、「建築CAD I」で修得した2次元製図の技能を基に、CADによる3Dモデリング・レンダリング、外観パース・内観パースなど3次元作図への応用技能の修得を目的とする。CADソフトウェアは建築・インテリア分野で広く使われているVectorworks（ベクターワークス）およびSketchUp(スケッチアップ)を用いる。
			建築CAD III		BIM (Building Information Modeling) とは、近年開発された立体モデル（BIMモデル）を作成する専用ソフトで、現実と同じ3次元のデジタルモデルにコストや仕上げを盛り込むことができる。建築図、構造図、設備図など、一つのモデルを構成する全てのデータが連動しており、設計図書の一元管理が可能となる。これまでのCADは修正が入ってしまうと関連する2次元の図面を全て修正する必要があったが、BIMでは変更や修正にも瞬時に関連図面が自動修正されるため、近年ではBIMを採用する企業や官庁も多い。こうした技術を修得し、設計、施工、維持管理等のフローを理解するとともに、基礎、設計、提案、シミュレーション演習を通して建築生産システムにおける実践的なスキルを身につける。
			建築CG		建築デザインをプレゼンテーションする際のPCアプリケーションの効果的な扱い方、さらには、DTPソフトウェアを活用した視覚的なプレゼンテーション技法を修得することを目的としている。アプリケーション操作は各種展覧会への出展などで通用するレベルまでクオリティを高めるため、モデリングのみならずレンダリングに関してもツインモーションを用いた実践的な技術を修得する。また、それらのプレゼンテーションに必要な情報の準備と整理、文字や画像などの効果的なレイアウト術、図面・模型写真・CGなどを加えた複合的な平面構成の方法を学び、最終的にはデジタルデータの作成から印刷までの一貫した制作工程を自律的かつ手際よく行えることを目指す。
	設計	建築設計演習Ⅲ		「建築設計演習Ⅲ」では、公共建築の設計課題を通して、設計におけるこれまで以上の習熟を目指す。 第1課題は、「集合住宅複合建築」で、空洞化された都心に賑わいを取り戻すため、集合住宅と複合施設の新しい建築空間を提案する。 第2課題は、「地域に開かれた幼稚園」で、社会性のある設計課題として地域との関係を考え、施設に求められる諸条件を整理して空間のプログラムを構想し、園児のための夢の空間を創造する。	共同

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部建築学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	展 開 科 目 設 計	建築設計演習Ⅳ	「建築設計演習Ⅳ」では、課題もこれまでより抽象的なテーマ設定とする。 第1課題は、「岡本太郎の図書資料館」であり、岡本太郎という、わが国を代表する芸術家の図書・資料を保存展示するための空間を考える。 第2課題は、「モダニズム建築財団の事務所ビル」である。効率や機能性を追求したモダニズム思想は現代建築に大きな影響を与えた。こうした思想の普及と情報発信をする財団のための事務所ビルを考える。 また、設計図面におけるこれまで以上の習熟を目指す。	共同
		建築設計演習Ⅴ	「建築設計演習Ⅴ」では、ひとつの課題に対して複数のグループに分かれ、グループごとに教員から指導を受ける。 テーマは都市規模の大規模空間を計画する。最終の公開講評会ではグループごとに分担して発表を行う。 企画から情報収集～調査～製図(CAD)～模型製作～プレゼンテーションまで、グループワークの中で考え主体的に設計コンセプトを立案する。これまでよりも社会に対するメッセージ性が強い課題に取り組む。	共同
		スタジオ設計演習	「スタジオ設計演習」は、建築に関わる社会問題を背景として問題意識を深めることでコンセプトとプログラムを立て、教員と学生が対話型で行う設計演習である。一人ひとりに用意された専用の設計ブースで、企画から情報収集～調査～製図(CAD)～模型製作～プレゼンテーションまですべてを行うことで、主体的に設計コンセプトを立案する能力を養い、より高度な設計技術の習熟を目指す。	共同
		建築設計特別演習	本授業では、これまでの建築設計演習から培ってきた設計製図技術を総合化しブラッシュアップするとともに、高度で実践的な設計課題を短時間で完成させることで設計製図実践力と職能意識を修得することを目的としている。専用住宅(木造)、保育所(木造)、事務所ビル等の設計を通して、材料、時間、予算などのリソースを管理し、実現可能かつ実用的な解決方法を思考・判断する力を身につける。	共同
		建築思想作品論	現代社会において建築デザインを行う為に必要な思想的基盤、及び、それを具体的実践へ移す技術手法について修得することを目的とする。 序盤では建築分野に於いて意匠処理をすることの根源的意味を客観的に納得することから始め、中盤以降ではその言語思想と共振可能となるような形態を創出する方法を学修する。単なる形態論ではなく建築空間を現象として扱うことのできる知識を獲得する。	
		建築設計デザイン演習	○ 「建築創作」という行為全般について考察し会得することを目指す。単純かつ物理的に建築物をデザインする技術やテクニックの修得に留まらず、より広く深い意味で人間が空間に包まれそれと共振していくこと、すなわち、「生きて考える」その様と空間の関係について思考する。具体的には、建築デザインを行う為に必要な思想的基盤について修練し、生涯、建築家として主体的に成長し続けるという高い志を持つことを目標とする。	
		海外建築研修	日本の縄文時代後期から弥生時代にかけて建築物は竪穴式住居であった時、ギリシャにおいてはパルテノン神殿が黄金比を用いて建てられ、ローマにおいてはフォロロマーノという都市があり、世界初のコンクリート建造物であるコロッセオやパンテオンがつくられていた。また、近代になって鉄骨で作られたエッフェル塔や鉄筋コンクリートで作られた近代建築群が現れた。こうした歴史的な建築物や都市は2000年たった現代においても現存しており、これらを自分の目で見ることは、建築学に対するモチベーションを高めるとともに、将来的な建築の職能に対する意識を確立することに寄与する。視察にあたっては事前に見学予定建築の調査を行う。また、見学後にグループごとにプレゼンテーションを行うとともに、個人でレポートを作成する。	3年に1回開講

授 業 科 目 の 概 要				
(理工学部建築学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	設計	国内建築研修 A	雑誌や本の写真で見た著名なまちや建築物、ランドスケープも実際に見ないとその感動は伝わってこない。 「国内建築研修A」では、近・現代で著名な国内の建築を対象として、そのコンセプトの表現、ディテールなど写真だけでは伝わってこない建築の魅力に触れる体験学修を行う。また、視察にあたっては事前に見学予定建築の調査を行う。さらに、見学後にはグループごとにプレゼンテーション発表を行うとともに、個人でレポートを作成する。	
		国内建築研修 B	雑誌や本の写真で見た著名なまちや建築物、ランドスケープも実際に見ないとその感動は伝わってこない。 「国内建築研修B」では、京都の鰻の寝床と呼ばれる町家の街並み及び、仁和寺などの古建築、龍安寺の石庭など歴史的建築物の見学や、高松丸亀商店街に見られる地方活性化の取り組みなど、国内の著名な都市及び都市施設やランドスケープなどを対象として、肌で感じる体験学修を行い、理解を深める。視察にあたっては事前に見学予定建築の調査を行う。また、見学後にグループごとにプレゼンテーションを行うとともに、個人でレポートを作成する。	
	展開 科目	インテリアデザイン論	インテリアをデザインする際に、必要となる基礎知識（インテリアによく用いられる素材の性質と使われ方、特色や利用法、家具や建具の名称と構成などの基礎、インテリアを効果的に演出する方法など）を修得するとともに、インテリアデザインの歴史、インテリアデザインの視点や手法を学ぶ。また、得た知識をどのように活用し、インテリアをデザイン・コーディネートするのか、インテリアデザインの視点やその手法についても学ぶ。	
		インテリアデザイン演習 I	「インテリアデザイン演習 I」では、住まいのインテリアや家具などのインテリアエレメントについて具体的にプランニングし、設計図とCGパース、プレゼンテーションボードを作成する。全15回の演習のうち、2つの課題を実施する。それぞれの課題の最終回には作品の魅力をアピールできるようなパースやスケッチ、模型とプレゼンテーションボードを作成した後、パワーポイントを用いてプレゼンテーションを行う。	
		インテリアデザイン演習 II	「インテリアデザイン演習 II」では、建築物内の比較的小さな商業空間などのインテリアデザインを構想する。全15回の演習のうち、2つの課題を実施する。それぞれの課題の最終回には作品の魅力をアピールできるようなパースやスケッチ、模型とプレゼンテーションボードを作成した後、パワーポイントを用いてプレゼンテーションを行う。	
		ランドスケープデザイン論	ランドスケープは日本では景観と呼ばれる。景観にも風景などの自然景観があるが、本授業では主として都市の景観について学ぶ。都市景観のアメニティ（ゆしみ）を構成する要素（街路や公園、広場、水辺、建築、商業空間などのデザインエレメント）について、その効果や歴史、デザイン手法などを概観するとともに、都市の景観を構成してきた軸線やシークエンスなどの手法についての基本的な考え方を学ぶ。さらに、都市のアメニティとは何かを探る。	
		ランドスケープデザイン演習	ランドスケープデザインは、周囲の建築と融合し、その場所のゲニウス・ロキ（空間認識概念）を分析したコンセプトを構想することが重要である。課題演習では、都市のアメニティを構成する広場や公園などを題材として、全15回の演習のうち、3つのランドスケープデザインの計画・設計課題を実施する。	

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部建築学科)					
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	展 開 科 目	空 間	アーバンデザイン	現代の都市は産業革命以降、近代化の流れの中で機能性に重点を置いて計画されてきたが、都市に多様性を求めるジェイン・ジェイコブズ以降、我が国も昨今になって都市のアメニティ・デザインに重点を置くようになり、タクティカルアーバンイズムやパークレットが現れた。こうした西洋と日本の都市を形作ってきた都市空間の特徴を歴史的流れに沿って考察するとともに、都市のアメニティ空間である広場や公園、歩行者空間、商業空間などのデザインについて学ぶ。西洋と日本の都市空間を考察することにより都市のデザイン手法について理解を深め、現代の都市空間の現状を評価するとともに課題を見つける。	
			福祉環境論	○ 成熟社会に入った日本が直面する住環境問題について、福祉の観点から学ぶ。対象は、高齢者、障がい者、乳幼児、妊産婦 等、これまでの増産期に於ける「強者の論理」では顧みられる機会が少なかったが、これからの成熟期の主役となる立場の人たちである。そうした人たちの誰もが、社会から疎外されず、安全かつ快適に住むことができる居住環境の方法について考察し、問題の改善に向けた支援ができるようにする。同時に、少子化による核家族問題、そして昨今の気候変動などに伴う災害被災地における被災者の生活環境と支援についても検証する。	
			福祉環境演習	本授業では全15回の授業の中で、高齢者や障がい者等に対して住みやすい住環境に関する2課題を実施する。 第1課題は、「在宅介護を考えた住まい」であり、高齢者が住み慣れた地域社会のなかで家族とともに快適に過ごせるとともに、家族にとっての負担を抑えられる在宅介護の住環境について考察する。 第2課題は、「高齢者や障がい者に住みやすい居住環境整備」であり、高齢化や障がいなどにより社会から疎外されず、安全かつ快適な生活を営むことができる居住環境整備の方策について考察する。	
			商空間デザイン論	世界各地の都市のアメニティは商空間の賑わいで作られているといっても過言ではない。古代ギリシャの都市アテネには、ストアに囲まれたアゴラと呼ばれる広場を形成していた。ストアは単なる商業用店舗ではなく、催し物の客席になるなどフレキシブルなアメニティ空間であった。現代では、サンフランシスコの海岸の埠頭につくられた商業コンプレックスであるピア39や、缶詰工場を商業空間にコンバージョンされたザ・キャナリーなど、これまでさびれていた空間に賑わいをもたらしている。また、フランスのシャンゼリゼ通りの歩道は拡幅をしてオープンカフェやワゴンショップなどが多く出て通りの賑わいを演出している。 本授業では、商業建築の歴史や社会的役割などの基礎知識を修得するとともに、前述の事例等（国内外のショッピングセンター・モールや飲食店、物販店など）のデザイン手法について学ぶ。	
			商空間デザイン演習Ⅰ	「商空間デザイン演習Ⅰ」は、課題としてコンパクトな商業空間の計画と設計を行う。計画・設計にあたっては、商業空間のコンセプトを明確にすることから始まり、空間のイメージを描きながら、空間のスケール、動線、構成を考える。全15回の演習のうち、2つの課題を実施する。第1課題はディスプレイデザインを通して展示コンセプトや展示手法を学ぶ。第2課題は、ディスプレイする展示空間の計画を構想する。 それぞれの最終回には作品の商空間の魅力をアピールできるようなパースやスケッチ、プレゼンテーションボードを作成し、プレゼンテーションを行う。	
			商空間デザイン演習Ⅱ	「商空間デザイン演習Ⅱ」では課題として、使われなくなった施設をコンバージョンすることで新しい価値を付加した商業空間として蘇らせたり、寂れた商店街を再生したりするリノベーションの計画と設計を行う。計画・設計にあたっては、商業空間のコンセプトを明確にし、空間のイメージを描きながら、空間のスケール、動線、空間構成を考える。 課題の最終回には作品の商空間の魅力をアピールできるようなCGパース（インテリア・エクステリア）の作成に取り組み、プレゼンテーションボード及び1/50の模型を作成し、パワーポイントを用いて公開プレゼンテーションを行う。	

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部建築学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	空間 展開 科目	建築リノベーション論	リノベーションは、リフォームとよく似た用語であるが、表面的な改装であるリフォームに対して、外・内装の大掛かりな改修を示す用語である。また用途変更を伴うリノベーションをコンバージョンという。海外の事例では、サンフランシスコのザ・キャナリーやガラデリスクエア、ボストンのファニユエルホール・マーケットプレイスなどが有名である。日本でも文化・商業施設としてリノベーションした横浜のレンガ倉庫や旧京都中央電話局をリノベーションした新風館がある。本授業では、このように古い建築を建て直すのではなく、再生をすることによってさらに新しい価値を付加するリノベーション手法について学修する。海外・国内の事例をもとに、リノベーションの目的や手法について理解を深めるとともに、建物の種類ごと（住宅、公共建築、商業施設など）のリノベーション計画について学ぶ。		
		建築リノベーション演習	本授業では全15回の授業の中で2課題を実施する。第1課題は、時間の経過とともに家族構成やライフスタイルなどの生活空間が変化する小規模な住宅の内部空間のリノベーションである。長年使ってきた住宅の内部空間を再構成することで生活の変化に対応したリノベーションを計画・設計する。 第2課題は古くなった建築に新しい価値を付加することで再生する総合的なリノベーション計画・設計である。これまでにはない新しい視点からリノベーションに係る諸問題を解決することが求められる。		
		建築フィールドワーク	本授業では、都市・建築でのフィールドワーク（グループワーク）を通して、そこで収集された情報から新しい創造的まちづくりの方法を模索する。それは、単なる現地調査の手法紹介や実践に留まることなく、現場で収集された情報を各人独自の方法で編集しながら、未来の新しい都市空間創出に昇華していく作業を要する。都市の中に散在する凡庸な事象、例えば、坂道、音、コンビニ、赤い物、歩道橋、空き地等といった一見まちづくりと関係のないものたちの有様が素材となり、未だ見ぬ未来の環境風景を生成する可能性があることを理解する。	共同	
	歴史	西洋建築史	○ 西洋建築の歴史を学び、建築の創作原理となる対象が「神」や「人間」、「機械」という、時代ごとの相違によって各歴史様式はどのように異なってくるのか、またその建築が制作される根拠が「メソッド」（他律）である場合と「作者」（自律）である場合とでどのように異なっているかについて理解する。また、建築は、そうした「根拠」を以て筋道立てられ、且つそれが実例（画像）と結びついて理解されてゆくプロセスをたどる。さらに、そこに発生してきた「空間」の意味、そしてそれらが今の私たちの時代とどう関連しているかを考察する。		
		日本建築史	○ 建築様式・形式の理解に留まることなく、そこに発生してくる「空間的質」を時代ごとに学修する。具体的には、住居建築（竪穴式住居、数寄屋建築、戦後の住居、近代の洋風建築）、宗教建築（神社建築、仏閣建築、禅宗様、神殿造）について、時代や文化、自然環境など建築を取り巻く背景とともに学び、過去の先人の知恵に基づいた建築が現代の私たちの生活に根付いていることに気づくとともに、今後の建築に生かす知識を修得する。		
		近現代建築史	「西洋建築史」「日本建築史」は体系として完成しているが、その次段階に位置する「近代建築史・現代建築史」には、未だ明確な定義付けが成されていない。 そのため本授業では、「近代建築」を、西洋建築史に於ける歴史的流れの中での「フォルマリズム」（合理主義）の延長線上にある行為として位置付けることで、ギリシャ以前からの流れにそれを合流させることを志向する。一方でその後の「現代建築」に関しては、「近代建築」を含めた2500年の流れからは、明確に一線を画す流れとして定義付けることが必要とされる。それが有機生命体的な視点からの接近であり、そうしたとき「現代建築」とは逆説的に「原始の小屋」に近づくようになるともいえるであろう。そうした悠久の時間の中での建築の変遷を論理的に思考する。		

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部建築学科)					
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	歴史	住居史	紀元前1万年ごろから人類は定住を始める。最初は自然の地形を生かした住空間から、長い年月をかけて身近にある材料を用いて風土に根差したバナキュラーな住空間を作ってきた。本授業では住居において、材料・工法・プランの変化に着目して、前半では、日本における住居形態と空間構成の歴史的な変遷を農家住宅と町家住宅に分けて学び、後半では、海外における住空間の展開について学修する。		
		建築法規	住宅や建築を設計する際、街や建築の中で人間が健康で安全に利用するための最低限のルールが定められている。それが建築基準法とその関係法令である。近年こうした基準を守らずに大きな社会問題となり結局、竣工間もないマンションが解体されるという事態になった事件もある。本授業では、建築物の設計・監理といった実際の計画に必要な建築基準法を軸に、建築基準法施工令及び告示、都市計画法、建築士法、建築業法などで構成される関連法規を学ぶ。		
	法規	建築法規演習	建築物の企画設計に必要となる建築基準法及び関連法規の社会的意義と個々の法定内容について理解を深めるとともに、実践的能力を確実に身につけるため、演習課題を通して学ぶ。 各回で定めるテーマに沿った演習課題に取り組みながら自分の力で答えを導くことを実践する。繰り返し法令集を引くという実践的授業により、法令集独特の専門的な表現を理解し、具体的な建築設計実例にまで落としこむことができるようにする。		
		建築材料学	建築に使用される材料は、建物を支えるための構造材料とこれを化粧するための仕上材料とに大別される。さらに、古くからの天然材料と種々の要求に対応するために新たに開発された人工材料とに大別することもできる。そして新材料の出現が新しい建築の意匠・構造・工法の開発を可能としてきた。本授業では建築材料の歴史的変遷について学んだうえで、現在使用されている代表的な構造材料と仕上材料について、その特徴や性質、使用上の留意点について学ぶ。また、今後の環境問題に適応した材料とは何かを考える。	○	
	材料・ 施工	建築材料学実験	住居や建築の基本的な材料（木材・コンクリート等）の引張試験や圧縮試験、そして住居や建築の構造に関する強度・ヤング係数・比重等の物理的性質実験を行う。こうした実験を通じて住宅・建築に用いられる各種材料の特徴や物理的性質について体得し、各種材料の持ち味を生かした建築デザインを可能にするための知識を修得する。 併せて、各種構造物の力の流れを実験を通じて体得する。		
		建築施工	建築工事全体の流れの中での施工方法・手順を学ぶ。躯体構成に関しては構造別（木造・鉄骨造・RC造）にその仕様を学び、仕上げ工事や基礎工事に関しては各構造で共通なメソッドについて学修する。また、施工用語には難解な概念・手順が多く含まれるため、画像や動画、実物サンプルなどで学びを深めるとともに、肌触りや重さなども体感する。		
		建築施工演習	多くの人がかかわり多種多様な工種が複雑に絡み合う建築工事では、工事進捗を管理するのは大変な作業となる。この工程管理がうまくできないと致命的な遅れが発生し、多くの人に迷惑や損害をあたえることになる。プロジェクト全体で工程管理をするうえで最も大事なことはクリティカルパスの把握である。本授業では、こうしたことをふまえたうえで工事全体の流れを明確化したネットワーク工程表を作成し、プロジェクト管理の方法を学ぶ。また、施工に際しての禁止事項や義務事項についても学修する。さらに、将来建築家として施主に分かりやすく説明する力を獲得する。		

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部建築学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容		備考
専門 教育 科目	材 料 ・ 施 工	建築積算		設計図面に従って建築工事を円滑に、かつ正確に施工するためには、建築に関する幅広い知識と経験が要求される。工事施工者がつくる「見積もり」に対して、「積算」は設計者が工事費を一定の基準で客観的に計算したものであり、建築工事費を左右する積算の知識は重要である。本授業では建築空間を構成する部材の「単価・複合単価・合成単価」の考え方や「数量拾い」の方法、「仮設・諸経費」など積算に必要な専門用語や基礎知識を知り、建築工事費の算出方法を学ぶとともに、コストコントロールの基本的な考え方を学ぶ。	
		建築積算演習		建築施工や積算は難しい用語も多く、経験のない学生には理解することは難しい分野であるが、事例写真や動画を用いて理解を深め、建築積算手法について、「建築数量積算基準」に基づいた実践的な工事費算定方法を修得する。積算用語の理解から積算書の作成まで、各回で定めるテーマに沿って演習課題の解答と解説を行い、建築積算の流れと建築物のコストの成り立ちを理解する。	
		建築マネジメント		建築が芸術的かつ工学的であると同時に、非常に深く社会やビジネスと関わりを持つという点に焦点を当て、これまでの学びを実践で活用可能にする為の科目である。自身の建築的提案内容を他者相手に社会的実現に漕ぎつける為に必要な戦略を多方面から検証していく。マーケティング・ブランディングの基本理念、データ情報の扱い方、プレゼンテーションの総合的戦略、ディベート論、経営論の基礎、人材育成の方法等、幅広く知識を得る。	
	構 造	建築構法	○	建築を初めて学ぶ者にとって、まずその仕組み全般を知ることが必要となる。そのためには建築の骨組み構造と仕上げ構造の各部の名称と仕組みを理解することから始まる。本授業では初めて建築を学ぶ学生のために、建築構造についての社会的、技術的な観点で事例にもとづいて学ぶ。住宅建築を主な対象とし、各種構造種別の特徴と構造形式、構造設計上の留意点等についての知識を修得する。	
		建築一般構造学	○	「建築構法」の講義では住宅建築を主な対象として、木構造、鉄骨造、鉄筋コンクリート造の特徴や工法を学修したが、本授業では中規模建築を対象として、これらに最もよく用いられる鉄筋コンクリート造と鉄骨造を中心に、その接合や細部の納まり、および構造設計上の留意点など、構造安全性を確保するための構法の重要性について学修する。また、建築に要求される性能とその解決策についての関係を理解し、建築計画に応用する力を身につける。	
		建築構造力学Ⅰ	○	地震や台風など自然災害の多いわが国において、建築は災害から人間を守らなければならない。そこで、設計者にはデザインのセンスとともに構造的安全性に関するセンスが要求される。構造の分野は一般構造と構造力学とに大別されるが、本授業は後者を対象としており、構造力学の基本である「力とその作用」という現象を理解するとともに、各部材に生じる力の大きさや荷重、反力、応力、モーメントの伝達方法など様々な荷重が作用する静定構造物について学び、設計者として把握しておくべき基本的な構造に対する考え方を修得する。	
		建築構造力学Ⅱ		建築や住宅は、安全かつ安心に利用できるものでなければならない。特に日本では自然災害が多く、建築や住宅は地震や台風の力に耐えるものでなければならない。そこで、本授業では「建築構造力学Ⅰ」に引き続き、部材の座屈やトラスの解析、弾性変形について学修するとともに、不静定架構の解析について理解を深める。実際の建物に多く登場する不静定構造物について、各種の荷重が作用するときの力の伝達や崩壊のメカニズムを理解することによって、構造計画および構造設計に必要な力学的なセンスを修得する。	

授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部建築学科)					
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門 教育科目	構造	建築構造力学演習Ⅰ	安全な建築をつくるには、建築に働く力の流れを理解し、部材の安全性を確認する必要があるが、授業における知識を確実なものとするため、つり合い式や反力など基本的な例題をもとに構造計算の基礎能力を培う。また、直感的な構造センスを養うため、建築模型を用いてシェル構造や折れ板構造など力の流れと形との関係についても理解する。 演習課題は静定構造物の範囲で、部材応力、モーメントなど、「建築構造力学Ⅰ」で学んだ知識の実際問題への応用能力を養成する。		
		建築構造力学演習Ⅱ	「建築構造力学演習Ⅱ」では、「建築構造力学Ⅰ・Ⅱ」及び「建築構造力学演習Ⅰ」で学んだ知識をもとに、不静定構造物の演習例題を用いて構造計算の実践的応用能力の向上を目指す。また、建築模型を用いて外部から力を受けた時の構造物の変形や歪みなどを観察する。 演習課題は解答と解説を繰り返しながら不静定トラスの応力解析や不静定ラーメンの応力解析など、「建築構造力学Ⅱ」で学んだ知識の実際問題への適応能力を養成する。		
	環境 設備	建築環境学	○ カーボンニュートラルや温室効果ガス削減など、現代においてエネルギー問題は喫緊の課題であり、建築においても建築物省エネ法が施行され省エネ基準が示されるなど、省エネルギー問題は建築の計画において重要な事項となっている。本授業では、主に建築の内・外部で起きる温熱環境・空気環境・光環境・音環境について学修する。		
		建築環境学演習	「建築環境学」の講義内容に呼応して、建築・都市空間にかかわる環境要因（熱・空気・光・音）について、各種演習課題を通じてその基本的な知識や計算力を確実に修得し、建築の設計・計画に反映できるようにする。 各回で定めるテーマ（①光環境、②温熱環境、③空気環境、④音環境）に沿った演習課題に取り組みながら、自分の力で答えを導くことを実践する。解答と解説を繰り返すことで理解を深め、応用する力を養う。		
		建築設備	建築設備は建築機能の中で主要な部分を担っている。室内の照度確保、室温調整、給排水などの快適さや健康維持などである。近年では省エネルギーを考慮した設備設計も重視される。 本授業は、建築計画・施工における空調・給排水衛生・電気その他関連設備の概要を理解し、それが何の為にあるのか、どのような建築システムの中で機能するかを技術的な説明とともに実際の画像を用いてその仕組みについて学修する。また、近年、大きな技術革新を遂げている建築設備の将来をスマート化（省エネ・機能化）やウェルネス化（快適・利便・安全）の観点から考察する。		
		建築設備演習	建築設備は、電気設備、機械設備、給排水衛生設備で構成されている。加えて、日本の排出するCO2の約30%を建築物が占めている。こうした建築物環境に配慮したCASBEEの計画など、「建築環境学」や「建築設備」の知識をもとに、本授業で計算力や設計法を身に付け、「建築設備」の授業で得た応用力を養成する。具体的には、給水・給湯設備、電気・輸送設備、照明設備など建築設備全般について、それぞれの設備の機能を十分活用し、心地よい空間を実現する力を獲得する。		
		住生活論	現在の日本の住まいに見られる間取りについて、その変遷過程を知る。また、住まい手の在り方も時とともに変化してきている。住まいと住まい手の変化の様子を知り、これからの日本の住まいについて考察を深める。 さらに、住まいを構成する諸条件について基礎事項を学び、住空間に求められる物理的・心理的機能について理解を深めるとともに、管理と維持を学ぶことを通して、住生活を科学的に見る目を養い、使い手と作り手の両側面から住まいについて考える。		
	関連 科目				

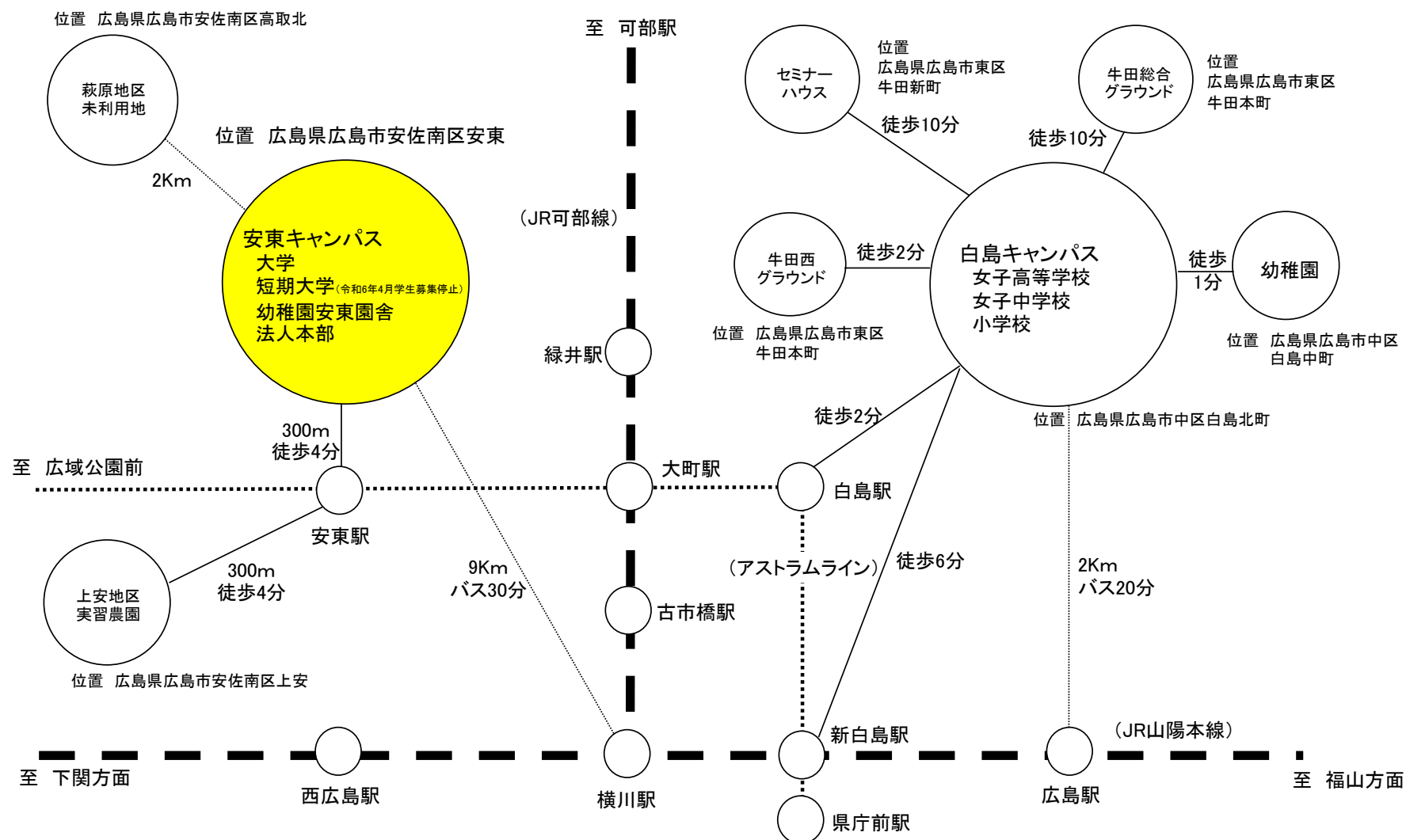
授 業 科 目 の 概 要					
(理工学部建築学科)					
科目 区分	授業科目の名称		主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	展 開 科 目	関 連 科 目	人間工学	建築は内部空間で人間が活動を行う施設である。内部空間やその中に入る家具類などには最適な寸法があり、それには人体の寸法が大きく関係している（ヒューマンスケール）。また、我々がものを選ぶときには、単に形や大きさだけではなく、色彩やテクスチャーなど、感性を左右する要因も含めて、ものを多面的に評価している。 本授業では空間やものの寸法の基礎、人間の行動特性、人間工学の応用の方法について学び、生活の中で人間工学的視点を養うことを目的とする。	
			建築比較文化論	世界には古くから地域に根差した様々な建築がある。自然発生的（アノニマス）な原初の住居の材料や構法は、その土地の気候風土、文化や社会的状況の影響を色濃く受けている。建築はいうまでもなく文化や社会の影響を受けている。本授業では、日本、中国、東アジア、ヨーロッパなどのエリアごとの文化や、キリスト教、イスラム教などの宗教を背景とする文化について学修し、国際化の進展に伴い複雑化・多様化する現代で建築を構想する際にも文化的特徴を海外と比較して考える視点を養う。	
			デッサン	デッサンは建築教育の基礎となるものである。最近では、建築完成予想透視図はCGで書かれることが多くなったが、建築家が描く手書きのバースは趣があるので今でも用いられている。 本授業では、デッサンの基礎技術を身につけるために、モチーフの量感や明暗などの表現力や観察力の向上を図る。課題は主に、建築物や、日常生活に関わる静物、人物、イメージドローイングなどを取り上げ、主に鉛筆と水彩絵具による表現の技術を修得する。初心者であっても光源や視点の位置、作画方法・色彩方法等の基礎的事項から着実に学ぶことにより、デッサンの素養を身につける。	
			色彩学	私たちの周りにある全てのものには色があり、人は様々な色に囲まれて生活している。しかし人はなぜ色彩を認識できるのだろうか。 この講義では、それを紐解くための光学・生理学・心理学など科学的な基本要素とともに、色の性質や特徴など基礎的な知識と、色の感情効果などの色彩心理を理解するとともに、様々な色彩の調和など色彩構成に触れ、より豊かで快適な建築空間をデザインするためのカラーコーディネートの知識の修得を目的とする。	
			スケッチ表現	スケッチはデッサンと並んで建築表現の基礎となるものである。最近ではCGがよく用いられるが、建築家が描く手書きのスケッチには手書きのぬくもりや趣があり、また簡便にスピーディに説明することができるため、手書きスケッチに勝るものはない。本授業では、建築模型の外観、インテリア、家具、人、車、植栽などの点景、エクステリアなど、建築家として実践的に活用できる題材を扱う。自分の考える想いやイメージを素早く分かりやすく表現し、第三者に伝える力を養う。	

都道府県内における位置関係の図面

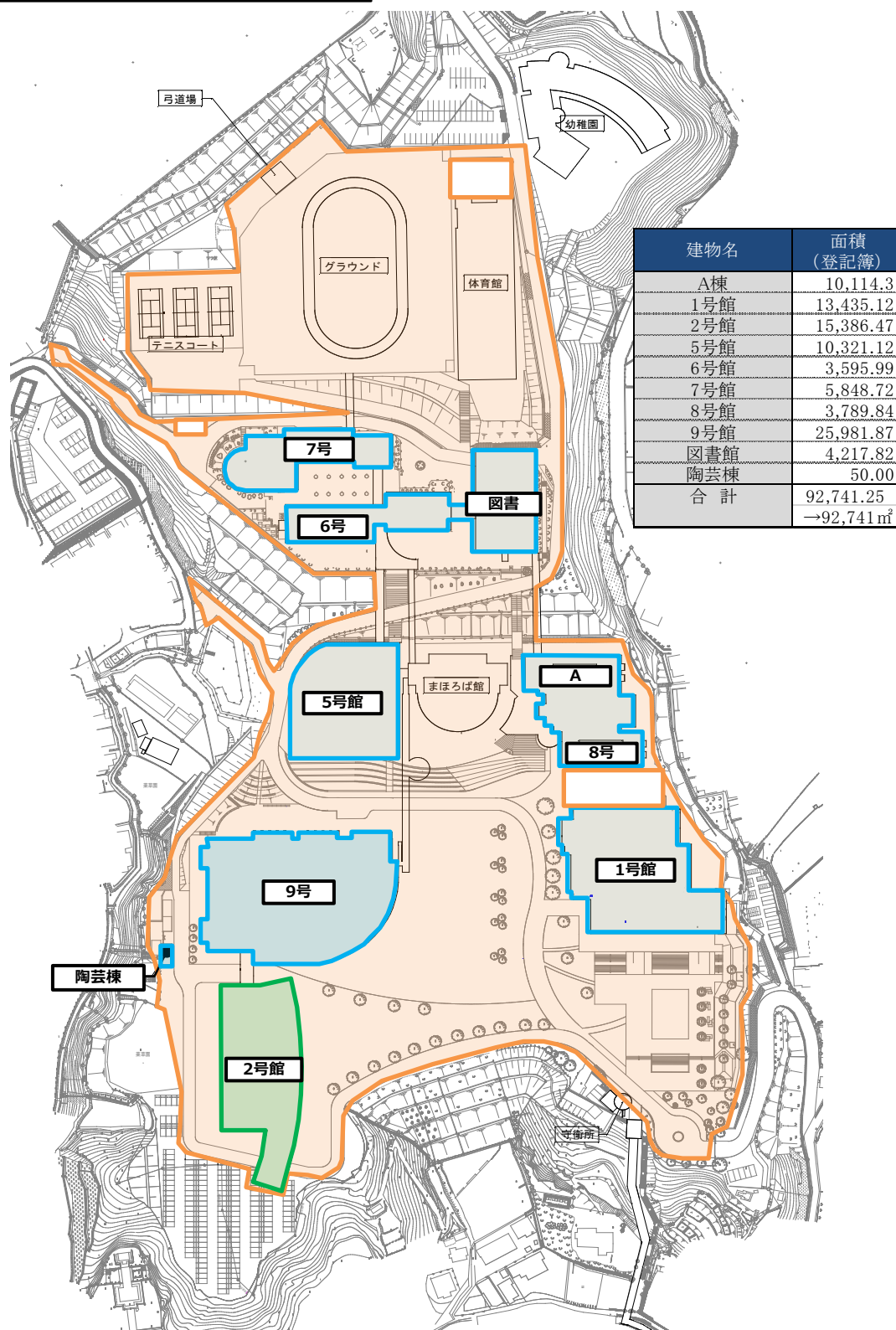


最寄り駅からの距離、交通機関及び所要時間がわかる図面

校地・校舎の概要について学校団地関係図



校舎、運動場等の配置



- : 理工学部(生物科学科・情報科学科・建築学科)専用施設を含む校舎(その他は大学で共用)
- : 理工学部(生物科学科・情報科学科・建築学科)使用校舎(大学で共用)
- : 校地面積に算入(校地面積 84,495 m²)

安田女子大学学則

第1章 目的

(目的)

第1条 安田女子大学（以下「本学」という。）は、教育基本法（平成18年法律第120号）及び学校教育法（昭和22年法律第26号）の精神に則り、女子に広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を養い、もって文化の向上に寄与する人格円満な女子を育成することを目的とする。

(自己評価及び教育内容等の改善のための組織等)

第1条の2 本学は、前条の目的を達成するため、大学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表するとともに、教育の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。

2 前項の点検及び評価並びに教育の内容及び方法の改善を図るために必要な事項は、別に定める。

(情報の積極的な公表)

第1条の3 本学は、教育研究活動等の状況について、刊行物への掲載その他広く周知を図ることができる方法によって、積極的に情報を公表するものとする。

第2章 学部及び大学院組織

(学部・学科)

第2条 本学に、次の学部及び学科を置く。

文学部	日本文学科
	書道学科
	英語英米文学科
教育学部	児童教育学科
	幼児教育学科
心理学部	現代心理学科
	ビジネス心理学科
現代ビジネス学部	現代ビジネス学科
	国際観光ビジネス学科
	公共経営学科
家政学部	生活デザイン学科
	管理栄養学科
	造形デザイン学科
薬学部	薬学科
看護学部	看護学科
理工学部	生物科学科
	情報科学科
	建築学科

2 学部及び学科ごとの目的に関し必要な事項は、別に定める。

(大学院)

第2条の2 本学に、大学院を置く。

2 大学院学則は、別に定める。

第3章 教育課程

(教育課程)

第3条 本学の教育課程は、別表第1のとおりとし、これを4年間に配当して教授する。ただし、薬学部にあつては、6年間に配当して教授する。

第4章 修業年限、学年、学期、授業期間及び休業日

(修業年限)

第4条 本学の修業年限は、4年とする。ただし、薬学部にあつては、6年とする。

2 在学期間は、6年を超えることができない。ただし、薬学部にあつては、9年を超えることができない。

(学年)

第5条 学年は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(学期)

第6条 学年を分けて次の2期とする。

前期 4月1日から9月19日まで

後期 9月20日から翌年3月31日まで

(1年間の授業期間)

第6条の2 1年間の授業を行う期間は、35週にわたることを原則とする。

(休業日)

第7条 授業を行わない日（以下「休業日」という。）は、次の各号に掲げるとおりとする。ただし、学長が必要と認めたときは、休業日を臨時に変更し、又は臨時の休業日を定めることができる。

(1) 国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日

(2) 日曜日

(3) 夏季休業 8月1日から9月19日まで

(4) 冬季休業 12月24日から翌年1月7日まで

(5) 学年末休業 2月1日から3月31日まで

第5章 履修方法、免許・資格、単位の基準及び単位認定

(履修方法)

第8条 学生（薬学部の学生を除く。）は、次の各号の規定に従い4年以上にわたって所定科目を履修し、卒業単位128単位以上を修得しなければならない。

(1) 特別科目 4単位

(2) 共通教育科目 32単位以上

(3) 専門教育科目 92単位以上

2 薬学部の学生は、次の各号の規定に従い6年以上にわたって所定科目を履修し、卒業単位197単位以上を修得しなければならない。

(1) 特別科目 4単位

(2) 共通教育科目 32単位以上

(3) 専門教育科目 161単位以上

(免許・資格)

第8条の2 教員の免許状授与の所要資格を取得しようとする者は、教育職員免許法（昭和24年法律第147号）及び同法施行規則（昭和29年文部省令第26号）に定める所要の単位を修得しなければならない。

2 前項の規定に基づき本学で取得できる教員の免許状の種類は、次の表のとおりとする。

学 部	学 科	免許状の種類	免許教科
文学部	日本文学科	中学校教諭一種免許状	国 語
		高等学校教諭一種免許状	国 語
		高等学校教諭一種免許状	書 道
	書道学科	中学校教諭一種免許状	国 語
		高等学校教諭一種免許状	国 語
		高等学校教諭一種免許状	書 道
	英語英米文学科	中学校教諭一種免許状	英 語

		高等学校教諭一種免許状	英 語
教育学部	児童教育学科	小学校教諭一種免許状 幼稚園教諭一種免許状	
	幼児教育学科	幼稚園教諭一種免許状	
心理学部	現代心理学科	養護教諭一種免許状	
家政学部	生活デザイン学科	中学校教諭一種免許状 高等学校教諭一種免許状	家 庭 家 庭
	管理栄養学科	中学校教諭一種免許状 高等学校教諭一種免許状 栄養教諭一種免許状	家 庭 家 庭

- 3 司書の資格を取得しようとする者は、図書館法（昭和25年法律第118号）及び同法施行規則（昭和25年文部省令第27号）に定める単位を修得しなければならない。
- 4 司書教諭の資格を取得しようとする者は、学校図書館法（昭和28年法律第185号）及び学校図書館司書教諭講習規程（昭和29年文部省令第21号）に定める単位を修得しなければならない。
- 5 学芸員の資格を取得しようとする者は、博物館法（昭和26年法律第285号）及び同法施行規則（昭和30年文部省令第24号）に定める単位を修得しなければならない。
- 6 保育士の資格を取得しようとする者は、児童福祉法施行令（昭和23年政令第74号）及び同法施行規則（昭和23年厚生省令第11号）に定める単位を修得しなければならない。
- 7 建築士の受験資格を取得しようとする者は、建築士法施行令（昭和25年政令第201号）及び同法施行規則（昭和25年建設省令第38号）に定める単位を修得しなければならない。
- 8 栄養士の資格を取得しようとする者は、栄養士法施行令（昭和28年政令第231号）及び同法施行規則（昭和23年厚生省令第2号）に定める単位を修得しなければならない。
- 9 管理栄養士の受験資格を取得しようとする者は、栄養士法施行令（昭和28年政令第231号）及び管理栄養士学校指定規則（昭和41年文部省・厚生省令第2号）に定める単位を修得しなければならない。
- 10 食品衛生管理者及び食品衛生監視員の任用資格を取得しようとする者は、食品衛生法（昭和22年法律第233号）及び同法施行規則（昭和23年厚生省令第23号）に基づく養成施設の登録基準に定める単位を修得しなければならない。
- 11 薬剤師の国家試験受験資格を取得しようとする者は、薬剤師法（昭和35年法律第146号）、同法施行令（昭和36年政令第13号）、同法施行規則（昭和36年厚生省令第5号）及び学校教育法（昭和22年法律第26号）における薬学の正規課程を修得しなければならない。
- 12 看護師の国家試験受験資格を取得しようとする者は、保健師助産師看護師法（昭和23年法律第203号）、同法施行令（昭和28年政令第386号）及び同法施行規則（昭和25年厚生省令第37号）に定める科目を履修し、所定の単位を修得しなければならない。
- 13 保健師の国家試験受験資格を取得しようとする者は、保健師助産師看護師法（昭和23年法律第203号）、同法施行令（昭和28年政令第386号）及び同法施行規則（昭和25年厚生省令第37号）に定める科目を履修し、所定の単位を修得しなければならない。
- 14 助産師の国家試験受験資格を取得しようとする者は、保健師助産師看護師法（昭和23年法律第203号）、同法施行令（昭和28年政令第386号）及び同法施行規則（昭和25年厚生省令第37号）に定める科目を履修し、所定の単位を修得しなければならない。
- 15 登録日本語教員の受験資格を取得しようとする者は、日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律（令和5年法律第41号）及び同法施行規則（令和5年文部科学省令第39号）に基づく認定機関の定める科目を履修し、所定の単位を修得しなければならない。

（単位の基準）

第9条 第8条の単位の基準は、次のとおりとする。

- (1) 講義については、15時間の授業をもって1単位とする。

- (2) 演習については、30時間の授業をもって1単位とする。ただし、別に定める授業科目については、15時間の授業をもって1単位とする。
- (3) 実験、実習及び実技については、45時間をもって1単位とする。ただし、別に定める授業科目については、30時間の授業をもって1単位とする。
- (4) 一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち2以上の方法の併用により行う場合については、その組合せに応じ、前3号に規定する基準を考慮して学長が定める時間の授業をもって1単位とする。
- 2 前項の規定にかかわらず、卒業論文、卒業研究、卒業制作等の授業科目については、これらの学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、これらに必要な学修等を考慮して、単位数を定めることができる。
- (1年次に入学した者の既修得単位等の認定)

第9条の2 本学が教育上有益と認めるときは、学生が本学に入学する前に大学又は短期大学において履修した授業科目について修得した単位（科目等履修生として修得した単位を含む。）を、本学における授業科目の履修により修得したとみなすことができる。

- 2 本学が教育上有益と認めるときは、学生が本学に入学する前に短期大学又は高等専門学校の専攻科において行った学修その他文部科学大臣が別に定める学修を、本学における授業科目の履修とみなし、単位を与えることができる。
- 3 前2項の規定により修得したものとみなし、又は与えることのできる単位数は、30単位を超えないものとする。
- 4 1年次に入学した者の既修得単位の認定に関し必要な事項は、別に定める。
- (他の大学における授業科目の履修等)

第9条の3 本学は、教育上有益と認めるときは、学生が他の大学において履修した授業科目について修得した単位数を、30単位を超えない範囲で本学における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

- 2 前項の規定は、学生が外国の大学に留学する場合に準用する。
- 3 前2項に規定する授業科目の履修等に関し必要な事項は、別に定める。
- (単位認定)

第10条 単位修得の認定は、試験、論文又は報告書その他の方法によって行い、一つの授業科目を履修した者に対しては、所定の単位を与える。

- 2 前項に関する細則は、別に定める。
- (履修科目の登録の上限)

第10条の2 学生が各年次にわたって適切に授業科目を履修するため、卒業の要件として学生が修得すべき単位数について、学生が1年間又は1学期に履修科目として登録することができる単位数の上限を定めることができる。

- 2 所定の単位を優れた成績をもって修得した学生については、前項に定める上限を超えて履修科目の登録を認めることができる。
- (学習評価)

第10条の3 学習評価は、秀、優、良、可及び不可の評価をもってし、可以上を合格とし、不可は不合格とする。

第6章 卒業及び学位

(卒業)

第11条 第4条第1項に定める修業年限以上在学し、所定の授業科目を履修してその単位を修得した者には、当該学部の教授会の意見を聴いて、学長が卒業を認定し、卒業証書・学位記を授与する。

- 2 本学に3年以上在学した者（薬学部を除く。）が、卒業に必要な所定の単位を優秀な成績で修得したと認める場合には、第4条および第8条の規定にかかわらず、当該学部の教授会の意見を聴いて、学長が早期卒業を認定し、卒業証書・学位記を授与することができる。
- 3 前項の早期卒業に関する規定は、別に定める。
- (学位の授与)

第12条 本学を卒業した者には、学士の学位を授与する。

- 2 学士の学位の授与については、別に定める。

第7章 収容定員

(収容定員)

第13条 学生の収容定員は、次の表のとおりとする。

学 部	学 科	入学定員	編入学定員	収容定員
文学部	日本文学科	90名	1名(第3年次)	362名
	書道学科	30名	1名(第3年次)	122名
	英語英米文学科	70名	2名(第3年次)	284名
教育学部	児童教育学科	60名	1名(第3年次)	242名
	幼児教育学科	130名	2名(第3年次)	524名
心理学部	現代心理学科	90名	1名(第3年次)	362名
	ビジネス心理学科	60名	1名(第3年次)	242名
現代ビジネス学部	現代ビジネス学科	80名	1名(第3年次)	322名
	国際観光ビジネス学科	80名	1名(第3年次)	322名
	公共経営学科	60名	1名(第3年次)	242名
家政学部	生活デザイン学科	120名	2名(第3年次)	484名
	管理栄養学科	120名	—	480名
	造形デザイン学科	75名	—	300名
薬学部	薬学科	100名	2名(第3年次) 2名(第4年次)	614名
看護学部	看護学科	120名	—	480名
理工学部	生物科学科	60名	—	240名
	情報科学科	60名	—	240名
	建築学科	60名	—	240名
計	—	1,465名	16名(第3年次) 2名(第4年次)	6,102名

第8章 入学、休学、復学、退学、転学、転学部、転学科、再入学、編入学、留学及び除籍

(入学時期)

第14条 入学時期は、学年の始めとする。

(入学資格及び入学願)

第15条 本学に入学することができる者は、次の各号のいずれかに該当する女子で、かつ、本学の入学者選抜試験に合格したものととする。

- (1) 高等学校又は中等教育学校を卒業した者
 - (2) 通常の課程による12年の学校教育を修了した者（通常の課程以外の課程により、これに相当する学校教育を修了した者を含む。）
 - (3) 学校教育法施行規則（昭和22年文部省令第11号）第150条の規定により高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められる者
- 2 前項第3号の入学資格に関し必要な事項は、別に定める。
- 3 本学に入学を志願する者は、所定の期日までに所定の手続をしなければならない。

(入学手続)

第16条 本学が行う入学者選抜試験に合格した者は、別に定めるところにより、入学の手続をしなければならない。

(入学許可)

第16条の2 入学手続を完了した者に対して、学長は入学を許可する。

- 2 入学を許可された者は、誓約書等所定の書類を提出しなければならない。

(休学)

第17条 学生は、疾病その他の理由により2ヶ月以上学習することができない場合は、事由を具して学長に願い出て、その許可を得て、当該学期又は学年の終りまで休学することができる。ただし、疾病の場合は、医師の診断書を添付しなければならない。

- 2 疾病その他の事由によって学習することが不適当と認められる場合は、学長は休学を命ずることがある。

第17条の2 休学期間は、通算して2年を超えることはできない。

2 休学期間は、在学期間に算入しない。

(復学)

第17条の3 学生は、休学期間満了の場合又は休学期間中であってもその事由が消滅した場合は、学長の許可を得て復学することができる。ただし、疾病による事由により休学した者が復学しようとする場合は、医師の診断書を添付しなければならない。

(転学部及び転学科)

第17条の3の2 学生が他の学部転学部又は同一学部の他の学科に転学科の志願をしようとするときは、事由を具して学長に願い出て、その許可を受けなければならない。

2 転学部及び転学科に関する規定は、別に定める。

(退学及び転学)

第17条の4 学生が退学又は他の大学に転学しようとするときは、その事由を具して学長に願い出て、その許可を受けなければならない。

(再入学)

第17条の5 前条の規定により本学を退学した者又は第17条の8第1項第2号若しくは第3号の規定により本学を除籍された者が、同一学科に再入学を願い出たときは、学長は入学を許可することがある。

2 再入学の手続等に関し必要な事項は、別に定める。

(編入学)

第17条の6 本学に編入学を希望する者があるときは、選考により第3年次（薬学部にあつては、第3年次又は第4年次）への編入学を許可することができる。

2 編入学に関する規定は、別に定める。

(留学)

第17条の7 外国の大学で学修することを志願する者は、学長の許可を得て留学することができる。

2 前項の許可を得て留学した期間は、第4条第1項に定める修業年限に含めることができる。

3 留学に関する規定は、別に定める。

(除籍)

第17条の8 学生が次の各号のいずれかに該当するときは、学長はこれを除籍することがある。

(1) 第4条第2項に定める在学期間を経過しても、なお卒業の認定が得られない者

(2) 第17条の2に定める休学期間を超えた者

(3) 授業料その他諸納付金の納入を怠り、督促を受けてもなお納入しない者

2 前項第3号に規定する授業料等の未納者に係る除籍手続に関し必要な事項は、別に定める。

第9章 賞罰

(表彰)

第18条 学長は、必要と認めたときは、教授会の意見を聴いて学生を表彰する。

(懲戒)

第19条 学長は、学生が本学の学則その他の規則に違反し、又は学生としての本分に反する行為があつたときは、教授会の意見を聴いてこれを懲戒する。

2 懲戒の種類は、訓告、停学及び退学とする。

3 前項に規定する退学は、次の各号のいずれかに該当する場合に行う。

(1) 性行不良で改善の見込みがないと認められる者

(2) 学力劣等で、成業の見込みがないと認められる者

(3) 正当の理由がなくて出席常でない者

(4) 学内の秩序を著しく乱した者

(5) 学生の本分に著しく反した者

4 前3項に規定する懲戒の処分の手続に関し必要な事項は、別に定める。

第19条の2 削除

第19条の3 削除

第10章 科目等履修生、委託生、研究生、外国人学生及び特別聴講学生

(科目等履修生、委託生、研究生及び外国人学生)

第20条 本学に科目等履修生、委託生、研究生及び外国人学生を入学させることがある。

2 前項に関する規定は、別にこれを定める。

第20条の2 第17条の8及び第19条の規定は、科目等履修生、委託生、研究生及び外国人学生に準用する。

2 削除

(特別聴講学生)

第20条の3 他の大学又は短期大学との協議に基づき、当該大学又は短期大学の学生に授業科目の履修を認めることができる。

2 前項の規定により、授業科目の履修を認められた学生は、特別聴講学生と称する。

3 特別聴講学生に関し必要な事項は、別に定める。

第11章 授業料等諸納付金

(授業料等諸納付金)

第21条 本学における入学検定料、入学料及び授業料並びに施設設備費の額は、別表第2に定めるとおりとし、それぞれ所定の期日までに納入しなければならない。

2 教育実習等に関する諸経費は、別に定めるところにより徴収する。

3 既に納めた納付金は、理由の如何にかかわらず、一切これを返還しない。

4 休学した者の授業料及び諸納付金は、免除する。ただし、別に定める在籍料を納入しなければならない。

5 退学を許可された者又は転学を許可された者は、その期の授業料及び諸納付金を納入しなければならない。

6 停学を命ぜられた者は、その期間中の授業料及び諸納付金を納入しなければならない。

7 薬学部及び理工学部の学生で、学力優秀なものに対して、授業料の全部又は一部を免除することができる。

(納付金の納付方法)

第22条 授業料等諸納付金の納入に関し必要な事項は、別に定める。

第12章 職員組織

(職員)

第23条 本学に、次の職員を置く。

学長、学部長、教授、准教授、講師、助教、助手、事務職員、その他の職員

2 本学に、必要に応じ、次の職員を置くことができる。

副学長、学長補佐

3 その他必要な事項は、別に定める。

(事務組織)

第24条 本学の事務組織については、別に定めるところによる。

第13章 教授会

(大学教授会)

第25条 本学に、大学教授会を置く。

2 大学教授会は、学長が次の各号に掲げる全学的な事項について決定を行うに当たり意見を述べるものとする。

(1) 学生の入学、卒業及び課程の修了に関する基本的な事項

(2) 学位の授与に関する基本的な事項

(3) 前2号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項で、大学教授会の意見を聴くことが必要なものとして学長が定めるもの

3 大学教授会は、前項に規定するもののほか、学長がつかさどる教育研究に関する全学的な事項について審議し、及び学長の求めに応じ、意見を述べることができる。

4 大学教授会は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

(1) 学長

(2) 教授、准教授、講師、助教

- 5 大学教授会には、学長が必要と認めたときは、その他の職員を加えることができる。
- 6 大学教授会に関し必要な事項は、別に定める。

(学部教授会)

第25条の2 本学の各学部、学部教授会を置く。

- 2 学部教授会は、学長が次の各号に掲げる当該学部に関する事項について決定を行うに当たり意見を述べるものとする。
 - (1) 学生の入学、卒業及び課程の修了に関する事項
 - (2) 学位の授与に関する事項
 - (3) 前2号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項で、学部教授会の意見を聴くことが必要なものとして学長が定めるもの
- 3 学部教授会は、前項に規定するもののほか、学長及び当該学部長（以下この項において「学長等」という。）がつかさどる教育研究に関する事項について審議し、及び学長等の求めに応じ、意見を述べることができる。
- 4 学部教授会は、次の各号に掲げる者をもって組織する。
 - (1) 学部長
 - (2) 当該学部教授、准教授、講師、助教
- 5 学部教授会には、学部長が必要と認めたときは、その他の職員を加えることができる。
- 6 学部教授会に関し必要な事項は、別に定める。

(代議員会等)

第26条 大学教授会は、その定めるところにより、学校教育法施行規則（昭和22年文部省令第11号）第143条に規定された代議員会等（審議機関）を置くことができる。

- 2 大学教授会は、その定めるところにより、代議員会等の議決をもって、大学教授会の議決とすることができる。
- 3 代議員会等に関し必要な事項は、別に定める。

第14章 公開講座

(公開講座)

第27条 本学において、公開講座を設けることがある。

- 2 前項の公開講座に関する規定は、別に定める。

第15章 附属施設

(附属図書館)

第28条 本学に、附属図書館を置く。

- 2 前項の附属図書館に関する規定は、別に定める。

(附属研究所)

第28条の2 本学に、次の附属研究所を置く。

実践教育研究所

発達・臨床心理研究所

- 2 前項の附属研究所に関する規定は、別に定める。

第28条の3 削除

(附属薬用植物園)

第28条の4 本学に、附属薬用植物園を置く。

- 2 前項の附属薬用植物園に関する規定は、別に定める。

(附属学習支援センター)

第28条の5 本学に、附属学習支援センターを置く。

- 2 前項の附属学習支援センターに関する規定は、別に定める。

(附属教職センター)

第28条の5の2 本学に、附属教職センターを置く。

- 2 前項の附属教職センターに関する規定は、別に定める。

(附属保健センター)

第28条の6 本学に、附属保健センターを置く。

- 2 前項の付属保健センターに関する規定は、別に定める。
(付属幼稚園)

第29条 本学に、付属幼稚園を置く。

- 2 前項の付属幼稚園に関する規定は、別に定める。

第16章 厚生施設

(厚生施設)

第30条 本学に厚生施設を設け、学生及び職員の厚生を図る。

- 2 前項の厚生施設に関する規定は、別に定める。

第17章 雑則

(委任)

第31条 この学則の施行に関して必要な事項は、学長が別に定める。

附 則

この学則は、昭和41年4月1日から施行する。

附 則

この改正学則は、昭和42年4月1日から施行する。

附 則

この改正学則は、昭和43年4月1日から施行する。

附 則

この改正学則は、昭和46年4月1日から施行する。

附 則

この改正学則は、昭和49年4月1日から施行する。

附 則

この改正学則は、昭和50年4月1日から施行し、昭和50年度入学者から適用する。ただし、第13条の文学部児童教育学科という総定員数は昭和50年度を初年度とし、昭和53年度（完成時）における総定員数を示す。また、第21条第1項第4号の施設設備費については、昭和49年度以前の入学者についても適用する。

附 則

この改正学則は、昭和51年4月1日から施行し、第21条については昭和51年度入学者から適用する。ただし、第13条の文学部日本文学科及び英米文学科という総定員数は、昭和51年から入学定員増を行い、昭和54年度以後における総定員数を示す。

附 則

この改正学則は、昭和55年4月1日から施行し、第21条については昭和55年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、昭和56年4月1日から施行し、第21条については昭和56年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、昭和57年4月1日から施行し、第21条については昭和57年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、昭和58年4月1日から施行し、第21条については昭和58年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、昭和58年4月1日から施行し、第3条別表2、英米文学科の教育課程については昭和57年度入学者から適用する。

附 則

- 1 この改正学則は、昭和59年4月1日から施行し、第2条、第8条第2項、第13条及び第3条別表2については昭和57年度入学者から適用する。
- 2 この改正学則施行の際、現に在学する昭和56年度入学者については、なお従前の例による。

附 則

この改正学則は、昭和59年4月1日から施行し、第21条については昭和59年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、昭和60年4月1日から施行し、第3条別表1日本文学科の教育課程、同条別表2英語英米文学科の教育課程、同条別表3児童教育学科の教育課程及び第13条については、昭和60年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、昭和60年4月1日から施行し、第8条第5項及び第21条については、昭和60年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、昭和61年4月1日から施行し、昭和61年度入学者から適用する。ただし、第21条第1項第4号の施設設備費については、昭和60年度以前の入学者についても適用する。

附 則

この改正学則は、昭和62年4月1日から施行し、昭和62年度入学者から適用する。ただし、第21条第1項第4号の施設設備費については、昭和61年度以前の入学者についても適用する。

附 則

この改正学則は、昭和63年4月1日から施行し、第21条については、昭和63年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、昭和64年4月1日から施行し、昭和64年度入学者から適用する。ただし、第21条第1項第4号の施設設備費については、昭和63年度以前の入学者についても適用する。

附 則

- この改正学則は、平成元年4月1日から施行する。ただし、第21条第4項の規定は施行日前の休学者から適用する。
- (別表2)教育課程・英語英米文学科の表中、一般教育科目・外国語科目・保健体育科目・専門教育科目Ⅰ及び専門教育科目Ⅱに係る(別表2-2)教育課程・英語英米文学科の表は、平成元年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、平成元年10月24日から施行する。

附 則

この改正学則は、平成元年12月1日から施行し、平成2年度入学者から適用する。

附 則

- この改正学則は、平成2年4月1日から施行する。
- (別表1-2)、(別表2-3)及び(別表3-2)の表は、平成2年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、平成2年12月1日から施行し、平成3年度入学者から適用する。

附 則

- この改正学則は、平成3年4月1日から施行する。
- (別表2-4)及び(別表3-3)の表は平成3年度入学者から適用する。
- 第13条の規定にかかわらず平成3年度から平成11年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

区 分	入学定員
日本文学科	170名
英語英米文学科	170名
児童教育学科	90名
計	430名

附 則

- この改正学則は、平成3年11月1日から施行する。
- 改正後の第21条第1項第3号については、平成4年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、平成4年2月6日から施行する。

附 則

- 1 この改正学則は、平成4年4月1日から施行する。
- 2 (別表1-3)、(別表2-5)及び(別表3-4)の表は、平成3年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、平成4年10月26日から施行し、平成5年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、平成5年4月1日から施行する。

附 則

この改正学則は、平成6年4月1日から施行し、平成6年度入学者から適用する。ただし、第21条第1項第4号の施設設備費については、平成5年度以前の入学者にも適用する。

附 則

- 1 この改正学則は、平成7年4月1日から施行する。
- 2 改正後の第21条第1項第1号及び第3号については、平成7年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、平成8年4月1日から施行し、平成8年度入学者から適用する。ただし、第21条第1項第4号の施設設備費については、平成7年度以前の入学者にも適用する。

附 則

- 1 この改正学則は、平成9年4月1日から施行する。
- 2 改正後の第21条第1項第3号については、平成9年度入学者から適用する。

附 則

- 1 この改正学則は、平成10年4月1日から施行する。
- 2 改正後の第21条第1項第3号については、平成10年度入学者から適用する。

附 則

この改正学則は、平成11年4月1日から施行する。

附 則

- 1 この改正学則は、平成12年4月1日から施行する。
- 2 第13条の規定にかかわらず、平成12年度から平成16年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

区 分	入学定員
日本文学科	150名
英語英米文学科	135名
児童教育学科	90名
人間科学科	120名
計	495名

附 則

- 1 この改正学則は、平成13年4月1日から施行する。
- 2 第13条の規定にかかわらず、平成13年度から平成16年度までの間の英語英米文学科の入学定員は、次のとおりとする。

学 科	入学定員
英語英米文学科	135名

附 則

- 1 この改正学則は、平成14年4月1日から施行する。
- 2 第13条の規定にかかわらず、日本文学科の編入学定員については、平成16年度編入学生から適用する。

附 則

この改正学則は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

- 1 この改正学則は、平成16年4月1日から施行する。
- 2 第13条の規定にかかわらず、平成16年度から平成18年度までの間の文学部人間科学科の収容定員は、次のとおりとする。

区 分	平成16年度	平成17年度	平成18年度
-----	--------	--------	--------

	入学定員	収容定員	入学定員	収容定員	入学定員	収容定員
文学部 人間科学科	— 名	340名	— 名	220名	— 名	100名

- 3 文学部人間科学科は、第2条の規定にかかわらず、平成16年3月31日に当該学科に在学する者が在学しなくなるまでの間、存続するものとする。

附 則

この改正学則は、平成17年4月1日から施行する。

附 則

この改正学則は、平成18年4月1日から施行する。

附 則

この改正学則は、平成19年4月1日から施行する。ただし、第8条第1項の規定は、各学部履修規程に定める年度の入学生から適用する。

附 則

この改正学則は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この改正学則は、平成20年4月1日から施行する。

附 則

この改正学則は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この改正学則は、平成22年4月1日から施行する。

附 則

この改正学則は、平成22年10月1日から施行し、平成23年度に転学部等をする者から適用する。

附 則

- 1 この改正学則は、平成23年4月1日から施行する。
- 2 第13条の規定にかかわらず、平成23年度から平成25年度までの間の文学部日本文学科書道文化専攻、文学部書道学科、文学部英語英米文学科及び家政学部生活デザイン学科の収容定員は、次のとおりとする。

区 分	平成23年度			平成24年度			平成25年度		
	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	入学 定員	編入学定 員	収容 定員	入学 定員	編入学 定員	収容 定員
文学部 日本文学科 書道文化専攻	— 名	1名	92名	— 名	1名	62名	— 名	— 名	31名
文学部 書道学科	30名	— 名	30名	30名	— 名	60名	30名	1名	91名
文学部 英語英米文学科	110名	2名	474名	110名	2名	464名	110名	2名	454名
家政学部 生活デザイン学科	100名	2名	364名	100名	2名	384名	100名	2名	394名

附 則

この改正学則は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この改正学則は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

- 1 この改正学則は、平成24年4月1日から施行する。
- 2 第13条の規定にかかわらず、平成24年度から平成26年度までの間の文学部の児童教育学科及び心理学科、教育学部児童教育学科、心理学部心理学科、現代ビジネス学部現代ビジネス学科及び家政学部生活デザイン学科の収容定員並びに平成24年度から平成28年度までの間の薬学部薬学科の収容定員は、次の表のとおりとする。

区 分	平成24年度			平成25年度			平成26年度		
	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	入学 定員	編入学定 員	収容 定員	入学 定員	編入学 定員	収容 定員

文学部 児童教育学科	— 名	10名	350名	— 名	10名	240名	— 名	— 名	120名
文学部 心理学科	— 名	2名	274名	— 名	2名	184名	— 名	— 名	92名
教育学部 児童教育学科	110名	— 名	110名	110名	— 名	220名	110名	10名	340名
心理学部 心理学科	90名	— 名	90名	90名	— 名	180名	90名	2名	272名
現代ビジネス学部 現代ビジネス学科	120名	2名	454名	120名	2名	464名	120名	2名	474名
家政学部 生活デザイン学科	105名	2名	389名	105名	2名	404名	105名	2名	419名
薬学部 薬学科	120名	— 名	770名	120名	— 名	760名	120名	— 名	750名

区 分	平成27年度			平成28年度		
	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	入学 定員	編入学定 員	収容 定員
薬学部 薬学科	120名	— 名	740名	120名	— 名	730名

- 3 文学部の児童教育学科及び心理学科は、この規程による改正後の第2条の規定にかかわらず、平成24年3月31日に当該学科に在学する者が在学しなくなるまでの間、存続するものとする。

附 則

この改正学則は、平成24年4月1日から施行する。

附 則

- 1 この改正学則は、平成25年4月1日から施行する。
- 2 第13条の規定にかかわらず、家政学部管理栄養学科の平成25年度から平成27年度までの間の収容定員は、次の表のとおりとする。

区 分	平成25年度			平成26年度			平成27年度		
	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	入学 定員	編入学定 員	収容 定員	入学 定員	編入学 定員	収容 定員
家政学部 管理栄養学科	120名	—	360名	120名	—	400名	120名	—	440名

附 則

- 1 この改正学則は、平成26年4月1日から施行する。
- 2 この改正学則による改正後の安田女子大学学則（以下「新学則」という。）第13条の規定にかかわらず、看護学部看護学科及び全学部に係る平成26年度から平成28年度までの間の収容定員については、次の表のとおりとする。

区 分	平成26年度	平成27年度	平成28年度
	収容定員	収容定員	収容定員
看護学部看護学科	120名	240名	360名
計	3,915名	4,080名	4,230名

- 3 新学則別表第1の規定は、平成26年度入学生から適用し、平成25年度以前の入学生については、各学部が定めるところによる。

附 則

- 1 この改正学則は、平成27年4月1日から施行する。
- 2 この改正学則による改正後の安田女子大学学則（以下「新学則」という。）第8条第2項及び第8条の2第2項の規定は、平成27年度入学生から適用し、平成26年度以前の入学生については、なお従前の例による。
- 3 現代ビジネス学部国際観光ビジネス学科及び全学部に係る平成27年度から平成29年度までの間の収容定員については、新学則第13条の規定にかかわらず、次の表のとおりとする。

区 分	平成27年度	平成28年度	平成29年度
	収容定員	収容定員	収容定員
現代ビジネス学部国際観光ビジネス学科	60名	120名	181名
計	4,140名	4,350名	4,521名

- 4 新学則別表第1の規定は、平成27年度入学生から適用し、平成26年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- この改正学則は、平成27年11月1日から施行する。
- この改正学則による改正後の安田女子大学学則の規定は、平成28年度編入学から適用する。

附 則

- この改正学則は、平成28年4月1日から施行する。
- この改正学則による改正後の安田女子大学学則（以下「新学則」という。）第8条の2第2項の規定は、平成28年度入学生から適用し、平成27年度以前の入学生については、なお従前の例による。
- 教育学部児童教育学科、家政学部造形デザイン学科及び全学部に係る平成28年度から平成30年度までの間の収容定員については、新学則第13条の規定にかかわらず、次の表のとおりとする。

区 分	平成28年度	平成29年度	平成30年度
	収容定員	収容定員	収容定員
教育学部児童教育学科	500名	540名	580名
家政学部造形デザイン学科	80名	160名	240名
計	4,470名	4,761名	4,942名

- 4 新学則別表第1の規定は、平成28年度入学生から適用し、平成27年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- この改正学則は、平成29年4月1日から施行する。
- この改正学則による改正後の安田女子大学学則（以下「新学則」という。）第8条第2項の規定は、平成27年度入学生から適用し、平成26年度以前の入学生については、なお従前の例による。
- 新学則別表第1の規定は、平成29年度入学生から適用し、平成28年度以前の入学生については、なお従前の例による。
- 現代ビジネス学部国際観光ビジネス学科の教育課程については、前項の規定にかかわらず、平成27年度入学生から適用する。
- 薬学部薬学科の教育課程については、第3項の規定にかかわらず、平成27年度入学生から適用し、平成26年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- この改正学則は、平成30年4月1日から施行する。
- 心理学部心理学科は、この改正学則による改正後の安田女子大学学則（以下「新学則」という。）第2条第1項の規定にかかわらず、平成30年3月31日に当該学科に在学する者が在学しなくなるまでの間、存続するものとする。この場合において、同学科に在学する学生に係る教育課程、履修方法その他修学に関する事項については、なお従前の例による。
- 平成30年度から同32年度までの間の心理学部の心理学科、現代心理学科及びビジネス心理学科に係る収容定員は、新学則第13条の規定にかかわらず、次の表のとおりとする。

区 分		平成30年度	平成31年度	平成32年度
		収容定員	収容定員	収容定員
心理学部	心理学科	274名	184名	92名
	現代心理学科	60名	120名	181名
	ビジネス心理学科	60名	120名	181名
合 計		4,972名	5,122名	5,152名

- 4 新学則第21条及び別表第2の規定中「施設設備費」に係る部分については、平成30年度入学生から適用し、平成29年度以前の入学生については、なお従前の例による。

- 5 新学則別表第1の規定は、平成30年度入学生から適用し、平成29年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- 1 この改正学則は、平成31年4月1日から施行する。
- 2 この改正学則による改正後の安田女子大学学則別表第1の規定は、平成31年度入学生から適用し、平成30年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- 1 この学則は、2019年4月1日から施行する。
- 2 この学則による改正後の安田女子大学学則（以下「新学則」という。）第13条の規定にかかわらず、2019年度から2021年度までの間の現代ビジネス学部国際観光ビジネス学科、家政学部生活デザイン学科に係る収容定員については、次の表のとおりとする。

区 分		2019年度	2020年度	2021年度
		収容定員	収容定員	収容定員
現代ビジネス学部	国際観光ビジネス学科	272名	302名	332名
家政学部	生活デザイン学科	449名	474名	499名
計		5,177名	5,262名	5,347名

- 3 新学則別表第1の規定は、2019年度入学生から適用し、平成30年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- 1 この学則は、2020年4月1日から施行する。
- 2 この学則による改正後の安田女子大学学則（以下「新学則」という。）第8条の2第2項の規定は、2020年度入学生から適用し、2019年度以前の入学生については、なお従前の例による。
- 3 新学則第13条の規定にかかわらず、2020年度から2022年度までの間の現代ビジネス学部現代ビジネス学科及び、公共経営学科並びに2020年度から2024年度までの間の薬学部薬学科に係る収容定員については、次の表のとおりとする。

区 分		2020年度	2021年度	2022年度
		収容定員	収容定員	収容定員
現代ビジネス学部	現代ビジネス学科	454名	424名	393名
	公共経営学科	60名	120名	181名
薬学部	薬学科	700名	680名	660名
計		5,272名	5,367名	5,432名

区 分		2023年度	2024年度
		収容定員	収容定員
薬学部	薬学科	640名	620名
計		5,442名	5,422名

- 4 新学則別表第1の規定は、2020年度入学生から適用し、2019年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- 1 この学則は、2021年4月1日から施行する。
- 2 この学則による改正後の安田女子大学学則（以下「新学則」という。）第8条の2第2項の規定は、2021年度入学生から適用し、2020年度以前の入学生については、なお従前の例による。
- 3 新学則別表第1の規定は、2021年度入学生から適用し、2020年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- 1 この学則は、2022年4月1日から施行する。
- 2 この学則による改正後の安田女子大学学則別表第1の規定は、2022年度入学生から適用し、2021年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- 1 この学則は、2022年4月1日から施行する。
- 2 この学則による改正後の安田女子大学学則（以下「新学則」という。）第13条の規定にかかわらず、2022年度の教育学部児童教育学科、心理学部現代心理学科、家政学部生活デザイン学科及び造形デザイン学科、薬学部薬学科に係る収容定員並びに2023年度から2024年度までの間の心理学部現代心理学科、家政学部生活デザイン学科及び造形デザイン学科、薬学部薬

学科に係る収容定員については、次の表のとおりとする。

区 分		2022年度
		収容定員
教育学部	児童教育学科	6 1 3名
心理学部	現代心理学科	2 7 2名
家政学部	生活デザイン学科	5 5 4名
	造形デザイン学科	3 1 5名
薬学部	薬学科	6 6 4名
計		5, 4 8 4名

区 分		2023年度	2024年度
		収容定員	収容定員
心理学部	現代心理学科	3 0 2名	3 3 2名
家政学部	生活デザイン学科	5 8 4名	6 1 4名
	造形デザイン学科	3 1 0名	3 0 5名
薬学部	薬学科	6 4 8名	6 3 2名
計		5, 5 4 6名	5, 5 8 5名

- 3 新学則別表第1の規定は、2022年度入学生から適用し、2021年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- 1 この学則は、2023年4月1日から施行する。
- 2 この学則による改正後の安田女子大学学則別表第1の規定は、2023年度入学生から適用し、2022年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- 1 この学則は、2023年4月1日から施行する。
- 2 この学則による改正後の安田女子大学学則別表第1の規定は、2023年度入学生から適用し、2022年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- 1 この学則は、2024年4月1日から施行する。
- 2 この学則による改正後の安田女子大学学則別表第1の規定は、2024年度入学生から適用し、2023年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- 1 この学則は、2025年4月1日から施行する。
- 2 この学則による改正後の安田女子大学学則（以下「新学則」という。）第13条の規定にかかわらず、2025年度から2027年度までの間の文学部英語英米文学科、教育学部児童教育学科、幼児教育学科、現代ビジネス学部現代ビジネス学科、国際観光ビジネス学科及び家政学部生活デザイン学科に係る収容定員については、次の表のとおりとする。

区 分		2025年度	2026年度	2027年度
		収容定員	収容定員	収容定員
文学部	英語英米文学科	4 0 4名	3 6 4名	3 2 4名
教育学部	児童教育学科	5 1 6名	4 2 6名	3 3 4名
	幼児教育学科	1 3 0名	2 6 0名	3 9 2名
現代ビジネス学部	現代ビジネス学科	3 5 2名	3 4 2名	3 3 2名
	国際観光ビジネス学科	3 5 2名	3 4 2名	3 3 2名
家政学部	生活デザイン学科	6 0 4名	5 6 4名	5 2 4名
計		5, 5 6 2名	5, 5 0 2名	5, 4 4 2名

- 3 新学則別表第1の規定は、2025年度入学生から適用し、2024年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- 1 この学則は、2025年4月1日から施行する。
- 2 この学則による改正後の安田女子大学学則（以下「新学則」という。）第13条の規定にかかわらず、2025年度から2027年度までの間の理工学部生物科学科、情報科学科及び建築学科に係る収容定員については、次の表のとおりとする。

区 分		2025年度	2026年度	2027年度
		収容定員	収容定員	収容定員
理工学部	生物科学科	60名	120名	180名
	情報科学科	60名	120名	180名
	建築学科	60名	120名	180名
計		5,742名	5,862名	5,982名

- 3 新学則別表第1の規定は、2025年度入学生から適用し、2024年度以前の入学生については、なお従前の例による。

附 則

- 1 この学則は、2025年4月1日から施行する。
- 2 新学則別表第1の規定は、2025年度入学生から適用し、2024年度以前の入学生については、なお従前の例による。

教育課程

区分	授 業 科 目	主要 授業科目	単位数	必修	選択
特 別 科 目	まほろは教養ゼミⅠ	○	1	1	
	まほろは教養ゼミⅡ	○	1	1	
	まほろは教養ゼミⅢ	○	1	1	
	まほろは教養ゼミⅣ	○	1	1	

[illegible]

区分		授 業 科 目	主要 授業科目	単位数	必修	選択
教 養 科 目	科学 技術 理 解	環境の科学A		2		2
		環境の科学B		2		2
		生活の科学A		2		2
		生活の科学B		2		2
		情報の科学		2		2
基	情報 処 理 科 目	情報処理基礎Ⅰ		1		1
		情報処理基礎Ⅱ		1		1
		情報処理基礎Ⅲ		1		1
		情報処理基礎Ⅳ		1		1
		情報処理演習A		1		1
		情報処理演習B		1		1
		情報処理演習C		1		1
		情報処理演習D		1		1
	健康 ス ポ ー ツ 目	健康スポーツA		1		1
		健康スポーツB		1		1
		健康スポーツC		1		1
		野外活動		2		2
	礎 <					

注) 外国語6単位の履修については、「英語リーディングⅠ・Ⅱ」、「英語ライティングⅠ・Ⅱ」、「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」のいずれかより4単位以上を修得し、外国語科目（欧米文化語学演習、中国文化語学演習を除く）から6単位以上を修得すること。
ただし、日本文学および書道学科については、上記4単位の「中国語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の単位を算入することができる。

区分	授 業 科 目	主要 授業科目	単位数	必修	選択	
理工学部共通科目	理工学概論	○	2	2		
	理工学データサイエンス	○	2	2		
基	生物学入門	○	2	2		
	生命科学基礎		2		2	
	生物学倫理	○	2	2		
	基礎生物学	○	2	2		
	基礎化学	○	2	2		
	サステナビリティ生物学	○	2	2		
礎	生物化学	○	2	2		
	生化学Ⅰ	○	2	2		
	生化学Ⅱ	○	2	2		
	動物分類学		2		2	
	植物分類学		2		2	
	植物生態学		2		2	
	バイオビジネス実践論	○	2	2		
	分子生物学Ⅰ	○	2	2		
科	分子生物学Ⅱ	○	2	2		
	細胞生物学	○	2	2		
	微生物学	○	2	2		
	酵素化学		2		2	
	応用微生物学		2		2	
	食と環境の経済学	○	2	2		
	生物統計学		2		2	
	実 験 実 習 科 目	化学実験Ⅰ	○	1	1	
		化学実験Ⅱ	○	1	1	
植物学フィールドリサーチ		○	1	1		
生物学実験Ⅰ		○	1	1		
生物学実験Ⅱ		○	1	1		
生化学実習		○	1	1		
環境科学実習		○	1	1		
微生物学実習			1		1	
食品化学実習		○	1	1		
植物生理学実習			1		1	
植物育種学実習			1		1	
植物形態学実習			1		1	
分子生物学実習			1		1	
基 幹 科 目		食香粧化学概論		2		2
	植物の多様性と進化		2		2	
	進化的生物学		2		2	
	フードセーフティ論		2		2	
	食品化学	○	2	2		
	環境生物学		2		2	
	植物形態学		2		2	
	植物育種学		2		2	
	食用作物学		2		2	
	園芸栽培論		2		2	
	環境科学	○	2	2		
	昆虫学		2		2	
	発酵化学		2		2	
	食品加工学		2		2	

区分		授 業 科 目	主要 授業科目	単位数	必修	選択
展 開 科 目	理 論 追 究	植物生理学		2		2
		動物生理学		2		2
		生理学演習		1		1
		遺伝子工学		2		2
		バイオインフォマティクス		2		2
		植物免疫学		2		2
		微生物利用学		2		2
		微生物工学演習		1		1
		生物資源工学		2		2
		生物資源工学演習		1		1
	実 践 展 開	花卉園芸科学		2		2
		園芸植物学		2		2
		園芸科学演習		1		1
		発酵工学		2		2
		食品の機能		2		2
		環境保全論		2		2
		醸造科学		2		2
		発酵・醸造学演習		1		1
		バイオマス利用論		2		2
		生物共生論		2		2
専 門 演 習 ・ 卒 業 研 究	研究企画プレゼンテーション	○	2	2		
	協働プロジェクトⅠ		2		2	
	協働プロジェクトⅡ		2		2	
	専門演習Ⅰ	○	2	2		
	専門演習Ⅱ	○	2	2		
	卒業研究Ⅰ	○	1	1		
	卒業研究Ⅱ	○	1	1		
	卒業研究Ⅲ	○	1	1		

理工学部 情報科学科

区分		授 業 科 目	主要 授業科目	単位数	必修	選択
理工学部共通科目		理工学概論	○	2	2	
		理工学データサイエンス	○	2	2	
基礎科目・卒業研究		情報科学概論	○	2	2	
		情報基礎数学Ⅰ	○	2	2	
		情報基礎数学Ⅱ	○	2	2	
		科学と倫理	○	2	2	
		知的財産論		2		2
		情報処理概論	○	2	2	
		情報セキュリティ	○	2	2	
		人間工学		2		2
		情報社会論		2		2
		分野横断プロジェクトⅠ		2		2
		卒業研究Ⅰ	○	1	1	
		分野横断プロジェクトⅡ		2		2
		卒業研究Ⅱ	○	1	1	
		卒業研究Ⅲ	○	1	1	
		卒業研究Ⅳ	○	1	1	
基礎幹科目		プログラミング総論	○	2	2	
		プログラミングⅠ	○	2	2	
		アルゴリズムとデータ構造		2		2
		プログラミングⅡ	○	2	2	
		プログラミングⅢ	○	2	2	
		プログラミングⅣ	○	2	2	
		オブジェクト指向プログラミング		2		2
		コンピュータアーキテクチャ	○	2	2	
展開科目		ソフトウェア工学		2		2
		デジタルメディア	○	2	2	
		We b	○	2	2	
		データベース基礎		2		2
		We bプログラミングⅠ	○	2	2	
		スマートモバイルプログラミング		2		2
		データベース設計		2		2
		ネットワークシステム	○	2	2	
		We bプログラミングⅡ		2		2
		デジタルメディア演習		2		2
		通信ネットワーク設計		2		2
		動的We bプログラミング		2		2
		SNSビジネス演習		2		2
		システム運用		2		2
		ネットワーク演習		2		2
		データベース演習		2		2
		サーバ構築演習		2		2
		U N I X		2		2
		セキュリティ演習		2		2

区分		授 業 科 目	主要 授業科目	単位数	必修	選択
展開科目	ヒューマンインタフェース・マルチメディア・画像処理・コンピュータグラフィックス・ゲーム開発・映像処理・メディアプログラミング・XR・ゲーム開発演習Ⅰ・仮想ネット配信演習・XR演習Ⅰ・3DCG演習・ゲーム開発演習Ⅱ・XR演習Ⅱ・プログラミングとエンジン	ヒューマンインタフェース	○	2	2	
		メディアコミュニケーション基礎	○	2	2	
		マルチメディア	○	2	2	
		画像処理演習		2		2
		画像処理ライブラリ	○	2	2	
		コンピュータグラフィックス		2		2
		ヒューマンインタフェースプログラミング	○	2	2	
		ゲーム開発	○	2	2	
		映像処理演習		2		2
		メディアプログラミング		2		2
		X R		2		2
		ゲーム開発演習Ⅰ		2		2
		仮想ネット配信演習		2		2
		X R演習Ⅰ		2		2
		3 D C G演習		2		2
		ゲーム開発演習Ⅱ		2		2
		X R演習Ⅱ		2		2
		プログラミングとエンジン		2		2
	データサイエンス・人工知能・情報理論・人工知能Ⅱ（深層学習）・画像認識・自然言語処理・I o T演習Ⅰ・データ解析・人工知能Ⅲ（A Iのための統計）・情報ストラテジ・I o T演習Ⅱ・人工知能演習Ⅰ・人工知能演習Ⅱ・ビッグデータ解析・データマイニング	データサイエンス	○	2	2	
		人工知能Ⅰ（機械学習）	○	2	2	
		情報理論	○	2	2	
		人工知能Ⅱ（深層学習）	○	2	2	
	画像認識・自然言語処理・I o T演習Ⅰ・データ解析・人工知能Ⅲ（A Iのための統計）・情報ストラテジ・I o T演習Ⅱ・人工知能演習Ⅰ・人工知能演習Ⅱ・ビッグデータ解析・データマイニング	画像認識		2		2
		自然言語処理		2		2
		I o T演習Ⅰ	○	2	2	
		データ解析		2		2
		人工知能Ⅲ（A Iのための統計）		2		2
		情報ストラテジ		2		2
		I o T演習Ⅱ		2		2
		人工知能演習Ⅰ		2		2
		人工知能演習Ⅱ		2		2
		ビッグデータ解析		2		2
		データマイニング		2		2

理工学部 建築学科

区分		授 業 科 目	主要 授業科目	単位数	必修	選択
理工学部共通科目		理工学概論	○	2	2	
		理工学データサイエンス	○	2	2	
基 幹 科 目 ・ 卒 業 研 究		建築概論	○	2	2	
		建築デザイン論	○	2	2	
		建築キャリアデザイン	○	2	2	
		建築倫理	○	2	2	
		デザイン基礎	○	2	2	
		空間デザイン論	○	2	2	
		建築計画学	○	2	2	
		住空間計画学	○	2	2	
		建築基礎製図	○	3	3	
		建築設計演習Ⅰ	○	3	3	
		建築設計演習Ⅱ	○	3	3	
		建築基礎数学	○	2	2	
		建築基礎物理	○	2	2	
		卒業研究Ⅰ	○	1	1	
		卒業研究Ⅱ	○	1	1	
		展 <				

[illegible]

別表第2（第21条関係）

授業料等諸納付金

区 分			金額（円）	
入学検定料	自己表現型選抜、学校推薦型選抜（指定校）、総合型選抜（専願・併願）、社会人特別選抜、一般選抜（前期日程・後期日程）、安田女子高等学校特別選抜、編入学試験、専門高校特別選抜		20,000	
	大学入学共通テスト利用選抜（前期日程・後期日程・薬学部薬学科特待生選抜）		10,000	
	一般選抜＋共通テスト利用選抜（高得点合算型）		2,000	
	上記以外の入学試験		20,000	
入学料	—		100,000	
授業料 （年額）	学部・学科		入学年度	—
	文学部	日本文学科	2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年 度・2021 年度	900,000
			2020 年度・2019 年度	880,000
		書道学科	2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年 度・2021 年度	900,000
			2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年 度・2021 年度	1,020,000
		英語英米文学科	2020 年度	1,000,000
			教育学部	児童教育学科
	2020 年度	880,000		
	幼児教育学科	2025 年度		900,000
	心理学部	現代心理学科	2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年 度・2021 年度	900,000
			2020 年度	880,000
		ビジネス心理学科	2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年 度・2021 年度	900,000
			2020 年度	880,000
	現代ビジネス 学部	現代ビジネス学科	2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年 度・2021 年度	900,000
			2020 年度	880,000
		国際観光ビジネス学科	2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年 度・2021 年度	1,020,000
			2020 年度	1,000,000
		公共経営学科	2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年 度・2021 年度	900,000
			2020 年度	880,000
	家政学部	生活デザイン学科	2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年 度・2021 年度	940,000
			2020 年度・2019 年度	920,000
		管理栄養学科	2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年 度・2021 年度	1,040,000
			2020 年度	1,020,000
		造形デザイン学科	2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年 度・2021 年度	1,040,000
			2020 年度	1,020,000
	薬学部	薬学科	2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年 度・2021 年度	1,640,000
			2020 年度・2019 年度・平成 30 年度	1,620,000
			平成 29 年度	1,800,000
	看護学部	看護学科	2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年 度・2021 年度	1,390,000
			2020 年度・2019 年度	1,370,000
	理工学部	生物科学科	2025 年度	1,150,000
		情報科学科	2025 年度	1,150,000
		建築学科	2025 年度	1,150,000
	施設設備費	2025 年度・2024 年度・2023 年度・2022 年度・2021 年度・2020 年度・2019 年度・平成 30 年度		200,000

※授業料等諸納付金の詳細については、別途規定に定める

安田女子大学

設置の趣旨等を記載した書類

<目次>

①学部設置の趣旨及び必要性	5
1. 安田女子大学の概要	5
2. 設置の社会的背景	5
3. 設置の理念と必要性	6
4. 設置の目的	10
5. 養成する人材像	16
6. 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）	18
7. 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）	21
8. 入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）	25
9. 研究対象とする中心的な学問分野	27
②学部・学科等の特色	29
1. 理工学部が担う重点的な機能	29
2. 理工学部の教育の特色	29
3. 各学科の教育の特色	30
③学部・学科等の名称及び学位の名称	34
1. 学部の名称	34
2. 学科の名称及び学位の名称	34
④教育課程の編成の考え方及び特色	35
1. 教育課程の構成と体系性（教養教育）	35
2. 教育課程の構成と体系性（専門教育）	38
⑤教育方法、履修指導方法及び卒業要件	59
1. 授業方法に適した学生数・配当年次	59
2. 教育方法の特長	59
3. 教育方法	62
4. 履修指導方法	70
5. 履修モデル	71
6. 他大学における授業科目の履修等についての考え方	72

7. 単位制度の実質化と GPA 制度	72
8. 履修科目の年間登録上限制度（CAP 制）	73
9. 追試験制度	73
10. 再試験制度	73
11. 卒業要件	74
⑥企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具 体的計画	78
⑦取得可能な資格.....	79
⑧入学者選抜の概要	80
1. 選抜方法・基準	80
2. 選抜体制	83
3. 既修得単位の認定	83
4. 科目等履修生.....	84
⑨教育研究実施組織等の編制の考え方及び特色	84
1. 教育研究実施組織等の編制の基本方針	84
2. 教育研究実施組織等の編制の内容.....	85
3. 教員の取得学位	87
4. 年齢構成と定年規程.....	87
⑩研究の実施についての考え方、体制、取組.....	89
1. 研究の実施についての考え方や、実施体制、環境整備.....	89
2. 研究をサポートする技術職員や URA の配置状況・役割・責任.....	90
⑪施設、設備等の整備計画	90
1. 校地、運動場の整備計画	90
2. 校舎等施設の整備計画	91
3. 図書等の資料及び図書館の整備計画	94
⑫管理運営	96
1. 大学教授会	96
2. 学部教授会	96
3. 大学運営協議会	97

4. その他の会議等	97
⑬自己点検・評価.....	97
1. 実施方法及び実施体制	98
2. 認証評価の受審	99
⑭情報の公表	99
⑮教育内容等の改善を図るための組織的な研修等	101
1. FD・SD 活動	101
2. 研究機会・研究時間の確保.....	101
3. 大学職員に必要な能力及び資質を向上させる取組	102
4. TA(Teaching Assistant)等の活用をはじめとする学修支援の充実	102
⑯社会的・職業的自立に関する指導等及び体制	103
1. 教育課程内の取組	103
2. 教育課程外の取組	103
3. 適切な体制の整備	104

①学部設置の趣旨及び必要性

1. 安田女子大学の概要

安田女子大学の母体である安田学園は、「柔しく剛く（やさしくつよく）」を学園訓としている。「柔しく」とは心遣い、気配り、思いやりといった人間としての品格、「剛く」とは意志、理性に加えて知識、技術等、自分を支える力を意味する。この学園訓は建学の精神を示すものであり、「人格の完成を目指して、学術や技能を磨き、徳性を身に付け、いかなる境遇にあっても女性らしい柔しさと、剛い意志を持って、社会に貢献できる心身ともに健全な教養ある女性を育成すること」（創立者・安田リヨウ）を教育理念とする。本学園は、大正4（1915）年に創設された広島技芸女学校に始まる。爾来、100年以上にわたり、一貫した教育方針により、堅実な人間の育成に力を注ぎ、現在は幼稚園から小学校・中学校・高等学校・短期大学・大学・大学院までを擁する総合学園となっている。

安田女子大学は、現在、文学部（日本文学科、書道学科、英語英米文学科）、教育学部（児童教育学科）、心理学部（現代心理学科、ビジネス心理学科）、現代ビジネス学部（現代ビジネス学科、国際観光ビジネス学科、公共経営学科）、家政学部（生活デザイン学科、管理栄養学科、造形デザイン学科）、薬学部（薬学科）、看護学部（看護学科）の7学部14学科、並びに大学院は、文学研究科、家政学研究科、薬学研究科、看護学研究科の4研究科で構成されている。

そのような状況の中、以下に述べる必要性を踏まえ、令和7（2025）年4月に理工学部の設置を行うものである。

2. 設置の社会的背景

近年、気候変動や自然災害などの環境問題、エネルギー資源の枯渇、食糧不足の深刻化など、世界規模の課題に加え、日本では少子化・超高齢化が進み、生産年齢人口の減少による労働力不足や地域格差など多くの課題が顕在化している。その一方でグローバル化の進展に伴い、世界各国との市場獲得や技術革新を巡る競争は激化しており、日本も海外企業との競争に勝ち抜くために、先進的な技術開発や優れた人材の育成が求められている。

文部科学省は、「理工系人材育成戦略（平成27（2015）年3月13日）」において、未来を築く最先端研究開発から、グローバルに人々の生活を一変させる全く新しい商品開発、日常生活を堅実に支える製品開発・運用まで、新しいアイデアと高い技術力を駆使し実用へと導くことのできる「付加価値の高い理工系人材」の必要性を指摘し、その戦略の方向性の1つとして「高等教育段階の教育研究機能の強化」を提示している。さらに、最先端のICT技術を駆使し、サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する「Society 5.0」の提言（第5期科学技術基本計画（平成28（2016）年1月22日））に続き、「第6期科学技術・イノベーション基本計画（令和3（2021）年3月26日）」では、その実現に向け『持続可能で強靱な社会への変革』『価値創造の源泉となる「知」の創造』『新たな社会を支える人材の育成』に取り組む方針が示された。デジ

タル化の進展と脱炭素の世界的な潮流は、産業構造を変革し、今後の労働需要の在り方にも根源的な変化をもたらすと言われ、内閣官房の教育未来創造会議の提言「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）（令和4（2022）年5月10日）」では、今後、特に重視する人材育成対象として「デジタル、人工知能、グリーン、農業、観光など科学技術や地域振興の成長分野をけん引する高度専門人材」「現在女子学生の割合が特に少ない理工系等の分野の女性人材」などがあげられている。

予測不可能な未来に向き合った上で、持続可能な発展を目指して、物質や自然現象に関する理論・原理を追究する「理学」と、その知識をもとに独創的な新技術を創出し、実用的な課題の解決に応用する「工学」の視点を有する人材養成の意義がますます高まっている。

3. 設置の理念と必要性

大学には、学術についての広い知識を授け、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させることを目的とし、同時に大学教育や学生生活の経験を通じて専門分野に関する知識・技能、社会的・職業的自立に必要な資質能力を学生が獲得するといった成果が期待されている。近年の大学進学率の上昇や、高等学校における教育内容の多様化を踏まえて、大学には時代の変化や社会の要請に適切に対応して、質の確保・向上のための様々な取り組みを行うことが求められている。

安田女子大学に理工学部を設置する必要性は以下の通りである。

（1）社会の要請（理工系人材不足）に応える

日本では、令和4（2022）年度の大学・学部生約263万2千人のうち、理工学系は約46万2千人（18%）である。大学院では、修士課程約16万6千人のうち、理工学系が約8万3千人（50%）、博士課程約7万5千人のうち、約1万8千人（24%）が理工学系である（出典：令和4（2022）年度「学校基本調査報告書」）。内閣官房の教育未来創造会議の提言「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）（令和4（2022）年5月10日）」においては、デジタル人材・グリーン人材の不足や、高等教育の発展と少子化が進行する中で、多くの子供たちが高い理数系の学力を有しながら高等学校段階で理系離れし、大学の理工学学部への入学者の割合が低い点が指摘されている。海外との比較においても、理工学学部への入学割合は経済協力開発機構（OECD）諸国の平均値27%に対して、日本は17%と大幅に低い状況である。さらに、女性比率の低さも問題視されており、大学の学部段階で理工系を専攻する女性は7%に留まり、男性28%に比べると大きな差がある。これはOECDの平均値15%よりも大幅に低い。初等中等教育段階で高い資質・能力が育成されながらも、大学で理数系の資質・能力をさらに伸長させる状況にないのは、高等学校段階での理系離れや、社会全体に根付いている男女の性別による先入観等、さまざまな要因が指摘されている。「2. 設置の社会的背景」で述べた社会変革に対応するためにも、不足している理系の学修を

行うための大学の受け皿を抜本的に拡充し、特に女性が科学技術イノベーションを担う多様な人材として理系の分野で大きく活躍できる社会を構築するという社会的要請がある。

加えて、本学の位置する広島県においては、令和3（2021）年度に「安心・誇り・挑戦 ひろしまビジョン」が策定され、急速に進むデジタル技術の革新など社会経済環境の変化に対応して持続的に経済発展を遂げていくため、DXの推進等を通じ基幹産業であるものづくり産業の生産性向上、競争力の強化や環境・エネルギー分野などの新たな成長産業の育成に取り組むことが目標として掲げられている。本学理工学部を設置に対して、広島県知事からは「情報・環境・建築等の分野における専門的知識・スキルを備えた人材の育成に着手されることは、本県が重点的に取り組む施策を後押しするものであり、地域社会・経済の持続的な発展を担う人材を輩出する高等教育機関として、より一層期待している」という意見書が寄せられ、さらに一般社団法人中国経済連合会からは「理学および工学を専門とする女性人材の育成は、時代を担う新たな視点を生み、新たな産業の創出につながる」として、学部設置による地域への理工系人材輩出に対して大きな期待と要望が寄せられている。（【資料1】「安田女子大学「理工学部」設置に係る意見書（広島県知事）」、【資料2】「要望書（一般社団法人中国経済連合会）」参照）

（2）時代の要請（デジタル人材育成）に対応する

急速な情報化や技術革新は、社会のグローバル化や複雑化を促進し、身近な生活も含め社会の多くの領域で質的・量的変化を起こしている。多くの企業においても、将来の成長、競争力強化のために最先端のデジタル技術を駆使した新たなビジネス・モデルを創出・改変するデジタル・トランスフォーメーション（DX）の必要性が主張されている。新型コロナウイルス感染症拡大への対応を経て、その有用性はますます認識された。日本の目指す「Society 5.0」においても、AI、ロボット工学、IoT、バイオテクノロジー、エネルギー管理など理工学の科学技術を駆使し、多様化する社会課題の解決や持続可能な発展に貢献する人材が求められている。我が国の経済の成長力を将来にわたって維持・強化し、社会生活環境を改善するためには、こうした時代の変革に遅れを取ってはならない。政府の「AI戦略2019」（統合イノベーション戦略推進会議（令和元（2019）年6月11日））は、文理を問わず全ての大学・高専生（約50万人卒／年）が正規課程にてリテラシーレベルの数理・データサイエンス・AIを修得することを目標として示した。学校における児童生徒のICT環境整備は加速度的に進みつつある。小学校では令和2（2020）年度からプログラミング教育が必修化され、中学校、高等学校においても「情報活用能力」が重要な資質・能力として位置付けられ、令和4（2022）年度からは高等学校で「情報Ⅰ」が必修科目になった。

本学においては、入学生全員に一人一台のノートパソコンを配付し、学内のICT環境を整備するとともに、入学時より数理・データサイエンス・AIに関する基礎教育に取り組んできた。教養教育における情報教育・データリテラシー授業の内容も継続的に見直しており、令和4（2022）年度には、文部科学省の数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制

度で「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム（リテラシーレベル）」に認定された。
技術革新が飛躍的に進む中で、理工系人材育成の重要性は益々高まっている。

理工学部では、専門分野に関わらず ICT 技術を活用できるようにするため、全学に共通する教養教育で情報通信技術の基礎を学び、さらに理工系分野において求められるデータサイエンス・AI の基礎知識を理工学部共通科目として学ぶ。加えて、情報科学科においてはデジタルメディア、ヒューマンインタフェース、データサイエンスの 3 分野を中心とした専門的知識・技術を持ち、課題解決に意欲的に取り組める人材を養成する。

(3) 自然の道理を知り、活かす「理工学」の必要性

人類は進化の過程で、自然を受入れた生活から、「もの」を作ることにより、自然に働きかけて生活をする存在になった。我々は自然の仕組み、現象を理解することで、それを利用して古代から様々なフィジカル空間（現実空間）を作り上げてきた。理学は自然の仕組み・現象を理解し、ものごとの原理を明らかにする学問であり、工学はその原理を応用して現実の課題に対応する。理学での発見が工学に応用され、逆に工学での課題が理学研究に影響を与えるように、理学と工学は相互作用を伴って発展を遂げ、新しい科学技術や価値創出に重要な役割を果たしてきた。理工学による科学技術の長足の進歩は、Web 会議やリモートワーク等を可能とし、メタバース等にみられるサイバー空間（仮想空間）の中での日常生活や経済活動も可能としつつある。新型コロナウイルス感染症拡大を契機に、様々な場面でデジタル技術の有益性の認識が進み、活用範囲の拡大は加速している。

「Society 5.0」では、フィジカル空間とサイバー空間の融合により新たな価値創出が期待されるが、それらを社会実装する際にはプライバシー保護、セキュリティの問題やデジタル格差など倫理的・法的・社会的な課題（ELSI）が生じる。「科学技術・イノベーション基本法（令和 3（2021）年 4 月 1 日施行）」においては、こうした諸課題に対応するため、自然科学と人文科学との相互の関わり合いが科学技術の進歩及びイノベーションの創出にとって重要であることに鑑み、両者の調和のとれた発展について留意されなければならないと述べられている。

「1. 安田女子大学の概要」で触れた通り、本学は開学以来、学園訓「柔しく剛く」のもと、時代や社会の要請に応えながらも、いつの時代も変わらない精神を持ち続け「不易流行の教育」を展開し続けてきた。その変遷の中で、学部増設を重ね現在では薬学部や看護学部などの理系分野も含め文理 7 学部を擁する女子総合大学へと発展した。理工学部の学びは、自然の道理を探究する「理学的視点」と、その知識をもとに独創的に応用する「工学的視点」を身に付け、対応策を模索する人材を養成するものである。今回の理工学部新設により、本学は女子総合大学として教育と研究の領域をさらに広げることが可能となる。

(4) 女子大学理工学部を開設する意義

日本が人口減少の中で技術革新を進め持続的に成長していくためには、男女を問わず多様な人材が個人の能力を最大限に発揮させて活躍することが必要である。政府は平成 11 (1999) 年の「男女共同参画社会基本法」の施行をもとに、男女が自らの意思に基づき、個性と能力を発揮できる社会の実現を目指した。平成 28 (2016) 年には「女性活躍推進法」の施行（令和元 (2019) 年改正）を経て、女性が活躍しやすい社会の構築、グローバル化やダイバーシティ（人材の多様化）への対応を推進している。令和 2 (2020) 年の日本学術会議「理工学分野におけるジェンダーバランスの現状と課題」においても、女性が活躍できる環境づくりは、子ども、高齢者、妊婦、育児中の人、病弱の人、要介護者、障害者、外国人など様々な人々の視点に通じ、女性の活躍促進がジェンダー・ダイバーシティの問題にも大きく寄与すると期待されている。

一方で、先に触れた内閣官房の教育未来創造会議における提言「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）（令和 4 (2022) 年 5 月 10 日）」での指摘の通り、OECD による調査では大学や高等教育機関に入学した学生のうち、理工学分野に占める女性の割合は低く、日本における理工系女性人材の育成が遅れている実態が改めて浮き彫りになった。

IoT や AI、ロボットなど科学技術の急速な発展は、生理学的制約の軽減を可能とし、女性ならではの感性や能力が発揮される分野が広がることが今後ますます期待されている。今まで生理学的制約故に活躍が限られていた建築、土木、農業、工業などの一部職業でも女性の進出が促進され、女性の感性や能力が発揮される分野が広がりつつある。日常生活や環境に対する女性の視点、アイデアは、多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じる社会全体の豊かさ（ウェルビーイング）の実現において重要な意味を持ち、産業や科学技術の発展だけでなく、企業の在り方や働き方にも影響を与えることができる。人材の多様性を職業の中に取り込むことは、未来の産業形態、労働形態の変化を促すのみでなく、新しい価値創出にも寄与することが期待される。

本学は開学以来、学園訓「柔しく剛く」のもと、高い倫理観と豊かな人間性を有する人材の育成に取り組み、人間や社会にとってより良い生活環境を作り出すための知識や技術の開発に注力してきた。時代に左右されず、高い就職率を維持していることも、本学が社会から評価され、求められていることの証左であると考えます。女性が今以上に情報・ものづくりの分野に参加することが期待される中、女性の理工系人材養成という社会的要請を踏まえ、本学が理工学部を設置する意義は大きい。

以上の背景・理由から、令和 7 (2025) 年 4 月に理工学部の設置を計画する。

4. 設置の目的

(1) 学部設置の目的

前述した社会的背景を踏まえ、今後の日本が取り組むべき課題は、自然と社会の共生、自然と産業の調和、文化と社会・経済との連動である。急速に進む知識と技術をいかに人間の「生活の質」に寄与させるかが問われており、自らが学ぶ専門的知識や技術が様々な分野へ与える影響を理解し、適切に判断して活用することのできる人材が求められている。

本学部の目的は、全人教育を理念とした学園訓「柔しく剛く」に基づき、真理の探究に努め、学生に幅広い教養と豊かな人間性を授け、自然の道理を探究する「理学的視点」と、その知識をもとに独創的に応用する「工学的視点」を身に付け、急速な技術革新、自然と社会の共生、持続可能な社会の実現など、現代社会が抱える複雑な課題に自ら対応策を模索する人材を養成することである。

(2) 学科設置の目的

学部設置の目的に基づき、理工学部には生物科学科、情報科学科、建築学科の 3 学科を置く。以下に、各学科の目的と、それを目的とする理由を記載する。

ア. 生物科学科

生物の世界は、多様性と柔軟性を備えた多種多様な個体によって形作られている。生物科学科では、植物を中心に、分子・細胞から生態系に至る幅広い階層で生物の進化や多様性の本質を学び生命現象の普遍性を探究する。さらに、学んだ知識をもとに「食」「資源」「環境」に関わる諸問題を解決し、持続可能な社会構築に寄与するための知識と技術を有する人材を養成することを目的とする。

①人間は自然の一部であると捉える視点の重要性

地球上に存在する約 175 万種以上の多様な生物は、様々な環境下で生き残るために進化を遂げてきた。哺乳類や植物、菌類、ウイルスなど、地球上に存在する生命すべてには人間と共通するメカニズムがある。生物の進化を学び、人間を含む生命の構造、形態、機能を理解することは、生物と地球環境の密接な関係性を理解する上で重要であり、さらに社会を理解することに繋がる。地域固有の自然景観や生物相が人間の活動に影響するように、多くの文化や芸術も、その地域の生物相や生態系と密接に関係している。また、人間は他の生物と同じく生存のために食物や水などの自然資源を必要とし、同時に、生態系や自然環境に影響を与える存在でもある。人口増加に伴う森林伐採、河川の汚染は生態系へ大きな影響を与え、エネルギー需要の増大や産業化による二酸化炭素等の温室効果ガスの排出量の増加は、気候変動を引き起こす要因となっている。こうした環境問題は世界規模の課題（グローバル・アジェンダ）として、人類を含む生物全体の存立基盤を脅かす看過できないものである。内閣官房は教育未来創造会議の提言「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方につ

いて（第一次提言）（令和 4（2022）年 5 月 10 日）」において、脱炭素社会の構築、再生可能エネルギーの活用、地方創生などの課題解決による価値創造を推進し、「Society 5.0」と国連の掲げる持続可能な開発目標（SDGs）達成の双方を実現する「Society 5.0 for SDGs」に向けて取り組む考えを示している。

人は自然の摂理の中でしか生存することはできない。自然環境や生態系が人類に与える影響は膨大で多様であり、我々が存在していく基盤をなしている。ウイルスから人間まで、自然界の生命の本質とその普遍性を研究することは、個体を形成するメカニズムのみでなく、自然を通して、動物の社会の一形態である人間の社会を理解することに繋がる。

このように、人間が自然の一部であると捉えることは、環境保全や持続可能な開発において重要な視点であり、客観的かつ現実的な「自然と社会の共生」に必要な理念形成の基礎を提供するものである。

②地球規模の課題解決や科学技術の発展に寄与する

近年急速に発展している画像認識、音声認識、自然言語解析といった種々のセンサデバイスコンピュータにおいて、データの抽出、加工、情報処理を行う人工知能（AI：Artificial Intelligence）は、人間の脳が行う認識、思考、学習といった活動を模倣して発達したシステムである。アリストテレスが「芸術(技術)は自然を模倣する」という言葉を残したように、人類は生物の形態、構造、機能、行動などを研究し、それを模倣して多くのものを利用・創造してきた。例えば、発酵・醸造技術に代表されるように、日本では古くから生物を利用した「ものづくり」が行われており、日本が国際的に競争力をもつ領域でもある。

一方、哺乳類などの高等動物から植物、菌類、ウイルスに至るまで、地球上に存在している膨大な種類の生物の特異的機能は、これまで数多くの研究が行われているものの、その多くが完全な解明には至っていない。未知の生物種の発見や、既知の生物種にも新たな機能が発見されることもある。新たな生物機能の解明は、人類を含む生物自体を理解する上で重要であることに加え、その発現原理の利用は、我々の生活を彩り、QOL（生活の質）の向上に寄与する。その知見は、21 世紀の人類が直面する食糧・資源・環境・エネルギーといった地球規模の課題解決や、科学技術の進歩、情報社会の発展においても、多くの可能性をもたらすものである。

③技術革新により生物学の重要性は増している

生命は DNA や RNA、タンパク質などを通じて情報をやり取りする存在である。近年は DNA シーケンサーに代表される解析技術の飛躍的な開発・普及と、そこで得られる膨大なデータを利用するバイオインフォマティクスを基盤としたゲノム解析が急速に進展している。観察や実験から得られたデータに基づいて仮説を立てるという従来手法から、膨大な遺伝情報やタンパク質構造・機能などビッグデータからの知見を得て新たな仮説を立てるという手法へと変化している。さらに、人工知能技術を生命科学に適用することで、膨大な量の

データから有用な情報を引き出すことも可能になりつつある。

このように、ゲノム解析やビッグデータの処理といった技術革新は、生命科学の研究に大きな変革をもたらす。さらに新たな知見は単に生命科学分野だけでなく、自然科学全体に深く関与し、さらに人文・社会科学分野との交差により新たな応用科学を生み出すものである。どのような専門分野の人々にも生命科学の知見が必要となり、その重要性は増していることから、「21 世紀は生命科学の時代」とも言われる。

政府は、「科学技術・イノベーション基本法（令和 3（2021）年 4 月 1 日施行）」により、人文・社会科学と自然科学を融合し、人間や社会の総合的理解と課題解決に資する「総合知」の創出・活用、様々な社会課題の解決に向けた研究開発・社会実装の促進を図っている。膨大な情報が瞬時に行き交う情報社会においては、諸課題の在り様も常に変化・複雑化しており、固定化された知識・技術では対応は難しい。想定外の事態において、自らの専門性を基盤にしながら様々な情報を駆使して、問題を発見し解決する道筋を見定める柔軟な能力が求められる。新設する生物科学科では、技術革新による大きな変革を踏まえながら、ウイルスからヒト、ミクロからマクロまでの様々な階層における生物の特徴、特性についての知識を得て、論理的に判断する能力、考察する能力の獲得を図る。

イ. 情報科学科

情報科学科では、情報の量や品質を定量的評価する情報理論に基づいて、社会課題を正確に分析・理解し、社会に必要な情報システムの設計・開発・運用を行うとともに、情報技術や人工知能を活用して人間の能力を拡張または援助し、快適な環境を構築できる知識と技術を有する人材を養成することを目的とする。

①IT（デジタル）人材の不足に寄与する

日本において IT（デジタル）人材が不足している。「IT 人材需給に関する調査」（平成 31(2019)年 4 月経済産業省）によると、IT 関連市場規模の拡大に伴い、IT 人材の不足は年々増加し、令和 12（2030）年には最大 79 万人が不足すると予測されている。

日本が目指すデジタル社会のビジョンとして、「デジタル社会の実現に向けた重点計画（令和 4（2022）年 6 月 7 日）」では、「デジタルの活用により、一人ひとりのニーズに合ったサービスを選ぶことができ、多様な幸せが実現できる社会」を掲げている。この「目指す社会の姿」を実現させる 6 項目の 1 つに「デジタル人材の育成・確保」があげられている。本学科では、このデジタル社会を実現させるため、次に記載する「デジタルメディア分野」「ヒューマンインタフェース分野」「データサイエンス分野」の基礎知識を身に付けた IT（デジタル）人材を養成し、デジタル社会の実現・拡大に寄与する。

なお、本学科の設置及び人材輩出に対しては、中国情報通信懇談会から「中国地方の経済の活性化や人材の確保、中山間地域・島嶼部の振興など地域が抱える諸課題を解決し、全国

どこでも誰もが便利で快適に暮らせる社会実現に貢献されることが期待される」として要望書が寄せられている。【資料3】「要望書（中国情報通信懇談会）」参照

②情報技術の発展とセキュリティ【デジタルメディア分野】

20 世紀は新聞・出版社、ラジオ・テレビ局を代表とするマスコミがメディアを寡占し、情報のアウトプットはマスに向けて画一的かつ一方向的に発信され、情報のインプットは受動的であった。20 世紀後半に始まったデジタル革命は、個人にパソコンやスマートフォンなどを普及させ、Web サイトや SNS などのデジタルメディアの発展により、企業や個人が情報をマスに向けてアウトプットすることが可能となった。また、ネットワーク技術の発展により、個人がいつでもどこでも能動的に情報をインプットできる時代となった。そして今日では、個人のデジタルメディア上の履歴から AI がマスの発信した情報をパーソナライズ化し、個々に適した情報に編集し提供している。

本学科ではデジタルメディアにおける Web サイト構築、モバイルデバイスプログラミング、データベース、サーバ構築などソフトからハードに至るまで幅広く学修する。また近年問題となっている情報セキュリティについて、独立したネットワーク上でハッキングの攻防演習を行うなど、実践力のあるエンジニアを養成する。

③誰もが理解・利用ができる人に優しいデジタル化【ヒューマンインタフェース分野】

現代はインターネットが社会に普及し、インターネットに接続するデバイスについてもデスクトップパソコンやノートパソコンからスマートフォンやタブレット端末などのモバイルデバイスに進化している。また、キーボードに代表されるボタンやスイッチなどのアナログ入力からタッチスクリーンによる入力など、デバイスの操作やデジタル上での表現方法は目まぐるしく変化している。これらの情報技術の加速度的な進歩は、この技術を利用できない、情報にアクセスできないデジタルデバイドという新たな格差を生み出している。

本学科では、「デジタル社会の実現に向けた重点計画（令和 4（2022）年 6 月 7 日）」で記載された「誰一人取り残されない、人に優しいデジタル化」の実現を目指し、ヒューマンインタフェース分野（ユーザーインタフェース）において、人と機械（デバイス）の操作やつながり方を学修する。特に Web サイト上での表現方法や操作性を基礎から学修し、老若男女を問わず幅広い年齢層が、デバイスに関係なく情報にアクセスが可能となるシステムの構築を目指す。また、近年著しく進化し今後成長が期待されている XR（AR、VR、MR）技術についても学び、さらにメタバースやゲーム開発などの領域についての科目も配置し、誰もが理解・利用ができる人に優しいデジタル社会に向けた人材を養成する。

④データ解析を通して安全な情報社会の進展に寄与する【データサイエンス分野】

今や我々の生活は情報通信技術（ICT：Information and Communication Technology）なしでは成立しない。近年、情報通信技術が急速に進歩し、多くのビジネスにおいて、経済・

人間活動等のデータがインターネット等を通じて集約され、情報の共有と利用が加速している。パソコンやスマートフォンといった情報通信デバイスのみならず、さまざまな装置・機器に取り付けられたセンサデバイスにより検知した行動・位置情報や状態、周囲の環境などのデータはインターネットや Bluetooth 等の通信技術で送信される。生成した膨大なデータを収集・分析して利活用する IoT(Internet of Things) システムは、もはや当たり前の存在になろうとしている。本学科では、データを収集する技術を学び、データを解析することで人間が使用するのに必要な安全性、信頼性、利便性などをもった機械システムについて学修する。そして、人間の知覚・認知・行動を熟知した上で利用者と機械を含んだ体系をシステム的に捉えて構築・研究し、情報社会の進展に寄与する。

⑤テクノロジーには人文科学の理解が必要である

近年、人工知能 (AI) は、大量のデータへのアクセスと計算機能力の劇的な向上とともに、ディープラーニングに代表される人間の脳の情報処理の仕組みを模倣した手法を組み合わせることによって、飛躍的な進歩を遂げている。AI には、人間の作業を効率化し、ものづくりの生産性を向上させ、単純作業、危険な作業から人間を解放するなど、私たち人間社会に多大なる便益をもたらす。

一方、テクノロジーの急速な進歩は、情報格差や人間の尊厳に関わる生命倫理の問題、遺伝子組換え食品の安全性、さらに環境問題等、科学技術が人間と社会に影響を与えることが予想される。AI のプログラムは人のアルゴリズムを模倣するが、万人に公平・共通のアルゴリズムは存在しない。それらの問題に対処するためには、個人の尊厳と多様な価値観を尊重することのできる環境と社会の成立が必要である。本学科では、情報倫理、著作権やデータのプライバシー保護など情報技術を扱う者として必要な社会規範や倫理観について学ぶ。

ウ. 建築学科

建築学科では、建築に関する専門的知識・技能に加えて、エネルギー効率の高い建物の設計・運用、再生可能エネルギーの活用、自然環境に配慮した材料の選定、既存建築の再生などグリーン分野を含めた広範な生活環境に対する状況把握能力や判断力、豊かな表現力と意匠性を兼ね備えた人材を養成することを目的とする。

①住空間へのニーズが高まる日本社会の要請に応える

古来、人々にとって建築は、雨露をしのぎ、災害から身を守る安全を確保するためのものであった。しかし、建築には時代ごとの経済や文化を反映して、長い歴史の変遷過程で利便性、機能性のみでなく快適性と美しさが追求され、近年では地球環境との調和も重要視されている。21 世紀の現在、我々は、集中豪雨及び地震や津波などの自然災害、地球温暖化等の地球規模での環境問題に直面している。国民の生命、健康、財産を守るため、地震や火災などに対する安全性や、環境などに関する必要な基準が定められているが、物質的生活はか

つてないほど豊かになり、人々の安心・安全を求める意識の高まりとともに益々、安全性、利便性、そして美しさ、優しさを兼ね備えた快適な建築の改善が進むようになった。

日本においては、少子化に伴う人口減少、家族構成の変化や単身世帯の増加、昨今の異常気象による災害の頻発化、新型コロナウイルス感染症拡大などにより、人々の生活スタイルは多様化している。社会は経済的に豊かになったが、戸当たり住宅床面積は欧米諸外国に比較すると依然として狭い。特に借家においては群を抜いて小さく、アメリカの約半分である。さらに、高齢者居住問題、低水準の居住問題、中高層共同住宅の一般化など課題は多く、都市計画も一部を除けば必ずしも順調に進んでいるとは言えない。住空間に限れば、日本は依然として先進国とは言い難い状況である。

しかし、経済の発展と人々の意識の変化とともに、複合市街地、歴史的市街地、マンション集積市街地、良好な戸建住宅地など多様な市街地が形成され、それぞれに異なる機能や魅力、個性を持った集合体が注目されている。これらは広範なランドスケープの変化をもたらし、緑豊かな公園、水辺のレクリエーションエリア、広々とした歩行者専用ゾーンなど、人々の生活の質を高める空間も重要視される。加えて、既存建築の長寿命化、歴史的建造物や街並みの保存などリノベーション、コンバージョンに代表される持続可能な社会の実現においても建築学の果たす役割は大きい。

②人間性を重視した総合的視点で建築を捉える

人の営みの多くは建物の中で行われ、建築は人の生活と活動に密接に関係している。住居としての役割のほかにも、美術館や学校などの文化・教育施設、ショッピングモールなどの商業施設や、人々が集い交流する公園・広場など、建築が地域コミュニティの発展・強化において果たす役割も注目されている。建築に携わる者には、地域社会の文化や歴史、風土、気候などを理解し、生活基盤となる建築・都市空間において利用者の安全性・快適性を最大限に考慮し、さらに意匠性に優れた提案ができる基本知識と技能、さらには倫理観を持つことが求められる。そのため、人間の活動、人間と環境の関わりを深く理解し、建築を捉える感性と、それを形にする工学基礎知識と技術の修得が必要である。

また、「用強美」という言葉が示すように、建築には目的に応える機能性（用）、安全性、耐久性（強）のみでなく、その国・地域の文化や伝統、美しさなど、デザインの要素（美）が必要である。新設する建築学科は、建築・都市のデザインを一つのものと考え、快適で居心地の良い、生活を豊かにする空間の創造を目指す。地球環境の保全と人の健康、安全・安心を図り、資源の効率的利用とともに持続的社会的維持に供する建築のあるべき姿―自然と人工の調和、人と環境の調和、防災、省エネルギーの追求、歴史的・文化的遺産の継承と再生―を求めて、新しい社会の要求に応える「人々の生活」「デザイン」を建築工学の視点で創造できる人材養成に重点を置く。

③女性建築士の活躍が求められている

日本全体の少子高齢化と連動し、建築士の年齢構成においても高齢化が進行している。現在、一級建築士（所属建築士）の年齢構成においては全体の 65%を超え 50 歳代以上が占めるなど高齢化は明らかであり、若手建築士の増加が期待されている。さらに、依然として建築分野は男性社会との認識も強く、令和 5（2023）年の一級建築士合格者は男性 69.2%に対して、女性 30.8%と、女性比率は低い状況にある。

建築物の種類は多岐にわたるが、例えば、女性や家族向けの住宅や介護施設、女性客や女性従業員をターゲットにした商業施設やオフィス設計など、女性の視点が求められるプロジェクトは増加している。こうした状況を踏まえ、一般社団法人広島県建築士事務所協会からは、「少子高齢化、技術革新、労働環境の変化の中、建築業界における女性の活躍は、新たな視点やアイデアの創出とともに業界全体の多様性とクリエイティビティの向上をもたらすことが予想される」として、本学科設置に対する要望が寄せられている（【資料 4】「要望書（一般社団法人広島県建築士事務所協会）」参照）。

人口減少、労働力不足が経済・社会の発展に大きな課題となる我が国において、女性建築士を養成して、社会での女性活躍の幅を広げ、生活を豊かにする建築空間の創造に女性の力が発揮されることが、今の時代には求められている。

④既設学部学科との関係性

本学科は、家政学部生活デザイン学科における「住」領域を発展的に改組するものである。家政学部生活デザイン学科は、平成 16（2004）年の開設以来、「衣」「食」「住」の 3 領域の学修が受験生の関心と呼び順調に学生は確保されており、3 領域の学修は学生の高い満足度を得ているものの、建築を専門的に学ぶ強い意志と熱意のある学生には十分に伝えられていない。専門性をより鮮明にして、強い関心、熱意のある学生の要望に応えるために、生活デザイン学科の「住」領域から建築士資格に係る課程を分離独立させ、理工学部の中に建築学科を新設する。なお、生活デザイン学科はインテリアを「住」領域として、引き続き「衣」「食」「住」の 3 領域を学ぶことで、家政学の観点から人間や社会にとっての豊かな生活にアプローチする。（【資料 5】「理工学部建築学科・家政学部生活デザイン学科住分野の特色」参照）

5. 養成する人材像

（1）学部の養成人材像

全人教育を理念とした学園訓「柔しく剛く」に基づき、真理の探究に努め、学生に幅広い教養と豊かな人間性を授け、自然の道理を探究する「理学的視点」と、その知識をもとに独創的に応用する「工学的視点」を身に付ける。各学科の専門教育を通して、急速な技術革新、自然と社会の共生、持続可能な社会の実現など、現代社会が抱える複雑な課題に自ら対応策を模索する人材を養成する。

本学部における人材養成については、【資料 6】「理工学部における人材養成について」にその概略を示す。初年次には『理工学部共通科目』として、理学と工学の関係性を理解し、そこから生まれる科学技術がどのようにして自然と社会の共生や持続可能な社会の発展に寄与できるかを学ぶ「理工学概論」と、理工学分野の学生に共通して求められるデータサイエンス・AI に関する基礎を学ぶ「理工学データサイエンス」を、理工学部の全ての学生が履修する。こうして理工学分野を学ぶ上での基盤を築き、生物科学科、情報科学科、建築学科それぞれの専門教育科目を履修することで、各学科の基礎となる自然科学に対する理解（理学的視点）を身に付け、その知識・理論をもとにした実社会の課題解決への応用・具体的な提案や表現（工学的視点）を学ぶ。そして、各学科の卒業研究において、理学・工学それぞれの視点を活かし 4 年間の学修の集大成とすることを目標とする。

(2) 学科の養成人材像

ア. 生物科学科

大学及び学部の養成人材像に基づき、植物を中心に、分子・細胞から生態系に至るまで、幅広い階層で生物の進化や多様性の本質を学び、「食」「資源」「環境」に関わる諸問題を解決し、持続可能な社会構築に寄与する使命感を持った人材を養成する。

イ. 情報科学科

大学及び学部の養成人材像に基づき、情報理論に基づく定量的な評価を用いて、社会課題を正確に理解し、解決に必要となる情報システムの設計・開発から実装・運用まで行うとともに、人間の能力を援助する快適なヒューマンインタフェース環境を構築できる人材を養成する。

ウ. 建築学科

大学及び学部の養成人材像に基づき、建築に関する専門的知識・技能に加えて、自然環境への配慮やエネルギー効率化などグリーン分野を含めた広範な生活環境に対する状況把握能力や判断力、豊かな表現力と意匠性を兼ね備えた人材を養成する。

6. 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

上記の養成する人材像に基づき、理工学部では、以下の方針に則り学位を授与する。

【生物科学科 卒業認定・学位授与の方針】

以下に示す能力・態度を身に付け、本学科の教育課程に定められた所定の単位を修得した学生には、卒業を認定して学士（生物科学）の学位を授与します。

DP1 【倫理観・使命感】

幅広い教養、豊かな人間性を兼ね備え、生命尊重の倫理観、環境保全や生物多様性の保護に対する責任感を持ち、持続可能な社会の発展に的確に対応できる。

DP2 【知識・技能・態度】

生化学、分子生物学を中心とした生物学の基礎知識、科学的研究で必要とされる実験手法や分析技術の基本を身に付けている。さらに「食」「資源」「環境」に関わる課題における生物科学の役割や基本的な知識を理解しており、課題の解決、新たな価値の創造に意欲的に取り組むための態度を有している。

DP3 【思考力・判断力・表現力】

卒業までに修得した知識・技能・態度を駆使し、「食」「資源」「環境」に関する科学的データや情報を調査収集し、それらを的確に解釈・分析することで、課題解決や新たな価値の創造に向けて論理的に思考・判断することができる。また、その成果を第三者に向けて発信する表現力を身に付けている。

DP4 【自律性の確立】

主体的・批判的精神を持って自己を律し、自ら目標を設定し、達成のための計画を立て、実行することができる。

DP5 【社会性・コミュニケーション能力】

他者と積極的に意思疎通を図り、他者の意見を聴き自己の意見を正確に伝えるコミュニケーション能力を身に付け、様々な立場の人々と連携・協働できる。

DP6 【多様性の受容と理解】

多様化・複雑化する現代社会において、文化の多様性や自分とは異なる価値観や視点を受容・理解し、多角的な視点・立場における思考や人を思いやる柔軟な態度を身に付けている。

【情報科学科 卒業認定・学位授与の方針】

以下に示す能力・態度を身に付け、本学科の教育課程に定められた所定の単位を修得した学生には、卒業を認定して学士（情報科学）の学位を授与します。

DP1 【倫理観・使命感】

幅広い教養、豊かな人間性を兼ね備え、データのプライバシー保護や権利尊重、公正なシステム設計など情報技術を扱う際の倫理観を持ち、社会課題の改善に対する責任感と使命感を持っている。

DP2 【知識・技能・態度】

デジタルメディア、ヒューマンインタフェース、データサイエンスに関する基礎知識を修得し、システム設計・開発・運用、ユーザーインタフェース環境の構築、データ分析などに必要な知識・技能、新たな価値の創造に意欲的に取り組む態度を有している。

DP3 【思考力・判断力・表現力】

情報理論に基づく定量的な分析・評価により社会課題の構造を思考・判断する力、課題解決に寄与する創造的なアイデアを生み出す思考力、その成果を第三者に向けて発信する表現力を身に付けている。

DP4 【自律性の確立】

主体的・批判的精神を持って自己を律し、自ら目標を設定し、達成のための計画を立て、実行することができる。

DP5 【社会性・コミュニケーション能力】

他者と積極的に意思疎通を図り、他者の意見を聴き自己の意見を正確に伝えるコミュニケーション能力を身に付け、様々な立場の人々と連携・協働できる。

DP6 【多様性の受容と理解】

多様化・複雑化する現代社会において、文化の多様性や自分とは異なる価値観や視点を受容・理解し、多角的な視点・立場における思考や人を思いやる柔軟な態度を身に付けている。

【建築学科 卒業認定・学位授与の方針】

以下に示す能力・態度を身に付け、本学科の教育課程に定められた所定の単位を修得した学生には、卒業を認定して学士（建築学）の学位を授与します。

DP1 【倫理観・使命感】

幅広い教養、豊かな人間性、高い倫理観を兼ね備え、社会の規範やルールに従い、建築設計において利用者の安全・快適性を最大限に考慮し、自然環境への配慮と調和を図り、持続可能な社会の発展に的確に対応できる。

DP2 【知識・技能・態度】

建築に携わる専門的職業人としてふさわしい「設計」「構造・材料」「環境・設備」及び関連諸領域に関する基礎的な知識、設計製図等に必要な技能、新たな価値の創造に意欲的に取り組む態度を有している。

DP3 【思考力・判断力・表現力】

卒業までに修得した知識・技能・態度を駆使し、複雑な設計課題に対して、材料、時間、予算などのリソースを管理し、実現可能かつ実用的な解決方法を思考・判断することができる。また意匠性に優れた提案ができ、成果を第三者に向けて発信するための表現力を身に付けている。

DP4 【自律性の確立】

主体的・批判的精神を持って自己を律し、自ら目標を設定し、達成のための計画を立て、実行することができる。

DP5 【社会性・コミュニケーション能力】

他者と積極的に意思疎通を図り、他者の意見を聴き自己の意見を正確に伝えるコミュニケーション能力を身に付け、様々な立場の人々と連携・協働できる。

DP6 【多様性の受容と理解】

多様化・複雑化する現代社会において、文化の多様性や自分とは異なる価値観や視点を受容・理解し、多角的な視点・立場における思考や人を思いやる柔軟な態度を身に付けている。

7. 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

本学では、学園訓「柔しく剛く」を教育の基本理念として、各学科のディプロマ・ポリシーを達成するため、以下の通り教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）を定める。ディプロマ・ポリシーや後述するアドミッション・ポリシーとの相関は、【資料 7-1】「理工学部 生物科学科の養成人材像及び 3 つのポリシーの対応」、【資料 7-2】「理工学部 情報科学科の養成人材像及び 3 つのポリシーの対応」、【資料 7-3】「理工学部 建築学科の養成人材像及び 3 つのポリシーの対応」に示し、養成する人材像及び 3 つのポリシーの各項目が整合するように策定している。

カリキュラム・ポリシーを踏まえた教育課程の編成やカリキュラム・ポリシー各項目と教育課程の整合については、「④教育課程の編成の考え方及び特色」で後述する。

【生物科学科 教育課程編成・実施の方針】

CP1 【倫理観・使命感】

幅広い教養や豊かな人間性を養う科目を特別科目及び共通教育科目に配置するとともに、理学と工学の関係性と社会での有用性を学ぶ科目を専門教育科目の理工学部共通科目に配置し、生命倫理、生物多様性の維持・持続可能性について学ぶ科目、生物科学の学びと実践の関連性を認識しキャリア形成及び専門的職業人としての使命感を醸成する科目を専門教育科目の基礎科目を中心に配置する。

CP2 【知識・技能・態度】

理工学の基本的概念や理工系人材に共通して求められるデータサイエンス・AI に関する基礎知識を学ぶ科目を専門教育科目の理工学部共通科目に配置する。また、生化学、分子生物学を中心とした生物学の基礎知識を修得するための科目を専門教育科目の基礎科目を中心に配置するとともに、科学的研究で必要とされる実験手法や分析技術の基本を身に付けるための科目を専門教育科目の実験実習科目に配置する。さらに、「食」「資源」「環境」に関わる諸課題における生物科学の役割や基本的な知識を理解し、課題の解決、新たな価値の創造に意欲的に取り組む態度を身に付けるための科目を専門教育科目の主要授業科目を中心に配置する。

CP3 【思考力・判断力・表現力】

「食」「資源」「環境」に関する科学的データや情報を調査収集し、それらを的確に解釈・分析することで、課題解決や新たな価値の創造に向けて論理的に思考・判断するための科目を専門教育科目の主要授業科目を中心に配置する。加えて、成果を的確に伝えることのできる表現力を身に付けるための科目を専門教育科目の専門演習・卒業研究を中心に配置する。

CP4【自律性の確立】

変動する社会の変化に対応し続けるために自律性をもって自己研鑽し続ける力、自ら目標を設定し達成のための計画立案及び実行できる力を身に付けるための科目を専門教育科目の専門演習・卒業研究を中心に配置する。

CP5【社会性・コミュニケーション能力】

他者を尊重し積極的に意思疎通を図ることで、様々な立場の人々と連携・協働できる力を身に付けるため、専門教育科目にディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションを計画した科目を専門演習・卒業研究を中心に配置する。

CP6【多様性の受容と理解】

特別科目や専門教育科目においてディスカッションを計画する科目など、多様化・複雑化する現代社会を生きる上で、価値観や視点の異なる他者を受容・理解し、多角的な視点・立場における思考や人を思いやる柔軟な態度を身に付けるための科目を配置する。

CP7【学修成果の評価】

全ての授業科目の学修成果は、各授業科目の到達目標の達成度について、成績評価基準（小テスト、試験、課題、レポート、プレゼンテーション、取組意欲・姿勢、グループワークの参加度など）を用いて評価する。全ての授業は公開されることを原則とし、授業公開を毎学期行なう。加えて、学生による授業評価アンケートにより、個々の教員の授業の質の維持・改善、新しい授業方法の開発・展開、教育課程全体の評価検証を行う。

【情報科学科 教育課程編成・実施の方針】

CP1【倫理観・使命感】

幅広い教養や豊かな人間性を養う科目を特別科目及び共通教育科目に配置するとともに、理学と工学の関係性と社会での有用性を学ぶ科目を専門教育科目の理工学部共通科目に配置し、データのプライバシー保護や権利尊重、公正なシステム設計など情報技術を扱う際の社会規範・倫理観を学ぶ科目を専門教育科目の基礎科目・卒業研究に配置する。また、社会における情報科学の役割を学び、社会課題の改善に対する責任感と使命感を醸成する科目を専門教育科目の基礎科目・卒業研究に配置する。

CP2【知識・技能・態度】

理工学の基本的概念や理工系人材に共通して求められるデータサイエンス・AIに関する基礎知識を学ぶ科目を専門教育科目の理工学部共通科目に配置する。また、デジタルメディア、ヒューマンインタフェース、データサイエンスに関する基礎知識を修得するための

講義科目を専門教育科目の基礎科目・卒業研究及び展開科目を中心にそれぞれ配置する。さらにシステム設計・開発・運用、ユーザーインタフェース環境の構築、データ分析などに必要な技能、新たな価値の創造に意欲的に取り組む態度を身に付けるため、プログラミングを中心に専門教育科目の基幹科目を配置するとともに、専門教育科目の展開科目におけるデジタルメディア、ヒューマンインタフェース、データサイエンス各分野に演習科目を配置する。

CP3【思考力・判断力・表現力】

情報理論に基づく定量的な分析・評価により社会課題の構造を思考・判断する力、課題解決に寄与する創造的なアイデアを生み出す思考力を身に付けるための科目を、専門教育科目の基礎科目・卒業研究及び展開科目におけるデジタルメディア、ヒューマンインタフェース、データサイエンス各分野に配置する。さらに、取り組みの成果を第三者に向けて発信する表現力を身に付けるための科目を専門教育科目の基礎科目・卒業研究に配置する。

CP4【自律性の確立】

変動する社会の変化に対応し続けるために自律性をもって自己研鑽し続ける力、自ら目標を設定し達成のための計画立案及び実行できる力を身に付けるための科目を専門教育科目の基礎科目・卒業研究に配置する。

CP5【社会性・コミュニケーション能力】

他者を尊重し積極的に意思疎通を図ることで、様々な立場の人々と連携・協働できる力を身に付けるため、専門教育科目にディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションを計画した科目や卒業研究を配置する。

CP6【多様性の受容と理解】

特別科目や専門教育科目においてディスカッションを計画する科目など、多様化・複雑化する現代社会を生きる上で、価値観や視点の異なる他者を受容・理解し、多角的な視点・立場における思考や人を思いやる柔軟な態度を身に付けるための科目を配置する。

CP7【学修成果の評価】

全ての授業科目の学修成果は、各授業科目の到達目標の達成度について、成績評価基準（小テスト、試験、課題、レポート、プレゼンテーション、取組意欲・姿勢、グループワークの参加度など）を用いて評価する。全ての授業は公開されることを原則とし、授業公開を毎学期行なう。加えて、学生による授業評価アンケートにより、個々の教員の授業の質の維持・改善、新しい授業方法の開発・展開、教育課程全体の評価検証を行う。

【建築学科 教育課程編成・実施の方針】

CP1 【倫理観・使命感】

幅広い教養や豊かな人間性を養う科目を特別科目及び共通教育科目に配置するとともに、理学と工学の関係性と社会での有用性を学ぶ科目を専門教育科目の理工学部共通科目に配置し、建築に携わる専門的職業人としての使命感・倫理観について学ぶ科目を専門教育科目の基幹科目・卒業研究を中心に配置する。また、社会規範、自然環境への配慮と調和、持続可能な社会の発展に向けた倫理観を醸成する科目を専門教育科目の展開科目に配置する。

CP2 【知識・技能・態度】

理工学の基本的概念や理工系人材に共通して求められるデータサイエンス・AI に関する基礎知識を学ぶ科目を専門教育科目の理工学部共通科目に配置する。また、建築に携わる専門的職業人としてふさわしい「設計」「構造・材料」「環境・設備」及び関連諸領域に関する基礎的な知識を修得するための科目を専門教育科目の基幹科目・卒業研究と展開科目にそれぞれ配置する。さらに設計製図等に必要な技能、新たな価値創造に意欲的に取り組む態度を身に付けるため、設計に関わる演習科目や実験実習科目を専門教育科目の基幹科目・卒業研究と展開科目にそれぞれ配置する。

CP3 【思考力・判断力・表現力】

修得した知識・技能・態度を駆使し、複雑な設計課題に対して、材料、時間、予算などのリソースを管理し、実現可能かつ実用的な解決方法を思考・判断する力、その成果を的確に伝えることのできる表現力を身に付けるため、専門教育科目に講義科目及び演習科目を配置する。また、デザインを重視した意匠設計を学び、高い創造力を身に付けるため、設計に関わる演習科目を専門教育科目の基幹科目・卒業研究と展開科目に配置する。加えて、各自の必要に応じて表現力を磨けるように専門教育科目の展開科目に関連科目を配置する。

CP4 【自律性の確立】

変動する社会の変化に対応し続けるために自律性をもって自己研鑽し続ける力、自ら目標を設定し達成のための計画立案及び実行できる力を身に付けるための科目を専門教育科目の基幹科目・卒業研究と展開科目に配置する。

CP5 【社会性・コミュニケーション能力】

他者を尊重し積極的に意思疎通を図ることで、様々な立場の人々と連携・協働できる力を身に付けるため、専門教育科目にディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションを計画した演習科目及び卒業研究を配置する。

CP6【多様性の受容と理解】

特別科目や専門教育科目においてディスカッションを計画する科目など、多様化・複雑化する現代社会を生きる上で、価値観や視点の異なる他者を受容・理解し、多角的な視点・立場における思考や人を思いやる柔軟な態度を身に付けるための科目を配置する。加えて、多様な文化・歴史、利用者の特性に合わせた建築について考察を深めるための科目を専門教育科目の展開科目に配置する。

CP7【学修成果の評価】

全ての授業科目の学修成果は、各授業科目の到達目標の達成度について、成績評価基準（小テスト、試験、課題、レポート、プレゼンテーション、取組意欲・姿勢、グループワークの参加度など）を用いて評価する。全ての授業は公開されることを原則とし、授業公開を毎学期行なう。加えて、学生による授業評価アンケートにより、個々の教員の授業の質の維持・改善、新しい授業方法の開発・展開、教育課程全体の評価検証を行う。

8. 入学者受入れの方針（アドミSSION・ポリシー）

養成する人材像及びディプロマ・ポリシーの達成のために編成されたカリキュラム及び学力の3要素を踏まえ、以下のような入学者受入れの方針（アドミSSION・ポリシー）を定める。ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーとの相関は、【資料 7-1】「理工学部 生物科学科の養成人材像及び3つのポリシーの対応」、【資料 7-2】「理工学部 情報科学科の養成人材像及び3つのポリシーの対応」、【資料 7-3】「理工学部 建築学科の養成人材像及び3つのポリシーの対応」に示し、養成する人材像及び3つのポリシーの各項目が整合するように策定している。

アドミSSION・ポリシーにおける中核的な資質・能力及び、それらを踏まえた選抜方法、選抜体制、選抜基準やアドミSSION・ポリシーの各項目と入学者選抜方法の整合については、「⑧入学者選抜の概要」で後述する。

【生物科学科 入学者受入れの方針】

求める入学者

関心 意欲

- 〔AP1〕 植物・微生物・動物等の地球上の生命体に対する好奇心と探究心を持っている人
- 〔AP2〕 自然と社会の共生・科学と技術の調和に関心があり、専門知識や技量を高めようという意志のある人
- 〔AP3〕 目標に向けて主体的に学び続ける意欲と向上心の強い人
- 〔AP4〕 持続可能な社会の発展に貢献したいと考えている人

入学者に求める能力	
知識 技能	[AP5] 高等学校卒業程度の十分な基礎学力と、本学の教育を受けるに必要な基礎学力 [AP6] 読解、表現、コミュニケーションに必要とされる基礎学力
思考 判断 表現	[AP7] 社会的な問題についての関心及び科学的な思考力 [AP8] 社会で活躍するために必要な知識・技能・態度を入学後の学修を通して修得できることに加え、自ら課題の発見と解決に取り組むことのできる基礎的な思考力・判断力・表現力
主体性 多様性 協調性	[AP9] 多様な人々と協力して学び合うために必要な主体性・協調性・知的好奇心・旺盛な学修意欲

【情報科学科 入学者受入れの方針】	
求める入学者	
関心 意欲	[AP1] 情報技術に対する好奇心と探究心を持っている人 [AP2] デジタル社会の進展に関心があり、専門知識や技量を高めようという意志のある人 [AP3] 目標に向けて主体的に学び続ける意欲と向上心の強い人 [AP4] 持続可能な社会の発展に貢献したいと考えている人
入学者に求める能力	
知識 技能	[AP5] 高等学校卒業程度の十分な基礎学力と、本学の教育を受けるに必要な基礎学力 [AP6] 読解、表現、コミュニケーションに必要とされる基礎学力
思考 判断 表現	[AP7] 社会的な問題についての関心及び科学的な思考力 [AP8] 社会で活躍するために必要な知識・技能・態度を入学後の学修を通して修得できることに加え、自ら課題の発見と解決に取り組むことのできる基礎的な思考力・判断力・表現力
主体性 多様性 協調性	[AP9] 多様な人々と協力して学び合うために必要な主体性・協調性・知的好奇心・旺盛な学修意欲

【建築学科 入学者受入れの方針】	
求める入学者	
関心 意欲	[AP1] 住空間や建築デザインに対する好奇心と探究心を持っている人 [AP2] 人間の生活のあり方に関心があり、専門知識に基づいて建築デザインやまちづくりに意欲がある人

	[AP3] 目標に向けて主体的に学び続ける意欲と向上心の強い人 [AP4] 持続可能な社会の発展に貢献したいと考えている人
入学者に求める能力	
知識 技能	[AP5] 高等学校卒業程度の十分な基礎学力と、本学の教育を受けるに必要な基礎学力 [AP6] 読解、表現、コミュニケーションに必要とされる基礎学力
思考 判断 表現	[AP7] 社会的な問題についての関心及び科学的な思考力 [AP8] 社会で活躍するために必要な知識・技能・態度を入学後の学修を通して修得できることに加え、自ら課題の発見と解決に取り組むことのできる基礎的な思考力・判断力・表現力
主体性 多様性 協調性	[AP9] 多様な人々と協力して学び合うために必要な主体性・協調性・知的好奇心・旺盛な学修意欲

9. 研究対象とする中心的な学問分野

ア. 生物科学科

生物科学科では、生物学の基礎的分野と基礎研究・理学関係分野、応用生物学分野を主な対象学問分野とする。具体的には以下の分野である。

①生物学の基礎的分野

生物化学、細胞生物学、植物分類学、動物分類学、植物生態学、環境生物学など。

②基礎研究・理学関係分野

植物生理学、動物生理学、分子生物学、遺伝子学、微生物学、遺伝子工学など。

③応用生物学分野

園芸植物学、食品機能学、発酵・醸造学、植物育種学など。

イ. 情報科学科

情報科学科では、デジタルメディア分野、ヒューマンインタフェース分野、データサイエンス分野を主な対象学問分野とする。具体的には以下の分野である。

①デジタルメディア分野

情報の定義や計測、伝送や保存を研究する「情報理論」、プログラミング、アルゴリズムやデータ構造、情報セキュリティを研究する「コンピュータ科学」、情報倫理、著作権やプライバシー、デジタルデバイスなどを研究する「情報社会学」など。

②ヒューマンインタフェース分野

人間の認知、知覚、情報処理に配慮しながら、ユーザビリティの高い操作性、認識を実現するための研究「ヒューマンインタフェース」、成長が期待される XR 技術等を研究する「メタバース（ゲーム開発）」など。

③データサイエンス分野

情報処理技術を応用したシステムの設計や開発、運用を研究する「情報工学」、先の情報工学技術を活かし、センサから収集したデータを統計、分析、機械学習等を複数組み合わせ有益な洞察、課題解決を研究する「データサイエンス」など。

ウ. 建築学科

建築学科では、建築に関わる「設計・計画」「構造」「環境設備」「材料施工」を主な対象学問分野とする。幅広い教養と建築学に関する実践的な知識・技術を修得して、時代とそれぞれの社会・文化に対応した安全快適な建築、住宅、都市空間の創出に貢献する。

①設計・計画分野

建築意匠学、建築計画学、建築史など。

②構造分野

構造力学、建築一般構造学など。

③環境設備分野

建築物における照明、音響、空調などを研究する建築環境学など。

④材料施工分野

建築材料学、建築施工、建築積算、建築材料実験など。

⑤その他

リノベーションに代表される建築再生学など既存の価値を再提案する知識・技術や、現代の多様なライフスタイルに適応し、健康で快適な住空間、顧客を魅了する商空間を創造する空間デザインも学ぶ。

②学部・学科等の特色

1. 理工学部が担う重点的な機能

本学部は、幅広い教養と豊かな人間性を授け、各学科の専門的知識・技術を理論的、実践的に教授・研究することで、急速な技術革新、自然と社会の共生、持続可能な社会の実現など、現代社会が抱える複雑な課題に自ら対応策を模索する人材を養成することを目的とする。これは、中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像（平成 17（2005）年）」の提言する「高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化」における 7 つの機能のうち、主に「3. 幅広い職業人養成」や「4. 総合的教養教育」の機能を重点的に担うものである。その実現のため、理工学部及び各学科では以下の点を特色とする。

2. 理工学部の教育の特色

(1) 理学と工学の相互関係を学び、社会での役割を学ぶ

理学での発見が工学に応用され、逆に工学での課題が理学研究に影響を与えるように、理学と工学は相互作用を伴って発展を遂げ、新しい科学技術や価値創出に重要な役割を果たしている。理工学部の教育課程においては、まず 3 学科共通で学ぶ『理工学部共通科目』に配置された 1 年次前期・必修科目「理工学概論」を 3 学科の学生全員が履修することで、理学と工学の関係性を学び、そこから生まれる科学技術がどのようにして自然と社会の共生や持続可能な社会の発展に寄与できるかを学ぶ。本科目においては、受講者が理学とは何か、工学とは何かを理解するとともに、双方の視点を得ることで物事を俯瞰する力、学問間の関係性、社会での有用性・実践力について関心を持ち、各学科での専門的知識・技能・態度の修得に主体的に臨むための基盤を築く。

(2) 理工系人材に共通して求められるデータサイエンス・AI に関する基礎知識を得る

本学では全ての学生が ICT 技術を幅広く活用できるように、全学共通の『共通教育科目』の『情報処理科目』に配置された「情報処理基礎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」等の履修により情報技術の基本を学ぶ。これには、コンピュータの基礎知識、デジタルリテラシーが含まれる。さらに理工学部の学生には、全学共通の科目に加えて、より専門的な知識が必要とされるため、『理工学部共通科目』に配置された 1 年次後期・必修科目「理工学データサイエンス」を 3 学科の学生全員が履修する。この科目では、データ分析、機械学習、AI アプリケーションの技術についての知識と技能など、理工系人材に特化したトピックを扱う。このように、全学共通の『共通教育科目』は情報技術の基礎を広くカバーするのに対して、『理工学部共通科目』は理工系の分野を学ぶ学生に共通して求められる知識・技能を身に付け、新たな価値の創造に意欲的に取り組む態度と定量的な分析・評価により社会の課題を考え、課題解決に寄与する創造的なアイデアを生み出す思考力や表現力を養うことに重点を置く。

(3) 多様な学生を受入れ、理工系人材育成のための基盤を強化する

内閣官房の教育未来創造会議の提言「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）（令和4（2022）年5月10日）」で指摘されている通り、我が国における女性の理工系人材不足と、その要因としてあげられる高等学校段階での理系離れや、社会全体に根付いている男女の性別による先入観等を考慮すれば、文系や理系といった高等学校段階での伝統的な分類に拘ることなく、本学部の分野に興味関心を持つ優秀な受験者を広く受入れ、理工系分野を学び社会で活躍できる女性人材を育成することが重要である。本学では、学びたい意欲を有する者に門戸を開き、積極的に受け入れる一方で、本学科の教育課程を円滑に履修できるよう、入学前教育及び初年次教育を充実させる。理工学部の入学予定者に対しては、数学・理科・情報・国語・英語の入学前教育（学科により科目等が異なる）としてeラーニングを提供する。さらに入学後には、プレースメントテストを実施することにより学生ごとの教科別の習熟度を判定し学修支援を行う。本学部各学科での学修に不安を感じている者や特定分野の能力が不足している者に対しては、「リメディアル学内講習会（補習）」を開催する。また、チューター（クラス担任）及び学習支援センターが個別支援やアドバイス等を行う。加えて、理工学部各学科の教育課程においても、初年次には、高等学校分野の発展領域として、生物科学科では「基礎生物学」「基礎化学」、情報科学科では「情報基礎数学Ⅰ」「情報基礎数学Ⅱ」、建築学科では「建築基礎数学」「建築基礎物理」といった科目を配置し、各学科の基盤となる理数系科目について基礎から段階的に学修することで、4年間の学びを通してディプロマ・ポリシーに定めた学修目標を達成できるように設計している。このように本学では、入学者選抜と入学前・入学後の教育プログラムを一体的に検討しており、大学で学びたい意欲と主体性・向上心を有する多様な学生を積極的に受入れ、育成するための仕組みを強化している。

3. 各学科の教育の特色

ア. 生物科学科

① 早期段階からの実学的・実践的学修

生物科学科では、講義科目により理論を学ぶだけでなく、初年次から実験・実習科目を通じて生物生命のメカニズムを理解することに重点を置く。具体的には、1年次から「化学実験Ⅰ・Ⅱ」「生物学実験Ⅰ」で基本的な実験操作や測定機器の取扱いを理解するほか、「植物学フィールドリサーチ」ではキャンパス構内に生育する植物群を実際に採集し観察することで、植物の形態形質や分類学、生態学的・進化的特性を実践的に学ぶ。このように早期段階から実験・実習科目を通して実践的に学ぶことで、生物学を学ぶモチベーションを高める。加えて、「サステナビリティ生物学」では持続可能な社会の実現における生物学が果たす役割を理解し、「バイオビジネス実践論」ではゲストスピーカーによる講話を通して農林水産業や食品産業など具体的なビジネスの現場での活用事例を学びながら、生物学の学びと実践の間の関連性を認識し、卒業後のキャリア形成や職業理解に繋げていく。

②3 年次前期からコースに分かれ、専門性を高める

3 年次からは以下のコースに分かれ、主に専門教育科目『展開科目』に配置する科目を履修することで、学生は 2 年次後期までに修得した基礎知識・技能をもとに、各コース該当分野を中心として専門知識を積み上げ、「知識」の専門性を高める。あわせて、具体的な研究事例や社会での応用事例などを学修する課程で、それら知識をどのように運用・検証するか、結果をどのように考察するかを学ぶ。これにより、課題探究の方法や自分なりの視点を身に付けることができ、「課題探究力」の専門性を高めることができる。

理論追究：生物科学コース
生物学の基本原理に対する理解を深めることを目的とし、基礎研究や理論的な側面に興味を持つ学生を主な対象とする。生物学の基本原理を理解し、根源を探究する上で必要な知識の高度化を図るため、専門教育科目『実験実習科目』から「植物生理学実習」、『展開科目』の科目区分『理論追究』から「植物生理学」「遺伝子工学」「生物資源工学」といったコース必修科目を履修し、加えてこれらの科目と関連の深い分野である応用生物学・生物生態学分野、応用微生物学・遺伝子工学分野を中心に「動物生理学」「微生物利用学」「植物免疫学」「バイオインフォマティクス」など複数の選択科目から履修する。さらに専門教育科目『展開科目』の科目区分『理論追究』に配置したコース選択必修科目「生理学演習」「微生物工学演習」「生物資源工学演習」から、いずれか 1 科目以上を履修することで、具体的な研究事例、応用事例、最新の研究成果などを学び、課題設定、実験・発見のプロセスを理解することで知識の運用方法、仮説検証手法を考察する力を高める。
実践展開：食・環境開発コース
理論から実践への応用に焦点をあて、持続可能な食品生産や環境・資源管理に興味を持つ学生を主な対象とする。主に生物由来（特に植物）の商品開発(加工)、消費・流通、環境等の側面に焦点をあてた知識の高度化を図るため、専門教育科目『展開科目』の科目区分『実践展開』から「花卉園芸科学」「発酵工学」「バイオマス利用論」といったコース必修科目を履修し、加えてこれらの科目と関連の深い分野である植物育種学・花卉園芸科学分野、環境科学分野、応用微生物学・遺伝子工学分野を中心に「園芸植物学」「醸造科学」「環境保全論」「生物共生論」「食品の機能」など複数の選択科目から履修する。さらに専門教育科目『展開科目』の科目区分『実践展開』に配置したコース選択必修科目「園芸科学演習」「発酵・醸造学演習」から、いずれか 1 科目以上を履修することで、産業応用事例や技術及びそれらの改善プロセスを学ぶことで、生物学の知識を社会で応用する上で必要な知識・知見を学び、理解を深める。

イ. 情報科学科

①1・2 年次に基盤教育として情報技術の基礎と技術者倫理を学ぶ

本学科の基盤教育として、静的な Web サイト構築の基本原理、VR プログラミングソフトウェアを作成、人工知能における機械学習及び深層学習の手法などの基礎的知識を学ぶ必修科目を 1・2 年次に配置する。さらに、1 年次には「科学と倫理」「知的財産論」、2 年次に

は「情報セキュリティ」などの科目を配置し、情報倫理、著作権やデータのプライバシー保護など情報技術を扱う者として必要な社会規範や倫理観について学ぶ。

②3 年次以降、専門性の高い 3 分野 7 領域から履修科目を選択し、知識・技能を高める

本学科では、急速に進化する高度情報化社会の中で、情報通信技術を以下の通り 3 分野 7 領域に分類・定義し学修する。

デジタルメディア分野	ヒューマンインタフェース分野	データサイエンス分野
プログラミング領域	ヒューマンインタフェース領域	IoT・データサイエンス領域
Web 領域	ゲーム開発領域	人工知能領域
サーバ・ネットワーク領域		

現代の情報通信技術は 1 つの分野・領域のみで完結することではなく、複数の分野・領域との組み合わせから新たな情報通信技術やサービスが開発されることが多い。本学科では上記 3 分野でそれぞれ必修科目を設定することで、すべての学生が最低限学ぶべき専門的知識・技能を明示するとともに、3 年次以降は、自分の関心テーマにより学ぶ領域を選択することで、社会に情報を発信する能力（デジタルメディア分野）、誰もが情報にアクセス・理解・活用できるデジタル上での表現力（ヒューマンインタフェース分野）、社会の多様な課題を発見する手法や課題解決に向けて適切なデータを収集・分析・活用できる知識と技術（データサイエンス分野）を高める。

ウ. 建築学科

①自然環境への配慮を含めた広範な生活環境に対応する力を養う

持続可能な社会実現に貢献する上で、建築家は地域社会の文化や歴史、風土、気候などを理解し、様々な利用者に合わせた利益を最大限考慮するとともに、自然エネルギーの利用、省エネルギー設計など環境問題にも配慮した設計を行う必要がある。本学科では、建築に関する専門的知識・技能の修得に加えて、必修科目として「建築倫理」や「建築キャリアデザイン」で自然との共生、持続可能な社会における建築家として必要な倫理観や使命感を理解し、「建築環境学」や「建築材料学」では環境に配慮した建築設計についての知識と技術を学ぶ。

②2 年次前期から希望する進路により、コースに分かれ専門性を高める

2 年次前期からは、希望する進路に応じて以下のコースに分かれ、専門性を高める。

建築コース
将来の進路として、一級建築士をはじめとする建築士として活躍することを想定し、設計演習科目を多く配置し、製図用具の使い方から応用設計まで段階的に学ぶ。デザインに重点を置いた意匠設計に焦点を当て、創造性と表現力を高める。4 年次には、学生一人ひとりに専用の製図機とパソコンを完備した個人設計スペース（スタジオ）を提供することで、個々の技術と創造力を最大限発揮することが可能となる。

空間デザインコース

将来の進路として、空間デザインの専門家として活躍することを想定し、現代の多様なライフスタイルに適応した、健康で快適な住空間や顧客を惹き付ける商空間、美しいランドスケープデザインなどを多角的に学ぶ。また、既存住宅の長寿命化や歴史的街並みの保存など、既存建築物の固有価値を活かし、新たな価値を付加して再構成するリノベーションの手法を学修する。

③学部・学科等の名称及び学位の名称

1. 学部の名称

今後の日本が直面する自然と社会の共生、自然と産業の調和、文化と社会・経済の連動といった多岐にわたる課題に対応し、知識と技術の急速な進展を人間の「生活の質」に寄与させることが求められる中で、本学部は学園訓「柔しく剛く」に基づく全人教育を通じて、真理の追究や人間性の向上を促し、専門知識・技術を理論的かつ実践的に提供し、自然の道理を探究する「理学的視点」と、その知識をもとに独創的に応用する「工学的視点」を身に付け、持続可能な社会の発展に寄与する人材の育成を目的としている。この理念と人材育成像、教育課程を踏まえ、本学部の名称を「理工学部」とし、英語表記は「Faculty of Science and Engineering」とする。

2. 学科の名称及び学位の名称

ア. 生物科学科

本学科は生物学に関する幅広い分野にわたる教育と研究を行う。分子生物学、植物育種学、応用生物学、微生物学など、生物学のさまざまな分野を取り扱うため、学科名称を広範で包括的な意味合いを持つ「生物科学科」とし、学位についても同様に「学士（生物科学）」とする。

イ. 情報科学科

本学科は情報通信技術に焦点を当て、社会の要請や技術の進展に対応するためデジタルメディア分野、ヒューマンインタフェース分野、データサイエンス分野の3分野を中心に広範な知識とスキルを教授するため、学科名称を包括的な意味合いを持つ「情報科学科」とし、学位についても同様に「学士（情報科学）」とする。

ウ. 建築学科

本学科は研究対象とする中心的な学問分野を建築学とし、実践的な知識・技術を修得して、時代とそれぞれの社会・文化に対応した安全快適な建築、住宅、都市空間の創出に貢献するため、学科名称を「建築学科」とし、学位についても同様に「学士（建築学）」とする。

<学部・学科名称>

(学部)	理工学部	(英語表記)	Faculty of Science and Engineering
(学科)	生物科学科	(英語表記)	Department of Biological Science
	情報科学科	(英語表記)	Department of Informatics
	建築学科	(英語表記)	Department of Architecture

<学位名称>	生物科学科	学士（生物科学）	(英語表記)	Bachelor of Biological Science
	情報科学科	学士（情報科学）	(英語表記)	Bachelor of Informatics
	建築学科	学士（建築学）	(英語表記)	Bachelor of Architecture

④教育課程の編成の考え方及び特色

本学では、学園訓「柔しく剛く」を教育の基本理念として、各学科のディプロマ・ポリシーを達成するため、教育課程の編成方針（カリキュラム・ポリシー）を定める。ディプロマ・ポリシーやアドミッション・ポリシーとの相関は、【資料 7-1】「理工学部 生物科学科の養成人材像及び3つのポリシーの対応」、【資料 7-2】「理工学部 情報科学科の養成人材像及び3つのポリシーの対応」、【資料 7-3】「理工学部 建築学科の養成人材像及び3つのポリシーの対応」に示し、養成する人材像及び3つのポリシーの各項目が整合するように策定している。

本学部の教育課程は、3学科ともに全学共通の教養教育として科目群『特別科目』『共通教育科目』を配置し、理工学部及び各学科の専門教育として科目群『専門教育科目』を配置している。なお、1単位の授業科目に必要な学修時間は「大学設置基準」第21条及び「安田女子大学学則」第9条に基づき定めている。この単位の基準及び授業形態（講義、演習、実験・実習）を基準に、授業の方法や授業時間以外の学修時間を考慮した上で授業科目ごとの単位数を設定している。講義科目は15時間の授業をもって、演習科目は15時間または30時間の授業をもって、実験・実習科目は30時間または45時間の授業をもって、それぞれ1単位としている。授業期間については「大学設置基準」第22条及び「安田女子大学学則」第6条及び第6条の2に基づき定めている。学年を前期（4月1日から9月19日まで）と後期（9月20日から翌年3月31日まで）の2学期に分け、1年間の授業を行う期間は35週にわたることを原則とする。授業を行わない日（休業日）については、国民の祝日に関する法律に規定する休日、日曜日、夏季休業、冬季休業及び学年末休業であり、授業が休講になった場合や授業回数が不足している場合は、補講を実施することで、1年間の授業期間を通して十分な教育効果を確保することができるよう設定している。

1. 教育課程の構成と体系性（教養教育）

教養教育は、豊かな人間性の涵養を目的とした『特別科目』、幅広い教養を有する人材を養成するための『共通教育科目』の科目群で構成する。

(1) 特別科目

本学の基本理念に沿って「人間性の涵養」を目指すため、特別科目として、「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」を通年の必修科目（計4単位）として開講する。「まほろば教養ゼミ」は、教育指導の柱として次の4点を掲げる。

- ・ 安田を知る：学園訓「柔しく剛く」のもと、本学の歴史を学ぶと同時に、本学の伝統を理解し、本学の一員としての自覚を深め、自分自身を形成する基礎を固める。
- ・ 学びを知る：大学における学びとは何かを理解し、自分自身の学び方を獲得し、広く教養を身に付け、専門教育において、さらに深い学問へと導く道筋を確認する。
- ・ 自分を知る：本学の一学生として自分を見つめ直し、本学の伝統に則って行動できる人間性の形成に努める。他者と関わり、主体的に行動することのできる自分を作り上げる。

- ・ 社会を知る：卒業後、社会の一員として活躍できるための知識を養う。社会に関わる知識と教養を身に付け、種々の活動を通して社会的視野を広げ、自己を社会の一員としてより確かなものに育てる。

(2) 共通教育科目

共通教育科目は、『キャリア科目』『教養科目』『基礎科目』から構成し、32 単位以上修得することを卒業要件としている。

・ キャリア科目

将来への目的意識を明確にし、入学早期より望ましい職業観、勤労観及び職業に関する基本的知識、技術、態度を修得することを目的とする。「キャリアデザインⅠ・Ⅱ」「ボランティア活動」「インターンシップ」「職と食－パティシエ実習」がある。

・ 教養科目

教養科目は、学生の興味と関心をもとに、選択科目として全学年にわたり開講し、社会人としての教養を幅広く身に付けさせる。「人間理解」「社会理解」「国際理解」「科学技術理解」の4分野により構成する。

「人間理解」

人間性に対する深い理解と関心を深める。「人間論 A・B」「こころの科学 A・B」「からだの科学 A・B・C」「人間形成の科学 A・B」「ことばの世界 A・B」「日本の文学 A・B」「世界の文学 A・B」「芸術 A・B」を開講する。

「社会理解」

人々の集団、地域社会等、現代社会がどのように相互に関連し、影響しあっているかという点について、理解と関心を深める。「現代社会と人間 A・B」「21 世紀の社会と法 A（日本国憲法）・B」「21 世紀の経済 A・B」「現代のビジネス A・B」「現代社会と政治 A・B」を開講する。

「国際理解」

日本と外国との相互の関連、歴史的、社会的背景、またそれぞれの社会制度や仕組み等について、理解と関心を深める。「異文化理解 A・B」「日本の歴史と文化 A・B」「世界の歴史と文化 A・B」「国際協力 A・B」を開講する。

「科学技術理解」

自然を理解し、生命と生活について考察して、人間に幸福をもたらす科学技術のありようを考え、人と環境、地球的規模での環境問題に対する理解と関心を深める。

「数学の世界」「自然科学の世界 A・B・C」「生命の科学 A・B・C」「環境の科学 A・B」「生活の科学 A・B」「情報の科学」を開講する。

・ 基礎科目

「情報処理科目」「健康スポーツ科目」「外国語科目」及び「基礎養成科目」に分かれて、情報処理に関する基礎的な力、生きる力の基礎となる健康や体力の向上、多様な人々との

コミュニケーションを可能にする外国語の力、専門の授業を支える基礎知識等の獲得を目的に、授業を展開する。

「情報処理科目」

コンピュータ・ネットワークを自由に使いこなせるリテラシーの獲得、また情報革命と呼ばれる変化の本質を理解し、対応するための基礎的な能力の獲得は、21世紀を生きていくための不可欠の基礎学力であり、情報処理科目の履修を通して情報処理に関する基礎的な力をつけることを目的とする。令和4（2022）年度には、文部科学省の数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度で「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」に認定された。情報処理科目は、「情報処理基礎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」及び「情報処理演習A・B・C・D」を開講し、このうち4科目（4単位）を選択必修とする。

「健康スポーツ科目」

今日の若者が次代を担う人材となる基礎には「健康なこころとからだ」が必要不可欠であり、スポーツを通して、生きる力の基礎となる健康の増進と体力の向上を図るとともに、明るく豊かな生活を創出するものとなる健康スポーツを学ぶことを目的とする。健康スポーツ科目は、「健康スポーツA・B・C」及び「野外活動」を開講する。講義内容は、総合スポーツとして様々な種目の基礎技能を修得するとともに、ルールや審判方法、マナー等を学ぶもので、健康を考え、他者との協調等を学ぶ。

「外国語科目」

今日の国際社会において、外国語の修得はますます重要なものとなっている。本科目では、読解力や作文力を養成するとともに、発信型学修に重きを置き、外国語によるコミュニケーション能力を養うことを目的とする。外国語科目は、「英語リーディングⅠ・Ⅱ」「英語ライティングⅠ・Ⅱ」「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「中国語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「北米文化語学演習」「中国文化語学演習」を開講する。講義内容は、「英語リーディング」「英語ライティング」については、英語の筆記・読解・聴解力を、コミュニケーション科目については、1年次からネイティブスピーカーの教員のもとで日常会話から始め、順を追って語学コミュニケーション能力を高める。

「基礎養成科目」

基礎養成科目は、専門教育の基礎力養成を目的として、1年次に「基礎国語演習」「基礎社会演習」「基礎数学演習」「基礎理科演習」「基礎生物演習」「基礎化学演習」「基礎物理演習」を開講する。

2. 教育課程の構成と体系性（専門教育）

専門教育は、理工系の分野を学ぶ学生に共通して求められる知識・技能・態度を身に付ける『理工学部共通科目』と各学科の『専門教育科目群』で構成する。

（1）理工学部共通科目

理学と工学の関係性を学び、そこから生まれる科学技術がどのようにして自然と社会の共生や持続可能な社会の発展に寄与できるかを学び、理工系人材としての使命感を醸成する「理工学概論」、理工系人材に共通して求められるデータサイエンス・AI に関する基礎知識・技能を学ぶ「理工学データサイエンス」の2科目（計4単位）を必修科目として開講し、3学科の学生全員が履修する。

（2）各学科の専門教育科目群

ア. 生物科学科

本学科の専門教育科目は、学科の学びの基盤となる生物学及び化学の基礎知識を身に付ける『基礎科目』、科学的研究で必要とされる実験手法や分析技術の基本を身に付ける『実験実習科目』、生物学及び化学の知識を基により深い生命現象の知識及びそれに関連する応用分野への基礎知識を身に付ける『基幹科目』、理論追究または実践展開に必要な特定の領域に特化した知識・能力を身に付ける『展開科目』、『専門演習・卒業研究』で構成する。これらを体系的に組み立て、「食」「資源」「環境」に関わる諸問題を解決し、持続可能な社会構築に寄与する使命感を持った人材を養成する。

なお、本学科のディプロマ・ポリシーを構成する DP1 から DP6 及びカリキュラム・ポリシーを構成する CP1 から CP6 と教育課程（各授業科目）との相関は、【資料 8-1】「理工学部 生物科学科 カリキュラムマップ」に示す。本学科では、養成人材の目的に照らして必要な能力を修得する上で、特に重要視される科目を必修科目とし、それらの必修科目を主要授業科目として設定する。【資料 8-1】「理工学部 生物科学科 カリキュラムマップ」において、◎は主要授業科目またはコース必修科目であり各ディプロマ・ポリシー達成のための重要な科目を表し、○はそれに準ずる科目を表す。卒業要件を満たすように学修を進めることで、ディプロマ・ポリシーを構成する DP1 から DP6 の全てで◎を付した科目の単位を修得できるようにしている。

カリキュラム・ポリシーの各項目に対応する主な授業科目は次の通りである。

生物科学科	
カリキュラム・ポリシーの各項目	対応する主な授業科目
CP1 【倫理観・使命感】 幅広い教養や豊かな人間性を養う科目を <u>特別科目及び共通教育科目</u> に配置する。	「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」 共通教育科目の科目区分 『キャリア科目』及び『教養科目』

理学と工学の関係性と社会での有用性を学ぶ科目を <u>専門教育科目の理工学部共通科目</u> に配置する。	「理工学概論」
生命倫理、生物多様性の維持・持続可能性について学ぶ科目を <u>専門教育科目の基礎科目</u> を中心に配置する。	「生物学倫理」 「サステナビリティ生物学」
生物科学の学びと実践の関連性を認識しキャリア形成及び専門的職業人としての使命感を醸成する科目を <u>専門教育科目の基礎科目</u> を中心に配置する。	「生物学入門」 「バイオビジネス実践論」 「食と環境の経済学」 「環境科学」
CP2【知識・技能・態度】 理工学の基本的概念や理工系人材に共通して求められるデータサイエンス・AIに関する基礎知識を学ぶ科目を <u>専門教育科目の理工学部共通科目</u> に配置する。	「理工学概論」 「理工学データサイエンス」
生化学、分子生物学を中心とした生物学の基礎知識を修得するための科目を <u>専門教育科目の基礎科目</u> を中心に配置する。	「生物学入門」 「基礎生物学」「基礎化学」 「サステナビリティ生物学」 「生物化学」「生化学Ⅰ・Ⅱ」 「分子生物学Ⅰ・Ⅱ」「細胞生物学」 「微生物学」
科学的研究で必要とされる実験手法や分析技術の基本を身に付けるための科目を <u>専門教育科目の実験実習科目</u> に配置する。	「化学実験Ⅰ・Ⅱ」 「植物学フィールドリサーチ」 「生物学実験Ⅰ・Ⅱ」「生化学実習」 生物科学コース必修科目 「植物生理学実習」
「食」「資源」「環境」に関わる諸課題における生物科学の役割や基本的な知識を理解し、課題の解決、新たな価値の創造に意欲的に取り組む態度を身に付けるための科目を <u>専門教育科目の主要授業科目</u> を中心に配置する。	「食品化学」「食品化学実習」 「環境科学」「環境科学実習」 生物科学コース必修科目 「植物生理学」「遺伝子工学」 「生物資源工学」 食・環境開発コース必修科目 「花卉園芸科学」「発酵工学」 「バイオマス利用論」

CP3【思考力・判断力・表現力】 「食」「資源」「環境」に関する科学的データや情報を調査収集し、それらを的確に解釈・分析することで、課題解決や新たな価値の創造に向けて論理的に思考・判断するための科目を<u>専門教育科目の主要授業科目を中心に</u>配置する。	「バイオビジネス実践論」 「食と環境の経済学」 「化学実験Ⅰ・Ⅱ」 「植物学フィールドリサーチ」 「生物学実験Ⅰ・Ⅱ」「生化学実習」 「環境科学実習」「食品化学実習」 生物科学コース必修科目 「植物生理学実習」「生物資源工学」 食・環境開発コース必修科目 「バイオマス利用論」
成果を的確に伝えることのできる表現力を身に付けるための科目を<u>専門教育科目の専門演習・卒業研究を中心に</u>配置する。	「研究企画プレゼンテーション」 「専門演習Ⅰ・Ⅱ」 「卒業研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」
CP4【自律性の確立】 変動する社会の変化に対応し続けるために自律性をもって自己研鑽し続ける力、自ら目標を設定し達成のための計画立案及び実行できる力を身に付けるための科目を<u>専門教育科目の専門演習・卒業研究を中心に</u>配置する。	「研究企画プレゼンテーション」 「専門演習Ⅰ・Ⅱ」 「卒業研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」 「バイオビジネス実践論」
CP5【社会性・コミュニケーション能力】 他者を尊重し積極的に意思疎通を図ることで、様々な立場の人々と連携・協働できる力を身に付けるため、<u>専門教育科目にディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションを計画した科目を専門演習・卒業研究を中心に</u>配置する。	「研究企画プレゼンテーション」 「専門演習Ⅰ・Ⅱ」 「卒業研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」
CP6【多様性の受容と理解】 <u>特別科目や専門教育科目においてディスカッションを計画する科目</u>など、多様化・複雑化する現代社会を生きる上で、価値観や視点の異なる他者を受容・理解し、多角的な視点・立場における思考や人を思いやる柔軟な態度を身に付けるための科目を配置する。	「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」 「生物学倫理」 「サステナビリティ生物学」 「バイオビジネス実践論」

専門教育科目の科目区分ごとの詳細は次の通りである。

①『基礎科目』

『基礎科目』では、生物科学の学びの基盤となる生化学や分子生物学を中心とした生物学及び化学の基礎知識を学ぶ科目を配置しており、そのほとんどを1年次から2年次において開講する。そのうち、「生物学入門」「生物学倫理」「基礎生物学」「基礎化学」「サステナビリティ生物学」「生物化学」「生化学Ⅰ・Ⅱ」「バイオビジネス実践論」「分子生物学Ⅰ・Ⅱ」「細胞生物学」「微生物学」「食と環境の経済学」の14科目28単位を必修科目とする。本学科の専門教育の導入科目として配置する「基礎生物学」「基礎化学」では、生物学や化学の基礎知識を学ぶことで専門科目の学修に繋げるための十分な礎を作る。「生物学入門」「サステナビリティ生物学」では、持続可能な開発目標（SDGs）と生物学との関連性、気候変動などの環境問題、食料問題、資源・エネルギーと生物学の関係性を学び、「バイオビジネス実践論」では、生物学と関わりの深いビジネスの最前線で活躍するゲストスピーカーを招聘することで、生物学が身近な生活から地球規模での問題まで、どのような役割を持ち、貢献するかを理解し、生物学に携わる専門的職業人としての責任感・使命感を醸成する。「微生物学」では、細菌、真菌、ウイルス、原虫等の細胞構造と機能について理解し、食品や医薬品などの有用物質の生産、環境や資源に関する問題にも活用される微生物の基本的知識を学ぶ。こうした必修科目の履修により、生物科学の役割や基本的な知識を理解することで、将来、課題の解決や新たな価値の創造に意欲的に取り組むための態度を身に付ける。「食と環境の経済学」では、「食」や「環境」に関する諸課題を的確に把握するために必要となる食糧経済や食品流通論、環境経済等を学ぶ。また「生物学倫理」や「サステナビリティ生物学」「バイオビジネス実践論」などの科目においては、価値観や視点の異なる他者の意見を聞く機会やディスカッションを積極的に取り入れることで、多角的な視点・立場における思考や柔軟な態度を身に付ける。

このほか選択科目として「植物生態学」や「応用微生物学」など、植物や微生物と「食」「資源」「環境」の関係性について幅広く学ぶ科目を配置し、学生の関心に合わせて理解を深められる体系を組んでいる。

『基礎科目』は合計21科目（必修14科目・選択7科目）で構成する。

②『実験実習科目』

『実験実習科目』は、科学的研究で必要とされる実験手法や分析技術の基本を身に付けることを目的としている。必修科目として「化学実験Ⅰ・Ⅱ」「植物学フィールドリサーチ」「生物学実験Ⅰ・Ⅱ」「生化学実習」「環境科学実習」「食品化学実習」の8科目8単位を開講し、基礎的な化学・生物学的実験手法を身に付け、それらを応用した環境や食品の分析技術を修得する。特に「環境科学実習」「食品化学実習」においては、水、大気、食品といった身の回りを取り巻くものを対象とした分析法を学ぶことで、「食」「資源」「環境」に関する

る科学的データや情報の調査収集、それらの解釈・分析の手法を学び、課題解決や新たな価値創造に向けて論理的に思考・判断する力を身に付ける。

このほか選択科目として、「微生物学実習」「植物生理学実習」「植物育種学実習」「植物形態学実習」「分子生物学実習」など、幅広く生命科学分野における実験技術やデータ分析のスキルを身に付ける科目を配置し、学生の関心に合わせて学修を深められる体系を組んでいる。このうち「植物生理学実習」は、生物学の基礎研究や理論的な側面に興味を持つ学生を主な対象とする「生物科学コース」（3 年次以降にコース選択）のコース必修科目として位置付け、植物が外的因子（生物的要因と物理化学的要因）にどのように反応し、内的因子を介してどのように成長や分化するのかを学ぶ。

『実験実習科目』は合計 13 科目（必修 8 科目・選択 5 科目）で構成する。

③『基幹科目』

『基幹科目』は、基礎科目で学修した基礎知識をもとに、より深い生命現象の知識及びそれに関連する応用分野に繋がる知識を身に付けることを目的としている。そのうち、「食品化学」「環境科学」の 2 科目 4 単位を必修科目として開講する。「食品化学」では、食品に含まれる栄養成分や健康維持成分、調理、加工、貯蔵中の化学変化について学ぶことで、食品の安全性と品質の保持に対する理解を深める。また、食の安全問題、食に関する環境問題、食文化の変化、持続可能性やフードテックなどの将来性についても学ぶ。「環境科学」では、エネルギー資源、気候変動の原因や生物多様性の保全、持続可能な開発目標（SDGs）と環境保護の社会的側面といった、実社会における重要な課題について学び、これらに対処するための理論と実践を結びつける知識を修得する。

このほか、選択科目として「食香粧化学概論」「フードセイフティ論」「環境生物学」「園芸栽培論」「発酵化学」など、多角的に「食」「資源」「環境」に関連する知識及び実践について学ぶことができる科目を配置し、学生の関心に合わせて学修を深められる体系を組んでいる。

『基幹科目』は合計 14 科目（必修 2 科目・選択 12 科目）で構成する。

④『展開科目』

本学科では 3 年次から学生の興味関心に合わせて 2 コースに分かれ、2 年次までに学んだ基礎知識・技能をもとに、各コース該当分野を中心として専門知識の積み上げを図るとともに応用事例の学修を通し、それら知識の運用・検証方法や結果の考察から課題探究の方法、自分なりの視点を身に付ける。『展開科目』は、生物学の基礎研究や理論的な側面に興味を持つ学生を主な対象とする「生物科学コース」と、理論から実践への応用に焦点をあて、持続可能な食品生産や環境・資源管理に興味を持つ学生を主な対象とする「食・環境開発コース」で履修する科目を 2 つに分類している。

科目区分『理論追究』に配置する「植物生理学」「動物生理学」「生理学演習」「遺伝子工学」「バイオインフォマティクス」「植物免疫学」「微生物利用学」「微生物工学演習」「生物資源工学」「生物資源工学演習」は、主に「生物科学コース」の学生を対象とする。このう

ち「植物生理学」「遺伝子工学」「生物資源工学」の3科目6単位はコース必修科目として位置付け、生物学の基本原理を理解し、根源を探究する上で必要な知識の高度化を図るため「生物科学コース」の学生が全員履修する。「植物生理学」では、エネルギー代謝として呼吸、光合成、窒素同化、糖類の合成や転流を中心に植物が生命を維持するための生理的なメカニズムを学び、「遺伝子工学」ではDNAやRNAの調製法、各種酵素を用いたDNAの加工法、DNAの配列決定法など、組換えDNAに関わる基礎的な技術の原理を理解する。「生物資源工学」では生物資源の中でも特に植物資源を中心にして成分（糖質、脂質及びタンパク質）及びその利用法、先進的な研究、バイオテクノロジーとの結び付きについて学ぶ。さらに、コース必修科目と関連の深い分野の講義科目で得た知識を統合し、具体的な研究事例、応用事例、最新の研究成果などを学び、課題設定、実験・発見のプロセスを理解することで知識の運用方法、仮説検証手法を考察する力を高めるため、演習科目「生理学演習」「微生物工学演習」「生物資源工学演習」を配置する。これらの演習科目はコース選択必修科目として、いずれか1科目以上を必修するものとし、さらに各演習科目には次の通り履修要件を設定する。「生理学演習」では、動物と植物の違いを比較しつつ、生命現象の基本原理や生体反応について具体的な事例を用いて詳細に学修する。履修要件として、同じ応用生物学・生物生態学分野の講義科目「植物生理学」「動物生理学」の単位修得を前提とする。続いて、「微生物工学演習」では、遺伝子工学と微生物工学の融合技術を理解し、研究及び産業応用への基盤を築くことを目指す。履修要件として、同じ応用微生物学・遺伝子工学分野の講義科目「遺伝子工学」「微生物利用学」の単位修得を前提とする。そして、「生物資源工学演習」では、植物資源の分析手法、成分の抽出・分離技術及びその応用についての理解を深めることを目指す。履修要件として、同じ食品機能・食品化学分野の講義科目「生物資源工学」の単位修得を前提とする。演習科目「生理学演習」「微生物工学演習」「生物資源工学演習」では、グループワークやディスカッション等を通して、他者と意思疎通を図ることで専門知識を共有し異なる視点も取り入れることにより、独自の視点を磨き、応用力を養うこともあわせて目的としている。

科目区分『実践展開』に配置する「花卉園芸科学」「園芸植物学」「園芸科学演習」「発酵工学」「食品の機能」「環境保全論」「醸造科学」「発酵・醸造学演習」「バイオマス利用論」「生物共生論」は、主に「食・環境開発コース」の学生を対象とする。このうち、「花卉園芸科学」「発酵工学」「バイオマス利用論」の3科目6単位はコース必修科目として位置付け、主に生物由来（特に植物）の商品開発(加工)、消費・流通、環境等の側面に焦点をあてた知識の高度化を図るため「食・環境開発コース」の学生が全員履修する。「花卉園芸科学」では観賞用植物の多様性、栽培技術、分類、繁殖、発育制御の原理などを学び、「発酵工学」では発酵技術や微生物由来の酵素の利用方法など食品加工と品質管理における応用を理解する。「バイオマス利用論」では再生可能資源の活用と環境保全に対する具体的な技術・実践事例に対する理解を深める。さらに、コース必修科目と関連の深い分野の講義科目で得た知識を統合し、産業応用事例や技術及びそれらの改善プロセスを学ぶことで、生物学の知識

を社会で応用する上で必要な知識・知見を学び、理解を深めるため、演習科目「園芸科学演習」「発酵・醸造学演習」を配置する。これらの演習科目はコース選択必修科目として位置づけ、いずれか1科目以上を必修するものとし、さらに各演習科目には次の通り履修要件を設定する。「園芸科学演習」では、園芸科学の実践的な知識を実際の応用事例等を通して学び、園芸植物の効果的な利用と栽培技術の向上を目指す。履修要件として、同じ植物育種学・花卉園芸科学分野の講義科目「花卉園芸科学」「園芸植物学」の単位修得を前提とする。続いて、「発酵・醸造学演習」では、実践的な発酵・醸造技術について具体的な事例を通して学び、次世代の発酵技術や機能性食品の開発に向けた基盤を築き、研究及び産業への応用方法を身に付ける。履修要件として、同じ応用微生物学・遺伝子工学分野の講義科目「発酵工学」「醸造科学」の単位修得を前提とする。また、履修要件には指定しないが「発酵・醸造学演習」と繋がりのある科目として、食品機能・食品化学分野の講義科目「食品の機能」を履修し、食品の機能性成分や人間の健康、疾患予防や改善との関係について理解を深めることもできる。演習科目「園芸科学演習」「発酵・醸造学演習」では、グループワークやディスカッション等を通して、他者と意思疎通を図ることで専門知識を共有し異なる視点も取り入れることにより、独自の視点を磨き、応用力を養うこともあわせて目的としている。

両コースの必修科目のうち、「生物科学コース」の「生物資源工学」と「食・環境開発コース」の「バイオマス利用論」は、生物資源の持続可能な利用と管理に関する現状と技術を学び、主に資源と環境の持続可能性について考察する力を高める上でも特に重要な科目と位置付けている。なお、『展開科目』に配置する科目はコース間での履修や分野選択を制限するものではなく、その多くを3・4年次の2学年を対象に合同開講することで、学びの集大成として卒業研究を完成させるまでに学生が自身の研究テーマにおいて必要と認識すれば、コースによらず柔軟に履修できるようにする。

『展開科目』は合計20科目（選択20科目）で構成する。「生物科学コース」は科目区分『理論追究』、「食・環境開発コース」は科目区分『実践展開』から、それぞれコース必修科目、コース選択必修科目を含めて合計11単位以上を修得することをコース必修要件としている。

⑤『専門演習・卒業研究』

『専門演習・卒業研究』は、本学科で学んだ知識をいかに追究あるいは実践的に生かしていくかに重点を置き、4年次の必修科目「専門演習Ⅰ・Ⅱ」や3年次後期から個々の研究テーマに応じた卒業研究を実施し卒業論文の完成を目指す「卒業研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を全員が履修する。これらの科目を通して、「食」「資源」「環境」に関する課題解決に向けて論理的に思考・判断するとともに、自ら目標を設定し達成のための計画立案力及び実行力を身に付ける。また、ディスカッションやグループワーク、プレゼンテーションなどを行い、他者を尊重し積極的に意思疎通を図ることで、様々な立場の人々と協働できる社会性も養う。このほか選択科目として、学内外の研究機関等との協働を前提とした産官学連携プロジェクト型学修「協働プロジェクトⅠ・Ⅱ」も開講する。

『専門演習・卒業研究』は合計 8 科目（必修 6 科目、選択 2 科目）で構成する。

イ. 情報科学科

本学科の専門教育科目において学びの基盤となる『基礎科目・卒業研究』は、情報科学及び高度情報化社会の基礎知識と高度情報化社会におけるエンジニアとしての社会規範・倫理観を涵養する科目群『基礎科目』と、3 年次までに学んだ知識・技能をいかに実践的に活かすかを探究する科目群『卒業研究』で構成する。このほか、高度情報化社会を支える重要なインフラであるコンピュータを動かすプログラムを創り出す作業であるプログラミングの技能を学び、新たな価値の創造に意欲的に取り組む態度を身に付ける『基幹科目』、情報通信技術をデジタルメディア分野（発信力）、ヒューマンインタフェース分野（表現力）、データサイエンス分野（課題解決力）の 3 分野に分類・定義し、専門的知識と技能を身に付ける『展開科目』で構成する。これらを体系的に組み立て、情報理論に基づく定量的な評価を用いて、社会課題を正確に理解し、解決に必要な情報システムの設計・開発から実装・運用まで行うとともに、人間の能力を援助する快適なヒューマンインタフェース環境を構築できる人材を養成する。

なお、本学科のディプロマ・ポリシーを構成する DP1 から DP6 及びカリキュラム・ポリシーを構成する CP1 から CP6 と教育課程（各授業科目）との相関は、【資料 8-2】「理工学部 情報科学科 カリキュラムマップ」に示す。本学科では、養成人材の目的に照らして必要な能力を修得する上で、特に重要視される科目を必修科目とし、それらの必修科目を主要授業科目として設定する。【資料 8-2】「理工学部 情報科学科 カリキュラムマップ」において、◎は主要授業科目であり各ディプロマ・ポリシー達成のための重要な科目を表し、○はそれに準ずる科目を表す。卒業要件を満たすように学修を進めることで、ディプロマ・ポリシーを構成する DP1 から DP6 の全てで◎を付した科目の単位を修得できるようにしている。

カリキュラム・ポリシーの各項目に対応する主な授業科目は次の通りである。

情報科学科	
カリキュラム・ポリシーの各項目	対応する主な授業科目
CP1 【倫理観・使命感】 幅広い教養や豊かな人間性を養う科目を <u>特別科目及び共通教育科目</u> に配置する。	「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」 共通教育科目の科目区分 『キャリア科目』及び『教養科目』
理学と工学の関係性と社会での有用性を学ぶ科目を <u>専門教育科目の理工学部共通科目</u> に配置する。	「理工学概論」
データのプライバシー保護や権利尊重、公正なシステム設計など情報技術を扱う際の社会規範・倫理観を学ぶ科目を <u>専門教育科目の基礎科目・卒業研究</u> に配置する。	「情報セキュリティ」 「科学と倫理」

社会における情報科学の役割を学び、社会課題の改善に対する責任感と使命感を醸成する科目を<u>専門教育科目の基礎科目・卒業研究</u>に配置する。	「情報科学概論」
CP2【知識・技能・態度】 理工学の基本的概念や理工系人材に共通して求められるデータサイエンス・AIに関する基礎知識を学ぶ科目を<u>専門教育科目の理工学部共通科目</u>に配置する。	「理工学概論」 「理工学データサイエンス」
デジタルメディア、ヒューマンインタフェース、データサイエンスに関する基礎知識を修得するための<u>講義科目を専門教育科目の基礎科目・卒業研究及び展開科目を中心にそれぞれ配置する。</u>	「情報基礎数学Ⅰ・Ⅱ」 「デジタルメディア」「Web」 「ネットワークシステム」 「ヒューマンインタフェース」 「メディアコミュニケーション基礎」 「マルチメディア」 「画像処理ライブラリ」 「データサイエンス」「情報理論」 「情報処理概論」
システム設計・開発・運用、ユーザーインタフェース環境の構築、データ分析などに必要な技能、新たな価値の創造に意欲的に取り組む態度を身に付けるため、<u>プログラミングを中心に専門教育科目の基幹科目</u>を配置する。	「プログラミング総論」 「プログラミングⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」 「コンピュータアーキテクチャ」
<u>専門教育科目の展開科目におけるデジタルメディア、ヒューマンインタフェース、データサイエンス各分野に演習科目</u>を配置する。	「Web プログラミングⅠ」 「ヒューマンインタフェースプログラミング」 「IoT 演習Ⅰ」
CP3【思考力・判断力・表現力】 情報理論に基づく定量的な分析・評価により社会課題の構造を思考・判断する力、課題解決に寄与する創造的なアイデアを生み出す思考力を身に付けるための科目を、<u>専門教育科目の基礎科目・卒業研究及び展開科目におけるデジタルメディア、ヒューマンインタフェース、データサイエンス各分野</u>に配置する。	「情報基礎数学Ⅰ・Ⅱ」 「Web」「Web プログラミングⅠ」 「ゲーム開発」 「人工知能Ⅰ（機械学習）」 「人工知能Ⅱ（深層学習）」

取り組みの成果を第三者に向けて発信する表現力を身に付けるための科目を<u>専門教育科目の基礎科目・卒業研究</u>に配置する。	「卒業研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」
CP4【自律性の確立】 変動する社会の変化に対応し続けるために自律性をもって自己研鑽し続ける力、自ら目標を設定し達成のための計画立案及び実行できる力を身に付けるための科目を<u>専門教育科目の基礎科目・卒業研究</u>に配置する。	「卒業研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」
CP5【社会性・コミュニケーション能力】 他者を尊重し積極的に意思疎通を図ることで、様々な立場の人々と連携・協働できる力を身に付けるため、<u>専門教育科目にディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションを計画した科目や卒業研究</u>を配置する。	「卒業研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」 「メディアコミュニケーション基礎」
CP6【多様性の受容と理解】 <u>特別科目や専門教育科目においてディスカッションを計画する科目</u>など、多様化・複雑化する現代社会を生きる上で、価値観や視点の異なる他者を受容・理解し、多角的な視点・立場における思考や人を思いやる柔軟な態度を身に付けるための科目を配置する。	「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」 「ヒューマンインタフェース」 「メディアコミュニケーション基礎」 「ヒューマンインタフェースプログラミング」 「ゲーム開発」 「データサイエンス」

専門教育科目の科目区分ごとの詳細は次の通りである。

①『基礎科目・卒業研究』

『基礎科目・卒業研究』は、情報科学科の学びの基盤となる科目群『基礎科目』と3年次までに学んだ知識・技能をいかに実践的に活かすかを探究する科目群『卒業研究』で構成する。

このうち『基礎科目』では、情報科学科の学びの基盤となる情報科学及び高度情報化社会の基礎知識と高度情報化社会におけるエンジニアとしての社会規範・倫理観を涵養する科目を配置しており、その多くを1年次から2年次において開講する。そのうち、「情報科学

概論」「情報基礎数学Ⅰ・Ⅱ」「科学と倫理」「情報処理概論」「情報セキュリティ」の6科目12単位を必修科目とする。「情報科学概論」では、今日の高度情報化社会を支えているコンピュータ及び情報通信ネットワークに代表される情報通信技術について、全体像を知り、情報科学において一般に知られている知識や経験を専門的な立場から概要的に理解し、社会における役割を学び、専門的職業人としての責任感・使命感を醸成する。「情報基礎数学Ⅰ・Ⅱ」では、本学科での学びがより円滑に展開できるよう、数学の基礎的かつ重要な内容を学修するとともに、数学的問題解決能力を高める。「科学と倫理」では、科学技術の進展が生活の質の向上に大きく寄与しているのと同時に、環境問題に代表される様々な弊害を生じさせていることを踏まえ、高度情報化社会におけるエンジニアにとって必要とされる倫理について、情報倫理だけでなく技術者倫理、自然環境倫理・生命倫理などについても学ぶ。また、具体的な問題を検討・ディスカッションし、倫理の問題には多様な意見が存在することを理解した上で、多角的な視点・立場における思考や柔軟な態度を身に付け、善悪・正邪を判断できる倫理観を涵養する。「情報処理概論」では、コンピュータの知識・技術を修得するために、コンピュータのソフトウェア、ハードウェアについての基本的な概念を学ぶ。加えて、情報処理を実現する手段としてのプログラミング、コンピュータの内部におけるデータの表現、データ処理を行う論理回路、論理回路からなる演算装置の構成、記憶装置についての基礎知識・技能を身に付ける。「情報セキュリティ」では、情報セキュリティ上の脅威に対して、実際にパソコンやスマートフォンを利用するときに、どのような対策を行うべきかについて、個人だけでなく企業などの組織体としての立場など多様・多角的な視点で、その手法などを体系的に学び、使命感・倫理観を涵養する。

このほか選択科目として学生の興味や関心、理解度に合わせて関連科目を配置する。「知的財産論」ではアイデアや創作物の持つ経済的価値や権利を理解し、侵害しないよう知識を身に付け、倫理観を涵養する。「情報社会論」では、高度情報化社会に至るまでの歴史を通して、現状を多角的に分析することによって、内包する問題点と危険性を明らかにし、エンジニアが情報社会とどのように関わっていくべきか、適切な関わり方について学ぶ。「人間工学」では、人間の特性、人とコンピュータシステムとの相互作用（インタラクション）、感性情報とその評価法を学び、他者を思いやる多角的な視点・立場における思考や理解、柔軟な態度を身に付ける。このように情報科学及び高度情報化社会について理解を深められる体系を組んでいる。

『卒業研究』は、3年次までに学んだ知識・技能をいかに実践的に生かしていくかに重点を置き、ディスカッションやグループワーク、プレゼンテーションなどを行い、他者を尊重し積極的に意思疎通を図ることで、様々な立場の人々と協働できる社会性を養う。各自のテーマに沿って、それぞれ教員の指導を受けながら卒業研究を行う。学生の問題意識と興味関心に沿って課題を設定した後、探究活動を行い、指導教員と協議しながら研究テーマを決定する。卒業研究を通して、広い視野で物事を捉える力、探究心と基本的研究能力、技術を培うことを目指し、「卒業研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」を全員が履修する。

このほか選択科目として、「分野横断プロジェクトⅠ・Ⅱ」を3年次に配置する。分野横断プロジェクトは、1・2年次に学んだ基本的な情報通信技術3分野の知識・技能を活かし、行政・企業と連携して課題解決に取り組むプロジェクトである。学生6～10名でチームを組み、各分野担当の教員がプロジェクトを支援する。行政・企業から提供されたデータを定量的に分析、評価することで課題を明確化し、創造力、コミュニケーション力をもってチームで検討、課題解決を試みることで社会での実践力を身に付ける。

『基礎科目・卒業研究』は合計15科目（必修10科目・選択5科目）で構成する。

②『基幹科目』

高度情報化社会を支える重要なインフラであるコンピュータは、人間の創造物であるプログラムに従って動作している。『基幹科目』は、このプログラムを創り出す作業であるプログラミングの技能を学び、新たな価値の創造に意欲的に取り組む態度を身に付けることを目的としている。本学ではこのプログラミング技能を情報通信技術の支柱の1つと考え、基幹科目として配当している。1年次の「プログラミング総論」では、プログラムの動作原理を学ぶとともに、プログラミング言語の種類、コンパイラとインタプリタ、リンカ、アルゴリズムといったプログラミングに必要な多くの基礎知識と概要を系統的に学ぶ。「プログラミングⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」は、1・2・3年次に基礎的なプログラミングから応用的なプログラミングまで、汎用性の高いプログラミング言語の技能を段階的に高められるように配置している。また、プログラミング言語の技能を修得する過程で論理的思考、創造に対する意欲、問題解決力、実行力を身に付けることを目標としている。また、「コンピュータアーキテクチャ」では、プロセッサ、メモリ、入出力、マルチプロセッサ、マルチコアというコンピュータシステムを構成する各種装置について、その役割と動作原理を学び、コンピュータの原理を理解する。

3年次以降、プログラミングについては、【資料9-2】「理工学部 情報科学科 カリキュラムツリー」に示す通り応用領域を設定しており、オブジェクト指向という考え方を学び、ソフトウェア工学の基礎的な知識を身に付ける。要求分析、設計、プログラミング、テスト、運用・保守といったソフトウェア開発プロセスや、構造化技法、オブジェクト指向に基づいた分析・設計の技法を学ぶ。そして、ソフトウェア工学の今後の展望について考察できるようにする。そして、プログラミング言語、ソフトウェアアーキテクチャ、データベース技術、ソフトウェア設計パターン、ソフトウェアテスト、プロジェクトマネジメントについての知識を深める。

このほか、1年次の選択科目「アルゴリズムとデータ構造」では、代表的なアルゴリズムとデータ構造及びプログラムに適用する方法について学ぶ。また、アルゴリズムで重要視される効率性の評価基準となる計算量についても学修し、様々なアルゴリズムの特徴や性能について考察する。このように『基幹科目』では、実践的なプログラミング技能だけでなく、コンピュータやデータ構造の原理に関する基礎知識について学ぶことができる科目を配置し、段階的に学修を深められる体系を組んでいる。

『基幹科目』は合計 9 科目（必修 6 科目・選択 3 科目）で構成する。

③『展開科目』

『展開科目』では、情報通信技術をデジタルメディア分野（発信力）、ヒューマンインタフェース分野（表現力）、データサイエンス分野（課題解決力）の 3 分野に分類・定義し、専門的知識と技能を身に付けるとともに先端技術への理解を深めることを目的としている。

情報通信技術 3 分野について、分野を隔てることなく基礎技能・知識全般について学ぶ科目を『展開科目』に必修科目として配置する。

デジタルメディア分野では、「デジタルメディア」「Web」「Web プログラミングⅠ」「ネットワークシステム」を必修科目に設定し、ハードウェア、ネットワークといった ICT 技術を基礎から学び、静的な Web ページの作成技術、情報通信システムにおけるネットワーク技術の概要、ネットワーク機器とその役割を理解する。

ヒューマンインタフェース分野では、「ヒューマンインタフェース」「メディアコミュニケーション基礎」「マルチメディア」「画像処理ライブラリ」「ヒューマンインタフェースプログラミング」「ゲーム開発」を必修科目に設定し、ヒューマンインタフェース分野を構成する様々な要素について学ぶ。画像・映像の編集技術を概観し、ゲーム開発の概要、今後一層の成長が期待されるメタバース（3 次元仮想空間）技術を知り、次世代クリエイターとしての多様な表現力、基礎知識を身に付ける。また、現代社会におけるコミュニケーションの多様な側面を学び、どのような論点が提起されているのかを学ぶとともに、コミュニケーションを成立させる存在や情報環境について学ぶ。また、うわさやフェイクニュース、映像の問題を取り上げることで、現代社会のコミュニケーションに対する多角的な視点、思考力、判断力、社会性を身に付けることを目指す。

データサイエンス分野では、「データサイエンス」「人工知能Ⅰ（機械学習）」「情報理論」「人工知能Ⅱ（深層学習）」「IoT 演習Ⅰ」を必修科目に設定し、IoT 技術を学び、人工知能の技術を概観し、未来を予測できる課題解決型人材になるための基礎知識を身に付ける。また、情報の価値と情報量との関係を定量的に明らかにし、情報理論と符号化に関する基本事項を修得するとともに、情報量（自己情報量、相互情報量、エントロピー等）について学ぶ。

この他にも各分野の関連科目として「データベース基礎」「スマートモバイルプログラミング」「データベース設計」「Web プログラミングⅡ」「デジタルメディア演習」「画像処理演習」「コンピュータグラフィックス」「映像処理演習」などを選択科目として設定している。このように情報通信技術 3 分野の基礎技術・知識を学ぶことにより、エンジニア、クリエイターが実社会で求められる汎用的な基本技能を身に付ける。

3 年次以降、情報通信技術 3 分野から学生が興味のある分野を自由に選択学修させるため、情報通信技術 3 分野を『基幹科目』における『プログラミング領域』も含め、7 つの応用領域として細分化し専門性を深化させる（【資料 9-2】「理工学部 情報科学科 カリキュラムツリー」参照）。学生はエンジニアやクリエイターとして社会での実践力の修得を目指し、7 領域から 2 領域以上履修し、4 科目 8 単位以上を修得する。

デジタルメディア分野では、『Web 領域』『サーバ・ネットワーク領域』の2領域に分類・定義し、各領域の専門性を高め、情報通信技術における発信力・実践力を身に付ける。『Web 領域』では、Web プログラミングを実現する仕組み、サーバサイドにおけるプログラミング、クライアントサイドにおけるプログラミング、リッチクライアントのプログラミングを学び、動的な Web ページを構築する技能を身に付ける。『サーバ・ネットワーク領域』では、情報通信システムにおけるネットワーク技術の概要、ネットワーク機器とその役割について学ぶ。また、ネットワークを構成する上で重要なインターネットプロトコルを理解し、情報通信ネットワークが多く要素技術の協調作用によって成立しているシステムであることを理解する。加えて、実際に情報ネットワークを構築し、サーバの基本操作と管理方法について、基礎的な知識と技術を修得する。同時に、サーバ構築のために必要な用語、システムが社会に果たす役割・影響、サービスの在り方について学び、サーバハードウェアの知識、オペレーティングシステムの知識、ネットワーク技術、サーバソフトウェアの知識、ハッキング攻防演習を通してセキュリティ技術の知識を深める。

ヒューマンインタフェース分野では、『ヒューマンインタフェース領域』『ゲーム開発領域』の2領域に分類・定義し、各領域の専門性を高め、情報通信技術における表現力・実践力を身に付ける。『ヒューマンインタフェース領域』では、「XR」「XR 演習Ⅰ・Ⅱ」等の科目を配置し、これらの基本知識・技術を身に付け、ヘッドマウントディスプレイ等のデバイス機器と人の親和性、能力を引き出し、日常生活での活用方法を学ぶ。また、将来の XR 事業展開に関する提案ができることを目指す。XR とは最近注目されている VR、AR、MR 等の技術の総称である。『ゲーム開発領域』では、「ゲーム開発演習Ⅰ・Ⅱ」「3DCG 演習」の科目を配置し、ゲームを題材とした 3 次元コンテンツの制作方法、インタラクティブコンテンツの制作手法を学ぶことで、プログラミング技術の組み合わせにより、高度な制作物を作り上げる能力を養う。

データサイエンス分野では、『IoT・データサイエンス領域』『人工知能領域』の2領域に分類・定義し、各領域の専門性を高め、マイコン制御に代表される IoT 技術を学び、人工知能の技術を概観し、未来を予測できる課題解決型人材になるための基礎知識・技能を身に付ける。『IoT・データサイエンス領域』では、「IoT 演習Ⅱ」「ビッグデータ解析」「データマイニング」等の科目を配置し、複数の IoT デバイスから様々なデータを取得する方法を学ぶ。また、ビッグデータの活用方法の基礎を学び、そこから知識を抽出するデータ加工技術及び数理最適化技術について学ぶことを通じて、ビッグデータを解析する手法を学ぶ。さらに、推測統計の基礎を学んだ後に、身近な Web アクセスログデータを活用して多変量解析手法（主成分分析・因子分析、回帰分析など）、データマイニング手法（決定木、KJ 法、テキストマイニングなど）を修得できるようにする。『人工知能領域』では、「人工知能演習Ⅰ・Ⅱ」を配置し、「人工知能演習Ⅰ」では代表的な機械学習である「教師あり学習（回帰と分類）」について演習を通じて学び、「人工知能演習Ⅱ」では深層学習（ディープラーニング）について演習を通じて学ぶ。ディープラーニングとは、ニューラルネットワークの一手法である。

ニューラルネットワークは、脳の神経ネットワークをモデルにしたアルゴリズムであり、機械学習の一手法である。「人工知能演習Ⅱ」では、ニューラルネットワーク用のライブラリやデータセットを用いて、実際にディープラーニングを実装したソフトウェアの制作を行う。

『展開科目』は合計 51 科目（必修 15 科目・選択 36 科目）で構成する。

ウ. 建築学科

本学科の専門教育科目は、建築に携わる専門的職業人としての使命感・倫理観、知識・技能・態度及び研究の手法等を獲得する『基幹科目・卒業研究』に加え、建築学の学びを深化させる『展開科目』で構成する。『展開科目』は、デザインを重視した意匠設計を学び、高い創造力を身に付ける『設計』、設計を電子的に表現する『CAD』、建築空間を創造するための幅広い知識及び技術を獲得する『空間』、多様な文化・歴史、利用者の特性に合わせた建築について考察を深める『歴史』、建築に関する社会規範について学ぶ『法規』、自然環境への配慮・調和や持続可能な社会の発展に向けた倫理観を醸成する『材料・施工』『構造』『環境設備』、建築に携わる専門的職業人としての幅広い視野や表現力を養う『関連科目』で構成する。これらを体系的に組み立て、自然環境への配慮やエネルギー効率化などグリーン分野を含めた広範な生活環境に対する状況把握能力や判断力、豊かな表現力と意匠性を兼ね備えた人材を養成する。

なお、本学科のディプロマ・ポリシーを構成する DP1 から DP6 及びカリキュラム・ポリシーを構成する CP1 から CP6 と教育課程（各授業科目）との相関は、【資料 8-3】「理工学部 建築学科 カリキュラムマップ」に示す。本学科では、養成人材の目的に照らして必要な能力を修得する上で、特に重要視される科目を必修科目とし、それらの必修科目を主要授業科目として設定する。【資料 8-3】「理工学部 建築学科 カリキュラムマップ」において、◎は主要授業科目またはコース必修科目であり各ディプロマ・ポリシー達成のための重要な科目を表し、○はそれに準ずる科目を表す。卒業要件を満たすように学修を進めることで、ディプロマ・ポリシーを構成する DP1 から DP6 の全てで◎を付した科目の単位を修得できるようにしている。

カリキュラム・ポリシーの各項目に対応する主な授業科目は次の通りである。

建築学科	
カリキュラム・ポリシーの各項目	対応する主な授業科目
CP1 【倫理観・使命感】 幅広い教養や豊かな人間性を養う科目を <u>特別科目及び共通教育科目</u> に配置する。	「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」 共通教育科目の科目区分 『キャリア科目』及び『教養科目』

理学と工学の関係性と社会での有用性を学ぶ科目を <u>専門教育科目の理工学部共通科目</u> に配置する。	「理工学概論」
建築に携わる専門的職業人としての使命感・倫理観について学ぶ科目を <u>専門教育科目の基幹科目・卒業研究を中心</u> に配置する。	「建築概論」「建築キャリアデザイン」 「建築倫理」「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」 「建築設計デザイン演習」
社会規範、自然環境への配慮と調和、持続可能な社会の発展に向けた倫理観を醸成する科目を <u>専門教育科目の展開科目</u> に配置する。	「建築一般構造学」 「建築構造力学Ⅰ」「建築環境学」 建築コース必修科目「建築法規」
CP2【知識・技能・態度】 理工学の基本的概念や理工系人材に共通して求められるデータサイエンス・AIに関する基礎知識を学ぶ科目を <u>専門教育科目の理工学部共通科目</u> に配置する。	「理工学概論」 「理工学データサイエンス」
建築に携わる専門的職業人としてふさわしい「設計」「構造・材料」「環境・設備」及び関連諸領域に関する基礎的な知識を修得するための科目を <u>専門教育科目の基幹科目・卒業研究と展開科目</u> にそれぞれ配置する。	「建築概論」「建築デザイン論」「建築倫理」 「デザイン基礎」「空間デザイン論」「建築計画学」「住空間計画学」「建築基礎数学」 「建築基礎物理」「西洋建築史」「日本建築史」「建築材料学」「建築構法」「建築一般構造学」「建築構造力学Ⅰ」「建築環境学」 空間デザインコース必修科目「商空間デザイン論」「建築リノベーション論」
設計製図等に必要な技能、新たな価値創造に意欲的に取り組む態度を身に付けるため、 <u>設計に関わる演習科目や実験実習科目</u> を専門教育科目の <u>基幹科目・卒業研究と展開科目</u> にそれぞれ配置する。	「建築キャリアデザイン」 「建築基礎製図」「建築設計演習Ⅰ・Ⅱ」「建築CADⅠ」「建築材料学実験」 建築コース必修科目「建築設計演習Ⅲ」
CP3【思考力・判断力・表現力】 複雑な設計課題に対して、材料、時間、予算などのリソースを管理し、実現可能かつ実用的な解決方法を思考・判断する力、その成果を的確に伝えることのできる表現力を身に付けるため、 <u>専門教育科目に講義科目及び演習科目</u> を配置する。	「建築キャリアデザイン」 「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」 「建築プレゼンテーション」 「福祉環境論」

デザインを重視した意匠設計を学び、高い創造力を身に付けるため、<u>設計に関わる演習科目を専門教育科目の基幹科目・卒業研究と展開科目にそれぞれ配置する</u>。加えて、各自の必要に応じて表現力を磨けるように<u>専門教育科目の展開科目に関連科目</u>を配置する。	「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」 「建築プレゼンテーション」 「建築CADⅠ」 「建築設計デザイン演習」 「デッサン」「スケッチ表現」
CP4【自律性の確立】 変動する社会の変化に対応し続けるために自律性をもって自己研鑽し続ける力、自ら目標を設定し達成のための計画立案及び実行できる力を身に付けるための科目を<u>専門教育科目の基幹科目・卒業研究と展開科目</u>に配置する。	「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」 「建築プレゼンテーション」 「建築設計デザイン演習」
CP5【社会性・コミュニケーション能力】 他者を尊重し積極的に意思疎通を図ることで、様々な立場の人々と連携・協働できる力を身に付けるため、<u>専門教育科目にディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションを計画した演習科目及び卒業研究</u>を配置する。	「建築キャリアデザイン」 「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」 「建築プレゼンテーション」 「建築設計デザイン演習」
CP6【多様性の受容と理解】 <u>特別科目や専門教育科目においてディスカッションを計画する科目など、多様化・複雑化する現代社会を生きる上で、価値観や視点の異なる他者を受容・理解し、多角的な視点・立場における思考や人を思いやる柔軟な態度を身に付けるための科目</u>を配置する。	「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」 「住空間計画学」 「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」 「建築設計デザイン演習」
多様な文化・歴史、利用者の特性に合わせた建築について考察を深めるための科目を<u>専門教育科目の展開科目</u>に配置する。	「福祉環境論」 「西洋建築史」 「日本建築史」

専門教育科目の科目区分ごとの詳細は次の通りである。

①『基幹科目・卒業研究』

『基幹科目・卒業研究』は、全科目 13 科目 27 単位を必修科目とし、建築学科の学びの基盤となる建築学の基礎知識と建築家として必要な倫理観や使命感を涵養する科目及び卒業研究を配置する。

建築学科の学びの基盤となる「建築概論」「建築デザイン論」「建築計画学」「建築基礎数学」「建築基礎物理」などの科目を主に 1 年次から 2 年次において開講する。「建築基礎数学」「建築基礎物理」では、建築学を学ぶ上で必要となる基礎的な数学と物理について学修する。「建築キャリアデザイン」や「建築倫理」で、自然との共生、持続可能な社会における建築家として必要な倫理観や使命感の涵養を図る。

また、1 年次前期から 2 年次前期の各学期において「建築基礎製図」「建築設計演習Ⅰ・Ⅱ」を順に開講し、設計製図を製図用具の使い方から段階的に学び、設計製図に必要な技能、新たな価値創造に意欲的に取り組む態度を身に付ける。

建築学科の学修の集大成として 4 年次に開講する「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」は全員が履修し、設計または論文のどちらかを選択し、教員の指導を受けながら完成させる。主体的に問題意識を持ち、客観的・論理的に考え、デザインする思考のプロセスを経たり、解決方法を模索したりすることにより、自己を律し、自ら目標を設定し達成のための計画を立て実行する自律性や、様々な立場の人々と連携・協働できる社会性・コミュニケーション能力を確立させる。

これらの科目を通して、建築学の基礎知識を修得するとともに、建築に携わる専門的職業人としての使命感・倫理観、社会性・コミュニケーション能力を醸成する。

『基幹科目・卒業研究』は 15 科目（必修 15 科目）で構成する。

②『展開科目』

『展開科目』は建築学の理解を深め、技術を磨くことを目的とする。本学科では 2 年次前期から学生の希望する進路に合わせて 2 コースに分かれて専門性を高める。将来の進路として、一級建築士をはじめとする建築士として活躍することを想定した「建築コース」と、将来の進路として空間デザインの専門家として活躍することを想定した「空間デザインコース」を展開する。

『展開科目』は、『設計』『CAD』『空間』『歴史』『法規』『材料・施工』『構造』『環境設備』『関連科目』で構成する。各区分に必修科目を設けることで、多角的・多面的な視野で建築を捉え検討、表現する知識・技術を醸成する体系としている（『法規』『関連科目』を除く）。それぞれのコースの学生が希望する進路に合わせて専門性を高められるよう、「建築コース」は 3 科目 7 単位、「空間デザインコース」は 3 科目 6 単位をコース必修科目として設定する。コースごとの必修科目については次に示す。

②-1『設計』

『設計』は、デザインに重点を置いた意匠設計に焦点を当て、創造性と表現力を高めることを目的としている。「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」同様、建築学科の学修の集大成として「建築設計

デザイン演習」2単位を4年次後期に必修科目として開講し、「建築創作」という行為全般について考察する。建築に理論は必要か、建築は機能的であるべきかなど、建築デザインを行うために必要な思想基盤について、グループごとに討議とプレゼンテーションを繰り返すことにより、世界観を広げ、生涯、建築家として主体的に成長し続けるという高い志を持つことを目標とする。

このほか選択科目「建築設計演習Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ」「スタジオ設計演習」「建築設計特別演習」で、『基幹科目・卒業研究』において身に付けた設計の技術力を高める。このうち「建築設計演習Ⅲ」は、「建築コース」の必修科目として位置付け、テーマに対する把握・分析・解決・提案のプロセスを学び、それを設計図面に正確に表現する能力を身に付けるため、「建築コース」の学生は全員履修する。また、「建築思想作品論」「海外建築研修」「国内建築研修A・B」を開設し、多様な文化・歴史、利用者の特性に合わせた建築について考察する。

『設計』は合計10科目（必修1科目・選択9科目）で構成する。

②-2『CAD』

『CAD』は、効率的に設計・製図を行う手法を獲得するとともに、他者を尊重し積極的に意思疎通を図ることで、様々な立場の人々と連携・協働できる力を身に付けることを目的とする。必修科目として「建築プレゼンテーション」「建築CADⅠ」を配置し、コンピュータを使用して正確且つ効率的に設計を行うことにより、自らの考え方を図面や模型で表現し、相手に伝える力を獲得する。

このほか選択科目として「建築CADⅡ・Ⅲ」「建築CG」を配置する。

『CAD』は合計5科目（必修2科目・選択3科目）で構成する。

②-3『空間』

『空間』は、建築空間を創造するための知識及び技術を獲得することを目的としている。「福祉環境論」2単位を必修科目として配置し、多様化・複雑化する現代社会を生きる上で、価値観や視点の異なる他者を受容・理解し、多角的な視点・立場における思考や人を思いやる柔軟な態度を身に付ける。

このほか選択科目として、ランドスケープデザイン、アーバンデザイン、インテリアデザイン、商空間デザイン、建築リノベーション等に関する知識・技術を修得する科目を配置する。このうち「商空間デザイン論」「建築リノベーション論」は、「空間デザインコース」の必修科目として位置付け、「空間デザインコース」の学生が全員履修する。「商空間デザイン論」では国内外の商業施設の事例とそのデザイン手法を学び、「建築リノベーション論」では古くなった建築に新しい価値を付加し、長く使うための知識や手法を学修する。

『空間』は合計14科目（必修1科目・選択13科目）で構成する。

②-4『歴史』

『歴史』は、過去から現在に至る建築の歴史的背景と文化的意義を学び、多様な文化・歴史、利用者の特性に合わせた建築について考察を深めることを目的としている。必修科目として「西洋建築史」「日本建築史」を配置する。

このほか選択科目として、「近現代建築史」「住居史」を配置する。

『歴史』は合計4科目（必修2科目・選択2科目）で構成する。

②-5『法規』

『法規』は、建築家として求められる社会規範を学び、倫理観・使命感を醸成することを目的としている。選択科目として、「建築法規」「建築法規演習」を配置する。このうち「建築法規」は、「建築コース」の必修科目として位置付け、建築に係る企画、設計、施工、維持管理等の実務に欠かせない基本的な諸法令・制度に関する知識を修得するため、「建築コース」の学生が全員履修する。

『法規』は合計2科目（選択2科目）で構成する。

②-6『材料・施工』

『材料・施工』は、建築に使用される材料について、その種類と特徴や性質・性能を学び、実践できる能力を身に付けることを目的としている。必修科目として「建築材料学」を配置する。

このほか選択科目として、「建築材料学実験」「建築施工」「建築施工演習」「建築積算」「建築積算演習」「建築マネジメント」を配置する。

『材料・施工』は合計7科目（必修1科目・選択6科目）で構成する。

②-7『構造』

『構造』は、建築に働く力の流れを理解し、構造的安全性に関する知識を獲得することを目的としている。必修科目として「建築構法」「建築一般構造学」「建築構造力学Ⅰ」を配置する。

このほか選択科目として、主に「建築コース」の学生を対象として「建築構造力学Ⅱ」「建築構造力学演習Ⅰ・Ⅱ」を配置する。このうち「建築構造力学Ⅱ」は「建築コース」の必修科目として位置付け、各種の荷重が作用する時の力の伝達や崩壊のメカニズムを学び、自然災害の多い我が国において構造計画及び構造設計に必要な力学的なセンスを修得するため、「建築コース」の学生が全員履修する。

『構造』は合計6科目（必修3科目・選択3科目）で構成する。

②-8『環境設備』

『環境設備』は、建築の内・外部で起きる種々の環境に関する知識を獲得し、環境に配慮した建築設計についての知識と技術を修得することを目的としている。必修科目として「建築環境学」を配置する。

このほか選択科目として、「建築環境学演習」「建築設備」「建築設備演習」を配置する。このうち「建築設備」は、「空間デザインコース」の必修科目として位置付け、それぞれの設備の機能を十分発揮し、心地よい空間を実現する知識を修得するため、「空間デザインコース」の学生が全員履修する。

『環境設備』は合計4科目（必修1科目・選択3科目）で構成する。

②-9『関連科目』

『関連科目』は、建築家としての視野や表現力を広げることを目的とし、学生の興味関心や基礎知識に合わせて履修できるよう全て選択科目として配置する。

健康で快適な住空間について学修する「住生活論」、人間の行動特性から快適性を追求する「人間工学」、豊かな表現力を醸成する「デッサン」「色彩学」「スケッチ表現」などを配置する。

『関連科目』は合計 6 科目（選択 6 科目）で構成する。

⑤教育方法、履修指導方法及び卒業要件

1. 授業方法に適した学生数・配当年次

1 年次に履修する『共通教育科目』の外国語科目「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」は、入学後にプレースメントテストを行い学生の基礎学力について測った上で、少人数による習熟度別のクラス編成で実施するとともに、多数のネイティブ教員を配している。また、情報処理科目「情報処理基礎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」は、SA (Student Assistant) の配置等により、学生の多様なスキルに細やかに対応する。

専門教育科目については、各学科の入学定員が 60 名であることから、履修者数の多い演習科目についてはクラスを分けたり、SA を配置したりし、きめ細やかな教育体制を維持する。配当年次については、1 年次から 4 年次まで段階を追って順に積み上げる形態で年次配当を行う。

2. 教育方法の特長

本学では、全学部共通で、学生 1 人に 1 台ノートパソコンを配付しており、パソコンを活用した授業や自習、アクティブ・ラーニングができる施設・環境等を整備している。また、本学の教育や授業、学生生活に関する多くの情報は、教育支援システム「まほろばポータル」に掲載しており、学生は大学・自宅・海外研修先等のいずれからもパソコン、スマートフォン等を通してアクセス可能であり、学生の学修を支援している。

『共通教育科目』で開講される「情報処理基礎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「情報処理演習 A・B・C・D」の科目の他に、『専門教育科目』においても、「理工学データサイエンス」などの科目を開講し ICT 教育の推進を図っている。

この他、各学科における特長は次の通りである。

ア. 生物科学科

①早期段階からの実学的・実践的学修

初年次から実験実習科目を多く開講する。基本的な実験操作や測定機器の取扱いを理解するほか、身近な植物群から植物の形態形質や分類学、生態学的・進化的特性を実践的に学ぶ。また、持続可能な社会の実現における生物学が果たす役割の理解を目的とし、ゲストスピーカーによる講話を通して農林水産業や食品産業など具体的なビジネスの現場での活用事例を学ぶことで、大学で学ぶ意味と学修の意義を明確にし、学修意欲を高める。

②学生の興味関心に合わせて専門性を高めるコース制

早期段階からの実学的・実践的学修を通して、生物科学の持つ多様な可能性を探り、2 年次前期に開講する必修科目「研究企画プレゼンテーション」では、各専門分野における学問領域に関連した現代社会の課題への対応について考え、各自の興味関心や適性、卒業研究として扱う課題について模索を始める。3 年次からは、学生の興味関心に応じて 2 つのコース

に分かれる。生物学の基本原則に対する理解を深めることを目的とし、基礎研究や理論的な側面に興味を持つ学生を主な対象とする「生物科学コース」と、理論から実践への応用に焦点をあて、持続可能な食品生産や環境・資源管理に興味を持つ学生を主な対象とする「食・環境開発コース」に分かれ、2年次までに学んだ基礎知識・技能をもとに、各コース該当分野を中心として専門知識の積み上げを図るとともに応用事例の学修を通し、それら知識の運用・検証方法や結果の考察から課題探究の方法、自分なりの視点を身に付ける。

③学生の研究対象と必要性に応じた柔軟な学び

『専門教育科目』の『基幹科目』と『展開科目』の一部科目では、複数年次を対象にした合同開講とする。学生は、学びの集大成として卒業研究を完成させるまでに、自身の研究テーマに関連する科目を、必要に応じて柔軟に履修することができる。履修計画においては、各専門分野における指導教員が学生に適宜指導を行う。これにより、学生は自身の研究テーマに沿って必要な知識や技術を、計画的かつ効率的に身に付け、異なる学年や背景を持つ他の学生との交流を通じて新たな視点やアイデアを得ることができ、それが卒業研究の質の向上にも繋がる。

イ. 情報科学科

①1・2年次は情報通信技術全般について基礎から学ぶ

本学科では、情報通信技術をデジタルメディア分野（発信力）、ヒューマンインタフェース分野（表現力）、データサイエンス分野（課題解決力）の3分野に分類・定義し、専門的知識と技能を身に付けるとともに先端技術への理解を深めることを目的としている。

情報通信技術3分野の展開科目について、1・2年次は分野を隔てることなく基礎技能・知識全般を学ぶ。デジタルメディア分野では、ハードウェア、ネットワークといったICT技術を基礎から学び、静的なWebページの作成技術、情報通信システムにおけるネットワーク技術の概要、ネットワーク機器とその役割を理解する。ヒューマンインタフェース分野では、分野における様々な要素について学ぶ。画像・映像の編集技術を概観し、ゲーム開発の概要、今後一層の成長が期待されるメタバース（3次元仮想空間）技術を知り、次世代クリエイターとしての多様な表現力、基礎知識を身に付ける。データサイエンス分野では、IoT技術を学び、人工知能の技術を概観し、未来を予測できる課題解決型人材になるための基礎知識を身に付ける。このように情報通信技術3分野の基礎技術・知識を学ぶことにより、エンジニア、クリエイターが実社会で求められる汎用的な基本技能を身に付ける。

②3年次以降は学生の興味関心に合わせて、分野領域を選択し学びを深化

3年次以降については、情報通信技術3分野を『基幹科目』のプログラミングも含め、7つの応用領域として細分化する。学生は将来の職種などを想定して、興味関心のある領域に

ついて 2 領域以上を選択し 1 領域から 2 科目、合計 4 科目 8 単位以上を修得し、専門性を深化させエンジニアやクリエイターとして社会での実践力の修得を目指す。

『卒業研究』は、3 年次までに学んだ知識・技能をいかに実践的に生かしていくかに重点を置き、ディスカッションやグループワーク、プレゼンテーションなどを行い、他者を尊重し積極的に意思疎通を図ることで、様々な立場の人々と協働できる社会性も養う。各自のテーマに沿って、それぞれ教員の指導を受けながら卒業研究を行う。学生の問題意識と興味関心に沿って課題を設定した後、探究活動を行い、指導教員と協議しながら研究テーマを決定する。卒業研究を通して、広い視野で物事を捉える力、探究心と基本的研究能力、技術を培うことを目指す。また、3 年次に配置する選択科目「分野横断プロジェクトⅠ・Ⅱ」では、本学が定義する情報通信技術 3 分野横断型のチームで、行政や企業と連携して課題解決に臨み、社会での実践力を身に付けることを目的とする。

ウ. 建築学科

①実学的・実践的な設計学修

1 年次前期から 4 年次後期まで、計 8 学期にわたる設計演習科目を配置する。そのうち、「建築基礎製図」(1 年次前期)、「建築設計演習Ⅰ」(1 年次後期)、「建築設計演習Ⅱ」(2 年次前期)を必修科目とし、全学生が履修する。図面のルールや設計の進め方等の基本的概念・手法から商空間の設計、単一の機能を持つ建築の設計を行い、将来、複雑な設計課題に対して、材料、時間、予算などのリソースを管理し、実現可能かつ実用的な解決方法を思考・判断する素養を身に付けることができるよう、実学的・実践的学修を展開する。

「建築設計演習Ⅲ」(2 年次後期)、「建築設計演習Ⅳ」(3 年次前期)、「建築設計演習Ⅴ」(3 年次後期)、「スタジオ設計演習」(4 年次前期)、「建築設計特別演習」(4 年次後期)は選択科目として配置し、主に「建築コース」の学生を対象とする。複数の機能を併せ持つ建築や、大規模建築の設計を行い、様々な要望に対応可能な力を獲得する。

開講学期		必修	選択	授業科目名	内容
1 年次	前期	○		「建築基礎製図」	作図手順・ルールや設計の進め方等の基本的概念・手法を獲得
	後期	○		「建築設計演習Ⅰ」	小空間・住宅の設計 (スモールアーバンスペース等)
2 年次	前期	○		「建築設計演習Ⅱ」	単一の機能を持つ建築の設計 (公園のカフェ等)
	後期		○	「建築設計演習Ⅲ」	複数の機能を併せ持つ建築の設計 (集合住宅複合建築等)

3 年次	前期		○	「建築設計演習Ⅳ」	抽象的テーマの建築の設計 (モダニズム建築財団の事務所ビル等)
	後期		○	「建築設計演習Ⅴ」	大規模建築をグループで設計 (地方都市のターミナル空間)
4 年次	前期		○	「スタジオ設計演習」	建築を取り巻く諸課題に対して、 課題の把握、調査、分析、解決、提 案のプロセスを完成させる
	後期		○	「建築設計特別演習」	高度で実践的な設計課題を短期間 で完成させる (専用住宅、保育所、事務所ビル 等を即日設計)

4 年次には、「建築コース」の学生一人ひとりに専用の製図机とパソコンを完備した個人設計スペース（スタジオ）を提供することで、個々の技術と創造力を最大限発揮することが可能となる。

②学生の希望する進路により、専門性を高めるコース制

2 年次前期から、学生の進路に応じて 2 つのコースに分かれる。将来の進路として、一級建築士をはじめとする建築士として活躍することを想定する学生を主な対象とする「建築コース」と、将来の進路として空間デザインの専門家として活躍することを想定する学生を主な対象とする「空間デザインコース」に分かれ、『専門教育科目』の『展開科目』の履修を通して専門性を高める。

③建築学を学ぶ意欲と専門的職業観を高める海外・国内建築研修

「海外建築研修」「国内建築研修 A・B」（それぞれ選択科目として配置し希望者が参加）により地域の文化や風土、気候等を肌で感じることで、歴史的な建築物や自然と共生する建築物を体験的に学修し、そのコンセプトや表現方法を学ぶ。本学における事前学修において視察する建築・都市の情報を収集した後、現地で視察を行い、本学における事後学修でレポート作成、グループディスカッション、プレゼンテーションを行う。様々な建築物を視察することにより、建築学を学ぶ意欲と専門的職業観を高める。

3. 教育方法

ア. 生物科学科

生物科学科の教育課程は、『特別科目』『共通教育科目』『専門教育科目』により編成される。その中核となる『専門教育科目』は、生物学及び化学の基礎知識を身に付ける『基礎科目』、科学的研究で必要とされる実験手法や分析技術の基本を身に付ける『実験実習科目』、生物学及び化学の知識を基により深い生命現象の知識及びそれに関連する応用分野への基礎知識を身に付ける『基幹科目』、理論追究または実践展開に必要な特定の領域に特化した

知識、能力を身に付ける『展開科目』、『専門演習・卒業研究』で構成する。これらを体系的に組み立て、「食」「資源」「環境」に関わる諸問題を解決し、持続可能な社会構築に寄与する使命感を持った人材を養成する。全体の科目構成については、【資料 9-1】「理工学部 生物科学科 カリキュラムツリー」に示す通りであり、各学年における教育方法については次の通りである。

初年次では『共通教育科目』の「キャリアデザインⅠ」「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」「情報処理基礎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」等を履修する。また『専門教育科目』の『理工学部共通科目』の履修により、理学と工学の関係性と社会での役割や理工系人材に共通して求められるデータサイエンス・AIに関する基礎を学ぶ。『基礎科目』では、「生物化学」「生化学Ⅰ」等を履修し、生物科学科の学びの基盤となる生物学及び化学の基礎知識を修得する。「生物学入門」「サステナビリティ生物学」では、持続可能な開発目標（SDGs）と生物学との関連性、気候変動などの環境問題、食料問題、資源・エネルギーと生物学の関係性を学び、「バイオビジネス実践論」では、生物学と関わりの深いビジネスの最前線で活躍するゲストスピーカーを招聘することで、生物学が身近な生活から地球規模での問題まで、どのような役割を持ち、貢献するかを理解し、生物学に携わる専門的職業人としての責任感・使命感を醸成する。そのほか『実験実習科目』を履修することで、基本的な実験操作や測定機器の取扱いを理解するほか、身近な植物群から植物の形態形質や分類学、生態学的・進化的特性を実践的に学ぶ。

2年次においては、引き続き『共通教育科目』を学ぶとともに、『基礎科目』では、「生化学Ⅱ」「分子生物学Ⅰ・Ⅱ」「細胞生物学」「微生物学」など初年次に学んだ生物学に関する基礎知識への理解をさらに深め、分子・細胞から生態系に至るまで幅広い階層で生物を学ぶ。また、「食と環境の経済学」では、「食」や「環境」に関する諸課題を的確に把握するために必要となる食糧経済や食品流通論、環境経済等を学ぶ。『基幹科目』からは「食品化学」「環境科学」を履修し、『実験実習科目』からは「食品化学実習」「環境科学実習」を履修することで、食の安全問題、食に関係する環境問題、エネルギー資源、気候変動の原因や生物多様性の保全、持続可能な開発目標（SDGs）と環境保護の社会的側面といった知識を学ぶとともに、「食」「資源」「環境」に関する科学的データや情報の調査収集、それらの解釈・分析の手法を学び、課題解決や新たな価値創造に向けて論理的に思考・判断する力を身に付ける。また、「研究企画プレゼンテーション」を通して、各専門分野における学問領域に関連した現代社会の課題への対応について考え、各自の興味関心や適性、卒業研究として扱う課題について模索を始める。

3年次は、興味関心に合わせて2コースに分かれて、2年次までに学んだ基礎知識・技能をもとに、各コース該当分野を中心として専門知識の積み上げを図る。「生物科学コース」は生物学の基礎研究や理論的な側面に興味を持つ学生を主な対象とし、「食・環境開発コース」は持続可能な食品生産や環境・資源管理に興味を持つ学生を主な対象とする。

「生物科学コース」は、生物学の基本原則を理解し、根源を探究する上で必要な知識の高

度化を図るため、3 年前期に『実験実習科目』からコース必修科目「植物生理学実習」と展開科目の『理論追究』区分からコース必修科目「植物生理学」「遺伝子工学」「生物資源工学」を全員が履修する。また、これらの科目と関連の深い分野である応用生物学・生物生態学分野、応用微生物学・遺伝子工学分野を中心に「動物生理学」「微生物利用学」「植物免疫学」「バイオインフォマティクス」など複数の選択科目から履修する。展開科目の『理論追究』区分では、4 年前期にコース選択必修科目（いずれか 1 科目以上を必修）として演習科目「生理学演習」「微生物工学演習」「生物資源工学演習」を配置しており、各演習科目には次の通り 3 年次の履修要件を設定する。「生理学演習」は履修要件として、同じ応用生物学・生物生態学分野の講義科目「植物生理学」「動物生理学」の単位修得を前提とする。続いて、「微生物工学演習」は履修要件として、同じ応用微生物学・遺伝子工学分野の講義科目「遺伝子工学」「微生物利用学」の単位修得を前提とする。そして、「生物資源工学演習」は履修要件として、同じ食品機能・食品化学分野の講義科目「生物資源工学」の単位修得を前提とする。

「食・環境開発コース」は、主に生物由来（特に植物）の商品開発(加工)、消費・流通、環境等の側面に焦点をあてた知識の高度化を図るため、3 年前期に『展開科目』の『実践展開』区分からコース必修科目「花卉園芸科学」「発酵工学」「バイオマス利用論」を全員が履修する。また、これらの科目と関連の深い分野である植物育種学・花卉園芸科学分野、環境科学分野、応用微生物学・遺伝子工学分野を中心に「園芸植物学」「醸造科学」「環境保全論」「生物共生論」「食品の機能」など複数の選択科目から履修する。展開科目の『実践展開』区分では、4 年前期にコース選択必修科目（いずれか 1 科目以上を必修）として「園芸科学演習」「発酵・醸造学演習」を配置しており、各演習科目には次の通り 3 年次の履修要件を設定する。「園芸科学演習」は履修要件として、同じ植物育種学・花卉園芸科学分野の講義科目「花卉園芸科学」「園芸植物学」の単位修得を前提とする。続いて、「発酵・醸造学演習」は履修要件として、同じ応用微生物学・遺伝子工学分野の講義科目「発酵工学」「醸造科学」の単位修得を前提とする。

両コースとも共通して、学生は 3 年前期でコース必修科目を全て履修し、4 年次前期にどの演習科目（コース選択必修科目）を選択するか検討した上で、3 年後期以降の履修科目選択を行う。また、コース選択必修科目として配置する演習科目を核とする学びの高度化を図るため、専門教育科目『展開科目』の各区分からコース必修科目、コース選択必修科目を含めて合計 11 単位以上を修得することをコース必修要件としている。

なお、本学科では、学生の希望に基づいたコース選択を重視しており、一方のコースに学生が集中する場合も上限人数の設定は行わない。仮に授業科目の履修人数が多い場合、クラスを分けることで、学生一人ひとりが十分な教育を受けられる環境を整える。3 年次後期には「卒業研究Ⅰ」を履修し、配属を決めた専門研究分野においてこれまで行われてきた様々な研究内容に対する理解を深める。

4年次では、本学科で学んだ知識をいかに追究あるいは実践的に生かしていくかに重点を置く。先述した『展開科目』におけるコース選択必修科目（「生物科学コース」は「生理学演習」「微生物工学演習」「生物資源工学演習」、 「食・環境開発コース」は「園芸科学演習」「発酵・醸造学演習」）からいずれか1科目以上を履修し、具体的な研究事例や社会での応用事例の学修を通し、それら知識の運用・検証方法や結果の考察から課題探究の方法、自分なりの視点を身に付ける。さらに、それぞれが専攻分属した研究室において、担当者の指導のもとに「専門演習Ⅰ・Ⅱ」や個々の研究テーマに応じた卒業研究を実施し卒業論文の完成を目指す「卒業研究Ⅱ・Ⅲ」を履修する。研究過程では、課題の本質を理解する思考力や、課題解決のための表現力を身に付け、自ら目標を設定し達成に向け計画立案・実行するとともに、4年間の学修の集大成として、生物科学の学びの基礎となる自然科学に対する理解（理学的視点）と、その知識をもとにした実社会の課題解決への応用、具体的な提案や表現（工学的視点）を、各自の卒業研究に生かし結実させることを目標とする。また、ディスカッションやグループワーク、プレゼンテーションなどを行い、他者を尊重し積極的に意思疎通を図ることで、様々な立場の人々と協働できる社会性も養う。なお、『基幹科目』『展開科目』の一部は複数学年を対象に合同開講としているため、卒業研究において、学生が自身の研究テーマにおいて必要だと認識すれば、学年や分野・コースを越えて柔軟に学ぶことができる。

イ. 情報科学科

情報科学科の教育課程は、『特別科目』『共通教育科目』『専門教育科目』により編成される。その中核となる『専門教育科目』は、情報科学の学びの基盤となる情報科学及び高度情報化社会の基礎知識と高度情報化社会におけるエンジニアとしての社会規範・倫理観を涵養し、広い視野で物事を捉える力、探究心と基本的研究能力、技術を培う『基礎科目・卒業研究』、高度情報化社会を支える重要なインフラであるコンピュータを人間の命令に従って動作させるプログラムを創り出す作業であるプログラミングの技能を学び、新たな価値の創造に意欲的に取り組む態度を身に付ける『基幹科目』、デジタルメディア分野（発信力）、ヒューマンインタフェース分野（表現力）、データサイエンス分野（課題解決力）の3分野に分類・定義した情報通信技術に対し、専門的知識と技能を身に付ける『展開科目』で構成する。これらを体系的に組み立て、情報理論に基づく定量的な評価を用いて、社会課題を正確に理解し、解決に必要な情報システムの設計・開発から実装・運用まで行うとともに、人間の能力を援助する快適なヒューマンインタフェース環境を構築できる人材を養成する。

全体の科目構成については、【資料9-2】「理工学部 情報科学科 カリキュラムツリー」に示す通りであり、各学年における教育方法については次の通りである。

1年次では『共通教育科目』の「キャリアデザインⅠ」「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」「情報処理基礎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」等を履修する。また『専門教育科目』の『理工学部共通科目』の履修により、理学と工学の関係性と社会での役割や理工系人材に共通して求められる

データサイエンス・AI に関する基礎を学ぶ。『基礎科目・卒業研究』では、「情報科学概論」「科学と倫理」等を履修し、情報科学科の学びの基盤となる情報科学及び高度情報化社会の基礎知識と高度情報化社会におけるエンジニアとしての社会規範・倫理観を涵養する。「情報科学概論」では、今日の高度情報化社会を支えているコンピュータ及び情報通信ネットワークに代表される情報通信技術の全体像を知り、情報科学において一般に知られている知識や経験を専門的な立場から概要的に理解し、社会における役割を学び、専門的職業人としての責任感・使命感を醸成する。「科学と倫理」では、科学技術の進展が生活の質の向上に大きく寄与しているのと同時に、環境問題に代表される様々な弊害を生じさせていることを踏まえ、高度情報化社会におけるエンジニアにとって必要とされる倫理について、情報倫理だけでなく技術者倫理、自然環境倫理・生命倫理などについても学ぶ。また、具体的な問題を検討・ディスカッションし、倫理の問題には多様な意見が存在することを理解した上で、多角的な視点・立場における思考や柔軟な態度を身に付け、善悪・正邪を判断できる倫理観を涵養する。『基幹科目』は、高度情報化社会を支える重要なインフラであるコンピュータを人間の命令に従って動作させるプログラムを創り出す作業であるプログラミングの技能を学び、新たな価値の創造に意欲的に取り組む態度を身に付けることを目的としている。1年次の「プログラミング総論」では、プログラムの動作原理を学ぶとともに、プログラミング言語の種類、コンパイラとインタプリタ、リンカ、アルゴリズムの必要性といったプログラミングに必要な多くの基礎知識と概要を系統的に学ぶ。『展開科目』では、情報通信技術3分野について、分野を隔てることなく基礎技能・知識全般を学ぶ。特に1年次においては、情報通信技術3分野の概論的科目「デジタルメディア」「ヒューマンインタフェース」「データサイエンス」を必修科目とし、各々の関心に応じて4年間で学ぶべき科目を主体的に選択できるようになることを目指す。

2年次においては、引き続き『共通教育科目』を学ぶとともに、『展開科目』では1年次に学んだ情報通信技術3分野に関する基礎知識・理論への理解から、Webプログラミング、画像処理ライブラリ、人工知能（深層学習）など、各分野の技能に関する基礎知識について系統的な学びに移行する。『基幹科目』においても1年次のプログラミングの概念、思考力の修得からファイル入出力、データ分析、画像ファイル操作といった応用的プログラミング科目の基礎となる技術を修得する。このように情報通信技術3分野の基礎技術・知識全般を3年次までに学ぶことにより、エンジニア、クリエイターが実社会で求められる汎用的な基本技能を身に付ける。

3年次以降は、情報通信技術3分野を『基幹科目』のプログラミングも含め、7つの応用領域として細分化する。学生は将来の職種などを想定して、興味関心のある領域について2領域以上を選択し専門性を深化させ、エンジニアやクリエイターとして社会での実践力の修得を目指す。各応用領域については、社会における実践力を身に付けることを想定して演習科目を多く配置している。プログラミング領域ではシステムエンジニア職を想定してオブジェクト指向という考え方を学び、ソフトウェア工学の基礎的な知識を身に付ける。要求

分析、設計、プログラミング、テスト、運用・保守といったソフトウェア開発プロセスや、構造化技法、オブジェクト指向に基づいた分析・設計の技法を学ぶ。

デジタルメディア分野では、『Web 領域』『サーバ・ネットワーク領域』の2領域に分類・定義し、各領域の専門性を高め、情報通信技術における発信力・実践力を身に付ける。『Web 領域』では、フロントエンドエンジニア職を想定して、Web プログラミングを実現する仕組み、サーバサイドにおけるプログラミング、クライアントサイドにおけるプログラミング、リッチクライアントのプログラミングを学び、動的な Web ページを構築する技能を身に付ける。『サーバ・ネットワーク領域』では、インフラエンジニア職種を想定して情報通信システムにおけるネットワーク技術の概要、ネットワーク機器とその役割について学ぶ。また、ネットワークを構成する上で重要なインターネットプロトコルを理解し、情報通信ネットワークが多く要素技術の協調作用によって成立しているシステムであることを理解する。加えて、実際に情報ネットワークを構築し、サーバの基本操作と管理方法について、基礎的な知識と技術を修得する。同時に、サーバ構築のために必要な用語、システムが社会に果たす役割・影響、サービスの在り方について学び、サーバハードウェアの知識、オペレーティングシステムの知識、ネットワーク技術、サーバソフトウェアの知識、ハッキング攻防演習を通してセキュリティ技術の知識を深める。

ヒューマンインタフェース分野では、クリエイター職種を想定して『ヒューマンインタフェース領域』『ゲーム開発領域』の2領域に分類・定義し、各領域の専門性を高め、情報通信技術における表現力・実践力を身に付ける。『ヒューマンインタフェース領域』では、「XR」「XR 演習Ⅰ・Ⅱ」等の科目を配置し、これらの基礎知識・技術を身に付け、ヘッドマウントディスプレイ等のデバイス機器と人の親和性、能力を引き出し、日常生活での活用方法を学ぶ。また、将来、XR による事業展開を提案ができる人材となることを目指す。XR とは最近注目されている VR、AR、MR 等の技術の総称である。『ゲーム開発領域』では、「ゲーム開発演習Ⅰ・Ⅱ」「3DCG 演習」の科目を配置し、ゲームを題材とした3次元コンテンツの制作方法、インタラクティブコンテンツの制作手法を学ぶことで、プログラミング技術の組み合わせにより、高度な制作物を作り上げる能力を養う。

データサイエンス分野では、データエンジニア職種を想定して『IoT・データサイエンス領域』『人工知能領域』の2領域に分類・定義し、各領域の専門性を高め、マイコン制御に代表される IoT 技術を学び、人工知能の技術を概観し、未来を予測できる課題解決型人材になるための基礎知識・技能を身に付ける。『IoT・データサイエンス領域』では、「IoT 演習Ⅱ」「ビッグデータ解析」「データマイニング」等の科目を配置し、複数の IoT デバイスから様々なデータを取得する方法を学ぶ。また、ビッグデータの活用方法の基礎を学び、そこから知識を抽出するデータ加工技術及び数理最適化技術について学ぶことを通じて、ビッグデータを解析する手法を学ぶ。さらに、推測統計の基礎を学んだ後に、身近な Web アクセスログデータを活用して多変量解析手法（主成分分析・因子分析、回帰分析など）、データマイニング手法（決定木、KJ 法、テキストマイニングなど）を修得できるようにする。『人工

知能領域』では、「人工知能演習Ⅰ・Ⅱ」を配置し、「人工知能演習Ⅰ」では、代表的な機械学習である「教師あり学習（回帰と分類）」について演習を通じて学び、「人工知能演習Ⅱ」では、深層学習（ディープラーニング）について演習を通じて学ぶ。ディープラーニングとは、ニューラルネットワークの一手法である。ニューラルネットワークは、脳の神経ネットワークをモデルにしたアルゴリズムであり、機械学習の一手法である。「人工知能演習Ⅱ」では、ニューラルネットワーク用のライブラリやデータセットを用いて、実際にディープラーニングを実装したソフトウェアの制作を行う。

『基礎科目・卒業研究』では、3年次までに学んだ知識・技能をいかに実践的に生かしていくかに重点を置き、ディスカッションやグループワーク、プレゼンテーションなどを行い、他者を尊重し積極的に意思疎通を図ることで、様々な立場の人々と協働できる社会性も養う。各自のテーマに沿って、それぞれ教員の指導を受けながら卒業研究を行う。学生の問題意識と興味関心に沿って課題を設定した後、探究活動を行い、指導教員と協議しながら研究テーマを決定する。卒業研究では、広い視野で物事を捉える力、探究心と基本的研究能力、技術を培うことを目指すとともに、4年間の学修の集大成として、情報科学科の学びの基礎となる自然科学に対する理解（理学的視点）と、その知識をもとにした実社会の課題解決への応用、具体的な提案や表現（工学的視点）を、卒業研究に生かし結実させることを目標とする。また、3年次に配置する選択科目「分野横断プロジェクトⅠ・Ⅱ」では、本学が定義する情報通信技術3分野横断型のチームで、行政や企業と連携して課題解決に臨み、社会での実践力を身に付けることを目的とする。

ウ. 建築学科

建築学科の教育課程は、『特別科目』『共通教育科目』『専門教育科目』により編成される。その中核となる『専門教育科目』は、建築に携わる専門的職業人としての使命感・倫理観、知識・技能・態度及び研究の手法等を獲得する『基幹科目・卒業研究』、建築学の理解を深め技術を磨く『展開科目』で構成する。さらに『展開科目』は、デザインを重視した意匠設計を学び、高い創造力を身に付ける『設計』、自らの考え方を図面や模型で表現する力を修得する『CAD』、建築空間を創造するための知識及び技術を獲得する『空間』、多様な文化・歴史、利用者の特性に合わせた建築について考察を深める『歴史』、建築に関する社会規範について学ぶ『法規』、自然環境への配慮と調和や持続可能な社会の発展に向けた倫理観を醸成する『材料・施工』『構造』『環境設備』、建築に携わる専門的職業人としての幅広い視野や表現力を養う『関連科目』で構成する。これらを体系的に組み立て、自然環境への配慮やエネルギー効率化などグリーン分野を含めた広範な生活環境に対する状況把握能力や判断力、豊かな表現力と意匠性を兼ね備えた人材を養成する。全体の科目構成については、【資料 9-3】「理工学部 建築学科 カリキュラムツリー」に示す通りであり、各学年における教育方法については次の通りである。

初年次では『共通教育科目』の「教養科目」「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」「情報処

理基礎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」等を履修する。また『専門教育科目』の『理工学部共通科目』の履修により、理学と工学の関係性と社会での役割や理工系人材に共通して求められるデータサイエンス・AIに関する基礎を学ぶ。『基幹科目・卒業研究』では、「建築概論」を履修し、建築学科の学びの基盤となる建築学の基礎知識を修得する。また、「デザイン基礎」「空間デザイン論」「インテリアデザイン論」で建築空間を創作するための知識や技術の醸成を図る。さらに「西洋建築史」の履修により、西洋における多様な文化・歴史等に合わせた建築について考察を深め、価値観や視点の異なる他者を受容・理解する態度を涵養する。設計製図については、「基礎設計製図」で作図手順・ルールや設計の進め方等の基本的概念・手法を獲得した後、「建築設計演習Ⅰ」で小空間・住宅の設計を行い、建築空間のコンセプトを構想し、それを設計図面に正確に表現する能力を育てるとともに、建築模型製作の基本を学ぶ。また、「建築キャリアデザイン」の履修により、設計関係、建築関係、メーカー、公務員等、多種多様な組織が関わり合っている建築業界について知見を広め、建築に携わる専門的職業人としての使命感・倫理観、知識・技能・態度を獲得する。併せて、各自の興味関心や進路について考察し、2年次のコース選択の手がかりとする。

2年次では、引き続き『共通教育科目』を学ぶとともに、『基幹科目・卒業研究』では、「建築デザイン論」「住空間計画学」「建築計画学」など、『展開科目』では「建築プレゼンテーション」「ランドスケープデザイン論」「建築一般構造学」「建築環境学」など、初年次に学んだ建築学に関する基礎知識への理解をさらに深める。また、「日本建築史」の履修により、多様な文化・歴史等に合わせた建築について考察を深め、価値観や視点の異なる他者を受容・理解する態度を涵養する。設計製図については、「建築設計演習Ⅱ」で公園のカフェ等の単一の機能を持つ建築の設計を行い、「建築設計演習Ⅲ」で集合住宅複合建築等の複数の機能を併せ持つ建築の設計を行い、求められる諸条件を整理して空間を構想する。2年次前期からは学生の進路に合わせて2コースに分かれて専門性を高める。「建築コース」は将来の進路として、一級建築士をはじめとする建築士として活躍することを想定する学生を主な対象とし、「建築CADⅡ」を履修する。「空間デザインコース」は将来の進路として、空間デザインの専門家として活躍することを想定する学生を主な対象とし、「インテリアデザイン演習Ⅰ」を履修する。なお、本学科では、学生の希望に基づいたコース選択を重視しており、一方のコースに学生が集中する場合も上限人数の設定は行わない。仮に授業科目の履修人数が多い場合、クラスを分けることで、学生一人ひとりが十分な教育を受けられる環境を整える。

3年次は、引き続き2コースに分かれて専門性を高める。「建築倫理」「福祉環境論」「建築材料学」は両コースの学生が履修する。「建築倫理」「福祉環境論」で建築に携わる専門的職業人としてふさわしい多角的な視点・立場における思考や人を思いやる柔軟な態度などを身に付ける。「建築材料学」「建築設備」で建築材料・設備の特徴・性質・性能や使用上の留意点を学び、今後の環境問題に適応した材料・設備について考察する。「建築コース」は『展開科目』から「建築構造力学演習Ⅰ」「建築法規」「建築施工」を履修し、建築士に必要な

な設計製図等の技能、安全な建築を創造するための知識や専門的職業人としての社会規範及び施工方法・手順を獲得する。また、「建築設計演習Ⅳ・Ⅴ」で大規模建築等の設計を行い、課題の把握・分析・解決する能力の醸成を図る。「空間デザインコース」は、「商空間デザイン論」「商空間デザイン演習Ⅰ」「色彩学」等を履修し、健康で快適な住空間、顧客を魅了する商空間等の空間デザインを創造する知識・技術を修得する。

4 年次では、本学科で学んだ知識をいかに追究あるいは実践的に生かしていくかに重点を置き、それぞれが専攻分属した研究室において、担当者の指導のもとに個々の研究テーマに応じた卒業論文または設計を実施する「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」を両コースの学生が履修する。これらの科目を通して、現代の建築を取り巻く課題の解決に向けて論理的に思考・判断する力、自ら目標を設定し達成のための計画立案力及び実行力を身に付けるとともに、4 年間の学修の集大成として、建築学科の学びの基礎となる自然科学に対する理解（理学的視点）と、その知識をもとにした実社会の課題解決への応用、具体的な提案や表現（工学的視点）を、卒業研究に生かし結実させる。また、ディスカッションやグループワーク、プレゼンテーションなどを行い、他者を尊重し積極的に意思疎通を図ることで、様々な立場の人々と協働できる社会性も養う。「建築コース」の学生は、「スタジオ設計演習」で建築を取り巻く諸課題に対して、課題の把握・調査・分析・解決・提案のプロセスを完成させる。「建築設計特別演習」で専用住宅、保育所、事務所ビル等の即日設計を行うことにより、これまでの建築設計演習で培ってきた設計製図技術を総合化しブラッシュアップするとともに、設計製図実践力と職能意識を修得する。「空間デザインコース」の学生は、「建築リノベーション演習」「商空間デザイン演習Ⅱ」で既設の建築に新たな価値を付加する手法を修得する。加えて、「建築フィールドワーク」で建築や街並み等を視察し、これまで学んだ知識をより具体的に理解・修得するとともに、建築家としてのモチベーションを高め、職能意識を確立する。

4. 履修指導方法

理工学部では、いずれの学科も以下の方法により履修指導を行う。

①入学直後の「学科別ガイダンス」

入学直後の「学科別ガイダンス」で、卒業要件等を記載した『履修の手引』を新入生に配付するとともに、教務委員が教育課程や履修計画を説明し、明確な履修モデルを示して指導を行うほか、図書館や学習支援センターの利用などを説明し、大学生活にスムーズに順応し、主体的な学びができるように支援する。

②毎学期の「履修登録ガイダンス」

学期始めには、チューター（クラス担任）による「履修登録ガイダンス」を行い、履修登録や履修モデルに基づく授業選択等についての指導を行い、チューターが学生の状況に応じた指導を行う。

③週1回の「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の時間を利用して指導

本学の教育の特長の一つとして、チューター制度の充実があげられる。チューターは、週1回クラス単位（通年）で開講される特別科目「まほろば教養ゼミ」を学生と共に運営することにより、学生の学修の状況や生活態度を常に把握できる。また、チューターは、入学直後に行われるプレースメントテストの結果や各学期の成績、履修登録状況を把握し、学生指導を行う。

④授業の欠席に対する対応

学生の授業欠席回数が所定の回数になると、非常勤講師を含む授業担当者は、「授業欠席状況について（連絡）」を当該学生のチューターに提出することになっている。この制度により、チューターが早期に学生と面談等を行うことができる。

5. 履修モデル

ア. 生物科学科

1・2年次の『基礎科目』を通して生物学及び化学の基礎知識を身に付け、3年次に興味関心及び卒業後の進路を想定した履修モデルに沿って学びを深め、より専門性を高めていく。生物学の基本原理と先端技術への理解を深めることを目的とし、基礎研究や理論的な側面に興味を持つ学生を主な対象とする『生物科学コースモデル』と、理論から実践への応用に焦点をあて、持続可能な食品生産や環境・資源管理に興味を持つ学生を主な対象とする『食・環境開発コースモデル』のいずれかを履修するように学生を指導する。

いずれのモデルも本学科が目標とする人材像を養成するために記述した『共通教育科目』『専門教育科目』を展開し、本学独自の特別科目「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（4年間で4単位）を履修することを加え128単位とした（【資料10-1】「理工学部 生物科学科 授業科目一覧・履修モデル」参照）。

イ. 情報科学科

1・2年次の『基礎科目』『展開科目』を通して情報処理技術3分野の基礎知識を身に付ける。また、各分野の『展開科目』で選択科目としている科目についても、その多くを指導により履修を促すことで、情報通信技術3分野の基礎技術・知識全般を3年次までに学び、エンジニア、クリエイターが実社会で求められる汎用的な基本技能を身に付ける。3年次以降は、情報通信技術3分野を『基幹科目』のプログラミングも含め、7つの応用領域として細分化する。学生は将来の職種などを想定して、興味関心のある領域について2領域以上を選択し専門性を深化させ、エンジニアやクリエイターとして社会での実践力の修得を目指す。

学生の興味関心や将来の職種に応じて、応用領域の選択が異なり様々な履修モデルが想定される。ここでは、システムエンジニア職を目指しプログラミング領域とデジタルメディア分野のサーバ・ネットワーク領域を履修するモデル、フロントエンドエンジニア職を目指し、デジタルメディア分野のWeb領域とネット上での表現力を身に付けるためにヒューマンインタフェース分野・領域を履修するモデル、データエンジニア職を目指しデータサイエ

ンス分野から IoT・データサイエンス領域と人工知能領域を履修するモデルを提示する。

いずれのモデルも本学科が目標とする人材像を養成するために記述した『共通教育科目』『専門教育科目』を展開し、本学独自の特別科目「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」(4年間で4単位)を履修することを加え128単位とした(【資料10-2】「理工学部 情報科学科 授業科目一覧・履修モデル」参照)。

ウ. 建築学科

1・2年次の『基幹科目』を通して建築学の基礎知識を身に付け、2年次前期に興味関心及び卒業後の進路を想定した履修モデルに沿って学びを深め、より専門性を高めていく。将来の進路として、一級建築士をはじめとする建築士として活躍することを想定した『建築コースモデル』と、将来の進路として空間デザインの専門家として活躍することを想定した『空間デザインコースモデル』のいずれかを履修するように、学生に指導を行う。

いずれのモデルも本学科が目標とする人材像を養成するために記述した『共通教育科目』『専門教育科目』を展開し、本学独自の特別科目「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」(4年間で4単位)を履修することを加え128単位とした(【資料10-3】「理工学部 建築学科 授業科目一覧・履修モデル」参照)。

6. 他大学における授業科目の履修等についての考え方

本学では単位互換制度を設けることにより、単位互換協定を締結した他の大学・短期大学等の授業を受講し、修得した単位について8単位を限度として『共通教育科目』の卒業要件に参入することができるようにしている。令和5(2023)年度は23大学が207科目を提供している。

7. 単位制度の実質化と GPA 制度

大学設置基準に基づく単位制の趣旨に基づき、授業科目(卒業研究等を含む)の1単位当たりの自習時間及び授業時間を踏まえて、単位数に応じた実質的な教育に努める。併せて、到達目標を定め厳格な成績評価を行って、輩出される卒業生の質の確保を図る。単位の認定、評価は、授業への姿勢(態度・取り組み)、課題やレポート、試験等によって総合的に行うが、基準を以下のように定める。

＜成績の評価基準＞

評価	評価基準	単位
秀 (S)	100～90 点	認定
優 (A)	89～80 点	
良 (B)	79～70 点	
可 (C)	69～60 点	
不可 (D)	59～ 0 点	不認定
欠席 (F)	試験欠席	
抹消 (M)	受験資格等なし	

また、本学では、成績評価の客観性と信頼性を高めるために GPA 制度を導入している。評価換算点は、S を 4 点、A を 3 点、B を 2 点、C を 1 点、D・F・M を 0 点とし、その合計を科目の単位数の合計で除して算出する。個々の学生の GPA 結果は、チューターが学部・学科ごとの GPA 分布表と照らし合わせて、履修指導や学修指導の際の資料として活用している。なお、特別科目「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」は合格・不合格で評価する。

8. 履修科目の年間登録上限制度（CAP 制）

本学部においては CAP 制を導入し、1 学期に履修できる単位の上限は 24 単位までとする。これは、大学設置基準第 21 条第 2 項にある 1 単位に必要な 45 時間の学修時間（授業時間を含む）を前提にして学修の深度を確保するためには、平日及び土曜日に充当できる学修時間の上限は、それぞれ 12 時間、6 時間が限度との仮説に基づき算出したものである。なお、当該学期の前の学期において成績が優れた学生（GPA3.0 以上）については、学びの機会を提供することを目的に履修制限を設けない。また、特別科目（「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」）、集中講義、海外研修は上限を超えて履修登録できることとする。

9. 追試験制度

下表に定める病気その他やむを得ない事由により試験を受験できない者は、所定の手続きを行い、許可された場合に追試験を受験することができる。追試験の実施は 1 回限りとし、追試験の不合格者に対する再試験は実施しない。

＜追試験を願い出ることができる欠席理由＞

欠席理由	添付すべき証明書等
病気・けが	医師の発行する診断書等
忌引き（2 親等まで）	「忌引き届」（所定の用紙）及び会葬礼状等
公共交通機関の事故等	公共交通機関等の発行する証明書 （試験当日を含む期間が記されたもの）
就職試験	「就職に関わる受験等確認書」（所定用紙、キャリアセンター長の承認印を要す）
免許・資格試験受験等	免許・資格試験の受験票のコピー （試験の日時・場所が確認できるもの）
災害（地震・台風・水害・火災等）	官公庁等の公的機関への確認に基づき学生課が作成した書類
他大学における単位互換科目の定期試験との重複	他大学の発行した「単位互換科目受験証明書」

10. 再試験制度

履修した科目の成績評価が「不可」となった場合、申請により 1 回限り再試験が受験できる。合格した場合の評価は「可」となる。ただし、「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」、一定期間学外の施設等で実習や演習を行う科目、卒業研究、単位互換科目等による他大学での履修科目については、再試験を実施しない。

11. 卒業要件

ア. 生物科学科

本学科を卒業するためには、4 年以上 6 年以下在学し、特別科目 4 単位（「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」）、共通教育科目 32 単位以上（うち情報処理科目から 4 単位以上、外国語科目（英語）から 6 単位以上）、専門教育科目 72 単位以上、専門教育科目の選択科目から 20 単位以上、計 128 単位以上修得しなければならない。なお、3 年次以降は 2 コース制とし、「生物科学コース」にあつては専門教育科目「実験実習科目」からコース必修科目「植物生理学実習」1 単位、「展開科目」の「理論追究」からコース必修科目「植物生理学」「遺伝子工学」「生物資源工学」6 単位の計 7 単位を、「食・環境開発コース」にあつては専門教育科目「展開科目」の「実践展開」からコース必修科目「花卉園芸科学」「発酵工学」「バイオマス利用論」の計 6 単位を修得しなければならない。科目区分ごとの卒業時には学士（生物科学）の学位が授与される。

< 卒業要件（単位） >

領域			必修	選択	備考	計	
特別科目			4	0		4	128 以上
共通教育科目	キャリア科目		0	9	※情報処理科目から4 単位以上、外国語科目 (英語) から6単位以 上修得すること。	32 以上	
	教養科目		0	94			
	基礎科目	情報処理科目	0	8			
		健康スポーツ科目	0	5			
		外国語科目	0	16			
		基礎養成科目	0	7			
専門教育科目	理工学部共通科目		4	0	※「生物科学コース」 は、専門教育科目の選 択科目のうち実験実 習科目の「植物生理学 実習」と、展開科目「理 論追究」区分の「植物 生理学」「遺伝子工学」 「生物資源工学」の単 位を必ず修得すること。 また、「生理学演習」 「微生物工学演習」 「生物資源工学演習」 から1単位以上を修得 し、展開科目「理論追 究」区分から合計11 単位以上を修得するこ と。	92 以上	
	基礎科目		28	14			
	実験実習科目		8	5			
	基幹科目		4	24			
	展開科目	理論追究	0	17			
		実践展開	0	18			
	専門演習・卒業研究		9	4			

				※「食・環境開発コース」は、専門教育科目の選択科目のうち展開科目「実践展開」区分の「花卉園芸科学」「発酵工学」「バイオマス利用論」の単位を必ず修得すること。また、「園芸科学演習」「発酵・醸造学演習」から 1 単位以上を修得し、展開科目「実践展開」区分から合計11単位以上を修得すること。		
--	--	--	--	--	--	--

イ. 情報科学科

本学を卒業するためには、4 年以上 6 年以下在学し、特別科目 4 単位（「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」）、共通教育科目 32 単位以上（うち情報処理科目から 4 単位以上、外国語科目（英語）から 6 単位以上）、専門教育科目 72 単位以上、専門教育科目の選択科目から 20 単位以上、計 128 単位以上修得しなければならない。なお、3 年次以降については、情報通信技術 3 分野を『基幹科目』のプログラミングも含め、7 つの応用領域として細分化する。学生は将来の職種などを想定して、興味関心のある領域について 2 領域以上を選択し、1 領域から 2 科目、合計 4 科目 8 単位以上を修得しなければならない。各領域の対象科目を含む、全体の科目構成については、【資料 9-2】「理工学部 情報科学科 カリキュラムツリー」に示す。卒業時には学士（情報科学）の学位が授与される。

<卒業要件（単位）>

領域			必修	選択	備考	計	
特別科目			4	0		4	128 以上
共通教育科目	キャリア科目		0	9	※情報処理科目から 4 単位以上、外国語科目（英語）から 6 単位以上修得すること。	32 以上	
	教養科目		0	94			
	基礎科目	情報処理科目	0	8			
		健康スポーツ科目	0	5			
		外国語科目	0	16			
		基礎養成科目	0	7			
専門教育科目	理工学部共通科目		4	0	※専門教育科目の基幹科目及び展開科目の 3 年次以降配当の選択科目のうち、7 つの領域から 2 領域以上を選択し、選択した各領域から 2 科目 4 単位以上、合計 4 科目 8 単位以上を修得すること。	92 以上	
	基礎科目・卒業研究		16	10			
	基幹科目		12	6			
	展開科目	デジタルメディア	8	28			
		ヒューマン インタフェース	12	24			
		データサイエンス	10	20			

ウ. 建築学科

本学を卒業するためには、4 年以上 6 年以下在学し、特別科目 4 単位（「まほろば教養ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」）、共通教育科目 32 単位以上（うち情報処理科目から 4 単位以上、外国語科目（英語）から 6 単位以上）、専門教育科目 72 単位以上、専門教育科目の選択科目から 20 単位以上、計 128 単位以上修得しなければならない。なお、2 年次以降は 2 コース制とし、「建築コース」にあつては専門教育科目「展開科目」からコース必修科目「建築設計演習Ⅲ」3 単位、「建築法規」2 単位、「建築構造力学Ⅱ」2 単位の計 7 単位を、「空間デザインコース」にあつては専門教育科目「展開科目」からコース必修科目「商空間デザイン論」2 単位、「建築リノベーション論」2 単位、「建築設備」2 単位の計 6 単位を修得しなければならない。卒業時には学士（建築学）の学位が授与される。

<卒業要件（単位）>

領域			必修	選択	備考	計	
特別科目			4	0		4	128 以上
共通教育科目	キャリア科目		0	9	※情報処理科目から 4 単位以上、外国語科目（英語）から 6 単位以上修得すること。	32 以上	
	教養科目		0	94			
	基礎科目	情報処理科目	0	8			
		健康スポーツ科目	0	5			
		外国語科目	0	16			
		基礎養成科目	0	7			
専門教育科目	理工学部共通科目		4	0	※「建築コース」は、展開科目の選択科目から当該コース必修科目 7 単位を修得すること。 ※「空間デザインコース」は、展開科目の選択科目から当該コース必修科目 6 単位を修得すること。	92 以上	
	基幹科目・卒業研究		31	0			
	展開科目	CAD	4	6			
		設計	2	23			
		空間	2	26			
		歴史	4	4			
		法規	0	4			
		材料・施工	2	11			
		構造	6	6			
		環境設備	2	6			
		関連科目	0	10			

⑥企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画

建築学科では、西洋・日本・近現代の建築や都市を実際に訪問し、理解を深めるために海外・国内建築研修を実施する。国内外の著名な建築を対象として、そのコンセプトの表現、ディテールなど写真だけでは伝わってこない建築の魅力に触れる体験的な学修を通じて、建築学に対するモチベーションを高めるとともに、将来的な建築の職能に対する意識を確立することを目的とする。

1・2・3年次の選択科目として「海外建築研修」（3年に1回開講）、「国内建築研修A」「国内建築研修B」を開講し、いずれも受講者数に上限は設けない。「海外建築研修」では、夏季休業中に8日間かけてイタリアのローマやフィレンツェ、ヴァチカンなどの歴史的建造物や街並みを見学する。同じく夏季休業中に実施する「国内建築研修A」では、石川県金沢市に5日間滞在し、谷口吉郎・吉生記念金沢建築館や金沢21世紀美術館などの近・現代で著名な建築を見学する。「国内建築研修B」では、学年末休業中の5日間で京都の鰻の寝床と呼ばれる町家や仁和寺などの古建築、龍安寺の石庭など歴史的建築物や街並み等の見学を行う。

いずれの科目も参加学生は研修前に学内で事前学修を行い、訪れる建築や都市についての専門的知識を得るとともに、研修を通して地域の文化や風土等を肌で感じ、建築物のコンセプト及び表現方法を体験することで、広い視点から建築や都市を捉える力を身に付けることを目指す。事前学修として実施する見学予定建築の調査計画書（30%）、研修後のグループプレゼンテーション（30%）、個人のレポート（40%）をもって成績を評価し、2単位を認定する。

⑦取得可能な資格

本学部では、以下の資格を取得可能とする予定である。

ア. 生物科学科

資格名	国家資格/ 民間資格	資格取得可能/ 受験資格取得可能	取得条件
食品衛生管理者	国家資格 (任用資格)	資格取得可能	卒業要件単位に含まれる科目の履修のみで資格の取得が可能である。なお、資格取得が卒業要件ではない。
食品衛生監視員	国家資格 (任用資格)	資格取得可能	卒業要件単位に含まれる科目の履修のみで資格の取得が可能である。なお、資格取得が卒業要件ではない。
甲種危険物取扱者	国家資格	受験資格取得可能	卒業要件単位に含まれる科目の履修のみで受験資格の取得が可能である。なお、受験資格取得が卒業要件ではない。

イ. 情報科学科

情報科学科においては、取得可能とする予定の資格はない。

ウ. 建築学科

資格名	国家資格/ 民間資格	受験資格取得可能/ 登録資格取得可能	取得条件
一級建築士	国家資格	受験資格取得可能	卒業要件単位に含まれる科目の履修のみで受験資格の取得が可能である。なお、受験資格取得が卒業要件ではない。
二級建築士	国家資格	受験資格取得可能	卒業要件単位に含まれる科目の履修のみで受験資格の取得が可能である。なお、受験資格取得が卒業要件ではない。
木造建築士	国家資格	受験資格取得可能	卒業要件単位に含まれる科目の履修のみで受験資格の取得が可能である。なお、受験資格取得が卒業要件ではない。
インテリアプランナー	民間資格	登録資格取得可能	卒業要件単位に含まれる科目の履修のみで登録資格の取得が可能である。なお、登録資格取得が卒業要件ではない。

⑧入学者選抜の概要

本学では、学園訓「柔しく剛く」を教育の基本理念として、各学科のディプロマ・ポリシー達成のために編成されたカリキュラム及び学力の 3 要素を踏まえ、入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）を定める。ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーとの相関は、【資料 7-1】「理工学部 生物科学科の養成人材像及び 3 つのポリシーの対応」、【資料 7-2】「理工学部 情報科学科の養成人材像及び 3 つのポリシーの対応」、【資料 7-3】「理工学部 建築学科の養成人材像及び 3 つのポリシーの対応」に示し、養成する人材像及び 3 つのポリシーの各項目が整合するように策定している。

1. 選抜方法・基準

アドミッション・ポリシーを満たす入学者（女子）を選抜するにあたり、一人ひとりの特性に応じて適切に選抜ができるよう、下表の通り入学者選抜を行う。

<令和 7（2025）年度入試制度、募集人員及び選抜方法・基準>

入試制度	募集人員	選抜方法・基準
学校推薦型選抜	6	出身学校長の推薦を前提に、小論文を5段階評価して合否判定する。併せて、生物科学科は「調査書」の「生物基礎」及び「化学基礎」、情報科学科と建築学科は「調査書」の「数学Ⅰ」及び「数学Ⅱ」を抜き出し、その評定値を5段階で評価し合否判定基準に加える。
総合型選抜	22	授業理解試験、面接、基礎学力調査（教科・科目に係るテスト）、自己推薦書を点数化して合否判定する。併せて、生物科学科は「調査書」の「生物基礎」及び「化学基礎」、情報科学科と建築学科は「調査書」の「数学Ⅰ」及び「数学Ⅱ」を抜き出し、その評定値により配点(50点を満点)し、合否判定基準に加える。
一般選抜	22	学力試験を点数化して合否判定する。併せて、生物科学科は「調査書」の「生物基礎」及び「化学基礎」、情報科学科と建築学科は「調査書」の「数学Ⅰ」及び「数学Ⅱ」を抜き出し、その評定値により配点(50点を満点)し、合否判定基準に加える。
大学入学共通テスト利用選抜	10	大学入学共通テストの得点により合否判定する。併せて、生物科学科は「調査書」の「生物基礎」及び「化学基礎」、情報科学科と建築学科は「調査書」の「数学Ⅰ」及び「数学Ⅱ」を抜き出し、その評定値により配点(50点を満点)し、合否判定基準に加える。
社会人特別選抜	若干名	小論文、面接を5段階評価して合否判定する。併せて、生物科学科は「調査書」の「生物基礎」及び「化学基礎」、情報科学科と建築学科は「調査書」の「数学Ⅰ」及び「数学Ⅱ」を抜き出し、その評定値を5段階で評価し合否判定基準に加える。

全ての入試制度において、生物科学科の受験者は「生物基礎」及び「化学基礎」を、情報科学科と建築学科の受験者は「数学Ⅰ」及び「数学Ⅱ」を履修していることを前提とし、「調査書」のこれら2科目の評定値を「5段階評価」または「点数化」して合否基準に加え合否の決定を行う。

1) 学校推薦型選抜

本学が指定する高等学校又は中等教育学校を卒業見込みの者で、全体の学習成績の状況等が一定の条件を満たし、かつ出身学校長の推薦が得られる者を対象とする。「調査書」において、生物科学科は「生物基礎」及び「化学基礎」を、情報科学科と建築学科は「数学Ⅰ」及び「数学Ⅱ」を5段階評価し、その他の小論文、出身学校長の推薦書と併せて合否判定する。なお、出身学校長の推薦書には、本人の学習歴や活動歴を踏まえた「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」に関する記載を求めるものとする。

2) 総合型選抜

「調査書」を50点満点とし、生物科学科は「生物基礎」及び「化学基礎」の評定値、情報科学科と建築学科は「数学Ⅰ」及び「数学Ⅱ」の評定値に基づいて点数化し、その他の授業理解試験、面接、基礎学力調査（「数学」「理科」「情報」「国語」「英語」から選択2科目）、自己推薦書等（選抜により方法・配点は異なる）と併せて、受験者の基礎学力と理工学部各学科の学びへの関心・意欲をもとに合否判定する。

3) 一般選抜

「調査書」を50点満点とし、生物科学科は「生物基礎」及び「化学基礎」の評定値、情報科学科と建築学科は「数学Ⅰ」及び「数学Ⅱ」の評定値に基づいて点数化し、本学独自の学力試験（「数学」「理科」「情報」「国語」「英語」から2科目を選択）と併せて、受験者の基礎学力と意欲・向上心をもとに合否判定する。

4) 大学入学共通テスト利用選抜

「調査書」を50点満点とし、生物科学科は「生物基礎」及び「化学基礎」の評定値、情報科学科と建築学科は「数学Ⅰ」及び「数学Ⅱ」の評定値に基づいて点数化し、大学入学共通テストの得点（選抜により配点は異なる）と併せて、受験者の基礎学力と意欲・向上心をもとに合否判定する。私立大学志願者のみならず国公立大学志願者を含めた幅広い受験者に対して、受験にかかる負担を軽減しながら機会を増やし、優秀な人材を募集・選抜することを目的とする。

5) 社会人特別選抜

23歳以上（入学年度の4月1日時点）の女子で、理工学部各学科での学修に強い意欲をもち、かつ、合格した場合本学に入学することが確実な者を対象とする。「調査書」において、生物科学科は「生物基礎」及び「化学基礎」を、情報科学科と建築学科は「数学Ⅰ」及び「数学Ⅱ」を5段階評価し、その他の小論文、面接と併せて合否判定する。

なお、各入試制度における選抜とアドミッション・ポリシーとの関係は、【資料11】「アドミッション・ポリシーの各項目と入学者選抜方法の対応」に示す通りである。

内閣官房の教育未来創造会議の提言「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）（令和4（2022）年5月10日）」で指摘されている通り、我が国における女性の理工系人材不足と、その要因としてあげられる高等学校段階での理系離れや、社会全体に根付いている男女の性別による先入観等を考慮すれば、文系や理系といった高等学校段階での伝統的な分類に拘ることなく、本学部各学科の分野に興味関心を持つ優秀な受験者を広く受入れ、理工系分野を学び社会で大きく活躍できる人材を育成することが重要である。したがって、アドミッション・ポリシーにおいては、「目標に向けて主体的に学び続ける意欲と向上心の強い人（AP3）」「高等学校卒業程度の十分な基礎学力と、本学の教育を受けるに必要な基礎学力（AP5）」及び「読解、表現、コミュニケーションに必要とされる基礎学力（AP6）」を中核的な資質・能力として位置付け、全ての入学志願者について評価・判定する。評価方法としては、全ての入試制度で出願書類「調査書」の提出を求めることにより、各教科・科目等の学習記録や成績状況、特別活動の記録、高等学校教員による指導上参考となる諸事項などの記載を通して、主体的に学び続ける意欲や向上心を評価するとともに、生物科学科においては「生物基礎」「化学基礎」、情報科学科及び建築学科においては「数学Ⅰ」「数学Ⅱ」の学習状況を含め、本学の教育を受けるに必要な基礎学力を有しているか否かを評価・判定の基準とする。また、総合型選抜及び一般選抜では、数学・理科・情報・国語・英語から2教科選択制とするなど、本学部各学科の分野に関心を持ち、主体性と向上心のある者が自分の強みを最大限に活かすことのできる入試を実施し、広く優秀な人材の募集と選抜を行う。

検討段階においては、理工学部として本来求めるべき数学や理科、情報といった科目を学力検査に必須として課すことも議論したが、それでは高等学校段階での女子の理系離れといった現状から考え、対象となる学生の範囲を狭めてしまい、文部科学省の「教学マネジメント指針(追補)(令和5（2023）年2月24日)」で示された入学者の多様性を確保する観点にも沿わず、不足する女性の理工系人材輩出を十分に達成できないと判断した。したがって、本学は先述の通り、学科別に指定する理数系科目を含めた基礎学力を調査書により評価または点数化するとともに、アドミッション・ポリシーにおける中核的な資質・能力の1つに「目標に向けて主体的に学び続ける意欲と向上心の強い人（AP3）」を指定することで、主体的に学び続ける意欲や向上心、そして総合的な学力及び本学科の教育を受けるに必要な基礎学力のある学生を積極的に受入れ、後述する入学前教育及び初年次の学修支援等により大学として責任を持って教育することで、各学科のディプロマ・ポリシーの達成は可能であると考え。

理工学部の入学予定者に対しては、数学・理科・情報・国語・英語の入学前教育（学科により科目等が異なる）としてeラーニングを提供する。さらに入学後には、プレースメントテストを実施することにより学生ごとの教科別の習熟度を判定し学修支援を行う。

本学部各学科での学修に不安を感じている者や特定分野の能力が不足している者に対しては、「リメディアル学内講習会（補習）」を開催する。また、チューター（クラス担任）及び学習支援センターが個別支援やアドバイス等を行う。

本学は、文学部、教育学部、心理学部、現代ビジネス学部、家政学部、薬学部、看護学部の7学部を擁しており、各学部において、新設する理工学部と同様にその特性に応じた充実したサポート体制を設けている。その結果、退学者は、令和5（2023）年5月1日時点で、大学全体0.5%となっており極めて少ないことから充実した支援ができていると自負している。

加えて、理工学部各学科の教育課程においても、初年次には、高等学校分野の発展領域として、生物科学科では「基礎生物学」「基礎化学」、情報科学科では「情報基礎数学Ⅰ・Ⅱ」、建築学科では「建築基礎数学」「建築基礎物理」といった主要授業科目を配置し、各学科の基盤となる理数系科目について基礎から段階的に学修することで、4年間の学びを通してディプロマ・ポリシーに定めた学修目標を達成できるように設計している。

このように本学では、入学者選抜と入学前・入学後の教育プログラムを一体的に検討しており、大学で学びたい意欲と主体性・向上心を有する多様な学生を積極的に受入れ、育成するための仕組みを強化している。これらは、文部科学省の「教学マネジメント指針（追補）（令和5（2023）年2月24日）」にも指摘されている通り、多様な価値観が集まり、新たな価値を創造するキャンパスの実現、不足する理工系分野における女性人材育成等の観点からも重要である。

なお、【資料11】「アドミッション・ポリシーの各項目と入学者選抜方法の対応」に示す通り、「目標に向けて主体的に学び続ける意欲と向上心の強い人（AP3）」「高等学校卒業程度の十分な基礎学力と、本学の教育を受けるに必要な基礎学力（AP5）」及び「読解、表現、コミュニケーションに必要とされる基礎学力（AP6）」以外の資質・能力に関しては、各入試制度の特長を生かしながら、それぞれ異なる比重で評価・判定し、各学科に所属する学生全体として、アドミッション・ポリシーに定める資質・能力を備えている学生が含まれるよう計画している。

2. 選抜体制

入学者選抜は、安田女子大学入学者選抜委員会が入学試験要項に基づき、公平かつ厳正に実施する。合格者の決定は合否基礎判定部会の原案に基づき、大学教授会の意見を聴いた後、学長が決定する。入学試験問題の作成及び採点等については、学長から委嘱された入学試験問題作成部会において取り扱う。

3. 既修得単位の認定

既修得単位は、「安田女子大学学則」別表第1に定める授業科目及び単位数に適合するものに限り、本学に入学した後に本学において修得したものとして認定することができ

る。既修得単位の認定を受けようとする学生は、入学した年度の4月30日までに既修得単位認定願及び成績証明書、シラバスを提出しなければならない。既修得単位の認定については、学部教授会の意見を聴き学長が決定する。

4. 科目等履修生

科目等履修生は、年2回学生募集を行っている。履修期間は1学年又は1学期（前期または後期）と定めており、科目等履修生として入学を志願する者は、学年または学期の始めの1ヵ月前までに学長に願い出なければならない。履修の可否については、当該学部の教授会の意見を聴き学長が決定する。受入人数等については、特に定めず、教育上、支障のない範囲で受講を認める。試験、論文等による評価で合格した場合、学長は学部教授会の意見を聴き、所定の単位を与える。

⑨教育研究実施組織等の編制の考え方及び特色

1. 教育研究実施組織等の編制の基本方針

本学部の教育研究実施組織等の編成においては、学部・学科の目的及び養成する人材像、学部・学科の特色、ディプロマ・ポリシーに掲げる教育目標を達成する上で必要な教育・研究について、高い水準で行える能力・実績を有する人材によって構成することを基本方針とする。

本学部では、学部を構成する3つの学科に対し、生物科学科（入学定員60名、収容定員240名）に計16名（うち教授7名）、情報科学科（入学定員60名、収容定員240名）に計11名（うち教授7名）、建築学科（入学定員60名、収容定員240名）に計15名（うち教授8名）、学部全体で42名の基幹教員を配置した上で、各学科の教育課程において、主要な授業科目は全て基幹教員が担当し、学生が意欲をもって学修に臨むことができる体制を構築する。なお、学年進行中の他大学の学部等から採用予定の基幹教員（各学科1名）を含む全基幹教員について、採用面接時に就任の強い意志を確認した後、就任承諾書及び本学の内定承諾書を受理している。以上により、大学設置基準に定める基幹教員数及び教授数を満たした教育組織の編制を計画している。

本学のほとんどの会議体の構成員には教員だけでなく関係部署の職員も配置したり、大学教授会に事務局長をはじめ事務局の全管理職が陪席したりして、教職協働で大学を運営している。また、大学運営協議会や総務会で審議・協議された内容で事務部門に係る案件については必要に応じて毎週定例の課長会議にて共有し対応策を検討している。

加えて、本学では学修支援、授業支援の人的補助体制として教育を支援する学部事務課職員を当該学部の教員の研究室や専用教室の近くに配置し、教員と連携して学生指導に携わるなど重要な役割を果たしている。学部事務課職員は、学部ごとに分かれた事務室で勤務しているために、各学部学科の情報共有や業務内容の把握、学部学科間での連携等を目的に学部事務課課長主催により週1回ミーティングを開催している。

理工学部においても既設学科同様、教育研究活動等の運営や厚生補導等が組織的かつ効果的に行われるよう、教員及び職員等の組織的な連携体制を確保する。

2. 教育研究実施組織等の編制の内容

各学科における教員の専門分野及び組織構成は次の通りである。なお、教員配置にあたっては講座制のもと、各教員が自主独立の精神を持ち、創造性、独創性を十分に発揮できる編成とする。

ア. 生物科学科

本学科の中心的学問分野は、生物学及び応用生物学の諸領域である。教員組織は、教授、准教授、講師、助教で構成される基幹教員 16 名（うち教授 7 名）及び基幹教員以外の教員 78 名が担当し、教育研究にあたる。基幹教員の研究室・専攻分野別の配置は次の通りであり、いずれも複数名の教員を配置し、研究業績の豊富な教授職位の教員の指導・支援により、准教授・講師・助教職位の教員がさらに研究業績を蓄積できるような仕組みを作る。

区分（講座）	教授	准教授	講師	助教	計
分子生物学・遺伝子学	2 人	0 人	1 人	1 人	4 人
植物育種学・花卉園芸科学	1 人	1 人	1 人	1 人	4 人
応用生物学・生物生態学 環境科学	2 人	0 人	2 人	0 人	4 人
応用微生物学・遺伝子工学 食品機能・食品化学	2 人	0 人	2 人	0 人	4 人
学科合計	7 人	1 人	6 人	2 人	16 人

本学科の主要授業科目は全て基幹教員が担当する。実験実習科目においては、実験準備及び実験中の安全管理、学生の個別指導の強化のため複数教員が共同担当する。当該科目のうち「植物学フィールドリサーチ」「環境科学実習」「食品化学実習」では基幹教員と基幹教員以外の教員（助手も含む）が担当するが、授業の運営方法、成績評価、学生からの質問等への対応については基幹教員が中心となっており、授業運営を基幹教員以外の教員（助手も含む）が補佐する。「食品化学実習」については、薬学科の助手が運営を補佐する。複数の教員を配置している科目（共同やオムニバス方式を除く）については、担当教員は 1 名で十分だが、時間割の調整や年度ごとの科目負担の調整などを考慮し、複数の教員を配置している。

なお、いずれの基幹教員も各専門領域において研究面や実践面で研鑽を積み教育歴を有する者であり、科目を担当するのに十分な業績がある。選択科目を含めてバランスよく担当できるように留意しており、教員の負担や学生への指導に不具合が生じないように配慮する。担当科目数が最も多い教員の時間割は、【資料 12】「理工学部教員時間割」に示す通り、適切に開講できる。

イ. 情報科学科

本学科の中心的学問分野は、情報科学科におけるデジタルメディア分野、ヒューマンインタフェース分野、データサイエンス分野の 3 分野である。教員組織は、教授、准教授、講師で構成される基幹教員 11 名（うち教授 7 名）及び基幹教員以外の教員 75 名が担当し、教育

研究にあたる。基幹教員の研究室・専攻分野別の配置は次の通りであり、いずれも複数名の教員を配置し、研究業績の豊富な教授職位の教員の指導・支援により、准教授・講師職位の教員がさらに研究業績を蓄積できるような仕組みを作る。

区分（講座）	教授	准教授	講師	助教	計
デジタルメディア分野	3人	1人	0人	0人	4人
ヒューマンインタフェース分野	2人	1人	1人	0人	4人
データサイエンス分野	2人	0人	1人	0人	3人
学科合計	7人	2人	2人	0人	11人

本学科の主要授業科目は全て基幹教員が担当する。いずれの基幹教員も各専門領域において研究面や実践面で研鑽を積み教育歴を有する者であり、科目を担当するのに十分な業績がある。選択科目を含めてバランスよく担当できるように留意しており、教員の負担や学生への指導に不具合が生じないように配慮する。担当科目数が最も多い教員の時間割は、【資料 12】「理工学部教員時間割」に示す通り、適切に開講できる。

また、理工学部共通科目の必修科目として配置する「理工学データサイエンス」は、本学科の基幹教員が担当することで、理工系人材に共通して求められるデータサイエンス・AIに関する基礎知識・技能を教授する。

ウ. 建築学科

本学科の中心的学問分野は、建築学の諸領域である。教員組織は、教授、准教授、講師、助教で構成される基幹教員 15 名（うち教授 8 名）及び基幹教員以外の教員 76 名が担当し、教育研究にあたる。基幹教員の研究室・専攻分野別の配置は次の通りであり、いずれも複数名の教員を配置し、研究業績の豊富な教授職位の指導・支援により、講師・助教職位の教員がさらに研究業績を蓄積できるような仕組みを作る。

区分（講座）	教授	准教授	講師	助教	計
都市計画・建築計画	2人	2人	2人	0人	6人
建築史・意匠学	3人	0人	0人	1人	4人
建築構造・材料	1人	0人	1人	0人	2人
建築環境・設備/建築生産	2人	0人	1人	0人	3人
学科合計	8人	2人	4人	1人	15人

本学科の主要授業科目は全て基幹教員が担当する。複数の教員を配置している科目（共同を除く）については、担当教員は 1 名で十分だが、時間割の調整や年度ごとの科目負担の調整などを考慮し、複数の教員を配置している。

いずれの基幹教員も各専門領域において研究面や実践面で研鑽を積み教育歴を有する者であり、科目を担当するのに十分な業績がある。選択科目を含めてバランスよく担当できるように留意しており、教員の負担や学生への指導に不具合が生じないように配慮する。担当科目数が最も多い教員の時間割は、【資料 12】「理工学部教員時間割」に示す通り、適切に開講できる。

3. 教員の取得学位

各学科における基幹教員が保有する学位は次の通りである。いずれの学科もカリキュラム、教員は教育研究の目的に合致したものとなっており、大学設置基準第7条、第13条～16条の規定を満足させるものである。

ア. 生物科学科

基幹教員では博士号取得者は教授7名、准教授1名、講師6名、助教2名である。

イ. 情報科学科

基幹教員では博士号取得者は教授7名、准教授1名、講師1名、修士号取得者は准教授1名、講師1名である。

ウ. 建築学科

基幹教員では博士号取得者は教授6名、准教授2名、講師1名、助教1名、修士号取得者は教授1名、講師2名（うち1名は専門職大学院）、学士号取得者は教授1名、講師1名である。

4. 年齢構成と定年規程

理工学部各学科の基幹教員の年齢構成は、別添資料の通りである（認可申請書「基幹教員の年齢構成・学位保有状況」参照）。各学科の学科開設時の平均年齢は、生物科学科は48.3歳、情報科学科は57.9歳、建築学科は56.8歳である。学科開設時は、学部・学科の目的及び養成する人材像、ディプロマ・ポリシーに掲げる教育目標を確実に安定的に実現できる教育研究体制を構築するため、経験・実績豊富な教員を中心に配置する組織編成とするが、定年等による教員の入れ替えに伴う教育研究の質の維持を念頭に、継続的に若手教員の積極的な採用を計画する。

なお、本学には、現在、定年の定めとして、「定年規程」（【資料13】参照）と「定年退職者等の再雇用に関する規程」（【資料14】参照）、「特別任用職員就業規程」（【資料15】参照）、「安田女子大学特別専任教員規程」（【資料16】参照）及び「安田女子大学助教就業規程」（【資料17】参照）がある。

「定年規程」では、教授の定年は満63歳、准教授・講師の定年は満60歳で、定年に達した日の属する学年末までと定めている。助教については契約期間の3年を超えない範囲の年度末まで雇用し、さらに2年を限度に契約を更新することができるようにしており、理工学部配置する助教3名についても完成年度まで雇用を継続することが理事会で承認されている。また、「定年退職者等の再雇用に関する規程」では、定年規程に基づいて退職した大学教員が再雇用を希望する場合に関して必要な事項を定めている。

一方、「特別任用職員就業規程」は、定年規程に定める定年退職日を越えて任用（再雇用）された特別任用職員に関する勤務、契約期間等について定めている。勤務等については、職員就業規程を準用することとなっており、通常の専任教員と変わらない。その在職期間は、教授にあつては70歳に達した年度の年度末まで、准教授・講師にあつては65歳に達した

年度の年度末までとする。さらに、余人をもってかえがたく、本学園の教育・研究上、なお必要と認められる教授・准教授・講師については、理事会の決定によりさらに再雇用することができることとなっている。

本学部においては、生物科学科で教授 2 名、情報科学科で教授 4 名、准教授 1 名、建築学科で教授 5 名、准教授・講師各 1 名が完成年度前に定年規程に定める退職の時期を迎え、特に情報科学科及び建築学科においては、完成年度前に定年を超える基幹教員割合が高い。

< 情報科学科基幹教員の職位別年齢構成（完成年度末） > (人)

	31-40 歳	41-50 歳	51-60 歳	61-63 歳	64 歳-	小計
教授			1	2	4 (※)	7
准教授			1	1 (※)		2
講師	1		1			2
助教						
小計	1		3	3	4	11

※：定年規程に定める退職年齢を超える教員

< 建築学科基幹教員の職位別年齢構成（完成年度末） > (人)

	31-40 歳	41-50 歳	51-60 歳	61-63 歳	64 歳-	小計
教授			2	1	5 (※)	8
准教授			1	1 (※)		2
講師		2	1	1 (※)		4
助教			1			1
小計		2	5	3	5	15

※：定年規程に定める退職年齢を超える教員

定年規程に定める退職年齢を超える教員を含む全基幹教員を特段の事情がなければ完成年度末まで雇用することを前提とし、令和 11（2029）年 4 月採用の教員公募を令和 9（2027）年度から行うとともに、情報科学科及び建築学科の職位・年齢構成の再構築を図る。具体的には、完成年度末には定年規程に定める退職年齢を超える教員の分野を中心に下表のとおり教員公募を行う。情報科学科は教授 7 人のうち 4 人、建築学科は教授 8 人のうち 5 人が完成年度末に定年規程に定める退職年齢を超えていることから、当該分野の教授の公募を行う。加えて、情報科学科及び建築学科の基幹教員の年齢構成を考慮しつつ、若手教員または中堅教員（20～40 歳代）も公募する。

＜令和 9（2027）年度から教員公募を行う分野等＞

学科	分野	職位等	採用条件等
情報科学科	デジタルメディア ヒューマンインタフェース	・教授 ・助教～准教授 20～40 歳代	博士または修士の学位を有する者、またはそれと同等以上の研究業績、もしくは実務実績を有する者
建築学科	都市計画・建築計画 建築史・意匠学 建築構造・材料 建築環境・設備/生産		

併せて、理工学部は講座制を敷き、分野ごとに講座長を中心とした教育力の向上や研究業績蓄積の支援を行う組織を構築することにより、昇格を組織的に推進する。

また、後任教員への引継ぎにあたっては、教員間で情報連携を密に行うとともに、各学部学科の情報共有や業務内容の把握を担う学部事務課職員が携わることによって教育研究の質の維持、改善に取り組める体制を構築する。さらに、若手教員の育成も重要課題として位置付け、当該研究分野ごとに後継者に対して研究時間、研究機会を確保し育成を図る。具体的には、本学では毎年意欲的な研究テーマに対し学内研究助成金を通常の研究費とは別に支給しているが、本学部・学科において同分野や分野を超えての共同研究を促し、それらに対し学内研究助成金等を活用する。また、本学では全教員に対し週に 1 日に相当する時間を研修日（研究日）として確保し、研究に努めるよう促している。このように、教育研究実施組織が継続・発展するよう運営する。

⑩研究の実施についての考え方、体制、取組

1. 研究の実施についての考え方、実施体制、環境整備

本学における研究活動を行う場合の基本的な考え方は、「研究に関するガイドライン」（【資料 18】参照）に定めている。

研究活動への資源配分は、学内資金と外部資金に分かれる。学内資金は、個人研究費、学術研究助成、国際研究集会への派遣に関する助成、実践教育研究所の出版助成、学術論文掲載助成がある。個人研究費は「安田女子大学における教員の研究費に関する内規」（【資料 19】参照）等に基づき予算執行・管理を行っている。本学独自の研究助成制度においても、各規程等を定めて、その規程に基づき予算を執行し適切に支援を行っている。

研究倫理に関する規則や運用は、「安田女子大学における人を対象とする研究に関する倫理規程」（【資料 20】参照）により、学長が総括管理し、学長補佐（学術・研究支援担当）が大学全体を統括する実質的な責任者として、適正な実施に努めている。研究が倫理的、法的、社会的に適正に実施されることを確保するため、倫理運営委員会において倫理審査委員会

の運営及び人を対象とする研究の倫理に関する事項を協議し、倫理審査に関わる審議やチェック機能の役割を果たしている。実際の倫理審査は、研究責任者から当該学部管理者への申請書類の提出により学部倫理審査委員会が行う。審査結果については、学部管理者が管理者（学長補佐）を介して統括管理者（学長）に報告する。学長は、倫理審査委員会に意見を求め倫理審査委員会の審議結果を尊重し当該研究の実施の許可等を決定する。なお、学部倫理審査委員会による審査では審査が困難であると判断される場合には倫理審査委員会の審査を行う。学長は、倫理審査委員会の意見を尊重し当該研究の実施の許可等を決定する。学長が決定した内容については、決定通知書により管理者（学長補佐）及び学部管理者を介して当該研究責任者に通知する。

2. 研究をサポートする技術職員や URA の配置状況・役割・責任

本学においては、現在 URA の配置は行っていないが、外部資金である科学研究費助成事業、受託研究、共同研究、奨学寄附等の獲得に関連した業務は事務部庶務課が包括して担っている。具体的には、募集通知の周知、応募の依頼、応募・申請の事務手続き、研究費の受入れと管理、契約書の締結、研究成果の公表、不正経理の防止といった業務を遂行している。科学研究費助成事業への応募では、「科学研究費助成事業学内説明会」を毎年 FD・SD 研修会として開催している。この説明会では概要、前年度からの変更点、研究計画調書の作成で留意すべきこと等について最新の情報を提供している。また、研究者の作成した研究計画調書を庶務課で全て目を通し、様式や形式の不備による不採択を未然に防ぐことに努めている。文部科学省等の補助金や助成金等の獲得に関しては、庶務課に届く要項等を確認しその都度ワーキンググループ等を結成している。

⑪施設、設備等の整備計画

1. 校地、運動場の整備計画

本学のキャンパス内で理工学部（生物科学科・情報科学科・建築学科（入学定員各 60 名の計 180 人、収容定員 720 人））の設置と併せて、同年に既設の教育学部児童教育学科の入学定員を減じる（150 名から 60 名に減）とともに、安田女子短期大学保育科（入学定員 150 名）を廃止し、教育学部に幼児教育学科（入学定員 130 名）を設置することを計画している。このほか申請書類「学校法人安田学園 設置認可等に関わる組織の移行表」の通り、複数の学科で定員減を同時に予定しており、今回の理工学部設置認可申請が認可、教育学部幼児教育学科設置届出の手続きが完了した場合、大学として入学定員 120 名増、収容定員 480 名増となる。

これらに伴い、主に理工学部の学生が使用することを想定し、新たに 2 号館（6 階建、総床面積 15,386 m²）を令和 7 年（2025）12 月の竣工を目指して新設する計画である。本学が現在所有している 84,495 m²の校地には、教室・研究棟、管理棟、図書館、体育館、ホール（まほろば館）、テニスコート、弓道場、運動場等の諸施設が整備されている。建物内には、

学生の学修環境充実の点から、ラーニング・コモンズ、学習支援センター、英語カフェ、自習室が備えられ、また学生の休養等の点から、5・9号館屋上庭園、天文台、テラスやアトリウム等の整備も行われている。これら多くの建物は、ホール（まほろば館）を中心に芝生広場を囲むように配置されており、教育、学生の学修、休息、学生間及び学生と教職員との交流にふさわしい環境を整えている。各施設はそれぞれ渡り廊下で連結されており、雨天等への備えにも配慮されている。

学生に対する教育及び厚生補導を目的として、体育館（2,663 m²）や芝生広場・運動場（16,905 m²）、テニスコート（2,794 m²）、弓道場（151 m²）を設置する。これらの施設は常時開放され、クラブ活動、学友会行事を含むキャンパスライフに十分活用できる広さと設備が整っている。

また、2号館（6階建・総床面積 15,386 m²）の新設により、当該施設に1・2階共有ホール（計 432 m²）、2階屋外スペース（550 m²）、3・4階ラウンジ（計 105 m²）、4階から6階のスカイラウンジ（計 216 m²）などを計画しており、学生が休息、交流、自主学習できるスペースは既存の施設に加え十分なスペースを確保できる予定である。既存の校舎と合わせると校舎面積は 92,741 m²となり、これらの施設、設備は本学部開設後、収容定員が同キャンパス内で 480 名増加しても、全学生の利用に十分対応できる機能と空間を備えている。

2. 校舎等施設の整備計画

本学では平成 28（2016）年度後期から段階的に施設の整備・拡張を進めてきた。

まず教室環境であるが、老朽化した1～4号館を解体し、平成 28（2016）年 8 月に新 1 号館（約 13,000 m²）が竣工した。延べ床面積としては、これまでの1～4号館合計より約 3,000 m²拡大するとともに、教室席数も 2,986 席から 3,476 席へと増加した。令和 7（2025）年 12 月には、理工学部が使用することを計画して 2 号館（6 階建・総床面積 15,386 m²・35 室）を新設する。令和 5（2023）年度後期は教室数が 225 室、合計コマ数が 1,784 コマ、平均教室稼働率が 31.7%であったのに対して、令和 10（2028）年度後期は、教室数 260 室、合計コマ数が 1,958 コマ、平均教室稼働率 30.1%と推計しており、十分な教室環境を継続的に担保できる。

教室以外の施設では、新 1 号館の 1、2 階にラーニング・コモンズを設置し、学生の能動的な学修を支援する環境を整備した。自由利用が可能な「クリエイティブラウンジ」144 席、課外講座等が可能な「ワークショッブルーム」70 席、少人数での授業準備等が可能な「ワークボックス」9 室、発表専用空間である「プレゼンテーションフィールド」70 席、グループ活動が可能な「グループスタディールーム」7 室、ハイスペックパソコンによる作業が可能な「マルチメディアラボ」32 席、集中して自習が行える「スタディホール」57 席など、用途に合わせての利用を可能としている。ラーニング・コモンズのみで約 2,400 m²あり、これは全国でも有数の規模となる。

令和 7（2025）年 12 月の竣工を目指して新設する 2 号館（6 階建・総床面積 15,386 m²）

には、教員の研究及び学生が十分に研究や創造力、実践力を高めるための施設を用意する。講義室 9 室（総席数 1,323 席、総面積 1,735 m²）、ICT 教室 1 室（60 席 123 m²）、ロッカー室 173 m²、理工学部基幹教員の研究室 39 室 1,019 m²、学部長室 1 室 31 m²、事務室 1 室 41 m²のほか、理工学部各学科の専門施設を後述の通り整備する。なお、理工学部基幹教員のうち講師及び助教は 2 名で同一の研究室を共用する。研究室及び個人のパソコンやデスク等は施錠機能を備えており、オフィスアワーなど学生の教育上の情報管理等セキュリティ確保を行い、プライバシーが十分に確保できる設計となっている。2 号館の新築工事工程表については、【資料 21】「2 号館建設工事工程表」の通りである。また 2 号館が完成するまでの期間、令和 7（2025）年 4 月から同年 12 月までの教育・研究については既存施設を使用する。既存施設の使用管理は全学的に一括管理を行っており、【資料 22】「理工学部授業時間割・教室利用状況」にて具体的に示す通り、理工学部及び他学部等の教育課程の実施に支障を来すことはない。それぞれの学科の専門施設や配置する主な設備機器は以下の通りである。

ア. 生物科学科

生物科学科（入学定員 60 人）の教育課程を実施するため、2 号館には専門研究室 6 室（各 40 席で、211 m²が 3 室、201 m²が 1 室、192 m²が 2 室）、実験実習室 4 室（60 席 282 m²が 1 室、48 席 211 m²が 3 室）のほか、培養室 1 室（164 m²）、共同研究室 1 室（53 m²）、共同機器室 1 室（164 m²）などを整備する。

1 年次前期から 3 年次前期にかけて開講される専門教育科目の『実験実習科目』では、実験実習室 4 室を使用する。各授業科目と使用施設及び主な施設設備は下表の通りである。

科目名	使用施設	主な施設設備
「化学実験Ⅰ・Ⅱ」 「植物学フィールドリサーチ」 「生物学実験Ⅰ・Ⅱ」 「生化学実習」 「環境科学実習」 「食品化学実習」	実験実習室 4 60 席・282 m ²	多目的冷却遠心機、オートクレーブ、生物顕微鏡、純水製造装置、低温恒温器、恒温振盪水槽、卓上型 pH メータ、電子分析天びん、コンパクト PCR 装置、ドラフトチャンバー、電気泳動装置、バイオクリーンベンチ、流し台、学生用実験台、教員用実験台、器具戸棚、薬品庫など、実験・実習を実施する上で支障がないよう必要な器具・備品等を整備する。
「微生物学実習」 「植物生理学実習」 「植物育種学実習」 「植物形態学実習」 「分子生物学実習」	実験実習室 1～3 各 48 席・211 m ²	多目的冷却遠心機、オートクレーブ、生物顕微鏡、純水製造装置、低温恒温器、恒温振盪水槽、卓上型 pH メータ、電子分析天びん、CO ₂ インキュベーター、紫外可視分光光度計、コンパクト PCR 装置、電気泳動装置、バイオメディカルフ

		リーザー、ドラフトチャンバー、バイオクリーンベンチ、流し台、学生用実験台、教員用実験台、器具戸棚、薬品庫など、実験・実習を実施する上で支障がないよう必要な器具・備品等を整備する。
--	--	---

本学科の授業時間割・教室等の利用状況は、【資料 22】「理工学部授業時間割・教室利用状況」に示す通り、授業科目を適切に開講できる。なお、2 号館が完成するまでの期間、令和 7（2025）年 4 月から同年 12 月までの専門教育科目の講義科目は、既存施設の講義室 76 室（総席数 8,043 席、総面積 11,084 m²）を使用し、実験実習科目は 9 号館 3 階の基礎実習室（席数 81 席、面積 242.7 m²）を薬学部薬学科と共用する。これらの施設の使用管理は全学的に一括管理を行っており、【資料 22】「理工学部授業時間割・教室利用状況」に具体的に示す通り、教育課程の実施に支障を来すことはない。

イ. 情報科学科

情報科学科（入学定員 60 人）の教育課程を実施するため、2 号館にはデジタルメディア、ヒューマンインタフェース、データサイエンスの 3 分野に対応する専門研究室 3 室（40 席 428 m²が 1 室、60 席 362 m²が 1 室、74 席 384 m²が 1 室）のほか、学生研究室 1 室（100 席 310 m²）、プログラミング室 1 室（100 席 308 m²）、情報処理室 1 室（96 m²）などを設ける計画である。本学科の授業時間割・教室等の利用状況は、【資料 22】「理工学部授業時間割・教室利用状況」に示す通り、授業科目を適切に開講できる。情報科学科の演習科目は、新設する 2 号館に設ける情報処理室、専門研究室 1・2・3、プログラミング室で実施する。このうち、情報処理室、専門研究室 1・3 には、情報科学科の授業科目を履修するのに適した性能を有するデスクトップパソコンを配置する。また、本学では全学部共通で、学生 1 人に 1 台ノートパソコンを配付しており、パソコンを活用した授業や自習、アクティブ・ラーニングができる施設・環境等を整備している。入学者に配付するパソコンは、「CPU インテル Core i5 相当以上/メモリ 16GB/ストレージ SSD256GB/Microsoft Office/カメラ・マイク」としており、Adobe Creative Cloud 等のソフトウェアがインストールされている。さらにノートパソコンを接続可能な GPU ユニット 33 台を学生研究室に整備し、授業時間外にも学生が最新の AI・データ処理を実践できる環境を整える。加えて、情報科学科が主に使用することとなる 2 号館においては、10GB ネットワーク環境を整備して先端研究・教育のための十分な帯域とセキュリティを確保する。また、高速無線接続が可能な Wi-Fi を各所に設置し、学生のノートパソコン集中利用にも耐え得るものとなっている。サーバについては、高度な機械学習・深層学習を用いた研究等を促進するための高い処理能力を有した GPU を搭載した計算機を整備し、授業や研究活動等において最新の AI・データ処理の実践を可能としている。2 号館が完成するまでの期間、令和 7（2025）年 4 月から同年 12 月までの専門教育科目の講義・演習科目は、既存施設の講義室 76 室（総席数 8,043 席、総面積 11,084 m²）を使用

する。講義室には Wi-Fi 等の設備を備えノートパソコンを使用可能な教室を含む。これらの施設の使用管理は全学的に一括管理を行っており、【資料 22】「理工学部授業時間割・教室利用状況」に具体的に示す通り、教育課程の実施に支障を来すことはない。

ウ. 建築学科

建築学科（入学定員 60 人）の教育課程を実施するため、2 号館には、製図・工作室 1 室（120 席 445 m²）、空間デザイン実習室 1 室（60 席 192 m²）、イノベーションスタジオ 1 室（120 席 317 m²）、材料実験室 1 室（171 m²）のほか、建築コースの学生（4 年次）一人ひとりに専用の製図机とパソコンを用意する製図スタジオ 1 室（60 席 365 m²）などを設ける計画である。3 年次後期に選択科目として開講する実験・実習科目「建築材料学実験」及び 4 年次前期に選択科目として開講する演習科目「建築施工演習」では、材料実験室（171 m²）を使用する。この材料実験室には万能試験機や必要な工具類、作業台等を購入し、教育研究上において支障がないよう計画している。

本学科の授業時間割・教室等の利用状況は、【資料 22】「理工学部授業時間割・教室利用状況」に示す通り、授業科目を適切に開講できる。なお、2 号館が完成するまでの期間、令和 7（2025）年 4 月から同年 12 月までの専門教育科目の講義科目は、既存施設の講義室 76 室（総席数 8,043 席、総面積 11,084 m²）を使用し、一部の演習科目は 6 号館 3 階のアトリエ（席数 72 席、面積 174.87 m²）及び 9 号館 4 階の CAD 教室（席数 48 席、面積 136.69 m²）、9 号館 6 階の製図実習室 2 室（総席数 90 席、総面積 470.92 m²）を家政学部生活デザイン学科と共用する。これらの施設の使用管理は全学的に一括管理を行っており、【資料 22】「理工学部授業時間割・教室利用状況」に具体的に示す通り、教育課程の実施に支障を来すことはない。

3. 図書等の資料及び図書館の整備計画

述べ床面積 4,597 m²の図書館には、現在、約 34 万冊の図書、約 4,900 種類の学術雑誌のほか、語学学習用の CD や DVD 等の視聴覚資料約 9,700 点を有している。また 468 席の閲覧席のほか、パーテーションに囲まれた個室型閲覧席、視聴覚室、AV ブース、コンセントや無線 LAN を配した自習スペースやワークスペース、グループ研究室等が設置され、十分な教育環境が整えられている。

令和 7（2025）年 4 月の理工学部（生物科学科、情報科学科、建築学科、入学定員各 60 名）設置にあたり、下表及び【資料 23】「理工学部設置により追加整備する図書等」の通り、図書 2,178 冊、学術雑誌 26 種類、電子ジャーナル 5 種類の追加整備を計画している。既存と合わせると理工学部に係る図書等は、図書 27,200 冊、学術雑誌 71 種類、電子ジャーナル 20 種類となる計画である。また開設後の教育研究・学修の展開に応じて、適宜、必要な図書等の整備を継続して図ることとしている。

＜追加整備する図書＞

学科	内容	冊数
生物科学科	生物科学関連	836 冊
情報科学科	情報科学関連	934 冊
建築学科	建築学関連	408 冊

＜追加整備する学術雑誌＞

学科	内容	種類
生物科学科	生物科学関連 例：化学と生物（学会出版センター） Nature（Nature Research）など	11 種類
情報科学科	情報科学関連 例：電子情報通信学会誌（オーム社） ACM Computing Surveys（Association for Computing Machinery）など	7 種類
建築学科	建築学関連 例：建築史学（毎日学術フォーラム） Domus(Editoriale Domus S.p.A.) など	8 種類

＜追加整備する電子ジャーナル＞

学科	内容	種類
生物科学科	生物科学関連	2 種類
情報科学科	情報科学関連	3 種類
建築学科	建築学関連	なし

図書館の資料は、図書館ホームページの「OPAC（オンライン蔵書検索）」で検索することができ、インターネットを活用することで学内外どこからでも利用できる。利用頻度の高い電子ジャーナルについては、教員は個人研究室から、学生は図書館、ワークルーム等から学内 LAN にアクセスして利用することができる。

データベースは、「Japan Knowledge」「CAS SciFinder Discovery Platform for Academics」「日本建築学会発表論文等検索システム」など 14 種類を契約しており、開設年度より「化学書資料館」「Bloomsbury Architecture Library Core Collection」など 4 種類を加え、計 18 種類を整備する。電子ジャーナルについては、「Wiley Online Library」や個別契約により約 3,700 タイトルをフルテキストで閲覧できる（令和 6（2024）年 1 月時点）。また開設年度からは、本学部に関連する個別契約タイトル 7 種類を追加する。キャンパス内は無線 LAN の環境が整備されており、図書館内に限らず、学内 LAN に接続しているパソコンであればどこからでも利用可能となっている。

他大学の図書館との協力等については、日本図書館協会のほか、中国四国地区大学図書館

協議会、私立大学図書館協会、広島県大学図書館協議会に所属し、他大学図書館との相互利用や他機関との相互貸借・文献複写などの相互協力に取り組んでいる。また総会や研究会・研修会を通じて、図書館運営や職員の知識・技能向上に関する情報交換を行っている。

⑫管理運営

本学の教学面における管理運営体制は、「安田女子大学学則」第 25 条に基づき大学教授会（学長が全学的な事項について決定を行うに当たり、意見を述べる機関）を、「安田女子大学学則」第 25 条の 2 に基づき学部教授会（学長が当該学部に関する事項について決定を行うに当たり、意見を述べる機関）をそれぞれ設置している。ただし、大学教授会には、大学運営の円滑化に資するため、後述の通り、学校教育法施行規則（昭和 22（1947）年文部省令第 11 号。）第 143 条の規定に基づく代議員会等（審議機関）として、大学運営協議会及び大学教員業績審査委員会を設置している。また、教育研究に関する事項を専門的に審議し、又は必要に応じてその処理に当たる機関として各種委員会を設置している。

以上の管理運営体制に本学部も組み込むものとする。主な概要は以下の通りである。

1. 大学教授会

大学教授会の役割は、学長が全学的な事項について決定を行うに当たり意見を述べることである。特に、学生の入学、卒業及び課程の修了に関する基本的な事項、学位の授与に関する基本的な事項及び教育研究に関する重要な事項で大学教授会の意見を聴くことが必要なものとして学長が定めるものについては、意見を述べることを求めている。ただし、大学教授会には、大学運営の円滑化に資するため、学校教育法施行規則第 143 条の規定に基づく代議員会等（審議機関）として、教育及び研究に関する基本的な事項、学生の生活及び身分に関する基本的な事項など全学的な事項について審議を行う大学運営協議会を、教員の教育研究業績の審査を行う大学教員業績審査委員会をそれぞれ設置している。

大学教授会の構成員は、学長・教授・准教授・講師及び助教をもって組織することとしている。ただし、学長が必要と認めたときはその他の職員等を加えることができる。

大学教授会は、学長が招集し、その議長となる。開催頻度は、原則として月 2 回程度としている。

【資料 24】「安田女子大学教授会規程」参照

【資料 25】「安田女子大学における教育研究に関する事項の審議機関等」参照

2. 学部教授会

学部教授会の役割は、学長が当該学部に関する事項について決定を行うに当たり意見を述べることである。特に、学生の入学、卒業及び課程の修了に関する事項、学位の授与に関する事項及び教育研究に関する重要な事項で学部教授会の意見を聴くことが必要なものとして学長が定めるものについては、意見を述べることを求めている。具体的には、教育課程

の編成、学部内諸規程の制定及び改廃、教育及び研究、試験及び成績、学生の生活及び身分、その他学部の運営に関する事項である。

構成員は、学部長及び当該学部の教授をもって組織することとしている。ただし、学部長が必要と認めたときは、准教授その他の職員等を加えることができる。

会議は、学部長が招集し、その議長となる。開催頻度は、原則として月 2 回程度としている。

（【資料 26】「安田女子大学学部教授会規程」参照）

3. 大学運営協議会

大学運営協議会の役割は、学校教育法施行規則第 143 条の規定に基づく代議員会等として、安田女子大学教授会から委任された全学的な事項について審議を行うことである。具体的な審議事項、すなわち大学教授会から審議を委任された事項は、教育課程の編成に関する基本的な事項、教員の教育研究業績の審査に関する基本的な事項、学内諸規程の制定及び改廃に関する事項、教育及び研究に関する基本的な事項、試験及び成績に関する基本的な事項、学生の生活及び身分に関する基本的な事項、その他大学の運営に関する重要事項である。

構成員は、学長、副学長、学長補佐、学部長、図書館長、学習支援センター長、教職センター長、教務センター長、アドミッションセンター長、学生センター長、キャリアセンター長、学科長、事務局長、その他学長が指名する教職員をもって組織することとしている。

会議は、学長が招集し、その議長となる。開催頻度は、原則として毎週木曜日に開催している。

（【資料 27】「安田女子大学運営協議会規程」参照）

4. その他の会議等

上記以外の会議としては、総務会（本学における教育研究の総合的な運営を協議する機関。構成員は、学長、副学長、学長補佐、学部長、大学院研究科長のうちから学長が指名した者、事務局長）や、教学に関する教務委員会、学生委員会、就職指導委員会などの各種委員会を設置している。

これらの会議においては、本学の理念のもと、教育研究に関する事項について審議・協議を行い、適正かつ円滑な管理運営を図るよう努めている。

⑬自己点検・評価

「安田女子大学学則」第 1 条の 2 に「大学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表するとともに、教育の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする」と示し、大学、教育研究組織、教員、事務局等が諸活動の自己点検・評価を継続的・継続的に実施している。

1. 実施方法及び実施体制

内部質保証に責任を負う組織として、学長のもと中心的役割を果たす自己点検・評価委員会を設けている。自己点検・評価委員会は、「安田女子大学学則」第1条に定める本学の目的「女子に広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を養い、もって文化の向上に寄与する人格円満な女子を育成」を達成するために、全学的又は各学部・学科の現状を把握し教育活動、研究活動の質的向上を図り、併せて今後の課題についての教職員の自主的改善を支援することを目的としている。自己点検・評価委員会は、学長が任命した委員長、各学科から推薦された教員のほか事務局長等で組織しており、全学的な協働体制のもとに運営されている。自己点検・評価委員会では、3つのポリシーに基づく教育活動の点検・評価において「安田女子大学学修成果の評価に関する方針（アセスメント・ポリシー）」に沿って「入学試験」「学生生活に関する実態調査」「卒業時アンケート」「企業の評価アンケート」等の結果を用いて点検・評価を行っている。自己点検・評価委員会において課題とされた事項について、教育内容・方法の改善に必要な組織的研修等の実施に関する事項はFD委員会で検討・実行され、それ以外の事項は総務会及び大学運営協議会で検討・実行されている。

なお教育活動評価の重要な指標となる学生による「授業評価アンケート」及び「授業公開」については毎学期行ない、個々の教員の授業内容・方法の改善に役立てている。「授業評価アンケート」の結果は、学科単位での項目別評価を学内掲示すると共に、科目ごとの項目別評価を授業担当教員にフィードバックして授業の改善に役立てている。「授業公開」は、原則すべての授業を公開とし、教員全員に半期に1度の授業参観を義務付けている。授業参観者は、参観後に所定の様式で報告書を授業公開者に提出し、授業公開者は授業参観者から受け取った報告書をもとに所定の様式で授業公開実施報告書を自己点検・評価委員会に提出している。これらの制度や仕組みにより、授業の内容や方法の改善を図る努力が行われるようにしている。

また、大学は「事業報告書」「各種委員会報告書」等、各学部・学科は「学科年報」等により活動を振り返って自己評価を行うこととしている。「事業報告書」は公式ホームページ等により学内外に公表している。「各種委員会報告書」は、各会議等実施後、議事録を学長に提出した後、グループウェアで全教職員に提示することで、各種委員会における課題や改善方法等の共有を行っている。「学科年報」は学長、主要役職者及び事務局等へ配付するほか図書館に配架している。

教員個人においては、毎年度「教員自己点検・評価書」を作成し自己評価した結果を大学に報告することとしている。「教員自己点検・評価書」は、教育活動領域の17項目、研究活動領域の24項目、社会貢献活動領域の10項目、大学の管理・運営活動領域の6項目に対する採点と4領域ごとの自由記述によって行う。全体的な評価分析結果は、グループウェアで全教職員に共有している。

（【資料28】「安田女子大学自己点検・評価委員会規程」参照）

2. 認証評価の受審

認証評価機構における外部評価は、平成 28(2016)年度に受審し大学評価基準に適合していると認定された。結果は、公式ホームページ等により学内外に公表している。

また令和 5(2023)年度に公益財団法人日本高等教育評価機構による評価を受け、現在は「評価報告書案」を受領している。令和 6(2024)年 3 月中旬に評価結果を受領し、公式ホームページ等により学内外に公表する予定である。

⑭情報の公表

大学の理念、教育研究の体制・活動状況、財務・経営状況などの情報を関係者及び広く一般に提供し、本学の活用を促し、関係者の理解と協力を得るために大学案内やホームページを中心に情報を積極的に公表している。

学生に向けては学内ポータルサイトである「まほろばポータル」を通して、日常の学修に必要な連絡事項、規程、手続き等の情報提供を行っている。

なおホームページ上での、主な情報提供項目は以下の通りである。

1. 大学の教育研究上の目的及び 3 つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）に関すること

安田女子大学・安田女子大学大学院の 3 つのポリシー（学位授与の方針、教育課程の編成・実施の方針、入学者受入れの方針）、安田女子大学の学部・学科・大学院各研究科及び専攻の目的

〔掲載場所〕 トップページ＞大学概要＞3 つのポリシー・アセスメントポリシー

<https://www.yasuda-u.ac.jp/outline/policies/>

2. 教育研究上の基本組織に関すること

学部・学科・大学院の名称、教育研究機関・施設の組織図

〔掲載場所〕 トップページ＞大学概要＞組織図

<https://www.yasuda-u.ac.jp/outline/organization/>

3. 教育研究実施組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること

教員組織、教員業績、専任教員数及び教員 1 人当たりの学生数

〔掲載場所〕 トップページ＞大学概要＞情報公開＞安田女子大学 教育情報の公表

<https://www.yasuda-u.ac.jp/outline/report/college/>

4. 入学者に関する受入れ方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること

学部・学科・大学院の入学定員、入学者数、収容定員、在学者数、収容定員充足率、過去3ヵ年の入学者数推移、卒業（修了）者数、就職希望者数、進学者数、就職者数、退学・除籍者数及び中退率、海外派遣学生数及び留学生数

〔掲載場所〕 トップページ＞大学概要＞情報公開＞安田女子大学 教育情報の公表
<https://www.yasuda-u.ac.jp/outline/report/college/>

5. 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること

授業科目、授業の方法及び内容（シラバス）

〔掲載場所〕 トップページ＞ 大学概要＞情報公開＞安田女子大学 教育情報の公表
https://manabi.yasuda-u.ac.jp/public/web/Syllabus/WebSyllabusKensaku/UI/WSL_SyllabusKensaku.aspx

6. 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること

学修の成果に係る評価、卒業又は修了の認定に当たっての基準

〔掲載場所〕 トップページ＞大学概要＞情報公開＞安田女子大学 教育情報の公表
<https://www.yasuda-u.ac.jp/outline/report/college/>

7. 校地・校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること

施設紹介、ラーニング・コモンズ、学生生活のサポート、キャンパスまでの交通手段

〔掲載場所〕 トップページ＞学生生活・進路

<https://www.yasuda-u.ac.jp/career/>

〔掲載場所〕 ホーム＞大学概要＞アクセス

<https://www.yasuda-u.ac.jp/outline/access/>

8. 授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること

授業料等諸納付金

〔掲載場所〕 トップページ＞学生生活・進路＞授業料・奨学金
<https://www.yasuda-u.ac.jp/career/tuition/>

9. 大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること

大学生生活のサポート（チューター制度、学習支援センター、保健センター）、取得可能な免許・資格、国際交流、就職サポート体制

〔掲載場所〕 トップページ＞ 学生生活・進路＞大学生生活のサポート

<https://www.yasuda-u.ac.jp/career/support/>

〔掲載場所〕 トップページ＞ 安田の教育＞取得可能な免許・資格

<https://www.yasuda-u.ac.jp/education/license/>

〔掲載場所〕 トップページ＞ 学生生活・進路＞国際交流

<https://www.yasuda-u.ac.jp/career/international/>

〔掲載場所〕 トップページ＞ 学生生活・進路＞就職のサポート

<https://www.yasuda-u.ac.jp/career/employment/>

10. 大学院学位論文に係る評価に当たっての基準

〔掲載場所〕 トップページ＞大学概要＞情報公開＞安田女子大学 教育情報の公表
<https://www.yasuda-u.ac.jp/outline/report/college/>

11. その他

建学の理念、歴史・沿革

〔掲載場所〕 ホーム＞ 大学概要＞学園訓
<https://www.yasuda-u.ac.jp/outline/institution/>

〔掲載場所〕 ホーム＞ 大学概要＞歴史・沿革
<https://www.yasuda-u.ac.jp/outline/history/>

大学学則、大学院学則、設置認可申請書・設置届出書、履行状況報告書、自己点検・評価報告書、外部評価機関による認証評価結果

〔掲載場所〕 ホーム＞ 大学概要＞情報公開
<https://www.yasuda-u.ac.jp/outline/report/>

なお、大学の属する学校法人安田学園としては、「安田学園財務状況及び事業報告書」を公表している。

⑮教育内容等の改善を図るための組織的な研修等

1. FD・SD 活動

教育内容・方法の改善に必要な組織的な研修及び研究を推進することを目的として FD 委員会を設けている。FD 委員会は、学長補佐のうちから学長が指名した委員長、学部長、学科長、教務センター長、自己点検・評価委員会委員長、事務局長等で構成し、自己点検・評価委員会での点検結果を基に教育研究内容の現状と課題を共有し、それらを踏まえて FD・SD 研修会を企画・運営し、併せて個別課題等に対する対策について協議を行っている。FD・SD 研修会は、FD 委員会で内容等を検討・計画し年 3 回以上開催している。また各学科においても年 2 回程度の FD・SD 研修会を実施しており、学科ごとに独自の課題に取り組んでいる。各学科の FD・SD 研修会をまとめたものを年に 1 回、「学科 FD 通信」として発行し各学科の研修内容を全学で共有している。また、他機関の FD・SD 研修会の開催や教育講座についても、グループウェアにより学内の教職員に随時周知を図り、教育方法の工夫・開発に取り組む機会を増やすように努めている。

（【資料 29】「安田女子大学 FD 委員会規程」参照）

2. 研究機会・研究時間の確保

教員の研究活動を促進し学術研究の振興を図ることを目的として独自の研究助成制度を設け支援を行っている。個人研究費の他に、「学術研究助成」「国際研究集会への派遣に関する助成」「実践教育研究所の出版助成」「学術論文掲載助成」があり支援を行っている。また外部資金獲得の支援として、「科学研究費助成事業等の公募説明会」を年に 1 回開催している。令和 5(2023)年度の説明会の参加者数は 196 人（本学教員 206 人）であった。公務など

の都合で参加できなかった教員には、資料を配付し必要に応じてフォローをしている。その他に「長期海外研修制度」を設けており、希望する本学の教員のうち教授、准教授及び講師は、教員の職務の一部を一定期間免除され海外の教育研究機関等において教育研究活動に従事することができる。研修期間は原則として1年以内の継続する期間であり、海外研修教員は諸費用として往復旅費、仕度料及び研修費、給与が支給される。

研究時間の確保のために、全教員に対し週に1日に相当する時間を研修日（研究日）として確保し、教員の研究能力を担保するために大学をあげて取り組んでいる。

（【資料30】「安田女子大学における教員の長期海外研修規程」参照）

3. 大学職員に必要な能力及び資質を向上させる取組

事務職員の研修は、職員の専門性の向上及び業務の効率化を図るために研修を体系的に整備している。階層別研修や目的別の集合研修、派遣研修、eラーニング、SD研修奨励制度等多様な機会の充実を図っている。新任の職員に対しては本学についての理解を深め大学運営に積極的に携わる力を涵養することを目的として入職から1年以内に7回以上の新任職員研修を行っている。

（【資料31】「職員研修規程」参照）

（【資料32】「事務職員研修規程」参照）

4. TA(Teaching Assistant)等の活用をはじめとする学修支援の充実

教育研究支援学生は、SA(Student Assistant)とTA(Teaching Assistant)の2つの制度があり充実した運用が行われている。学部の学生がSAとして、大学院の学生がTAとして学部の授業の補助業務にあたっている。業務の内容は、学生の質問等の対応・授業理解向上のための学習アドバイス・授業用資料の準備等と定めており、成績評価に直接関わる業務と授業に直接関わらない業務及び通常の試験監督業務は担当できないこととしている。

SAは、当該授業学年より上位学年の学生が採用の対象となり、採用にあたってはその学生のGPA(Grade Point Average)が考慮される。各学期のはじめに研修会を実施し、目的や心構え等を理解する機会を設けている。また授業担当者により授業開始前に指導が行われ、学期の終わりには授業担当者が「SA実績報告書」を提出する。令和4(2022)年度は延べ29人の学部生がSAを務めた。TAは、希望教員の申し出により研究指導教員が「採用計画調書」に業務内容を記載して大学院の委員会に提出する。授業担当教員及びTAは業務終了後、所定の実績報告書をTAの研究指導教員を経由して当該研究科委員会に提出することになっており、その教育的効果は常に確認することができる。令和4(2022)年度は大学院博士前期課程・博士後期課程で合計12人の大学院生がTAを務めた。

⑯社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

1. 教育課程内の取組

全学部対象の共通教育科目にキャリア科目として「キャリアデザインⅠ・Ⅱ」「ボランティア活動」「インターンシップ」「職と食ーパティシエ実習」を開講している。「生きる」「学ぶ」「働く」「奉仕」をキーワードに、進路・職業選択を考え目標を持って学生生活を送ることをねらいとしている。

「キャリアデザインⅠ」では、キャリアとは何かを知るとともに、「女性と働き方」「ワークライフバランスへの取り組み」について学び、キャリアに関する諸理論を参照しながら「自己分析」を行う。「キャリアデザインⅡ」では、様々な業界で活躍されている方をゲストに招き、「業界や企業の紹介」「人生観・職業観」「学生へのアドバイス」を聴き、学生自身の可能性（選択肢）について視野を広げる。

「インターンシップ」は、学生自身が働く意義を考え働くことを実感する取り組みとして、地元企業を中心に様々な業界・業種の企業や公共団体など約 180 団体と連携し教育課程に組み込んで実施している。毎年約 400 人を超える学生が参加するこの授業では、インターンシップ参加の事前準備として 15 回の授業を開講している。授業では、実習を希望する業界や企業について研究し、ビジネスマナーや社会人基礎力、コミュニケーション力を修得していく。

2. 教育課程外の取組

学生が「社会で生き抜く力」を修得し、「理想の進路・就職の実現」ができるようにキャリアセンター及び学習支援センターを中心に支援を展開している。

キャリアセンターでは、就職支援プログラムとして「就職ガイダンス」「学内企業説明会」「履歴書等の添削」「先輩体験発表会」等で就職活動の進め方、面接、対策等についてアドバイスを受けられる機会を設け、スムーズに就職活動に取り組める環境を整えている。また本学独自の「YASUDA CAREER HANDBOOK」を制作し、学生に配付している。

キャリアセンターでは、積極的に新規あるいは卒業生の就職先である企業等への訪問を実施し、企業と信頼関係の構築に努めている。採用担当者や本学卒業生から仕事内容ややりがい、職場環境などを聴くことで在学生の職業選択に役立つ情報を蓄積している。令和 5（2023）年 3 月卒業生のうち広島県内での就職者は全体の 7 割を超えており、地元企業との信頼関係を維持することが重要となっている。また、広島県外出身学生の U ターン就職支援として U ターン就職のための活動にかかる旅費補助制度を運用している。その他に、「就職支援に関する協定」を山口県、島根県、愛媛県、岡山県、鳥取県と締結し、学内における U ターン就職説明会の開催や各県主催の合同企業説明会に関する情報提供、各県の企業等と学生のマッチング支援、各県の新卒採用支援担当者による定期的な個別相談会等を行っている。

学習支援センターは、各種資格取得のための説明会、課外講座の運営などを実施している。

3. 適切な体制の整備

キャリアセンターを中心に、就職指導委員会及びチューターが連携をし、入学時から卒業までの全学生を対象とした支援体制を整えている。

キャリアセンター（キャリア支援課）の職員は、学科担当制とし、各学科の特性をよく理解した上で就職支援を行っている。一人の学生に対し、同じ職員が個別相談や履歴書のチェック等を継続して行うことで、学生一人ひとりと向き合い、学生自身が満足できる就職先が決定するまでサポートするようにしている。また、キャリアセンターと各学科の就職指導委員が協働で理工学部各学科に特化した「就職ガイダンス」「就職ワークショップ」「学内合同企業説明会」等の就職支援を実施している。理工学部においても同様の支援を行う予定である。

学生の履修指導からメンタルサポートまで幅広く相談に応じている各クラスのチューターは、就職についてもクラスの学生全員と面談を行い、各学科の就職指導委員やキャリア支援課と連携して学生の希望を尊重した上で、個人の適性を踏まえたアドバイスを行っている。毎年、「保護者懇談会」を学科ごとに開催し、必要に応じて就職に関する説明も行っている。また同日、キャリアセンターの相談窓口を開設し、個別相談に応じている。

以上